
歪みを正す

日野望美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

歪みを正す

【Nコード】

N9593S

【作者名】

日野望美

【あらすじ】

十七世紀某国の歴史ネタです。

敗戦後の大変な時期に苦勞する王様の視点です。

チヨツとわけありの王様と、その秘密を共有する女が登場します。

従来「なろう」の歴史ジャンルで上げていた旧作二つのネタをもとにして、もっとサクサク読めるようにしました。各一話は短めです。

5月8日よりArcadiaでも掲載をはじめました。

はじめのこゝろ（前書き）

歴史そのものではなく、歴史ファンタジー、ですね。

つづめくもの・1

「殿下、主上殿下、一大事でございます」

いつもは滑るように足音もさせずこの王の住まいである大殿に入り込んでくるはずの尚宮や内官達が大きな足音を立てて慌てふためいている。

私は大きな戦に負けた混乱状態の中で、父である急死した先王から王位を継承した。

正妻の中殿すなわち王妃は王子を産んですぐに息を引き取った。そしてその王子だが、生まれてすぐから度々、熱をだし、もはや生き延びれないのではないかと思う事が幾度か有った。

めったに感情をあらわにしない判内侍府事が声を震わせて、私に告げた。

「王子様の御容態が、急変いたしました」

世子たるべき一人息子の成弘の症状はよほど厄介なようで、王の主治医である御医が自分の見立てだけでは自信が無いと言い出し、内侍府尚薬つまり後宮の宦官で奥医師でもある高内官にも成弘の診察をさせたのだ。

「なに？ 毒？」

「はい、王様。私も御医殿と同じ意見で御座います」

「乳飲み子に毒を飲ませるのは、難しいのではないか？」

乳母は亡き中殿の乳母子にあたり、ただ乳をやるだけの女達もすべて乳母が管理しているはずだった。

「乳母達に怪しい点は今のところ見つかりません。ですが、王子様のお体に奇妙な斑点が浮かんでいるのは事実でして……」

毒は必ずしも飲ませなくても、色々使いようが有るらしい。

「ごく細い針の先に毒を仕込み、王子様のおみ足に目立たぬように刺したのではないかと思われます」

乳飲み子の足に毒針を刺すのか。その陰湿さに吐き気を催す。使われた毒は余り強い物ではなく、大人用の薬に使われても不自然ではない物を幾度か使った可能性が最も高いらしい。これだけの事実を私に伝えると、高尚薬はその場を去った。

「毒針を使うなど……誰か王子を世話をする係りの女官が犯人としか思えぬ」

「全員、義禁府ウィグムフへ移すべきでしょうか？　ですが、お世話するものが居りませんのも問題ですし」

この受け答えしているこの成弘付きの内侍もどこまで信用してよ
いものやら……疑いだせばキリがないのが後宮と言う所だ。

「行方をくりました者が居れば、そのものが一番怪しくはないか？」

バタバタと女官や内侍どもの動きがあわただしいと思つたら、誰かが首をつつていたらしい。

「王子様のお傍につかえておりました女官見習いが、洗濯場近くの木で首をつつておりました。これが懐に入れておりました遺書でございます」

手渡された遺書には「御依頼を断れない自分がもつと早く死ねばよかつた」といったこと以外、何も書いていない。

「この女官見習いはどういった経緯で、成弘付きになったのだ？」

「亡き中殿様の母上様からの御推挙で入宮いたしました」

「それ以前の事は？」

「それ以前の事は？」
「スツネムン」
「キバン」
「イルベキセン」
「崇礼門近くの妓房の一派妓生・素妍なるものが生んだ娘で、赤子のうちから中殿様の御実家に引き取られ養われたようです」

「一派妓生と言えば、妓生では一流どころで、客も身分有る者ばかりだ。私も素？の名は聞き覚えが有る。その素？は引退後この数年、重い病の床に居るらしい。」

「実の父親は不明か？」

「実父はどうにも調べが付きません」

「馴染み客は？」

「その、こう申しては何ですが、只今の名だたる高官の方々がお若いころお遊びになったようで……特にどなたが一番とは言い難い状態であつたようです。幼馴染の在野の学者と特別な関係であつたらしいのですが、その者は若いうちに亡くなっております」

在野の学者と誰ぞがつながりが有るかも知れず、只今の高官の誰かが実父である可能性も捨てきれない。

「もつと、その実父と思しき人間すべてを洗いなおした方がよさそうだ」

そうした指示をしていたところ、また急に周囲が騒がしくなった。

「一大事でございます。王子様が……王子様が……」

解毒が思うように出来なかったのだそうだが……幼い成弘は、こうして何者かに殺害されたのだった。

「中殿様のお亡くなりようも、今にして思えば奇妙でございました」

確かに私も……そのように感じている。妻も息子も陰謀から守ってやれなかった愚か者が、王としてこの国を立て直す事など出来るのだろうか？

いったい誰を信じるべきか、それすらも定かでは無い。

深い深い泥沼の底に落ち込んで行くような無力感と絶望感に、私は囚われた。

つめくもの・2

「世子邸下、セイヤジョハー 臣妾の体がひ弱なばかりに御迷惑をおかけいたします」わたくしめ

そのように囁かれた事が幾度も有ったが、その言葉を聞きたび私は涙がこぼれそうになったものだ。

亡き中殿・明珠は私が世子の時に正妃すなわち嬪宮ヒンケンとして私のもとに輿入れしてきた。正式な夫婦として婚姻の儀式を上げた当時は、互いにまだ十歳であった。当然、男女の事など有ろうはずも無く、明珠に月の物も来ない内は互いにせがんで布団を並べて眠ったものだった。冷え冷えとした宮中の人間関係の中で、明珠だけは互いを偽らず素直に接する事の出来る「家族」であったのだ。

昼はそれぞれきたりにより決められた日程をこなすのではあったが、まだ定まった公務がある身の上でもなく、学問なり礼儀作法なりの講義を受け終わった後なら、比較的自由に行き来できた。宮中の庭を共に散策したり、茶を楽しんだりする事ぐらいは許されていた。

今にして思えば、まだ無垢で無邪気な少女であった頃は別段あれの体はひ弱と言うほどでもなく、それなりに健康であったと記憶している。共に手を繋いで歩く時、時折可愛らしく微笑む様子は瑞々しい命の力が感じられた。

「こうして手を握って、御一緒に夜を過ごせば御子ができましょるか」

姫君育ちで、真面目な書物しか読んだ事も無く、ましてや私のように前世の大人であった頃の記憶が有るでも無さそうな明珠は、恥ずかしげにそんな事を言ったりもしていた。

これまで世子の最初の妃は何歳か年上の場合が多かったのは、閨の事を教える意図があったかららしい。私の場合同い年の娘が選ばれたのは、私が「大人びている」ため、早くから房事にふけるようになってはまずいと言う判断が働いたからだとも、私にあまり早くに子を作られたくないと言う思惑があったからだとも言う。

一体全体、何が本当なのかわからない。それがこの国の宮中と言るところだ。

私には前世の記憶がある。この国では全く見たことも無いような身なりをしていて、馬よりも早く走る鉄の箱に車輪がついたような乗り物に乗っていた、そんな情景が幾度か頭に浮かんだ事がある。前世での名前も生業も家族や親族・友人も何も思い出せないが、この国の常識では有りえない高さに天を突くように聳え立つ大きな建物が幾つも幾つも有り、多くの人々が行きかう幅の広い道が有る、そんな場所に住んでいたように思う。

「時折夢で見るあれは、一体どこなのだろうな」

「また、不思議な国の事をお考えでしたか」

「うむ。幾ら書物を読んでも、あのように背の高い大きな建物の話は出てこない」

「仏典に有る極楽の建物とも違うのですよね」

「全然形が違うのだよ」

私が簡単にその情景を絵に描いてみせると明珠は「不思議な建物ですね」などと興味深そうにしていた。

下手の横好きというやつだが、私は絵を描くのが好きだ。余りそれに耽溺すると宋の時代の徽宗皇帝のように国を滅ぼしかねないな

どと言われちゃうので、回りに人のいない時にそつと描く程度だが、明珠には折に触れて小鳥の絵や野兎の絵、花の絵、蝶の絵などを文に添えて送ってやったりした。

嬪宮に迎えて最初の一、二年は目の前で互いに絵を描いたりして楽しんだが、あれの月の物が始まって以降は、共寝をしない夜にはいつも絵入りの文を送っていた。時折、愛らしい絵や文が返事で戻ってくることも有り、あるいは匂袋や栞と言ったちよつとした身の回りの物が返事の代わりに届いたり、礼の口上だけの事も有ったが、いずれにしても喜んでくれてはいたのだろう。

「この頃、胸のあたりが時折急に痛くなる事が有ります」とか「どうも食事がのどを通りません」とか頻繁に言うようになったのは、明珠に月の物が来るようになってからの事であつたような気がする。当時私は、毒だの陰謀だの可能性はまるで考えていなかったのだ。うかつだった。

今にして思えば、おそらく明珠は継続的に毒物を飲まされていたのだ。

清との戦が始まった時、我々も都を離れて安全な地方に避難したのだが、すると不思議な事に不自由で不便な暮らしのはずが、明珠の健康状態は大きく改善した。これならば大丈夫かもしれないと思ひ、子を作る事にしたら見事に懐妊した。

今にして思えば、都を離れた避難生活の間は、毒を飲み食いさせられる事が無かつたと言う事だったのかもしれない。明珠の廃妃を狙う連中も国中を逃げ惑っていて、陰謀どころでは無かつたのだろう。

祖母は「風水のせいだ」と言い、恵方に移動したから子に恵まれたなどと考えたようだが……。

やがて、我が国が酷い負け方をして、戦は終わった。数々の屈辱的な条件を飲まされたが、とりわけ『大清皇帝功德碑』なるものを都の内に建てる様に命じられたのは、父にとって耐えがたい屈辱であつたらしい。清国皇帝に対し平伏して三跪九叩頭の礼を行う父の姿を彫り込ませ、清に逆らつた愚かな王としての反省文を刻んだ巨大な石碑は、時折、民が泥や馬糞などを投げつけるとも聞く。腹に据えかねるといつた所か。

だが、超大国・清に逆らつて生き延びるのは難しい。それが耐え難い現実だつた。敗戦の衝撃に打ちのめされた父王は、あつけなく亡くなつてしまった。その父の死と入れ違いの様に生まれたのが、初めての王子・成弘だつた。

若く無力で凡庸な王であつた私は、妻や息子に迫る危険を未然に防ぐ事もできなかつた。相次いで王妃となつたばかりの明珠と幼い成弘を失つて、私は耐え難い思いに沈むばかりであつた。

つごめくもの・3

正妃の明珠の体がひ弱であることを、私の祖母は気にして、まだ世子の時代に側室を一人迎え入れた。

私が即位した時に力になる家の娘で、本人も淑やかだという理由で選ばれたのが申智敏^{シン・ジミン}だった。ようやく明珠とは男女の情を互いに解し始めたばかりで、実質的な新婚時代と言っても良い様な状況の中で、側室など迎えたくは無かった。だが絶大な力を持つ祖母には逆らえなかつたのだ。明珠の輿入れもほとんど祖母の意向で決まっただのであつたし、「嬪宮に無礼を働く事のない、温順で賢明な娘」だという祖母の見立てを信じて決めたのだった。

申智敏は従四品の承徽^{スンフイ}として世子たる私の側室にはなつたが、自身と親しむよりも明珠と姉妹の様に馴染むことが多かつた。男女の仲になつたのも明珠がしばしば病の床に就くようになって以降の事だ。それも体を壊した明珠自身が私にそれを勧め無かつたら、いつの事になつていただろうか。

ともかくも申承徽は私の初めての子供を産んだが、娘であつたので祖母は落胆したらしい。

私が即位した事で、祖母は先王の母として大王大妃^{テウンテヒ}となり継母の中殿様は大妃^{テヒ}となられた。かねてから政治勢力を操る事に意欲的であつた祖母は私から見ると「喜々として」各派閥間の均衡工作を行っているように見えた。確かに……若い王であつた私の宮中での立場を強固なものにするため……ではあつたのだろうか。だがしかし、明珠や成弘の喪も明けぬうちから、更に新たな側室やら中殿候補やらの話を煩く持ちかけるのが不愉快であつたのは、確かだ。

「主上^{チュサン}！ いつまでも亡くなつた者の事を嘆いておられる場合では

有りません！ 朝廷で勢力を持つ者たちの後押しが必要なのです。新たな女たちを、一刻も早く後宮にお迎えなさいませ」

激昂する祖母に、私の気持ちは届きそうになかった。

もともとあまり人との交際をなさらなかった大妃様は、ますます世捨て人の様におなりだった。私の継母と言うにはあまりにもお若くお美しい。その美しい御方が悲しみを内に秘めた静かな表情で私を御覧になる時、何とも申し訳ない気分になるのだ。

同じ姓の女性を娶るなど、我が国では異例な事だが、父にしては珍しく自分の望みを通した。

父は「王家の血筋の統合」とか「王家の権威の上昇」とか中国の例を引いたりしてもつたいをつけて、この方を中殿としたが……暴君として殺害された先々代様の紛れもない姫君・公主様であられるこの方の、高貴な凛とした美しさに強く魅かれての事だったろう。

血を分けた父子だからだろうか、父と私が「美しい」と感じる顔は良く似ているのかも知れなかった。少なくとも大妃様は私の中で「美女」の基準であった。私を産んですぐに亡くなった母は、それなりに美しい人ではあったようだが、生前を知る者らの評判などからしてもこの大妃様の美しさには恐らく及ばなかったのではないかと思われた。

子として、母である方のご機嫌伺いを毎朝するのは当然の務めであったが、私にとって大妃様にお会いするのは義務などではなく、むしろ心安らぐ時間だ。物心ついた頃から、この美しい方に子として孝養を尽くせる立場に有るのは私にとっての喜びであったのだ。だが、それは私の一方的な思いであって、大妃様がどうお感じであるのか伺うのは、何やらためらわれた。この方のおなかを痛めた子供は、三人ともごく幼い内に不慮の死を遂げている。何らかの陰謀

による疑いが強いが……その理由が……もしかしたら私を世子とし、王とするためであったかもしれないのだ。そうであるならば、私は知らず知らずの内に、大妃様にとって、仇同然の存在と言う事になっっているのかも知れず……うかつな事も言えない筈であった。だがしかし……

「大妃様のお産みになった私の弟や妹たちが幼くして儂くなったのは、成弘と同様な事情でございましたか？」

自分でも意外なほど素直に、そのような言葉がふつと口を突いて出た。

「さあ……いかがでしょう。ただ……三人の子らには何の罪も無いのに、むごい運命であったと、そう思います」

それから衣の袖をお目に当てられて、はらはらと涙をこぼされた。

「私は……弟も妹たちも、妻も息子も守れませんでした。そして、この国は先ごろの戦で大きな傷を負いました。それなのに朝廷の者たちは勢力争いしか頭にありません。私にはあの不逞の輩を抑える力が有りません。このような不甲斐無い者が王であって良いものでしょうか」

大妃様はじつと私の顔を御覧になった。王の顔を凝視するのは無礼とされたものだが、私はこの方にならじつと見つめられても全く不快ではない。ただ、何とも照れくさいような感覚に陥った。

「大王大妃様がおっしゃるように、新しい側室たちを後宮にお迎えなさいませ。後宮の縁もなさりようによつては、それぞれの実家の力を逆に押さえ込む事が出来ましょう。そして誰が不逞の輩か真の

忠臣か、よくよくお気をつけになって、お確かめなさいませ。今は若く力は無くとも、将来お役に立てそうなもの、大いに働きそうなものを始めはあまり目立たぬようにそつと、でも確実に取り立てておやりなさいませ。くれぐれも私の父君のような短気を起こされてはなりません。不逞の輩であつても綺麗に掃除するには、それなりの名分が必要なのです」

「一度に側室を二、三人入れるように、大王大妃様は私におつしやるのですが……正直、そのように多くの者を迎えるのは、勘弁して欲しいと思つてしまいます」

「とりあえずは、今居ります者も含めて、皆を公平に扱われたら宜しいのです」

「それでは……自分の妻と言う感じが、誰に対しても持ちにくいように思います」

「どなたか特に愛しいとお感じになる方が出来るまで、しばらくの御辛抱です」

「やはり……耐えねばなりませんか」

「王の背負つものは、あまりに多く、重く、お辛いでしょうが……きつと、重荷を共に担つて下さる方が現れましょう。あなた様は国難のこの時期に耐えて国を守つて行ける方だと、私はそう信じております。だからあなた様の上に天命があるのだと、思っております」

「ありがとうございます」

お子達を失つた原因であつたかもしれない私に向かつて、そのよ
うな言葉をかけて下さるのが有りがたかった。適う限りの孝養を尽
くして差し上げようと、新たに思い直した瞬間でもあつた。

つづめくもの・4

大妃様の御言葉を伺ってから、私は祖母の申し出を受けた。新たに三人の側室が後宮に加わった。

廷臣の頂点に立つ領議政の孫である金昌嬪、高名な学者の娘の朴淑儀、実家が裕福な張昭容だ。申智敏は戦の間も明珠によく仕え、既に二人の翁主を生んでもいるので、世子時代の従四品から一挙に従一品貴人とした。中殿を除く側室の序列では金昌嬪のすぐ下の二番目と言う事になる。

「昌嬪は野心が強い人のように思います。実家の力が有るので、ぞんざいには扱えません」

「淑儀は穏やかで賢いと感じますが、本音の読めない人ですね」

「昭容は嫉妬深い人のようですよ」

大王大妃様のおっしゃるように。皆美しくは有ったが、あまり心を許せそうも無い者ばかりだった。それでも、後宮にやってきた彼女たちもまた、政略の犠牲であり、意に添わぬのを耐えているのだらうと思ひ、誠意は尽くし、皆を公平に扱うように努めた。

新しく迎えた三人の側室が全員、娘を一人づつ出産した頃に、新しい中殿を迎えた。正直な話、全く気がすまなかったため、随分引き伸ばしたのだが、あいにく我が国の後宮は中殿が管轄する事になっている。名目上、側室などの王と同衾する後宮の女は、すべて中殿の臣下と言う位置づけなのだ。後宮の揉め事は役目柄、中殿の管轄なのだ。今のように王の祖母が取り仕切るのは、いわば一種の異常事態とみなされる。

それでも、私是一向に構わなかったが、今度は朝議の場で「一刻も早く中殿をお迎えになり、後宮を有るべき姿に整えられるべきで

す」と提議されてしまった。

皆で一斉に米つきバツタのように幾度も幾度も礼を繰り返しながら「何卒御賢察下されませ」の大合唱だ。連中の常套手段だ。数を頼んで王を脅迫しているのだと言って良い。毎回毎回、うるさい事だ。

今回口火を切ったのは右議政を務める沈守己シム・スギの腰巾着と思われる者たちだった。かねてから中殿候補の一人である沈家の娘は「不細工」だと言う風評が有る。家柄に不満は無いが、祖母は気が進まないらしい。だが、実力者の右議政の後押しは欲しい所だ。

「御器量よりも賢明さに重きを置くべきかと存じます。容色に自信が無ければ奢った事もなさいませまい」

宮中の生き字引のような内侍ネンすなわち宦官どもの長である判内侍パンネ府事シッサの言い分は、一理あるとは感じた。

「自分の容色に自信満々の昌嬪は、時折傲慢不遜な態度を私にも取りますからねえ」

祖母に判内侍府事の見解を伝えると、そんな言葉が戻ってきた。確かに昌嬪の態度はあからさまではあるし、浅はかな言動が多いし、褒められた物ではない。あれを押さえる者が居ても良いとは思う。

「穏やかな気性で裏表の無い方が良いですね。容色に自信が無い方の場合、表立って不遜な事は言わないでしょうが、御気性が捻じ曲がっていれば、裏であれこれ企む事が無いとは言えません」

その大妃様の御懸念が図らずも的中してしまったと気がついたの

は、随分と後になってからの事だった。

どの道最初から、私自身の個人的な希望など全く無視されるのは明らかだった。結局は沈家の娘を新中殿とせざるを得ない状況に追い込まれて、それを受け入れた。

つづめくもの・5

王妃冊立の儀式を執り行う数日前に、初めて当の沈寿貞シム・スジョンに会った。醜い、と言うほどではなかったが、何を考えているのか読み取りにくい糸の様に細い目と、女の顔にはいささか不似合いなあくらをかいたような団子鼻は、寿貞を高貴な姫君と言うよりは性格の悪い下級の女官のように見せていた。立ち姿もすんなりとは行かず、ずんぐりむっくりとして、少女と言うよりは中年女のようにであった。

「新しい中殿様はお気の毒なお顔立ちとお姿だ」などと側室付きの女官どもが噂していたが、確かに本人の落ち度ではないので、気の毒としか言いようが無い。

礼儀作法・立ち居振る舞いは身分相応で、話しぶりは賢げで悪くも無いと思った。女として魅力的とはさっぱり思えなかったが、後宮を治めてくれる様になればそれで十分なのだった……全くの期待はずれであった。

儀式も無事終わりやれやれと思った矢先、沈中殿はすぐに側室達と角を突き合わせ、幾つかの揉め事を起こした。下仕え同士が殴り合いのけんかをするとか、互いの住まいの筆頭の尚宮同士が大声でののしりあうとか、ろくでもない事ばかりが立て続けに起きたようなのだ。

「中殿には全く失望させられました。後宮を治めるどころか、自分が騒動の元になっておるのですからね」

祖母は疲れた表情でそう言ったものだったが、全く同感だった。だが国王としてはそうも言っておれない。

「中殿の不徳は、寡人の不徳だ。すまぬがこらえてくれぬか」

「徳の少ない者」を意味する寡人クワインと言う王としての自称は謙讓の美德を示す言葉とされるが、私の場合、文字通り徳が足りないのだと思う。あざといとは思ったが、全ての側室の住まいを回り、順に抱きしめてやりたり手を握ったりして機嫌を取った。そもそも、本當に心を許した相手に寡人などと言う堅苦しい言葉は使わないのだが、どの側室にも心を許せない私のよそよそしい気持ちがつい、表に出してしまう。

心を許せないと思う一方で、子が出来ると肌が馴染むというのか、好いた惚れたという間柄ではなくても「一応」身内なのだと思う部分は有るのだ。娘たちはどの子も幸せになってほしい。だからその母親をあまりぞんざいには扱いたくないのも、また、真実だった。

「翁主は私より父上に抱いていただいた方が、嬉しげです」

昌嬪にも淑儀にも昭容にも、同じような事を言われた。王の娘に生まれたからと言って、幸せの保証が有るわけでもない。大体どの子も私の娘なのに、側室が産めば翁主オンジュと呼び、正室が産めば公主コンジュと呼んで差別する。実にいやな習慣だ。しかも政争の道具として、不逞の輩に利用されかねない危うさを生まれた時から背負わされている。だが、その幼い無垢な命を、王として私もまた利用しているのだ。側室たちの実家を抑え込むために。その事を十分に自覚しているながら、やはり我が子は愛しいのだった。

申貴人は私の想いが今も亡き明珠の上にも有る事をよく承知していた。亡き人の思い出話をする事が出来る数少ない相手であったし、煩いことは言わなかったし、愚かしい振る舞いも無かった。貴人の生んだ翁主二人はよちよち歩き、愛らしい様子で言葉を話すようになった。自然と良く昼食を一緒に取ったりしたが、もはや床を共にする事は無かった。このころから貴人は体調を崩していたの

だ。それが、毒によるものだとはい、そのころは露ほども思っていないが、

「中殿様にもお子をお授けなさいませ。そうなされば、苛立っておいでのお気持ちも治まりましょう」

性格は温順には程遠く見目もよろしくない中殿を、私も正直言って持て余していた。毎朝、祖母と大妃様の後、挨拶には行ったが、いつも事務的で、ごく短い訪問であった。正直言つて、閨を共にする気にはまるでなれなかった。だが、貴人の言葉通り、あの中殿にも、気が進まなくても娘を一人ぐらいは持たせなくては治まらないのかもしれないと、うんざりした気分になった。

「そうだな。それ以外……方法が無いか」

申貴人の前で有ったが、私は大きなため息をつかずにおれなかった。

つづめくもの・5（後書き）

後宮の主な人々を上げておきます。これから登場予定の親族の名前なども含んでいます。

・判内侍府事 バンネシフサ

宮中に仕える内侍、つまり宦官の頭。貧乏な士大夫の息子。色々後ろ暗い過去の秘密も有る模様

・大王大妃様

祖母。父王の母。元来は分家の王族の正室に過ぎなかったが、思わぬ事件で息子が即位した後、政治権力を握るようになる。宮中の廷臣たちに、にらみが利く。政治的な感覚が鋭い。

・大妃様

継母。父王の後妻。暴君とされ廃位された先々代国王の正妻腹の長女。父王との間の子供達は全員幼いうちに死亡した。何らかの陰謀によるものらしい。

・明珠 ミンジュ

王世子時代に輿入れした正妻。最初の中殿。唯一の家族と言える存在だった。毒物を飲まされていた疑いが有る。王子・成弘を出産後死亡。

・沈王妃
名は沈寿貞シム・スジョンと言う。実力者で右議政ウイジョンの沈守己シム・スギの娘。一番上の兄は切
れ者の知宣チソン。二人目の中殿で、側室達より後から輿入れした。

・金昌嬪
官僚トップの領議政ヨンウイジョンの金恩成キム・ウンジョンの孫。祖父以外の親族は官位も官職も
振るわないのが悩み。野心家らしい。

・申貴人
一番入宮が早い。目敏く賢い人らしい。亡くなった前の中殿とは仲
が良かった。健康を損ねている。仕えている者は皆忠実。翁主二人
の母。

・朴淑儀
父親は高名な学者の朴時烈パク・シヨル。兄弟たちは皆有能で出世株。

・張昭容
家柄の格式のせいで一番身分が下の側室。実家は豊か。兄の張季良チャン・ゲリヤン
は学者なのに阿漕な高利貸し。些細なことで激昂して、すぐに周り
の者を打つ。

遭遇・1 (前書き)

もつすぐ、重要人物が登場します。

世子に定まった頃から眠りは浅くなった。王位についてからはそれが更にひどくなり、毎晩必ず夜中に一度は目を覚ます。二度三度と言う事も珍しくは無い。医師達の言うように運動をし、食べ物の偏りが無いように用心しても、大した変化は無かった。

「お心の問題で御座いましょうなあ。これ以上、薬や針では何とも出来ません。後宮でどなたかお心の安らぐお相手がおできになりますと、事情が違つてきますでしょうか」

そのように診断された。明珠や成弘が奇妙な死を遂げたせいもあって、私は後宮の誰にも心を許せず居る。それが体にも現れたのだろう。皆、実家の勢力を伸ばし、安定させるために後宮に送り込まれてきたのだ。本当は私の事もどう思っているのやら、未だによくわからぬ。あれらは私に抱かれ体を開くのは「義務」だと思つているとしか思えない。心が満たされる事が無いのも当然だろうか。

中殿にも子を作らねば、釣り合い上もよろしくない事は承知していたが、ただでさえ中殿と緊張関係にある側室たちをなだめるのに疲れてしまい、よそに逃げ場を求めてしまった事が有る。

ふと目についた下仕えの者を、幾度か寝所に呼ばせたのだ。一人は庭先で掃除をしている時にたまたま出くわしたのが、もう一人は庭先で転んだのを見たのがきっかけだった。共に身分は軽かったが、それぞれ愛らしい女たちであったので近く承恩尚宮として取り立てるつもりだった。何より、即位以来夜の眠りが浅く、一日中疲れた感じが抜けなかったのだが、あれたちを抱いて眠ると、熟睡できたのが有りがたかった。

だが、私の心配りが足らず、手配が遅れたのがいけなかったのだらう。一人は子を流産して、もう一人は井戸に落ちて命を落とした。適う限り手厚く葬り、それぞれの実家に財物を贈らせたが後の祭りだった。私と関わったせいで、罪の無い若い女二人と赤子が一人命を落としたという事実は、何ら変わりようがなかった。

「二人とも毒物を飲まされたようでございます」

判内侍府事の報告を聞いて、私は怒りで体が震えた。だが……中殿にも側室達にも犯行の動機は十分ある。半年以上かけて、調べ上げたが、実行犯と思しきものは既に殺害されていた。一番怪しいのが中殿だったが、確証が無い。確証も無いのに廃妃にもできず、私は後宮に行くこと自体が大きな苦痛になりはじめていた。

不眠症は悪化した。私は発狂しそうだった。

「そうだ、街に出てみよう」

そんな風に思いついて、一人で供もつれずに宮殿の外に出た。外の空気が吸いたかった。気分を入れ替えたかった。私は手元に官服を隠し持っていたので、それを着た。赤い色から本来の持ち主は王と直接面会する資格のある堂上官のものだと知れた。戦のゴタゴタのせいで紛れ込んだものであったのか、存在に気が付いて以来、使う事も有るかもしれないと、長い間仕舞い込んでいた。

改めて確かめると、胸背ヒュンペと呼ぶ官位と職種を現す階級章には、正邪を見分ける聖獣へちが刺繍されている。司憲府サホンブの長官である大司憲サホンのものに違いない。位としては従二品だから、まずまずの高官と言えようか。この服の本来の持ち主は恐らくは清との戦の頃に亡

くなつた前任者だ。そうだ林正哲だ。イム・ジョンチョル

私が世子であつた頃、世子専用の学問所である世子侍講院の侍講官の一人にその人物が居たはずだ。侍講官は次代の王の朝廷を支えるにふさわしい人物が選ばれる。本人の文官登用試験の成績だけではでなく、妻の曾祖父に至るまで身元を調べ上げて任命するという念の入れようなのだ。恐らくは私が王位についた時に、林正哲が側近の中に居ると不都合だと考えた連中の仕業だろう。

林正哲は明を崇拜していた連中とは違い、早くから清と手を結ぶべきだと主張していた。そして、いざ、戦となつた時には、断固として清と戦うべきだと主張した。至極まともな事を言っていたはずなのだが、敵対勢力に『嵌められた』らしい。事実無根の罪で死罪となり、家族は奴婢に落とされた。気の毒な話だ。

正しい事を公然と主張すると、寄つてたかつて引きずりおろされかねない。事と次第によつては先々代様の様に王でも廃位させられ、命を奪われるかもしれない。朝廷も後宮も魑魅魍魎の巢だ。腐つた泥沼だ。

官服のおかげで暗くなつた宮殿の中を誰にも疑われず、真つ直ぐ門まで歩いてこられた。そこに輿も無く供もないのを奇妙に思つた者がもしかしたらいたかも知れないが、誰も声をかけなかつた。それでも内侍府の手練れの者たちには気づかれたような気がする。撒いた方が良いかどうか、私は少し悩んだ。撒いたとて、行く当てが有るわけでもなし、必要以上に判内侍府事の気を揉ませても後が厄介な事になりそうだ。

夜空は澄み渡り、秋の美しい月が辺りを照らしている。松の林をゆっくり歩くと、気持ち伸びやかになってくる。ひととき大きな大木を目指すようにして歩いていると、笛の音が響いてきた。染み

入る様な美しい音だ。この旋律は聞き覚えが有る。我が国の曲ではないし、おそらく清の曲でもない。はて、一体全体どこで聞いた曲であつたらう？

遭遇・1 (後書き)

へテもへチも語源は中国の中国の伝説上の動物「?豸」(カイチつて読むらしいです)です。お役人はへチ、一般民衆はへテと呼ぶものだったらしいです。

笛の音に引き寄せられるようにして、私は先へ進んだ。笛は、古い王朝のころ盛んに演奏されたソグムと呼ばれる竹製の横笛ではないか、と思われた。高く澄んだ音色から、奏者の確かな手腕のほどが伺える。実に美しい音色だ。それにしても、どこの楽曲だろうか？

「周りを悪者に取り囲まれておいでですよ、御用心を」

はつきり私に向かつて、警告を発したものらしい。若い声だと感じた。それを聞いてようやく怪しい黒づくめの覆面の連中に気が付いた。何とも我ながら間の抜けた話だ。後をつけていたのは内侍府の者だとばかり思い込んで、油断しきっていた。刀の柄に手をかけたが、その手が無様なまでに汗ばんでいる。鼓動が早鐘の様に打っている。

虚空を切り裂くように何かが飛び、覆面の男たちが呻き声を上げ崩れ落ちた。

黒い覆面からすると士大夫を殺害し、世の中を作り変えるなどと宣言している殺人契サリンゲの者だろうか？ 南の方では相当に暴れているらしいが、そうした連中がこれからは都でも暴れると言う計画なのかもしれない。虐げられた民の敵は、確かに都に一番沢山居るわけだから、有り得る話だ。

時節柄も考えず、見るからに士大夫でございと言わぬばかりの赤い官服で供もつれず歩くなど、軽率だった。あるいは……士大夫の中で王である私の排除を狙う輩が、相当数居るのだろうか？ そうであるならば殺人契より物騒な話だ。

一応剣の扱いは、習ったはずなのだが……二、三回切り結ぶと息が切れる。声の主は身軽な様子で大木の枝からひらりと飛び降りると、素晴らしい剣の腕前を披露している。何やら舞でも舞っているような水際立った動きだ。時折、つぶても投げて、命中するたび離れた位置の敵が呻き声を上げて、のけぞる。

「笛も凄いが、つぶても凄いいじゃないか」

「のんきな事をおっしゃっている場合ではございませんよ。剣をしつかり構えて下さい」

叱られた。当然だ。恰好ばかりで軟弱な情けない男だとあきれられたのだろう。

「護衛の方はどうなさったのです？ おひとりで出歩かれるには聊か心許ない剣ですねえ」

「恐らく勝手についてきた護衛が居るはずだが、はぐれたかな」

そう答えるのも、肩で息をしながら、精いっぱいという感じだ。情けないが。

「御身分がお有りでしょうに、あまり軽はずみな事をなさると、周りの方々がお困りになりますよ」

月明りで私の官服の色ぐらいは確認できたのだろう。どこまでも敬語だ。まさか王だとバテてはいないと思うのだが。どうにか確認できた様子から、大ぶりの倭刀を構えた少年であるように見えた。それにしても、本当に強い。黒覆面どもは大いに慌てている。小柄だが、素早くしなやかに動くその様子が実に美しい。そんなことを言うと「何をのんきな」と怒られそうで、言わなかったが。

「た、大変だ、急げ」

聞き覚えのある声がした。内侍府の者たちだろう。一挙に形勢は逆転し、黒覆面たちは雲の子を散らすように逃げ出した。

「ああ、御苦労」

私が見知っている判内侍府事の腹心に声をかけると、助けてくれたその人物は刀をようやくおさめた。

「お供が追いつきましたか」

「そのようだ。いやあ、助かった」

私は礼を言い、もう少し話を聞こうと思ったのだが、どうい事情かは分からないが、急に慌て始めたようにも見えた。

「では、私はこれにて御無礼いたします」

断固として、我々を拒絶している、そんな雰囲気だった。気が付くと霧か霞の様に姿が無かった。

きつとあの者にはもう一度会える。いや、何としても会わなければならぬ。そう思った。

今にして思えば、私はあの時既に……あれに強く魅かれていたのだ。

遭遇・3

そのころ、政治や世相を批判した絵入りの壁書きが、非常に話題になっていた。一日に同じ内容の物が二枚づつ、都の中の人目が多い場所を狙って張り出される。それが三日間続いたのだった。

私も回収された問題の六枚を全て持ってこさせて、現物を見たが、強烈な内容だった。

「右ほおに大きな黒子のある大監テガンが、いつも通う妓房キバンで金払いが良いの嫌われているのはなぜか。次の三つから正解を述べよ」

墨痕鮮やかに文が綴られている。筆跡から大変な能書家が気軽に書いた、と言う印象を受けた。その三つの選択肢はこうだ。

- 一、いつも口が臭いから
- 二、閨でしつこいから
- 三、王様の財物を横流ししているだけのくせに威張るから

大監と呼ばれる正二品以上の男の官服は赤いが、文の隣にはその赤い官服姿の老人が、酒を飲みながらしつこく妓生に絡んでいる様子を、面白おかしい戯画に表しているのだ。三つの選択肢ごとにそれぞれ絵が添えられている。水墨画に朱でわずかに彩色しただけだが、該当者だと思しき人物の特徴をよくとらえているのは、驚くばかりだ。

そして、オチが笑える。「三つとも正解」なのだ。

「実に良くできているな」

「都中の噂になっております」

「張り出されたのは、全部で六か所か？」

「そのようです」

今朝の朝議の場でも、その当事者がノコノコとあらわれた折に、皆がしきりに噂していたらしい。

王直属の秘書官とも言うべき都承旨と左右承旨・左右副承旨、同副承旨の六名を前に、私は壁書きを再び見返した。やはり皆も、文字は能筆の者が楽々と書いたような印象を受けたようだ。絵は相当な才能をうかがわせる。笑いに紛らわせているが、批判は強烈だ。

「問題は三番目だ。戸曹判書が不正で私腹を肥やしているとしか読み取れないが」

「戯れごとめいた書きぶりですが、かなりの見識の人物が描いたものの様に感じます」

「内密にお調べはお入れになった方がよろしいのでは」

「うむ。そうしよう」

犯罪捜査が専門の左右の捕盗庁ポトチヨンの大将をその場に呼び寄せた。

「ここが上がっている噂について、見聞きしたことは有るのか」

私の問いに対して、私腹を肥やしている人物は十人以上噂に上っているが、なじみの妓房キバンで派手に散在するのは数名に限られていると答えた。

「恐れながら、右ほおに大きな黒子が有るのは仰せの通り御一人だけです」

「戸曹判書・安達平アン・ダルヒョンで相違ないか？」

私が実名を挙げると左右の大将はしばらく無言で顔を見合わせていたが、頷き「仰せの通りでございます」と答えた。気まずそうに顔を見合わせた様子から、他の部署にも調べる様に申し渡す必要を感じた。漢城府の判尹や司憲府の大司憲にも安達平について調べさせた。

翌日、司諫院サガンの長官である大司諫テサガンが「何故、壁書きなどと言う不確かなもので国家の柱石たる人物を調べさせるのです」と意見を言いに来た。確かに匿名の文書をまともに取り合うべきではないという主張は、一見筋が通っているが……都でも朝廷でもこれほど噂になるのは、やはりそれなりの根拠が有るはずだ。大司諫は王に諫言をするのが役目だが、安の爺の実の甥なのでそこは割り引いて考えるべきだろう。

「調べて何も後ろ暗い事が無ければ、寡人も自信を持って朝廷の皆に『根拠の無い噂をやめよ』と言えるな」

私が顔をじつと見て言っていると、それ以上の言葉は出てこなかった。

あの笛を吹く人物に助けられてから、私は二日か三日おきに市中に忍びで出るようになった。あの折の経験から内侍府の中の腕の立つ者を六名ほど、身近につけている。判内侍府事も一緒だ。酒場に入り、噂話に耳を傾けたり、触れ書きの張られている所で民の言葉を耳で拾うように気を付けた。

「どうやらあの壁書きの内容は、事実無根と言う訳でも無さそうだが」「口が臭いという、あの壁書きを気に掛ける男が多いのでしょうか？ あちらの露店に面白いものが売っております」

その露店に見に行くと一人の中年男が、盛んに呼ばわつていて、辺りを男どもが取り囲んでいる。

「奥方様、お嬢様、婀娜な妓生から、しつとり年増の女将さん、はては尼さん、巫女さんまで、女は誰でも口の臭い男は大嫌い。毎食後、これで丁寧歯を磨きなせえ。そうすればあら不思議、あなたも、あなたも、ほれ、そこのお若いあなたも、女にもてるようになる事請け合いです！」

すると、小さな壺に入って紙のふたをした歯磨き用の薬らしきものが、飛ぶように売れている。少年が父親であるらしい男の商売を手伝って、懸命に売り子の役を務めている。

「これは、どうやって使うのだ」

私が尋ねると、男は手の平ほどの大きさの紙を渡した。そこに事細かに用法・効能が書き記してある。主成分は塩・炭・ヨモギといった所らしい。王宮で使う焼き塩より、効き目が有りそうだった。

「ここにある房楊枝はおすすめですぜ。柳の枝の筋をうまい具合に細かくしてあります、これに歯磨き粉を少しのせて、丁寧に一本一本磨くんです。特に夜寝る前は丹念になさつて下さい。最後は、よく口を漱いで下せえよ。そうなされば虫歯にもなりませんぜ」

「あの壁書きのおかげで、大繁盛じゃないか？」

そう水を向けると、警戒したような視線を向けてきたので、銀の小粒を握らせて「その飲み屋で待っているから、歯磨きを作った者を教えてくれないか？」と頼むと、頷いた。

遭遇・3 (後書き)

正確には大監テガムは正一品、従一品、正二品で、日本の太政大臣、左右大臣級のトップエリートです。赤い官服は王に直接の面会を許される正三品堂上官と言われる役人までです。正三品でも王に直接面会出来ない堂下官は青い官服になります。

従二品と正三品堂上官は大正令監ヨシガムと呼ばれます。

しばらく飲み屋で待っていると、品物があらかた売れたらしく、男は店じまいして飲み屋にやってきた。

「房楊枝はおいらの手作りですが齒磨き粉の方は誰がどこで作っているのか、実はおいらも良くは知りません。東大門のわきつちよの市場の妓房の隣のちよつとした料理屋で、どういう訳かこの齒磨き粉が売ってるんで」

「さつきくれた効能書きが良くできているなと、思ったのだが、そこで印刷したものか？」

「そうなのかどうかわかりませんが、齒磨き粉を仕入れる時、仕入れた本数に応じて、枚数を数えてもらってくるんです」

「ほおお、この南の市場から、わざわざ東の市場まで行くのか」「へえ。そうです。気の利いた小物を扱う店なんかも有りますし、腕のいい代書屋もいるんだそうですよ。何でも役所関係の書類はそこに任せるとうまく事が運ぶらしいです。おいらの様な金釘流じやあ、まともな話でもお役所で最初からはねのけられちゃうらしいんです。うちの畑を業突く張りの金貸しをやってる士大夫に横取りされそうなので、訴状を書かないとな、なんて思ってるんです」

その男の『業突く張りの金貸しの士大夫』の話も興味深かったが、その東の市場の事が私は気になってならなかった。早速、翌日暗くなつてから市中に出たが、真っ直ぐ東の興仁之門フインジムンを目指した。東大門トンデーと一般に呼ばれるその場所にも、かなり大きな市場が有る。そこでよもや探し求めていた人物に再会できるとは、思ってもみなかった。

その東の市場は南より更に活気があった。どうやら食べ物屋の評

判が良いようだ。

「どうやら色々な種類のチヂミとチヨンビョンが有るようです」

チヂミは生地には様々な食材を切り混ぜて焼いたものであるのに対し、チヨンビョンは混ぜ物なしで薄く焼き上げた生地には何かをはさんだり巻き込んだりした料理なわけだが、どちらも穀物の粉を水で溶いたものが生地の主な材料なのは共通している。

店に入り、出された物を供の者にも食べさせると、皆良い味だと褒めた。

「こう言うてはなんです、宮中で頂いたものよりおいしいかも知れませんが」

私も判内侍府事の意見に賛成だった。特に珍しい材料を使っているようにも見えないのだが、評判を呼んでいるのは、それだけ調理人の腕前が良いという事だろうかと思ひ、聞き込みをさせたところ、料理に使う水と焼き油を非常に吟味していると言つ。特に水を浄化させてから、全ての料理に使うと言つのは耳新しかった。

「何でも水の汚れを取る仕組みを考えた女人在るそうで、その女人の指導でここの料理も出来たそうです」

まだ年若い随分と才覚の有る女らしいと判った。働き者で器量良しで物知りだと言つ事で、是非本人が見たいものだと思ひ聞き込みをさせると、夕方からポジャギを商う店に出ている事が多いと言つ。

「あいにく、本日は休みのようですな」

自分でも驚くほど、ひどくがっかりした。せつかくここまでできたので、あの、齒磨き粉についても調べてみた。

「ヤンホと言うこのあたりの顔役の男が中心になって、作っているものらしゅうございます」

炭としては火力も強くなく火の持ちも良くないものでも、匂い取りにはなるらしい。その性質に着目して作り出された商品のようだ。そのヤンホが相談を持ちかけたのが、水の浄化の仕組みを考えた女と同一人物らしい。

「ますます、その女が気になるな」

更にその翌日になって、捕盗庁を手始めに、漢城府や司憲府からも戸曹判書・安達平についての調査結果の報告が上がってきた。私が出日忍びで市中に出て色々探っているらしいと知って、本腰を入れたということもあるようだった。都承旨以下の六名と、先日文句を言いやってきた大司諫も呼んで、調査報告を見せた。

「見ての通りの結果だ。噂はそれなりに根拠のあるものだったようだな」

「ならば、やはり安達平は罷免ですな」

「お待ちください、市中の壁書きを元に六曹の長の一人をすげ替えるなど、有ってはならない事だと存じます」

やはり大司諫はゴネた。

「寡人自身が市中の噂に耳を傾けてみた所、調査結果と大差無い話が聞けたぞ」

「王様御自身が、熱心にお調べになった結果も踏まえての事です。」

大司諫の言葉は認識違いと言うものでしょう」

別に熱心に調べたわけではなく実を言えば気晴らしに過ぎないのだが、人格者で知られ、朝廷内で派閥を超えて一目置かれる存在である都承旨の実にありがたい誤解を、私は敢えて解く必要も感じなかった。

それからの一ヶ月ほどは戸曹判書の解任、処罰、新任者の選出で朝廷全体が上を下への大騒ぎだった。安達平は都から遠く離れた離島へ流罪となった。不正蓄財の額は相当な物で、それらは皆、王直属の手元資金の方に置くことにした。主な廷臣どもは皆文句を言いたげでは有ったが、自分の部署に資金を持つてくる『名分』が立たないので、諦めたらしい。

「ともかくも清廉潔白で温厚な人物を望む。皆の推挙で後任を定めたい」

そんな風に申し渡しておいたおかげもあって、まずまずの人物が後任者に決定したのは良かった。その間、私の市中への微行は無かったし、意を決して面倒事を片付けようと言うヤル気も出たので、沈中殿とも初めて男女の事を成した。そして、他の側室達の所も平等に夜に行つてやる事にしたのだ。ちなみに申貴人は、保養のために新たに作つてやった田舎の邸に行つていて、ずっと留守だった。

「それにしても、夜も気分が休まらなくて困る」

一時期治まっていた不眠症が、また、ぶり返した。

「どなたか心から安らげるお相手の方が見つければ宜しいのでしようが……」

主治医である御医の診立て通りなのだろうが、なかなか難しい。あの下仕え二人を殺されて以来、宮中で羽目を外すのも逃げ道を見つけるのも難しいのだと痛感した。どの女の所にも、もう行きたくは無かったので、判内侍府事に酒の相手をさせた。

「安らかな眠りが欲しいものだ」

「何とも、私どもの力不足で御座います。申し訳御座いません」

「やたら女子を寢所に入れると、すぐ何者かが秘密を漏らすようだな」

「はあ。そのようです。後宮の方々からそれぞれ、財物を頂いたり、家族の面倒を見て頂いたりしてやってのけているのですが、まだ、上手く調べがつかえません」

「外で少しぐらい、気晴らしがしたいものだが、揉め事の種になっても困る」

「明日にでも、また、お出かけになっではいかがですか？」

「ん？ 市中にか？」

「はい。あの市場で聞き込みました一件、御興味がお有りかと思いましたが」

「ああ、そつだ。確かに」

私はあの、買い込んだ歯磨き粉の効能書きを、文箱から取り出して、改めてみた。

「この効能書きだが、実に良く出来ている。南の方で聞いた代書屋

がいかなる文章を書くのか知らんが、気になるな」

「女の件ではございませんで？」

「それは、無論、気になるが……」

「ひよっとして、壁書きの件と関係が有ると、お考えでしょうか？」

判内侍府事のその問いに、私は返事をしなかった。壁書き、効能書き、代書屋、物知りだという若い女……結びつけて考えるのは、おかしいのだろうか？ 私はそんな疑問を持ち始めていた。そしてその翌朝に、また、壁書きが出たとは、私も露知らずにいたのである。

「御覧下さい。今度は王様の御処置を褒め称えているようです」

最新の壁書きは一枚きりで、宮殿の正門にいつのまにやら貼り出されていたらしい。

そこには沢山の民衆が描かれていた。実に様々な職業・年齢の区別がはつきり一目でわかる。画風からして、先日の壁書きの作者と同一人物の手になるものだろう。皆うれしげに笑い、諸手を上げて叫んでいるようだ。表情の捉え方が見事だと思う。

「千歳、千歳、千歳、千歳、千歳、千歳、千歳、千歳、千歳、千歳」

今回書き込まれている言葉は、これだけだった。この言葉は文武の百官が集い、王と国家の安泰を祝い寿ぐ折に全員で一斉に唱えるものだ。

「真実、民が寡人をこのように寿いでくれるのであれば、有りがたいのだがな」

この作者といつか話が出来る日も来るだろうか……そんな感慨に私は耽っていた。

描いた人間が年を取っているのか、若いのか、あるいは男か女かもわからない。雲をつかむようだ。そんな事を考えている時、決まっただけ思い浮かぶのは、あのソグムを吹く倭刀の使い手だ。舞うように美しかった戦う姿を思い浮かべると、なぜか胸が高鳴る。命の恩人の名も知らず素性も知らないなどという間抜けな状態が、いつまでも続いて良いものか。だが、どこをどう探せばよいのやら見当もつかない。ソグムを吹く倭刀の使い手を役人どもに探索させて随分たつが、それらしき人間は未だに見つからない。

「殺人契サリンゲにも火賊フアジヨクにもやられっぱなしの役人連中では無理か」

都でも身分有る者の邸を襲撃して男は殺し、女はさらい、財物を強奪するという犯罪行為を繰り返す殺人契と言う秘密結社や、火賊と言う強盗団が暴れていた。火賊は家屋敷に放火すると言って脅迫するから、そのように呼ばれる。要求を拒まれると庶民の村だろうが、王族の邸だろうが、すぐに火をつけるのだ。

政を行う立場の者たちは長い間、貧しい者から情け容赦なく絞り取り虐げてきたのだから恨みを買っても当然かもしれない。だが最大の被害者は、善良な力無い者たちだった。

士大夫は、しばしば火賊よけに、自分の邸に火をつけられそうになると、近隣の庶民の家々に火を放ち「火事だ！」と大騒ぎして賊を追い払うと言うえげつないやり方をしていた。弁償する良心的な士大夫は非常に稀で、大半は庶民への賠償は踏み倒すか、無視するかなのだ。

犯罪者から民を守るべき士大夫が、犯罪者そのものの悪行を公然と働いている。情けないが、それがこの国の現実で、王である私の臣下なのだった。

そんな犯罪者まがいの役人が民の信頼を得ているとは思われず、私の探す人物の行方を知る者が居ても、役人には知らせないのかもしれない。

「自分で探すしか無いか」

後宮が落ち着いた頃合いを見計らって、私自身が微行して探す方が早道かも知れない。そんな気がした。

遭遇・6 (前書き)

ようやく、遭遇しました。ポジヤギは食膳の覆い、風呂敷、ふくさなどの用途に使う布製品です。漢字表記は「袱子器」「らしいです。

遭遇・6

テンギの赤い色が眼にしみるようだ、と一瞬思った。

この国の未婚の娘の髪に当たり前に有るやや幅広の布製の紐と言
うか帯と言つか、そのような物だが、テンギは乙女の純潔の印だ。
それが艶やかな三つ編みの髪をまとめ、抜けるように白いうなじに
かかっている。

娘は質素な麻のチヨゴリを着ているが少し衿に刺繍が入っている
のが目を引く。うるさい事を言えば、刺繍が入った衣服は士大夫以
上の身分の者しか本来着用は許されないが、絹ではない質素な素材
を工夫しているのだから、許容範囲だろう。そして下着の襟は驚く
ほど清潔な純白だ。それが娘の心意気を示すようで実に好ましい。
品物を買った客に向かって、折り目正しい深々とした礼をしたが、
いささかも卑屈では無かった。再び真つ直ぐ体を起こした時の背筋
が、伸びやかで美しかった。

夢中になって女の顔を見つめるなど、生まれてはじめての経験だ
った。今にして思えば「ひとめぼれ」と言うものであったのだろう。

我に返って娘が売っているものがポジャギである事に気がついた。
前回この市場に来た際に、店が閉じていて落胆した噂のその店らし
い。「働き者で器量良しで物知り」との噂であったが、確かにその
立ち居振る舞いは無駄が無く、それでいて何処か趣が有った。

ともかくも、品物を買おう。まずはそれがきつかけになる。私は
年端も行かない少年が初めて乙女に話しかける時のように、ひどく
緊張した。

「いらつしゃいませ」

品物を物色し始めた私に、娘は声をかけ微笑んだ。花びらのような口元から微かに見える歯が、真珠のようだ。心の臓が柄にも無く大きな音を立てたような気がした。気分を落ち着かせるために、わざとらしい咳払いをした。

「その、風変りな模様の入った朽葉色の書類包みをくれ」

ここの品物はどれも麻や木綿製なのだが、粗末な感じはしない。色使いも意匠も品が良く、実に美しい。私を買おうとした書類包みは、この国ではついぞ見たことの無い大きな南国の木の葉の模様であると見た。

「ここはちゃんと一つ一つに値札がついている。分かりやすくて良いな。なるほど、付けは断っているのか」

その由を記した注意書きの文字の見事さに驚く。この娘の筆跡なのだろうか？

「はい。以前、大変な目に会いましたので、こりまして」

「ふうむ。相手は士大夫か？」

「はあ。まあ……御想像にお任せいたします」

娘の美しい目がいつぺんにこちらを警戒する様な色合いに変化したのが、何とも残念だった。

「ああ、いや、別に鞭打ちを食らわせるなどと考えていない。だからそう警戒しないでくれ」

「恐れ入ります」

いささか深すぎる礼が、自分とこの娘の距離の大きさのように思われて来る。私も信頼できない士大夫の一人におそらくは見えているのだろう。

「この値札は、そなたが書いたものか」

「はい」

「ふうむ。置いてある品物も美しいが、筆跡も美しい。その金包み用の物をまとめて五枚くれ」

金銀や銭を包むのに使う小さな袋だが、五枚それぞれに異なる雅やかな色合いで、気が利いている。少し余分にと思つて銀の小粒を渡すと、すぐに正確な金額の釣りが出た。計算も速いのだ。

「ああ、釣りは良い。取つておけ」

そういう私の言葉に、深く礼を返し、手際良く品物を紙で包んでよこした。初めて見る美しい包み方だ。

「計算も早いし、良い店だな。また来る」

この娘が一体どういう人物なのか、気になつてたまらなかつたが、初日の客としてはこのあたりで引き上げなくてはなるまい。年の頃はどつ見てももようやく十五か十六か……だが、いきなり「そなたの年齢は？」と聞くのとはばかられる。恐らく、この器量なら色々な男から不快な視線を向けられた経験も多いだろう。そんな輩の一人と思われなくなかつた。

それから幾度も私は自分の私室で、買ってきたポジャギやら袋やらを出して、眺めたり溜息をついたり、無意識にそのような行動を

取っていた様だ。かなり後になって判内侍府事に言われるまで自覚は無かったのだが。

「美しかったなあ」

自分でその独り言を聞いて、ぎよつとした。どう見ても十歳以上年下のごく若い娘に、心底参ってしまったらしい。それを自覚すると、急に気恥ずかしくなった。あの目の輝きと見事な筆跡から、娘が並外れて賢いのは明らかだった。そんな娘の目から見て、正室も側室も子供もいる年嵩の男など、鬱陶しい迷惑な存在だろう。それが例え王であつたとしても……そうとしか思えなかつた。

あの娘なら自分で世に立つこともできようし、めがねに適った男と夫婦になれば家運が栄え、妻として母親として家の中でも尊敬されるのも当然のような気がする。

嫌われたくないと思った。少なくとも、嫌な客だと思われたくなかった。客以上に親しくなりたい気持ちは強くあるのだが、どうすればよいのかさっぱりわからない。毎日毎日ポジャギを買いに行くのも変だろう。私のように感じている男が、恐らく都の中に幾人もいるのではないか？ そんな気がする。

「今宵は市中にお出かけになりますか？」

珍しく判内侍府事の方から、そう言い出した。

「そうだな。東市場のチヂミで一杯飲むとするか」
「はい」

娘は……今夜も美しかった。昨日と違うチヨゴリを着ていて、もっと大人びて見えた。そこへ遊び人か商人か何か良く分からない身なりの若い男がやって来て、娘と親しげに話をしている。

「何を言ってるの、ヤンホ兄さん」と言う弾んだような声が聞こえた。男は「お前のようなお転婆」とか何とか言っているようだが、それ以上は聞こえない。会話はごく短かったようのだが、ひどく長いものを感じられた。

「あのヤンホと言うのはこの市場の顔役なのだよな」

つい、気になる事が口をついて出る。

「まだ、二十歳かそこらの若さだそう。清との戦の絡みで罷免され死罪となりました先の大司憲の息子だそうです。先ごろの大王大妃様の還曆のお祝いに伴います恩赦で免賤されたようでございます」
「先の大司憲テサホンといえ、無実の罪にはめられて死罪となったと言うイム・ジョンチヨル林正哲だな？」

あの私の手元に残っていた官服の本来の持ち主だろう。

「さようでございます」

「頑固では有ったが、思いやり深い人格者であったと記憶している」

「あの息子は士大夫の身分に戻る手続きをしなかったそうです」

「馬鹿馬鹿しい朝廷には嫌気がさしたかな……」

正義の士・林正哲の息子には、私は一体どのような王として見えているのだろうか？

あの弾むような「ヤンホ兄さん」と言う声が、数日耳を離れなかった。

私が別に命じたわけではないのだが、判内侍府事は色々な部署に手を回してポジャギの店の周辺の調査も事細かにやらせていたようだ。市中微行の度にあの店を物陰から覗き込んで溜息をつく主を見ていれば、そう言った心配りをするのも当然といえは当然なのだろうが、うかつな事に私はそのあたりの事情には気がついていなかった。

「もうすぐ、店じまいか」

ここ二月ばかりは、娘が店じまいしてすぐ後ろの小さな住まいに入るのを確かめてから宮中に戻るのが習い性になってしまっていた。後宮の女たちは懐妊した者が多くて、ここしばらくはうるさい事も

言われ無さそうなので気が楽なのだった。一番厄介な中殿も身籠ったよう、まずは一安心だ。

幾度かあの、ヤンホ、どうやら本来の名前は林亮浩と言うらしいが、あの若者が住まいに入る所を見たが、すぐに出てくるので、男女の仲……では、無さそうだった。

「あのチヂミとチョンビョンが美味しい店は、ポジャギ屋の女主人の指導を受けたようです。自分の店をしめた後、手伝いに行く事も有るようです。お出かけになりますか？」

ハンネシプサ
判内侍府事の提案に私は飛びついた。すぐにあの店に入って、酒を頼み、いくつかの料理を注文したが、味が良くわからなかった。酒が空になったころ、聞き覚えのある声がした。

「嫌だ、ヤンホ兄さん。そんな事は言っちゃダメだって。おじさんだって上手に焼いてるでしょ？」

「だけど商売してずいぶん経つだろうに、なんか今一つじゃねえ？」

「人のお店でそういう事を言うもんじゃないって」

「こついつちゃんだけどさ、お前が焼く方がうまいじゃねえか」

「だからあ……」

後は小さな声で聞き取れない。会話の時間は短いものだったのだろうが……ひどく長く感じた。

「じゃあね、兄さん、おじさん、おやすみなさい」

思わず席を立ちかけて、自分に向けられた判内侍府事と護衛たちの視線に、動きを止めた。

我知らず、ため息が漏れた。

一体いつになったら、私はあの娘と話が出るだろうか？ そんな

な事ばかりを考えていた。

「それほどお気に召したなら、後宮にお入れになってはいかがでしょうか?」

そう判内侍府事に言われたが、魑魅魍魎の巢の後宮に入って、あの娘が幸せになるとは思えない。

娘があつたヤンホと言う青年を憎からず思っており、信頼もしているのは確かだろう。青年は整った涼やかな容顔で、商いの才覚もあり、相当に腕っ節も強いようだ。一度、喧嘩を仲裁している所を見たが、荒くれ共を一度で黙らせるだけの貫禄と強さを感じさせた。

妓生や商売をしている女たちから見ても、あの青年は非常に魅力的なのだろう。市場の中で幾人もの女たちから秋波を送られているのだが、本人は無視して応じないようだ。青年の目は真つ直ぐあの娘だけを見ている。それは間違いなかった。

「父親が死罪になどなっておりますでしたら、あの若者も今頃はお傍近くに仕えておりましたでしょうな」

確かに……恐らくは有能な若手官僚になつていただろう。惜しい人材を手に入れ損ねたのは事実だが、私の関心はそこではなく、やはりひたすらあの娘との関係ばかりが気になるのだ。どうにも恥ずかしい事だが……。

「おや?」

「どこへ行くのでしょうか?」

今夜はいつもと様子が違う。街の明かりも消えた中、娘は一人で脱兎のごとく駆け出し、何処かへ向かった。全く予想外であったので、後を追う事も出来ない。

「誰ぞに……会つのかも知れんな」

「宜しいのですか？」

あのヤンホと言う青年の求婚の申し入れでもあったのなら、私が出る幕は永遠に無い。そうなれば諦める他無かろうと思ひ、トボトボと道を歩いた。馬は先に帰させて、頭を整理するためにも、いつぞやの松林のあたりをゆっくり歩いて宮殿に戻るつもりだった。

諦めようとしても、諦められない……想いを打ち明けるにしても、上手い方法が見つからない。あの娘本人の立場にしてみれば、林正哲の息子と所帯を持つ方が幸せなのだ。それがはっきりしているだけに、やはり堪えるしか道は無いのだろう……

物悲しい気分で見上げると、いつぞやのように美しい月があった。

「あの笛が聞きたいものだがな」

溜息交じりで、そんな独り言をつぶやきながら歩いていると、あの大樹が見えてきた。

ん？ 何と、笛の音が聞こえるではないか。そう気づいた瞬間、自分でも不思議な事に、異国の歌を笛に合わせて口ずさみ始めた。

Hey Jude, don't make it bad
Take a sad song and make it better

ああ、そうだ。前世の記憶の中にこの歌があったのだ。ならば、この曲を笛で奏でる人間は、私と同じ異世界の記憶を持つ者……それ以外有りえない。

私はあの大木の下で足を止めた。笛の音は今夜もここから聞こえたのだ。私の気配を感じてか、笛の音が止んだ。ならば、まだ、笛の主はこの木に上ったままのはずだ。そう思った。

「以前聞いた笛だな。あの時は命を救われた。礼を言いたかったのに、逃げ出してしまった。今夜は話をさせてくれるのか」

「あなたは……先ほどの歌を御存知なのですね」

「あ？」

帰って来た言葉の語気の鋭さに、嫌われた、あるいは警戒されてしまったのかと思った。

「私の耳は普通の方より遥かに良いのです。あなたが小声で呟かれた言葉が聞き取れてしまいました」

確かに相手は大変な地獄耳のようだ。また、今夜もすぐに姿を消すつもりなのかと落胆していたら、そうではなかった。笛に負けなほどの美声が、先程の歌を歌い始めたのだ。

Hey Jude, don't make it bad
Take a sad song and make it better

その美しい声にあわせて、私も歌うことにした。

Remember to let her into your heart
Then you can start to make it

b e t t e r .

「うる覚えなのだ。だが、かつて自分がいた別の世界の歌だという記憶ははつきりある」

「この歌を歌っていた人たちを御存知ですか？」

「いや、思い出せない」

「そうですか。異世界のどこの国にいらしたのか御記憶は？」

「わからない。だが、この世界ではありえない速く走る車に乗っていて、事故に逢ったようだ。その最後の瞬間に、その曲が鳴っていたのは確かだ」

「思い出せる言葉は有りませんか？ たとえば外国の言葉だと思われるような」

「びーとるず、と言う言葉と、その曲しか思い出せないのだ」

「この曲を歌っていましたのが、ビートルズという四人組です」

「それを知るそなたは、前世の記憶をしっかりと持っているのか？」

「はい。うんざりするほどに。それで時折こうして、懐かしい歌を奏でていきます」

声の主は、身軽に木から飛び降りた。

「お、おどろいた。そなたはあのポジャギの店の女あるじではないか」

なんとまあ、女の身なりに大きな倭刀を背負っているという、奇妙な勇ましい姿だが、確かにあの娘だ。てつきり笛の主は腕の立つ少年だと思っただけに、本当に驚いた。だが、驚いた次の瞬間、あのヤンホ青年の姿が無いのを確認して、ひどく嬉しくなった。まだ、私はこの娘との縁を繋ぐ事を許されているようだ。

「はい。今はスルギと呼ばれております」

スルギ……知恵や賢さを現すその呼び名は、実にこの美しい娘にふさわしい。そう思った。そしてその印象は、その後ますます強く確かなものとして私の中に深く根付くようになるのだが、まだまだ様々な紆余曲折がある事を、この頃の私は、いやスルギ本人も、全く知る由も無かった。

友として・1 (前書き)

ようやく二人の接点が出来そうです。

友として・1

スルギのこの世界の父親は、清との戦で亡くなった武官の金稔キムニヨムと言つ者で、清との戦で戦死してすぐ正三品の位を与えられたが、その後一転して名誉を剥奪され戦争犯罪人扱いとなり、母親とスルギは官婢に落とされたらしい。逃亡して身を隠し、今日まで無事に暮らしてきたと言つ。どうやら兄弟姉妹は居ないらしい。母親は都から離れた尼寺に居り、スルギは一人暮らしなのだと言つ。父親につけてもらった名前は英秀ヨンスだそうな。

「……清との戦で戦死した父はお国のために尽くした武官でしたが、名誉をはく奪されてしまいました、母と私は今は官婢の身の上です。逃亡奴婢ですから、本来は牢屋行きですが、色々付け届けなど致しまして、お目こぼし頂いて、生き延びております」

あの戦の後、余りにも多くの戦死者が死後名誉を剥奪され、その家族が奴婢に落とされた。その一連のいきさつがどうにも奇妙だったので、私はひそかに命じて調査させたところ、官位・官職の売買をするものが、死んだ人間から取り上げられるものは取り上げて、不都合なものは奴婢に落としたようだ。官位官職の売買を禁じてずいぶん経つが、実効は上がらない。中殿の実家・沈家が中心になつて不正を行い、蓄財していると推測できるが、まだ処罰するには証拠が足りない。

スルギ達は、まさにそうした不正の被害者なのだ。本来は金稔の遺族に与えられるはずの名誉と財物を巻き上げて、自分たちの手下にやったのだらう。王として内心忸怩たる思いだ。

「そうか。あの戦の折に奴婢に落とされた武官や兵の遺族は、残ら

ず『免賤』されるはずだ」

「そうなのですか？」

「ああ。確かな話だ」

私自身の権限で特赦を出すのだから、間違いの無い話だ。

スルギの場合もともとが無実の罪で有るのだ。それなのに免賤すなわち奴婢から身分を回復するためには、その筋に顔の利く人間に金品を送るのが一番確実に早いというのが、情けない事にこの国の現実なのだった。自分と母親の二人が無事に免賤されるためには、かなり高額な金品が必要らしい。スルギはその資金を用意するために商売を始めたという。

スルギに免賤を請け負う連中の存在を教えられてから、私も改めて密かに調査させた。その結果によると、無実の罪や、親族に連座して奴婢に落とされたものから密かに金品を受け取り、免賤を請け負う輩が確かに居た。そ奴らは長い間『人助け』と称して、暴利を貪っていたのだ。

全く……どうしてこうも、この国の士大夫は民を虐げ、不正に富を蓄える事ばかり考えているのか、情けない限りだ。

スルギと話が出来るようになったのは嬉しい限りでは有ったが、正面切って私の名前を尋ねられて、困ってしまった。見え透いた嘘をつくのも嫌ではあるし、嘘をついてもこの娘なら見抜くのではないかとも思えた。

「そうよなあ。名無しと言うわけにも行かぬし。嘘をつくのもイヤだ」

「見え透いていなければ、嘘をつくのも『方便』で御座いましょう」

いったいどこまでこの娘は私の身の上を察知しているのだろうか、

ひよつとして私が王かも知れないと察しているのだろうか、とも思われたのだった。

「では、こうしよう。梅里と呼んでくれ。ごく親しい者しか知らないが、一応私の号なのだ」

苦し紛れにほとんど誰にも教えたことのない、私の雅号を教えた。

宮中では排泄物を梅雨メウとか梅花メフアなどという。

私は梅が好きなので、そうした表現自体、梅に失礼だと思つてしまふ。だが、それだけに身分の制限を受けずに梅の字は名前に使いやすいのだろう。妓生には梅の字が付く者が多いようだ。

判内侍府事は私が自分の乏しい才能を自覚して付けた一種の謙讓表現だと受け取つたようだが、そうではない。前世の微かな記憶によるものだ。あちこちを微行して回り、悪者どもを痛快にやつつけ貪官汚吏を懲らしめる、そんな高貴な身分の白ひげの老人の物語が有つたのだ。その老人の号が梅里先生だった。たしか。

スルギはその辺の事情も察するかもしれない。

月が雲から顔を出すと、並はずれて美しい顔がはつきり見えた。衣服は質素で、髪には赤い木綿のテング以外何の飾りも無い。うっすらと唇に紅をさした以外、化粧もほとんどしていない。それなのに後宮に居るどの女よりもはるかに美しい。

話をしているうちに分かつたのだが、スルギはこれまで横暴な士大夫に妾になれとか、酒の相手をしろとか、不愉快で厄介な誘いを受けたことが幾度となく有るらしい。私もそうした輩と似たり寄つたりと思われるのは、嫌だった。

「そのう……そのものどもと私が似たり寄つたりだと思われたくないのだが……」

「思っではおりません」

「だが……私も正室がいるし娘もいる。いや、勝手だな。男は」

「そうお思いなら、お早くお邸にお戻りなさいませ」

「だが、そなたと話したい」

厚かましいが、ここで食い下がっておかねば縁が切れてしまう。
私は必死だった。

友として・2

「……御正室様が気をもまれたらお気の毒です」

スルギの言う事は客観的には恐らく正しいのだ。だが、私は正室もその他の者も、私が選んだ相手ではないし、皆実家で言い含められて輿入れして来ただけだと言う事、気詰まりで互いに本音は晒せない関係だと言う事、そんな事情を話して、多少なりとも気持ちを理解して欲しいと思ったが……完全に男の身勝手と思われてしまったようだった。

「身分の有る殿方には御正室の他に御側女がいて当たり前。名高い妓生と馴染みになれば風流を解する方と褒められても、誰もけなしません。夫の有る女が家を空けて出歩いて、別の男と会ったりしたら、この国では重い罪ですのに……本当に不公平ですね」

得手勝手な男だと思われたのだろう。だが、その言葉ほどには嫌われてもいないような気がした。あくまで気がしただけだったが……前世は同じ世界で暮らしていたかも知れない親しみが、そう思わせるのだろうか？

大抵の事なら、もっとあっさり諦めるのだが、スルギの事だけは諦められそうにない。だから、図々しいとは思ったが、文を出したら返事を欲しいと頼んだ。

「返事はもらえるだろうか」

「はい」

「本当に？」

「はい」

スルギが微笑んだ。大輪の花のつぼみが開いた、そんな印象を受ける様な微笑みだった。その微笑みを見るだけで幸せで、その視線が自分に向けられていたなら天にも昇る様な心地になる。いつまでも見つめていたかったが、それも行かない。後ろ髪をひかれるような思いで、自分から別れの言葉を述べた。

「では、また会おう」

そう言っ て宮殿を目指したが、頭の中はスルギに送る文の事で一杯だった。

一つ気になっていたことが有った。

やり手だと噂の東の市場の代書屋だ。その代書屋の正体がひよつとしてあのスルギではないかと思えてならなかった。店の値札や注意書きの筆跡が、不似合な程達筆であったからかもしれない。あるいは、あれほど見事に剣を使い、笛も見事なのだから、他にも何か有りそうだと思うたせいだったかも知れない。

翌日、捕盗庁からの報告が上がった。やはり、代書屋はスルギらしい。

「あのポジャギ屋の主が代書の仕事をまとめているのは確かです」

東の市場にほど近い妓房の妓生たちが艶書というか懸想文の代筆をしばしば頼むようで、そうした場合は割合とすぐに書状が仕上がるそうだ。役所に提出する上诉状になると、前日に話を受け、翌日に出来るという具合らしい。ために捕盗庁の者が、個人的な土地のいざこざに関する訴状を依頼してみたと言う。実際は既にその土地に関しては無事に裁定が済んでいるそうで、その上诉状を見せられた。

「筆跡と言い、文章と言い、見事ですな。先にこの上诉状を提出すべきであったと、後悔しております」

このような見事な上诉状が、年端も行かぬ女が書いたとは誰も信じないだろう。

確かに様々な法令・判決を熟知している者しか書けそうに無い、見事なできればあった。実際の所は時の権力者の都合で恣意的に判決が下されることが多いのだが、こうした「甘く見られない」しつかりした上诉状が有ると、判決を下す者も後の厄介ごとを恐れて、余り無茶な結果は出さないものなのだ。

この国ではそうした腐れ役人の横暴を押さえる上でも、文書の高い教養をうかがわせる整った筆跡と措辞・型式は重要な武器になる。スルギの代筆で命拾いしたものは、多いはずだ。

市場を監督する平市署ヒョウシヤウの長官・提調テイテウを務める洪敬徳ホン・キョウドクにも東の市場の状況について報告させた。温厚で学識高く武術にも優れている人物で、私が即位したばかりの頃、ならず者達が宮中の勢力と結んで米や塩の取引に絡み、民を困窮させている件を解決する必要性について献策した人物だ。洪敬徳によれば「東の市場は取引など概ね、公正で、治安もまずまず」らしかった。

何か目新しい事、市場の民の動向について尋ねると、スルギの話が出た。

友として・3

「どうやら平市署提調ヒョウシンソウ・テシヨを務める洪敬徳は日ごろから関心を持って、スルギを観察していたらしい。

「並はずれて美しい娘だから、というだけでは有りませんで」

洪敬徳が言うにはスルギには男にも珍しい志が感じられるのだと言う。

「あの娘のポジャギを作り出す技も意匠も、御覧になったように優れております。ですが、あの娘の並はずれておりますのは、その技を惜しげもなく女たちに教え、戦で稼ぎ手を失い困り果てている者たちに生計たつきの道を示してやっている事でしょうか。優れた縫い手には、店ののれん分けをしてやるようでございます」

浄水装置の作り方も、目新しい料理の作り方も、読み書きを教えてやるのも、周りの皆の暮らしが少しでも良くなるように考えて行っているものらしい。

「並みの娘なら多少蓄えが出来れば身を飾る事に使いましうが、あのスルギと呼ばれている者は『皆で手を携えて貧しさから抜け出すべきだ』と市場の仲間たちに説いております。衣類衣類が絹物ではないからと言って恥じる事は無い。襟が汚れ黒ずんでいるのを放置する事こそ恥じるべきだ、とまあ、このような事を常日頃申しているようです。その言葉を実際に耳にいたしました時、若い娘ながら天晴れな見識と感じ入りました。近頃、市場の道から見苦しいものを片づけ、掃除をする者が次第に増えてきておりますのも、あの娘の言葉を受け入れ、その行いに共感するものが着実に増えている証拠

です」

確かにスルギの衣類は綿や麻の質素なものだが、襟はいつも清潔で真っ白だ。そして私自身東市場の通路に、ごみや馬糞が落ちているのは見た事が無いのも事実だった。都の他の場所では公道にそうしたものが落ちていられるのも珍しくは無いのだから、特筆すべき事なのだろう。

「不逞の輩は身分にかかわらず見事な腕前で懲らしめますし……いやあ、美しい娘の姿をしておりますが、あれは立派に一個の士大夫だと言えるかもしれません」

「そちの話にいちいち合点がいった。あれは見事な剣の腕前で寡人の命を救ってくれた恩人故、そのつもりで便宜も図ってやってほしい」

「やはり御心が動きますか」

「引き付けられるな」

「ですが、あの娘は後宮に入るより、市井に有ってこそ、本領が発揮できますよ」

洪敬徳は私に釘を刺したのかもしれない。『王の女』となるより、世のため人のため力を尽くす方がスルギには相応しいのだと……

「確かにその通りであろう。故に寡人は、あれを友であると考える事にした」

そう言った瞬間、胸の奥が少し痛んだようだった。

「主上殿下が御友人とは、あの娘も大したものですな」

「そうだ。寡人の友をよろしく頼むぞ」

皆が引き下がってから、私はスルギとやりとりした手紙を取り出して眺めていた。

私は紅梅の枝を描き、こつ書き添えて送った。

「瓊姿けいし只合まなに瑤臺ようたいにあるべきに、誰ぞ漢城に向いて処処に栽つる」

通り一遍な解釈なら、こんな所か……元の漢詩に「江南」とあった部分はこの都を指す「漢城」とした。

「玉のような美しい姿をした梅花は月の仙宮にあるべきなのに、誰がこの梅の木を都の処処に栽えたのだろうか」

だが、私がこの言葉を書き付けた時、宮中を月の仙宮になぞらえ、そこに玉のように美しいスルギを引き入れたい。適う事なら朝夕身近に、スルギの姿を見ていたい。そんな願いが胸に有ったのも事実だ。スルギは、どう思ったのだろうか？

「寒依疎影蕭蕭竹　春掩残香漠漠苔」

（寒中に竹は蕭蕭として梅枝の疎影により添い、春の名残の香をかくして苔が一杯についている）

私と同じ漢詩の一部から、この部分だけを名高い学者か官吏かと思つような謹厳で見事な楷書で書き添え、私の描いた梅の枝の周囲に、竹林と月を風情有る様に描いたスルギの意図はどの様なものであつたのか？

友として・4

「やはり、そなたは……友人としなければならぬのかもしれないな」

男女の仲になる事を慎んでほしい。そう言う遠回しな牽制なのかもしれないと、私は感じた。

「だが、それならば、なぜ……この栞をくれたのだ？」

スルギの手作りだろう。梅の花型の赤い絹地で作った栞には、ほのかに香をたきしめて有る。心惹かれる、どこか懐かしく優しい香りだ。両手のひらでそっと包み込み、思うさまその香りを吸い込んだ。

もしかして……スルギ自身も自覚しない内に、私に対する何がしかの感情が育ちつつあるのかも知れない。そんな期待を抱かせるには十分な、魅力的な香りだった。

「我慢強く待つしか無いのかもしれない」

先ほど洪敬徳に釘を刺されたくせに、その言葉の妥当性も認めたくせに、私の感情は一向に納得していないのだ。実にもって全く……我がままな子供と大差無いのだった。

その夜私は夢を見た。スルギを組み伏せ、思うさま髑り抜き責め立てている夢だ。何とも賤しげな腰つきと、スルギの苦悶する表情が意味するものは、明らかだった。

「スルギ！ スルギーっ！」

おのれの発した叫び声で、目が覚めた。心の臓が早鐘の様に打ち、ひどく喉が渴いた。

「いかが遊ばしましたか？」

判内侍府事の声だ。今夜の宿直とこいを務めていたものらしい。

「水をくれ」

明かりをともし、すぐに水を持って来たこの内侍府の長に、私は問いたださずにはおれなかった。

「寡人は先ほど、何を叫んでいた？」

「……」

「答えよ。何を叫んでいた？」

「あの……女主人の名を呼んでおいでであつたかと……」

私は拳を床に打ち付けた。全く、もう、何という……賤しい自分が許せなかった。

「……かの人を、やはり後宮にお召しになりませんか？」

「ならん。それはならんぞ、判内侍府事！ 絶対にならん！」

海千山千と言われた老いた内侍府の長は、奇妙な生き物でも見る様な眼差しで、幾度も同じことを繰り返す私の顔を見つめていた。

そのような事が有つてからしばらくして、スルギも母も免賤された。官婢身分からの解放に加えて、完全に士大夫としての身分も回

復させたのだ。さすがに父の死後追贈された正三品に戻すのは適わなかったが……

「あの方の母君は正式に得度を受けて尼となられたようです」

頼みもしないのに判内侍府事はスルギの母が尼になった事を、私に伝えた。あの、夜中の叫び声を聞かれて以来、恐らくは色々気にかけてスルギの事を調べているのだろう。

「そうか。得度にもまとまった金品が必要だと聞くが、免賤のために使わずに済んだだけ、願いを適える事が予定よりは早まったかな」
「左様でございますよう」

私の出した手紙に絵と漢詩の一部を書き添えて寄越した以外に、スルギからは何の便りも無い。どうやらそのような独り言を私は無意識に口走り、判内侍府事の耳に届いていたようだった。

私の出生以来ずっと付き添い、私が東宮になると内侍府の長に納まり、私のためなら『いかなる事でも』してのけるこの年老いた宦官は、私の傍にいても完全に存在感を消せる特技の持ち主なのだ。

最近になって、こやつが私のためと信じてやってのけた恐ろしい犯罪の数々について気づいてしまったが、こやつが私の忠臣であるのは否定できない事実だ。幼い日に男の証を断ち、宦官として生きてきたこの男にとって、私と言う主は存在意義そのものになっていくのだろう。「私は身も心も主上殿下に奉げております」と言うこやつは口癖は恐らくは全くの真実であって、それが有り難くもあり、時折恐ろしくも感じる。

「恐れながら……あの方からこちらに連絡をつける方法を、お定めになっておられぬのではないかと」

確かにそうなのだった。市井の民の立場の人間が、身分を明らかにしないで微行する王に連絡の取りようも無いのは当然だった。

「では、連絡先を決めたいものだなあ……目立つては困るし、後宮の連中に知られたくはないし……」

「お任せ下さいましたなら、何とか致しましょう」

「これを……スルギに渡してほしい」

渡した手紙は、士大夫の男が酒に酔って不貞寝している後姿を墨で描き、「きつと忘れられているな」という言葉だけを書き添えたものだった。それに清国渡りの紅絲硯という赤い独特の色合いの良い硯と出来の良い筆を数本、さらに上質の紙をまとめて一緒に持たせた。

その日の夕方、返事が戻ってきた。

友として・5

硯と筆に手紙を添えて贈ったその日の夕方、返事が戻ってきた。

「毎日、落ち着く時間もなくありません」

そう書き添えられているその絵は、忙しいスルギの日常を示していた。四つの場面に区切られた絵のそれぞれにごく簡単に一言が添えてある。

「開店しました」

新たに何か食べ物の店を開いたらしい。

「持ち逃げされました」

それに使用人が一時的に金を持ち逃げしたようだ。

「なぜか戻ってきました」

さらにその者が戻って来たらしい。

「千客万来ですが……」

店は大繁盛で、朝から晩まで忙しく、他人の飯を作っていたくせに、自分の飯を食べ忘れたり、大忙しかった……と言った所らしい。その店が見てみたいものだ……

「判内侍府事、微行の準備だ」

私は居ても立っても居られない気分になった。馬に鞭を当て、道を急いだ。

スルギの新しい店は大繁盛だった。

「入口に植えこみですか。このような店は初めて見ますな」

「まるで宮中の一部の様に床に石を張っているのですね」

すべての料理の値段がはっきり明示されていて、入り口で料金を先払いし、料理名を記した木の札を受け取る。席には店の者に案内されてから座ることになっているのだ。簡素ではあるが清潔な椅子と卓子が置かれ、前の客が席を立つとたちまちに清潔に拭き清め、次の客を案内する仕組みになっている。

「給仕たちの真つ白い前掛けと頭巾が清々しいですな」

「ほおお、豆乳でこのような汁物が出来るのですか」

ん？ なぜか見た覚えが有る料理だ。何の前触れもなく『ほわいとしちゅー』と言う言葉が頭の中に浮かんだ。やがて、スルギがはいさつにやってきたので、声を潜めて訊ねた。

「これは『ほわいとしちゅー』か？」

「左様でございます。御記憶にありますの？」

「いや、この料理を見たら言葉が浮かんだだけだ」

「本来は牛の乳を用いますけれど、この国では王様でも無い限り、めつたに手に入らない食材ですから、豆乳で似たような味を目指して作ってみました」

「美味しい。非常に美味しいと思うぞ」

「まあ、宜しゅうございました」

「店はいつ終わる？」

「食材が無くなりましたら、閉じます」

「……そうか。ここで待たせてもらっても、悪いな……」

「お酒をお持ちしましょう。しばらくお待ちいただけましょうか？」

本当は私の勝手に待つわけだが、スルギの言葉はあたかもスルギ自身が私が待つ事を期待しているかのように聞こえる言い方だ。こ

こちらに気まずい思いをさせ無いための心配りだろうが……つい、それ以上の気持ちを期待してしまう。我ながら勝手だと思う。

スルギは店の仕事に戻り、水で溶いた小麦粉に細ねぎとイカをのせて焼いたものが酒と一緒に出た。他にも和え物が三種ばかり添えてある。どれも美味しい。

「店の主より、本日のお礼でございます」

そう口上を添えて酒と料理を運んできたのは、まだ子供と言ってもよい様な少女だった。普通この国の料理屋は引退した妓生などが経営者で、客への給仕もする事が多い。その点でもこの店は変わっている。

「夜遅くまで務めは辛くないか？」

つい、そんなふう尋ねてしまう。

「こちらのお店ほど良い条件の奉公先は他に御座いません。食事も部屋も十分気を使っていたいておりますし、御主人様は文字や帳簿の事まで教えて下さいます。私はここに来るまで読み書きができませんでしたが、おかげさまで今では簡単な手紙のやり取りぐらいでしたら、できるようになりました。私以外の者も、皆そうです。御主人様は使用人に落ち度が有りまして、お打ちになりません。いつも至らなかつた点を私たちに分かるように、やさしく教えて下さるのです」

主であるスルギに心服している様子が見て取れる。確かに、何かと言うと自分より身分が下のものを鞭やら杖やらで打つのが当たり前なこの国で、使用人を打たないというのは大変珍しい。

大抵の料理屋は客は男だけであつたりするものだが、ここは妻子連れで来る者が多いのも珍しい。

「ここは何でも綺麗に美味しく作つてあつて、気に入っているの」「今度は息子の嫁を連れてきましょう」

そのような事を言っている年かさの夫人達の一団も有つた。こうした夫人達は寺か互いの家で集まるのが普通だろう。従来の料理屋の客層とは違う人たちにもこの店は好まれているようだ。

活気に溢れた店の情景を観察するのは飽きなかつた。おかげでスルギが店じまいするまでの時間も、予想より短く感じられたのだつた。

友として・6

「ゆっくり話がしたいのだが、良いだろうか？」

こう切り出すのも心の臓が口から飛び出すかと思うほど緊張した。店を終えた後で、疲れているだろうから断られても致し方ないとは思っていたが……案に相違してスルギはあっさりついて来てくれた。並々でない武術のたしなみが有る所為か、私を『不逞の輩』とは異なる存在だと思ってくれているからなのか、あるいは……異世界での前世の記憶を持つ者同士の親近感なのか、あるいはその全てであるからなのか、良くは分からない。

「知人の邸」だと言って連れ出したのは判内侍府事の小ぶりな別邸だ。東の市場のすぐそばなので、スルギとの繋ぎを付けるのに好都合な場所だ。一見簡素なつくりだが、かなりの財物を費やして建てられたと見るものが見れば判る。そんな邸だ。庭には私が好む梅の花が咲き始めていた。

「これより大きなお邸は数々有りましようが、ここは小ぶりでも風雅な良く出来た建物ですね。この丸い窓から、ちょうど一番枝振りの良い梅が見えるようになっていいるなんて、実に気が利いてます」

最初はこんな当たり障りの無い話をしていたのだが、段々この国の未来とか政治的な話になってきた。女性と話をしてこんな具合になるのは初めてのことだが、スルギはこの国の行く末が心配だと大真面目に言った。

「どうしてこの国の官吏は、出身地や血縁関係ごとに固まって徒党を組み派閥を作り、他の派閥を蹴落とす事ばかり考えているのですし

ようね。天主教の布教や商売を隠れ蓑に、領土を獲得しようと思つて血眼になつてゐる西洋人たちに目を付けられたら、今の我が国ではひとたまりもないでしょうに」

「我が国は貧しいから、西洋人からしたら旨味は少ないとは思つがな」

「確かに禿山が無秩序に広がり、例年水害に見舞われ、春先には必ず餓死者が多数出ると言う国柄ですが、港を開き、更に別の土地を物色するための足がかりには使われるかと思ひます。それに、朝廷の不逞の輩は内密に条件の良い場所に『隠田』を相当持つておりますし、勝手に開発された鉾山からそれなりに銀も出るようですから、一般的にこの国全体の富と信じられている物より三割から四割は多いのではないかとも思われますが……」

こうまではずきり自分の治める国が貧しい事を指摘された事もなかったし、『隠田』や勝手な鉾山開発の話は初耳だった。

「やはり、八道全域の細かい測量が必要でしょうね。測量を現実に行うにしても……恐らく方々で土地の有力者や『隠田』を持つ朝廷の不逞の輩の養つ私兵などが、ひどい妨害工作を働くでしょうが……」

スルギはため息をついた。

「どうした？」

「この国はボロボロですね。まともな事を言つたりやろうとすると誰かに足を引っ張られて、気が付くと牢屋行きと言う事も珍しくないですし……こんな国に見切りをつけて、さつさとどこかもつと自由に暮らせる異国にでも逃げ出した方が賢いんでしょうが……殊にこの国の女は弱い立場ですから……でもなぜか……この国を捨てがたいのです」

おもわずスルギの肩をつかんで「それはならん」と言いそうになったが、私の一方的な思いでスルギを煩わせることになるのだと思いなおし、ぐっところえた。ともかくも当分は国内に留まってくれそうだ。

「あの前世の異世界では、女の地位はもつと高く、身分の違いなどと言うものも殆ど無かったかな？」

「ええ。そうです。少なくとも女が政治に関して自分の意見を言うたからって、罰を受けたりしません」

「男も女もかなり長い間、皆学問をするのだったよなあ」

そう、最低でも九年、十六年ほど学ぶものも珍しく無い。

「はい。そうです」

「スルギは前世に学んだ事を、覚えているか？」

「おおよそすべて、覚えていきます。あちらの世界は、色々と面白い読み物が有りましたが、こちらの世界はさっぱりですから、つまらなく感じます。まあ、漢籍をひっくり返すのも悪くは無いんですが」「漢籍はどの程度読んでいる？」

「十三経に分類されるものは、おおよそでしょうか」

儒学の書物であつても、四書五経を上回るそのような書物は、あまりこの国では読まれていない筈だ。

「四書五経、ではなくてか？」

「五経を学ぶ前段階として四書、っていうのは朱熹の提唱にすぎないわけですし、朱子学が国教のこの国ではそれ以外の選択肢は無いって感じでしょうけど……朱熹が切り捨ててしまった部分の方に私は興味を持ってました」

朱熹と言う呼び方は、確かにスルギ以外この国では誰もしないだろう。

「ほおお……そういう事は考えたことも無かった」

「朱子学なんて、儒学のほんの一部じゃないですか。前世では科挙で出題されないであろう古い時代のもの、朱熹が無視したものに興味がありましたね。まあ朱熹って人は社会を設けて難民の救済を行ったりもしてますが、この国の役人はそれを見習おうとはしませんね。朱子学は身分制度とか君子の権限を重視しますから、仏教の弊害を排除するのに具合がよかったです。でも、今の状況を見ると、朱子学が国教というのは、あまり感心しません。今更仕方ないんでしょうが」

朱子学こそが儒学そのものと信じているような連中が聞けば腰を抜かしそうな言葉だが、深い学識が有るからこそ導き出される意見だろう。

『大学』も『中庸』も『礼記』の一部に過ぎなかったのに今となつては余りに重視されすぎて自分としては納得がいかないとか、禅の影響を強く受けて成立した朱子学は本来雑多なものを含んでいたはずの孔子の儒学とは相当性質が違うと思うとか、『春秋』に記された日食の記録とか……確かに科挙向けの読み方とは違うが、スルギの学識は相当の物である事は確かだろうだつた。

「この世界に生まれ変わるにあたって、そうした記憶力を強めてもらつたようなんですよ。だから、一度でも読んだものは忘れないみたいです」

「朱子学成立以前の儒学関係の書籍なんて、この国で手に入るものだろうか？」

内侍府が管理する王家の書庫や国の正史の編纂を行う芸文館辺りなら、かなり変わった物も收藏されているだろうが、私はそうした本の存在自体認識していない。というか、現物を見た記憶が無い。

「本を商う店に行くと、二束三文の値段で売っています。清から輸入しても科挙の出題範囲と被らない本は全然買い手がつかないみたいですよ。私はそういうのばかり、買ってますが」

「手元にあるのか？」

「ごく限られたものですが、それでも百冊程度は……」

「貸してもらえるか？ どんな本なのか読んでみたい」

「では、私はもう家に戻りますから、お立ち寄り頂けましたならお貸しいたしましょう」

思いもかけず、あの、市場の店の裏側の小さなスルギの住まいの中に入れてもらえた。

住まいは一間きりで、そこには飾り気のない筆筒と本で一杯の書棚と小さな机に布団に長持ちぐらいしか家財道具も見当たらなかつた。娘の部屋と言うよりは、在野の清貧に暮らす学者の住まいのようだった。縫物を仕掛けていた様子が見て取れたのが、唯一女性の部屋らしいところだろうか。嬉しい事に私の贈った硯は早速机に置かれていた。

「散らかつておりますが……御自由に書棚の本でも御覧ください」

縫物を手早く片付け、茶を入れてくれた。部屋の軒下部分で煮炊きをするようだ。茶が入るまで私は書棚の本を手に取って見たが、半分ほどが私の読んだことの無い書物だった。

「なかなか凄じくないか。科挙を受けても楽々通るのではないか？」

「つい先日まで官婢であった女に、科挙なんて関係ありません。こうした書物を女が読むこと自体、怪しからん事なんでしょうし……」

スルギはフツとさみしげに笑った。確かに、いかに才覚に満ち溢れていようと、女である限り官吏登用への道は完全にふさがれている。だが、何か方法は有るかもしれない。私はちらつと、そんな事を思った。

「この本は？『周礼非周公書』とはどう言う事だろうか？」

「宋の学者で官吏だった人の著作です。論拠がしっかりしていて信用できる内容だと感じます。『周礼』は後世の捏造だという事のようです」

「春秋三伝とは言うが『春秋公羊伝』は読んでないな。私などは一般的な左氏伝もつる覚えだ」

「その『春秋公羊経傳解詁』というのが公羊伝こそが『春秋』にと

つて唯一の解釈書だと漢の時代に主張した人の本です。儒教の本を暗記出来る事と、良い政治が出来る事は全然別だと思えます。だから、科挙なんて政治にも学問にも、あまり良くないと思うのですよ。科挙の無い倭の方が純粹に学問としての儒学を究めようとする人が多いのも、わかる気がします」

「たしかになあ。文科の知識だけでは良い政治は行えないと思う。武科もだが、雑科があまりにも軽視されているとは、感じるよ」

「どれも国家の運営の上で必要な技能や知識だと思いますのにな。まあ、軽視されている雑科すら受ける資格のない人間がこの国では圧倒的に多いのですが……」

普通は科挙と言えば文科すなわち文官登用試験を指す。武官を登用する武科は一段低く見られる。武科は受験資格が文科よりは緩やかなので、名門の庶子などは武科を受ける場合も多い。さらに雑科は医学、数学、通訳、天文学といった分野の専門家を登用する試験だが、文科の連中は自分たちとは完全に身分が違つて見ており、正当な評価をしていない。

「身分の恨みか……この国では皆が何がしかの身分の恨みを持っているな」

「そんなものが無かつた国の記憶を持つていると、この国の実情は辛すぎます。正しい事を、正しいと言えない状態は、私にとってかなりつらいです。何を言つても処罰など受けない国で暮らしていた記憶が、鮮明に有るものですから……」

「そうか。それは……私も似たようなものだ。正しい事を正しいと言つと言えは……」

私は以前から気になっていた壁書きの作者の話を持ち出した。

「あの絵の画風だが……人物の描き方が、今日貰つた返事に良く似

ていると思っただの。文字の筆跡も……」

スルギは困ったような顔になった。

「ああ、別に良いのだ。私が勝手にそう思っただけだ。別に答えなくて良い」

「恐れ入ります。いえ、正直に申します。作者は私です」

えらくあっさりスルギが認めたので、少しばかり驚いた。

「そうか。どうやら……その不逞の輩が壁書きの作者を目の敵にしているようなのでな、心配になったのだ。自分たちにとって不都合なら、どんな汚い手でも使うような連中だから」

だから、当分の間、壁書きの制作を止めた方が良いと忠告しておく。

「今日案内したあの邸に繋ぎをいつでもつけられるようにするから、気が向いたら何か書いてくれると嬉しい。まとまった物を書くというのも有りだろうし……その……手紙の一つも送ってくれと、私としては非常に嬉しい」

茶を貰った後、本を二十冊ほど貸してもらって私は部屋を出た。

それからしばらくは父である先王の三年の喪が完全に明けられるに際しての儀式やら、後宮での翁主たちの誕生祝やら、市中に出られない日が続いた。その間、私が二通手紙を送ると、スルギからの返事はすぐに届いた。だが、スルギの方から手紙をくれる事は無い。

返事では日々の何気ない様子を知らせてきたが、相変わらず男の文の体裁を取っている。妓生達の懸想文の代筆をするほどのだから、女らしい文も得意なはずだが、私はそうした文の受け取り手ではない……そう見なされているのだろう。

「恐れ入ります、主上殿下は何をお読みになっておられましたか？」
喪が明けた翌日、昼食の後、私の居室に領議政の金恩成がやって来た。孫娘の昌嬪の生んだ明恵翁主の初誕生を祝う件についてだった。金恩成はかつて文科の最終試験である殿試で首席、すなわち状元で、歴代状元の親睦会である龍頭会の会長でもある。自分こそはこの国の最高の文官であり学者でもあるという自負心が強いようだから、私が読んでいた本が気になったのだろう。

「春秋の解説書のそのまた解説か？ まあ、そんな所だ」

私の手にしていた本の題名を読んで、金の爺はちよつとばかり驚いたようだった。

「ほお！漢の何休が著した『春秋公羊経傳解詁』ですか。小臣は浅学非才の身で読んだ事が御座いません」

「科挙の出題にはまず関係ないから、それも当然かもしれないな」

「内容はいかがございましたか？」

「全部で十二冊も有るからな、まあ、ゆっくり読もうと言う所だ」

スルギがどうやらほぼそらんじているらしい書物なので、ぜひとも私もしっかり内容を記憶したいと思って、真剣に読んでいる。

「こちらは『韓詩外伝』ですか」

「最初の一巻だけ借りたよ。持ち主はどうやらそらんじているらしいのでね」

「はたまた『文心雕龍』とは」

「これも全部読めば十巻らしい。読めば多少は文章がまともになるかと、思ったのだ」

「斯様な本の持ち主とは、どこのだれで？」

「無位無官だが、それなりの見識の持ち主だな」

「科挙は受けませんか？」

「さあ、なあ。わからん」

自分の読んでいない本を私が読むのが気になるらしい。全部スルギからの借り物だが、それを知られたらスルギの身が危ないかもしれない。以前私の子を孕んだ女が殺害された件に、この爺が絡んでいる疑いは晴れていない。それに昌嬪は嫉妬深い。

「王様がお気持ちを傾けそうな女は全て、可能な限り遠ざけよ」と金品を撒いて色々な女官に命じているとかいないとか……鬱陶しい話だ。スルギとの仲は清らかなものだが、私の気持ちが大きいに傾いているのだから、その事を後宮の女に知られるわけには行かない。

翁主の誕生祝いは祖父である領議政が仕切ればそれで良いのだし、私はただ出席すればよいだけの事だ。私は必要以上の事をこの爺に教えるつもりは無い。

「我が孫娘も……女腹ですかな」
「さあな。取り合わせというのものも有ろうよ。」

領議政は年を食っている割に、裏表の使い分けが余りできない人だと内侍や女官どもが噂する。確かに機嫌の良し悪しも実に分かりやすい。名門の嫡出の長男で、殿試の状元、加えて出仕以来これという不都合もなく順調に上り詰めて領議政となったわけだが、孫の性別までは思うようにならない。更には正妻と側女がいがみ合い噂になっている。側女は別邸を与えられ、その女の産んだ息子の長女が昌嬪らしい。正室は王族で、私も大王大妃様の所で幾度か見かけた記憶が有るが……記憶に残るほどの不器量だ。正室の生んだ息子も側室の生んだ息子も、人物学識とも、パツとしない。

そんなこんなで「金領議政の所は昌嬪が王子を産んで、その王子が世子にでもならない限りおしまい」だとも言われている。

孫が二人続けて翁主を産んだのが不本意で不快なのだろうが、あきらめて貰おう。私としては、一応義理は果たしたと思っている。これ以上昌嬪が子を生む事も有るまい。無論そんな事は口が裂けても言えないが。

だが、満一歳を迎える明恵翁主には何の罪も邪心も無いのだ。だから、誕生祝にはにこやかに同席してやろう。

友として・8 (後書き)

本当はかの国では状元という言葉は使わず、**壮元**と言いました。

スルギとは、さほど度々は会えなかった。それでも月に一度は共に酒を飲み、十日に一度ぐらいは店に顔を出し、わずかでも言葉を交わすようにしていた。相変わらずスルギの方から文を寄越してくれる事は無かったが、私が出した文には必ず返事をくれた。

「迷惑なのかもしれないが、会いたい」

そう言ってしまった所為なのか、私が酒に誘って断られた事は……今の所は無い。何を話しても興味深かったが、男女の情に関わる話は敢えて互いに避けていた。それでも私は自分の強い感情は十分自覚はしていたが。

「特別な友、そう思っても宜しいですか？」

スルギがそのように言ってくれた時は嬉しかった。実を言うと手一つ握っていなかったが。というのも、一旦触れたが最後、自分の理性が持つとは思えなかったからだ。

それでも何かと理由をつけて、一緒の時間を過ごす口実を探した。梅が満開になれば、共に見ようと誘った。幸いな事に断られなかった。まだ肌寒い時期でもあるし、いつも忙しく働くスルギの体に良くて温かいものと思い、宮中で材料を吟味させて体を温める薬膳を用意した。

「スルギは何時も忙しそうだから、滋養の有る物をとって作らせた。独特の匂いは有るが上等な人參だ。ほら、食べておくれ」

互いに酒を飲み肴を楽しむ時、スルギは私に箸で料理を取って、食べさせるようなまねは一切しない。スルギは妓女でも女官でも無い。優れた淑女なのだから、当然と言えば当然なのだった。この時は逆に私が箸でつまんで差し出したものを、スルギが恥ずかしそうに食べてくれた。

「口に合うだろうか？」

「ええ。これほど上等な材料で丁寧に作った料理はめったに頂けません。とてもおいしいです」

そして極上の人参を見事だと褒めたのだが、その笑みを見て私まで気恥しくなった。だが、嬉しかった。

いい年をした子持ちの男が、まるで十代の少年のようだ。我ながらおかしいと思う。自分でもおかしく感じるくらいだから、判内侍府事などはもっとおかしいと思っているだろう。

「それほどにあの方を想っておいでですのに、なぜ御身分を明かされて、後宮にお迎えになりませんか？」

「あれが後宮に来て、幸せになれるだろうか？ 並はずれた才能と美しさは女どもに妬まれ、ひどい目にあわされかねない。朝廷での後ろ盾も無いのだし。市井にあればこそあれの才能も生かせるのだ」

まるで、押し問答の様にこんな具合のやり取りが幾度か有った。

「大王大妃様辺りが気に入って下されば、かなりあの方の御立場も楽では御座いませんか？」

「私はあくまで『友』なのだ。スルギに後宮の女どもの様に臣妾シンチヨフなどと言わせる気も無いし、狭いところに閉じ込める気も無い。それに……」

「林亮浩ですか？」

「ああ。そつだ。わかつているなら、その話はやめよ」

あのスルギが『ヤンホ兄さん』と呼ぶ男は、スルギの夫の最有力候補なのだと思う。あの男ならスルギをただ一人の妻として終生大切にするだろう。あの男が決断した時が……私たちの別れの時だ。そう覚悟している。だから、それまではあくまで『友』として、清らかな美しい思い出を作りたい。そう思っていた、いや、そう思い込むことにしていた。

サムジンナルつまり三月三日の節句に花餅フヤジヨンを食べさせたくて、スルギを招いた事も有った。宮中製のとりどりの色合いの花を張り付けた小さな餅をスルギに見せると、喜んでくれたようだった。

「まあ、綺麗で可愛らしいですね！ 何だか食べるのがもつたいなような気がします」

後は春らしく蕩平菜タンピョンチエも出した。これは色とりどりのナムルを緑豆の寄せ物に混ぜ合わせて食べる料理だ。「蕩平」とはどちらにも偏らないという意味を表し、宮中では争いをいさめる意味を込めた一種の縁起物として食べるのだが……一番喜ばれたのは鯛と春雨を様々な食材で彩った鍋だった。

「これって鯛麵トウミンとか勝妓楽湯スンギアクトンとか呼ばれるお料理でしょうか？」

「そつだな。彩が春めいているだろう？」

「鯛が立派ですねえ。クルミに松の実、クコ、シイタケに銀杏にニラ、春菊に牛肉も入るのですか、へええ」

「ほら、このうまみを吸い込んだ春雨とタイの身を一緒に、お食べ」

「まああ、あつさり上品なのに……複雑で豊かな、良いお味ですね」

スルギは仕事に夢中になりすぎると、しばしば食事が抜けてしま

うらしい。

「料理屋の主が食事を忘れて体を損なつては、本末転倒ではないか」
「本当に……おっしゃる通りですね」

「スルギにはいつも元気で居てもらわないと、私も困る」

長いまつ毛に縁どられた美しい瞳が、もの問いたげに私に向けられるとドギマギしてしまう。昼間の明かりの中で見つめられたなら、私の顔が赤らんでいるのまではつきり見られてしまっただろう。

「そ、その、そなたは私の大切な友だからな」

おかしい具合に声が裏返っている。判内侍府事に聞かれなくてよかった。

「ありがとうございます」

「私が勝手にそう思っているだけだ。気にしないでくれ」

その実、気にしてほしくて堪らないくせに、つい、そんな言葉が口をついて出る。

「さあ、躑躅チンダルレの花を漬け込んだ杜鵑酒トウキョウジンジュはどうだ？ ん？」

私も飲める方だがスルギはいくら飲んでも乱れない。そんなわけでもいくら杯を互いに重ねても、互いは理性を失う事も礼を失うことも無い。従つて最後まで席は乱れず、互いは清らかな友人のまま別れるのだった。

「今度一緒に飲むときは、もっと温かいだろう。スルギは鞆クネは好きか？」

「あちらの世界ではブランコで子供のころ遊びましたが、この国では一度も。鞆クネというと宮中かよほどの大家のお庭にあるか、いつその事、野原か河原の木の下にあるか……そんなものではないかと」「じゃあ今度、鞆クネ、あの世界ではブランコと呼んだか、そのブランコをこいで楽しまないか？」

「春のブランコですか。ああ、この国の習わしでは四月の御釈迦様のお誕生日から五月の端午の節句まで、女の人がブランコで遊ぶんでしたね」

「戦続きでここしばらくはそれどころではなかっただろうが、清との和平がなつて国が落ち着いた。だから、スルギだってブランコぐらい楽しんで良からう」

「どうせなら、昼間の温かい時間に楽しみたいものです」

「互いの予定がうまくかみ合うようなら、ぜひ、そうしたいな」

次の機会を約して、私達は別れた。

それからしばらくして、国中で或る語り物の演目が大いに話題になった。土大夫の息子と妓生の娘の恋の物語だ。二人の出会いはこのうだ。春のうらかな日差しの中で色鮮やかなチマを翻しクネを楽しむ美しい娘に、土大夫の息子は一目ぼれしてしまう。やがて相思相愛の仲となった二人だったが……

私はこの無名子の名前で発表された物語とスルギをつい重ねて考え込んでしまったものであったが……後から思えば、それはあながち的外れでも無いのだった。

しばらくして無名子の名前でもた別の作品が発表された。

「いやあ。迫真の描写ですな。読んでいる内に何やら物悲しい気分になりました。だが、確かに身分の低い美しい娘と言うのは、得てしてこうした不幸に見舞われるものでしょう」

「若君の子を孕んで無一文で邸を追い出されては、確かに生き残る事も生易しい事ではないでしょうな」

「春をひさいでいても、不思議は無い……追い詰められれば人殺しも、まあ、分からんでもないですぞ」

「それにしてもその罪を裁くのが子の父親とは……ありえぬ話でも無いですな」

「大監^{デガン}、ひよっとして身に覚えがあたりで？」

「いやいや、私の邸にはそのような見目麗しい下女はおりませんでしたよ」

「そのようにおっしゃる兵判^{ヒョパン}のお邸には、評判の美女が居るそうではないですか」

「息子が側室に直したいなどと言いますので、頭が痛いです」

朝議の前に皆が何かの噂ばなしに耽っていると思えば、今評判の『婢と若君』の内容に関してらしい。

「皆も、今噂の本を読んだのだな？」

「おお、主上殿下、もしやお目を通されましたか？」

「ああ、読んだぞ。最後にあの士大夫の男が官位官職を捨て、女とその息子と共に生きると決めるのは、皆どう思うのだ？」

「人として、子の父親としては正しいかもしれませんが、朝廷には不忠でしょう」

「官位についたままで、女を邸に引き取り、共に暮らすと言う解決策で、十分な気がしますけどな」

子までなした女が惨めな暮らしの中で人殺しの罪を犯した、しかもそのような境遇に女が落ちたのが、自分の責任である場合、罪の償いをしたいと考えるか否か、と云うことだろうと私は思ったが……

「この無名子なる作者、何者でしょうなあ」

「大方、幾度も立て続けに科擧に落ちた学者崩れでは有りますまいか？」

「身分卑しい女の立場について、もっと考えさせたい、そんな目的で書いたものでしょうか？」

「下女に子を産ませて、ろくに面倒も見てやれず、気がとがめた男かもしれないな」

皆勝手に色々噂したが、作者が女かも知れないという意見は出なかった。私はひよっとしたら……とは思ったが、スルギに「あれはそなたの書いたものか？」と尋ねる手紙を書く勇氣は無かった。身分違いの男女の仲はあの物語のように互いに不幸を招く、と言われかねない気がしたのだ。

「朝廷の権威をないがしろにするけしからん悪書ですぞ」

「身分卑しき女のために官位官職もなげうって家も飛び出す事をそのかすなど、けしからん本だ」

そんな声も当然聞かれたが、どちらにせよ『婢と若君』が大いに話題になったのは確かだった。

更に半年程たってから、同じ無名子の新作『大寿』が出た。今度は宮中の女官どもが夢中だった。

物陰から女官達の噂話を聞くのはなかなか興味深い。盛り上がるといささかかしましいが。だが、その時節の様々な話題をちゃんととらえている場合も多いので、侮れない。

「二人の見目麗しい男に思われているのに、不幸になって行くのね
大寿^{テス}って」

「美人は辛いわ」

「でも大寿^{テス}って男みたいな名前ね。身分卑しい女なら確かに変な名前が多いものだけど」

「でも……あの男二人の、それぞれの身勝手さと無神経さと鈍さ、わかるなあ」

「あら、あなた、身に覚えが有るの？」

「そう言うあなたこそ、どうよ」

「まあまあ、二人とも。どっちにしたって、夢中で読んじやう面白さよね、あの話」

『大寿』は、無垢な貧しい娘が、豊かな士大夫の男と善意の人物である学者と言う性格も境遇も異なる二人の男に愛されていながら、次第に不幸のどん底に落ちて行く様子を克明に描いた作品だった。

「これを書いた無名子^{テス}って、どんな人かしらねえ？」

「この話の士大夫か、学者、みたいな境遇の人じゃない？」

「凄く才能のある人なのは確かよね」

「何処かの権門の側女腹の坊ちゃんとか？」

「ああ、食うには困らないし、科挙は受けられないし、それってありえるかもねえ」

女どもも、作者は無意識に男だと思い込んでいる節が有る。私はすぐにスルギを思い浮かべたが。

いずれにせよ、正体不明の無名子なる人物の作品は、巷を大騒ぎさせていたのは確かだ。

早い物で、スルギと言葉を交わすようになってから丸三年が過ぎ、今年で四年目になる。出会った頃は瑞々しい美少女と言う感じであったが、近頃は共に酒を飲んでいるとひどく艶めかしい風情を漂わす瞬間があつて……困っている。てつきり林亮浩と所帯を持つと思つていたのに、あの男は相変わらず『兄さん』扱いだ。男の方はずっとスルギを想っているようなのに……一体、スルギはどう言つつもりなのだろう？

久しぶりにスルギのやつている店で酒を飲んでみると、その『兄さん』が向こうからやつて来た。

「梅里様、でいらっしやいますね」

「確かにそれが私の雅号だが」

「あなた様は、一体全体どういふおつもりで、スルギと度々会つておいでなのでしょう？」

判内侍府事が割つて入ろうとするのを、私は手で制止した。若者の目は真剣な怒りに満ちていた。

「まさか……スルギを戯れにどういふしょうなど、お考えじゃありませんまいね？」

「とんでもない。あれほど優れた学識・見識の持ち主なのに、ふさわしい場が無い事を惜しいと思つているのだ。大切な友だと思つている。決して傷つけるつもりは無い」

「そのお言葉、しかとまことでいらっしやいますな？」

「ああ」

「あなたがどのどなた様でいらっしやっても、そのお言葉が偽りと判明致しました時は、それ相応の報いが御座いますよ。お覚悟は確かですか？」

「ああ。それは当然だ」

「少なくとも私は……あなた様がスルギを不幸になさるなら……絶対に許せません。例えどれほど貴い御身分の方で有ったとしても……たとえ、主上殿下であつたとしても許しませんから」

「肝に銘じよう」

私の言葉に若者は折り目正しい一礼をして、無言で去って行った。

「御身分を承知しているようですね、あの男」

「そうだな」

「これから先、いかがあそばすのですか？」

「これまで通り、だな」

「失礼ながら、お出会いになって既に丸三年が過ぎております。あたら花の盛りをこのまま過ごしてしまわれるのでしょうか？」

「これまで、何のために私が耐えてきたと思つているのだ」

「はあ……それは、幾度も伺つておりますが……」

判内侍府事が惜しいと思う以上にずっと、何倍も、私は花の盛りのスルギがこのまま歳月を一人寂しく送つて行くのが惜しいと思つている。

店に入った客の注文をテキパキとさばくしぐさの中にも、近頃は微妙に艶やかさが加わつた。体の線も若竹を思わせるみずみずしい感じから、近頃はもつと優しい丸みを帯びてきた。胸も……いや、いかん。それこそ困つたことになってしまいそうだ。

「いかん。まずいな」

「どうなさいました？」

「今夜は二人で会うのをやめておこう」

「あの青年に、義理立てですか？」

「いや……ともかく止めておく」

宮殿に戻って、寝具の傍らで『大寿』を読み返していた。随分と男女の機微が細やかに描写されている。ひよっとしてスルギは、一度ぐらいは男と寝たのだろうか……たとえばあの青年と……そして、満たされない辛い気持ちを抱えているのだろうか？

「どうすれば、良いのだろうか。お前を不幸にしたいわけではないのに」

誰にもまだ、先は見えていなかった。

友として・11(後書き)

急展開は次回以降です。

希望の光・1

「甥の亮浩ヤンホめが何か申しましたとか」

「誰に聞いたのだ？」

「判内侍府事から『甥御はずいぶんとまあ怖い物知らずな人ですな。王様の御身分を察しておいでなのに、いささかも遠慮なさらぬのですから』と聞かされまして。何かとんでもない御無礼を申し上げたのではと思ひまして」

テサホン 大司憲を務める林誠哲イム・ソンチョルは無実の罪で死罪となつた林正哲の弟だ。

田舎に引つ込んで百姓仕事に励んでいたが、私が幾度も手紙を送つて呼び寄せ、つい最近着任した。

「いらぬ事を。良い。気にするな。共通の友人をないがしろにしてはいけないと怒られただけだ」

清との戦の前後のどさくさに紛れて、反対勢力に嵌められた無実の人々の名誉回復を行い、その中から有能な人材は意識的に引き上げている。

恐らく、汚い手を使ったのは中殿の実家・沈家を中心とする勢力だろうとは思ふが、今のところ沈家側からの積極的な反対攻勢が無いのは、沈中殿が懐妊中だからだろう。高名な占い師が胎内の子が王子だと断言したとかで、それを信じているのかもしれない。私は意識的に女が生まれるように気を配ったはずで、他の側室が懐妊した折も占いで男と出たとか騒いでいたが、やはり女だった。だから、今度も失敗は無いはずだと私は信じていた。

林誠哲は兄や甥より言葉遣いは柔らかだが、芯の通った硬骨漢だ。スルギに聞いて以来、私は秘密に隠田の調査を行っており、地方官

の綱紀肅正を行う必要を強く感じている。全ての官吏の違法行為を監督する司憲府の長官である大司憲は、言わば改革の要の人事なのだ。

「それにしても……怒るとは、穏やかでは御座いません。それにその御友人とは、いかなる人物で」

「市井に隠れた知者だ。寡人なりに友人の幸せを願っているのだが、何をどうすれば良いのか考えあぐねている。何も宮中に出仕するばかりが人の幸せでもなからうし……」

林誠哲は私の顔を見て、何をどのように感じたものか……こう言った。

「その御友人が何やらうらやましゅうございますな」

若く優秀な人材を慎重に選び出し、王直属の地方監察官である暗行御使に任命し各地に派遣しているが、彼らは一応司憲府に所属しているのだ。やがて関連部署の者達が集まり、隠田に関する調査結果の報告と分析、これからの対策について会合を行った。司憲府の他に王の秘書官である都承旨以下の承政院の面々、財政担当の戸曹、穀物などの市場価格を監督する平市署からも幾人かが参加した。

「八道全体で課税対象から外されてしまっている隠田の面積は相当な量に及んでおりまして、逃亡奴婢を困い込んで耕作を行わせている場合が大半です。そこから上がる収益の全てを地主が独占しております」

「隠田の地主は地元の良い有力者である場合が多いのですが、例外無く都の権門の恩顧を蒙っております。当然そのためには、相当な財物を費やしておりますが、その実態までは掴めておりません」

「冠婚葬祭の折の贈答品や、招待客などを精査すればかなりの実態

が浮かび上がる可能性が御座います」

「中殿の懐妊祝いが全国から寄せられたらしいが、それらの財源もこうした不正収入の可能性が高いな」

「恐れながら申し上げます……沈家の場合には通常の地方官にも書面を出して、それぞれの土地の有力者に催促するよう命じており、隠田だけではなく、本来国庫に収まるべき全ての税から何割かが恣意的に抜き取られていると思われます」

「これまでに判明した全国の隠田のたまかな位置を地図に色分けしてみました。赤い色の沈家もつとも多く、それに次ぐのが青色の金家と言う事がお分かりいただけましょう」

幾つもの未解決の課題は含むが、問題解決のための糸口は見えてきたようだ。秘密の審議は一旦そこで終わったが、最後に無念そうにまだ若い同副承旨が呟いた。

「ですが、中殿様が王子様をお生みになれば、沈家を押さえるのはほぼ不可能になりましたよなあ……」

彼の心配は無理も無い。

「案ずるな。公主だと寡人は信じている。子供ぐらいは本気で慈しんでやりたい故、そうでなくては困る」

その言葉に、一同は息を呑んだ。

「今の言葉は、内密に願うぞ」

だが、この言葉が回りまわって「王の御気持ちは沈中殿の上には全く無いらしい」と言う噂になるであろう事は想像に難くない。だが、まだ、沈家との正面对決は避けねばいけないのだ。今の私には

力が足りない。だが、いずれは沈家の勢力を一掃する時期が来るだろう。そして、明珠や成弘のカタキも取るのだ。

やがて、三々五々、目立たぬように皆、席を辞した。

この日を境に、私の中で沈家に対する姿勢が明確に定まったのだ。た。

希望の光・2

寝具を前にして明珠と成弘の不審死……いや、ほぼ毒殺と断言してよかるうが、二人の死について考えていた所、判内侍府事が一冊の本を持ってきた。このような深夜に王の部屋に出入りできるのは内侍か女官の中でも限られた者だけだ。

「これはあの方の最新作では御座いますまいか？」

そう言っただけで差し出された本の表題は『高南君逸話集』となっている。作者名は無名子だ。

「既に読んだか？」

「いいえ、ですが、私はもう一冊手に入れましたので、読むことに致します。なにぶん最新作ですので、読み終えた者は少ないようです」

「ほお。ならばこれから読むとするか。朝まで、眠らず読み続けるかもしれないが」

「明日は朝議はお休みと存じますが、朝のお食事は遅らせますか？」
「いや、いつも通りで良い。大王大妃様、大妃様への御挨拶は欠かせぬからな。その後、眠ければ眠る。中殿と側室達の所は回らないで置こう」

主人公の高南君は権門の子息で、齢わずか七歳にして四書五経はおろか、万巻の書を読みこなし、大変な能筆で、顔立ちも美しい少女と間違われるほど優しい。武芸もなかなかの物で、弓と礮は百発百中、剣も小太刀を使い、馬はいかなる荒馬も乗りこなすと言う特技が有る。ただ、唯一の欠点は歌で、何を歌っても調子が外れてしまい、邸の皆に、何でもできる大天才にも不得手が有るのかと思

議がられている……そのような、人物設定だ。

「どうやらその高南君はこれまで未解決の事件を解決して、左右捕盗庁の役人達にも恐れられ煙たがられているらしいが、なにぶん見た目が愛くるしい子供であり、身分の上下を問わず女性に人気がある為、聞き込みの際も大いに得をしている。そうした高南君に、国王から事件解決への密命が下る……そこから話の本題に入るのだった。

「なるほどなあ。いや、本当にそうであつたかもしれん」

話を読み進める内に、思わずそんな独り言が出てくるほど見事な推理で、実際の明珠や成弘の殺害のいきさつもこのようであつたかと思われた。

事件は幼い王子の不審な死を巡って、様々な思惑が絡み複雑な様相を呈するが、殺害を命じた犯人は娘を新しい中殿にしたいと狙っている^{デカン}と或る大監であつた。その罪を高南君は国王に報告するが、国王は朝廷で大きな勢力を持つ犯人達を今すぐ処罰できない無力さを嘆く。

「早く科挙を受けて出仕し、力になって欲しい」と願う王に対して、犯人達の勢力を削ぐ策を授け、王の命令があればすぐに犯罪捜査に協力することを条件に、三年間待って貰う様に願い、認められる。

高南君の最初の話は、以上のような内容だつた。

「確かに……三年ほどはかかるかも知れんな」

「宮中から沈家の勢力を一掃するには、まだまだ幾つも試練が有るだろうと言う事は、想像に難くない。」

私と判内侍府事は無名子の正体をスルギだと、最初の作品を読ん

だ時から思ってきたのだが、再びゆつくり話をする機会は、季節が
移り変わり夏になるまで訪れなかった。隠田の件も有り、梅の時期
は思うように顔を合わせられなかったのだ。その間、手紙は五回ほ
どやり取りしたが、スルギの返事は相変わらず男の手紙の体裁を取
った、何気ないものだった。

「それは……スルギ、危ないのではないか？」

「そうでしょうか？」

やはり私の睨んだとおり、無名子はスルギの筆名だった。『高南
君逸話集』の続編もあまりに面白そうなので、校正役を買って出て、
印刷や紙の手配も援助した。さらにあの毒殺事件を扱った第一話を
別個に冊子にして、都以外の場所に持って行き無料で配布もさせた。

後から考えれば、この、私の勝手でした事が沈家に強い警戒感を
与えてしまったようだった。

希望の光・3

「スルギの書いた物は余りにも描写が真に迫りすぎているので、皆強烈な印象を抱く。あの『高南君逸話集』の特に第一話は、宮中の事情に通じている物なら登場しているのは全て実在の人間かと疑うだろう。特に名を伏せた」と或る大監』は具体的な人物を思い浮かべた人間も多いと思うぞ。事実……」

沈家の連中が焦って居るようだ。中殿の父・沈守己はシム・スギ『と或る大監』その人だと思ふものが多いために、非常にいらだってこんな風に言っているらしい。

「名を隠し、我らをこのような姑息な手段で攻撃するとはけしからん。草の根掻き分けてもそいつの首をはね、さらしてやらねば気が済まん」

印刷用の紙や版木の入手経路をあれこれうるさく調べたようで、この市場の中に該当者が居ると捕盗庁の連中は見当をつけたらしく、夏になってから市場一帯の取り締まりが厳しくなったと言うのだ。

「そなたがしばらく、本を出さずにおいてくれたら、半年もすれば連中も別の事に気を取られて忘れるだろう。私も新作を読みたいのは山々だが、我慢する。つまらぬ事で命を落としては大変だ。どうかくれぐれも用心してくれ」

「はい……あのう……梅里様、こうしてお話をさせていただくようになって、かなりたちますが……私は未だにあなた様がどの様な様か、教えていただいては居りません。おっしゃりにくい御事情がおありなのだと、わかっておりますけれど、でも、それが酷く寂しく感じられる事も有りますの」

確かに、随分な話だ。だが、それを告げる事によって互いが『友』で有り続けるのが難しくなるのも事実だ。そうであっても、スルギが真実を知りたいと望むなら、告げるべきなのかもしれない。

「……………スルギ……………ならば……………」

「いえ、宜しいんです。それを伺ってはならないと、私も判っております。伺えば、二人の関係が崩れ去ってしまうかもしれないから……………だから、本当の御名前と御身分を伏せておいでなのだ……………さようでございますよ？」

「だが……………」

「本当に……………私にそれを告げるべきだとお感じになった時には……………教えて頂けるでしょうから。もしかしたら、それは、私達がお別れしなければならぬ時かもしれません」

「ああ……………そうだな。だが、私の気持ちと言葉に嘘は無い。言えない事は色々有るが、それでもスルギに言う事の出来た言葉には、少なくとも嘘は無い」

「以前、私、自分で申しましたよね。見え透いていなければ、嘘をつくのも『方便』だなんて。でも、嘘をつかずに居て下さって、ありがとうございます」

気がつくくと、小さな机越しに互いに手を握り合っていた。だが、それ以上近づき過ぎてはいけない……………互いにそう考えて、やっとその距離を保っている。そんな緊張感があつた。一体どれほどの時間互いに無言で手を握り合つたまま部屋の中で座っていたものか判らない。

「お供の方が、お困りになりましたよ」

私には何も聞こえなかったが、ひどく耳の良いスルギには何かそ

んな気配が感じられたらしい。時刻は深夜を回っていたようだった。

「私も、そろそろ、戻る事に致します」

「では、送っていいこう」

「もう、おそう御座います。それに、私は自分の身一つぐらいは、守れますから」

「たとえそなたが、武芸に秀でていても、若い娘だ。せめて、送るぐらいのことはさせてくれ」

「ありがとうございます」

その夜はあの手の感触を、幾度も思い返していた。可愛そうに、すこし荒れていたのだ。いや、可愛そうなどと言っては、いけないのかもしれない。スルギはあの小さな手で沢山の料理をつくり、掃除をし、洗濯をし、針を取って美しい物をつくり、筆を取って見事な文章を書くのだから。あれは、働きの手だ。自分自身の力で、立派に生きて行くことの出来る女の手だ。

その翌日から、私は隠田の調査報告を読み、さらには沈家の行っているらしい国有地の横領について調査を進めさせていた。沈中殿は出産したが、私の予想通り生まれたのは娘だ。五体満足で元氣そうであった。可能であるなら、あの母親の性格を、娘には受け継いでもらいたくない。私が娘の誕生を本心で喜んで居るのを見て、中殿の表情は複雑であった。

「大君テケンならば大変でした」

隠田の調査に携わる若い官僚たちは皆一様に安堵していた。

大君とは王の正室である中殿の生んだ王子、ないしは東宮時代の正妃が生んだ男子を指す。側室腹なら男子は君と呼ばれる。我が国はこうした嫡出・庶出の区別にいちいちうるさい。

「まだ、我々には機会が残されているという事ですな」

「ですが、中殿様の二番目のお子様がお出来になるまでの限定的なものでしょうが」

「いや、恐らくその心配は無用だ」

力の配分を考えて、全ての側室に娘を二人づつ生ませたが、中殿は正室としての地位が保証されているのだ。子供は一人で十分だろう。ただでさえ実家の勢力が大きすぎるのだから。

右議政の沈守己が大いにいらだった事は想像に難くない。絶対中殿が男子を産むと断言した占い師は、百叩きの上、都を追放されたらしい。鬱屈する感情を弱い立場の者にぶつける。どうもそういう連中が宮中には多すぎる。スルギに何か困った事が起きなければ良いが……そう案じて見上げた空は、どんよりと曇っていた。

希望の光・4

夜には確実に降るだろう。そんな空の色だった。

「判内侍府事、例の場所へ使いを頼む」
パンネシフサ

私はスルギに手紙を書いた。と言っても晩唐の詩人・李商隱の『夜雨北に寄せる』の後半を書いただけだが。

「何か当に 更に西窓の燭を剪り 却つて話らん 巴山 夜雨の時
なるべし」

あの西向きの窓べでお前と二人きり、夜更けまで灯心を切りつつ語りあえるのは、一体いつだろうか。その時こそ巴山に雨が降る今の私の心を語りあえるのだが……と言ったところか。元の詩は、夫が妻に情愛を込めて囁くと言った内容で、気恥ずかしくは有るが、あの邸の窓辺でじつと手を取り合っていた時の気分を思い返して書いた。そしてそこに、物思いに耽る男の後姿を書き添えた。

「雨が酷くなるかもしれんな。返事は貰わなくて良いぞ」

返事を待つために使いの男がスルギの家で雨宿りする事に成るのも、なにやらイヤだったのだ。

深夜になって、小さな梅の花が沢山組み合わせさせた意匠の愛らしい書類包みが届けられた。判内侍府事の付けてきた説明書きによると、スルギ自身が「心を込めて縫った」と言っていたらしい。

「来年こそは、一緒に梅が見たい」

まだこの時は、その希望が実現可能かどうか丸で見当がつかなか

った。

翌日、宮中は朝から騒然としていた。

「トウチヨカヨジュシオブン何卒御賢察下されませ」

宮廷の爺連中はまた一斉に大合唱だ。今度は何をしろと言つのかと思えば……

「この『高南君逸話集』なる悪書を焼却し、読んだ者を罰し、作者をとらえて晒し首になさつて下さい」

馬鹿め、有り得ぬわ。晒し首にしたいのはお前らの方だとは思つたが、無論、そうは言えない。

騒いでいる連中の女房子供だとて、皆この本は読んでいるだろうに。無性に腹が立って言つてやった。

「この作者の話は面白い。悪書だとそちたちは言つが、宮中の女官もそちたちの夫人や娘・息子達も、恐らく読んでおるぞ。まあ、良く確かめてみよ」

王自らが読んだと言っているだけでなく、煩い連中の家族だつて読んでいる。事実幾つかの確証も有る。こやつらは自分の妻や子供らの事なのに、案外わかつておらぬ。

「成弘の死のいきさつが奇妙だと常々思つてきたが、この本の通りなら辻褃が合う。寡人も一冊持っているが、焼却すると言つなら差し出す。作者はともかく、読んだ者まで罰してはならん。作者が誰か丸でわからぬのだから、まずお前たちが自分で探せ。後の処分はそれからだ。そちたちが潔白なら、成弘の死の真相を皆の納得いく

ように明らかにして見せよ。さもなくば、寡人も多くの読者同様、その『高南君』の言葉が真実に迫っているのだとつい、思ってしまった。もう読んだ故、寡人の分はそちたちに渡そう」

連中は静かになったが……スルギをかえって危険な目に逢わせる事になったのかもしれない。

その翌日、珍しく、いや、初めてスルギの方から手紙が来た。急ぎの用事だと言うので慌てた。どうやら、スルギの留守に何者かに家探しをされて、部屋中ひっくり返されていたらしい。

「連日、不逞の輩に見張られております。梅里様もくれぐれも御用心なさって下さい。取り急ぎ要件のみにて失礼いたします」

相変わらず官吏か学者の様な書きぶりの手紙だった。だが、初めて文を貰えたのは実に嬉しかった。確かに、緊急事態では有るのだが。

「さて、どこにかくまうべきかな。都を離れて、母親のいる山の寺に行かせるのが良いかもしれん」

「ですが、尼僧では不逞の輩からあの方を護る事など出来ましようか？ お手元にお引取り遊ばせば宜しゅうございましょう。何も、後宮である必要はございません。あの方は学問も武芸もなまじの男よりよほどお出来になるのですから……内侍府でもお引き受けできそうです」

「今の後宮は恐ろし過ぎる故な……だが、そうになると、私はスルギに王だと明かさねばならなくなる」

「どのみち、すでにあの方はお分かりなのではございますまいか？」
「やはり、そうかな」

「左様でございましょう。あの『高南君逸話集』の作者でいらっし

やるのですから、もう、はっきりお分かりではないかと推察しますが

「そ、そういうものだろうか……」

「あるいは林亮浩と夫婦となり、清国辺りに行ってしまわれるようにお勧めになるとか」

「な、何？ 清？」

「はあ。あの方も林亮浩も、清の言葉に堪能だそうです」

私はその事を全く知らなかったので、衝撃を受けた。

「私は清の言葉の事などまるで知らなかったぞ」

「さようでございますか、とうの昔に御存知だとばかり思っていました。あの亮浩という男、腕も立ちますし、あの方が共に旅をなさつても安全でしょう」

「判内侍府事、何が言いたい」

「その、一体全体どうなさるのか、そろそろお決めになるべき潮時かと」

「判内侍府事としては、あの男と夫婦にすべきだと、そう考えているのか」

スルギを清にやるなど耐えられない。そうなれば、永遠に会えないだろう。それに、林亮浩の妻となるのをただ見守っているのも難しい。私の意識と感情は、その問題に關してずっと堂々巡りを繰り返してきたが、終わりにすべき時が来たのだ。好むと好まざるとに關わらず。

希望の光・4（後書き）

誤字訂正しました。すみません

希望の光・5

「あの青年との結婚以外の方法も考えましたが、難しゅうございましょうなあ」

「……科挙を受けさせると言う事か」

以前、スルギに科挙を受けさせて、官吏に登用するにはどうすると可能かという事を考えた事があった。その時は、まだ、あくまで頭の中で、あれこれ考えただけだが……

「庶子が受けてはならぬという規定はございますが、女子や内侍が受けてはならぬという規定はございませんし、ですが、やはり、女子の姿のままは難しいかと……内侍に変装しなくては、実際問題無理でしょうなあ」

「一度で合格できるとは思いますが、受かった後、どうするのだ。女子では、表で使えない」

科挙の受験資格は男女の別について何の規定も無いが、官吏については男でなければ無理なはずだ。

「さようでございます。内侍府の場合も……内侍府の高尚薬は科挙に優秀な成績で合格しておりますが、やはり内侍府以外の役職には付けませなんだ」

「高尚薬は探花合格であったな」

「さようです」

探花とは科挙の最終試験である殿試において三位で合格したものを、そのように呼ぶ。探花では、陋習の壁を打ち破るには不十分なのだ、恐らく。

「スルギなら状元合格が狙えよう。状元なら龍頭会の会員になれるし、生涯国王と単独で面談する権利を持つぞ」

歴代の状元合格者の親睦団体の龍頭会の会員は、官吏にも学者にもかなり大きな発言権を持つものなのだ。

「ですが……女である事が周りに知られてしまいましたら、いかがなりましょうか？」

「うーん、そうよなあ。良い。寡人が承知の上で受けさせたという事なら、構うまい」

「ですがやはり、あの方にとっては御負担でしょう。友として、幸せを願うというお気持ちでしたら、ここは林亮浩と所帯を持って頂く方が……」

「友として幸せを願う……か……ううむ……そうよな」

「何れにしても、今日明日中にはお決めになりませんと、『と或る大監』の手の者が暗躍しておりますから」

「分かった。今夜中に決める。うむ……」

「酒でも、お持ちいたしましょう。落ち着いてゆるりとお考えになった方が、宜しいかと」

この時、酒を勧めたのも、林亮浩の事を持ちだしたのも、判内侍府事のちよつとしたはかりごとであったと悟るのは、かなり後であったが、このときは何をどうしたらよいのか、私の理性と感情は色々な意味で混乱していた。

「もっと、酒を持って」

「そのように召し上がっては、微行なさるのに差し支えませぬか？」

「いや、馬にかじりついてでも行く故、大事無い」

「林亮浩はなかなか男気のある人物ですなあ。つい先日機会が御

座いまして、話をいたしましたか？」

「すると何か？判内侍府事は、きっぱり諦める、そう言いたいのだな？」

少し自分でも、目が座り気味なのがわかる。酒に酔うなど、私としては非常に珍しい事だ。飲めば飲むほど判内侍府事の言う事がまことの事であったとしても、認めたくない自分の気持ちに、嫌でも突き動かされて行く。

「ずっと、ずっと好きなのだぞ。誰よりも。気持だけなら、あの男にだって負けぬ。それなのに……」

「ならば、御決断あそばしませ」

「うん。決めた。行くぞ。馬引け」

後にも先にも、私が酒の匂いをぶんぶんさせて馬に乗ったのは、この夜だけだった。

「久しぶりだが、息災か？ 手紙を見て、いてもたってもいられない気分だった。その割には来たのが随分遅いがな……スルギ、許せ」

あつかましくも真夜中の女の一人住まいに、上がりこんでしまう。そう、酒の力でも借りないととても言いたい事が言えず、思いのたけをぶつける事が出来ない……そう感じていた。だが、私の体はそんな偽善者ぶつた言い訳とは別に、卑しい本性をむき出しにし始めてた。

「まあ、妓楼にでもお出かけでしたか？ それともどこぞで宴会でも？」

私よりは随分と年下なのに、まるで出来の悪い弟をたしなめる様な、そんな口調だ。

「お前が居ないのに、飲んでも大して美味くない。近頃顔を見ておらぬので、寂しくてならなかった」

「御正室や御側室がおいででしょうに」

「居るには居るが、別に、義理や付き合いでそう言う仲になっただけの事。幼馴染であった最初の正室を亡くしてからは、どの女にも心を許せないのだ……すまない、本当にすまない」

すまないと言いながら、実に怪しからん暴拳に打って出た。だが、私なりに必死であったのも確かだった。狭い部屋の中で、思い切りスルギに抱きついてしまったのだ。スルギが逃げる気なら、私の手をねじ上げるなり、ひっぱたくなり、出来るだろうに……しない。それをよいことに、私はますます付け上がった行為を始めている。

「謝らないで下さい」

「イヤなら、私を突き倒して、頬を打て」

しなやかで芳しいスルギの体の感触に、うっとりして、思わず頬ずりをしてしまう。夢の中で勝手に妄想していたより、もっと骨が細く、いかにも年頃の乙女という感じがする。柔らかな肌にヒゲの有る顔を押し付けられては、迷惑千万だろうに……頬を打てと言って置きながら、恐らくは打たれないであろう事を心のどこかで信じていたのだ。

希望の光・6

「イヤではありません」

「私は……お前を幸せにする自信が無い。あのお前が書いた『大寿』の中の男達のように、お前に不幸と災いをもたらすだけなのかもしれない。だが、私はお前を好いている。言つのをやめておこうと幾度も思ったが、そう思えば思うほど、お前への気持ち膨らんで、もはやどうにもならないのだ」

「私は卑しい身分の女ですが、それでも、あなた様をお慕いしてきました」

私の勝手な言い草を、スルギは許してくれるらしい。何より私を慕ってくれていたと言つのが嬉しかった。卑しいなどと一度だつて考えたことは無い。卑しいのは私、さもしいのは私の根性だ。スルギはまっすぐに清らかで綺麗なのに、そんな言葉を言わせてしまうのは、私の配慮が足りないからだ、おそらく。

「一度奴婢に落とされたとはいえ、士大夫の息女ではないか」

「いいえ、私は拾われた子、養い子なのです。実の親から貰った物はこの体とこの玉牌だけです」

拾われた子だつて、どこかの武官の娘だつて、どうだつて構わない。スルギはスルギなのだから。

この時私は、この玉牌が恐ろしく上質な璧玉の半分のかけらである事など、これっぽちも気がつかなかった。ただ、スルギがそんな大切にしている物を私の着物の懐に入れてくれた、その気持ちが有り難くてうれしかっただけのことだった。この国ではこうしたいつも身に付けている飾り物を男女で交換するのは、互いを想い合う特別な存在であると言う約束の印であり、誓いの印でもあるのだ。だ

から私は父から受け継いだ紅玉製の龍の形の玉牌を腰から外してスルギに渡さねばと、少しあせった。

「頂けません。御手元にいつもの玉牌が無いと、皆様の手前、お困りになるのでは無いですか？」

確かに私には中殿やら側室やら色々居るにはいるが、本気で好んでいるのはこのスルギだけなのだ。そのスルギから親の形見を貰いっぱなしなど、とんでもない。この国に唯一つと言う父王から受け継いだ逸品であつても、私の想いを伝えるのに十分とは言えない。どこまでも私の立場や事情に遠慮してくれているのだ。だが、それは有りがたくもあり、寂しくも有る。

大体、あれらに私の腰の飾り物がどうなろうとあれこれ言う権利など有るものか。そもそもが、実家の都合でやってきただけの連中なのだし、互いに好いたの想っているだの言う事すら無いのだし……

「寂しい事を言ってくれるな。せめて玉牌の交換ぐらい、させてくれ」

「本当に、こんなに立派な物は、頂けません」

闇でも見通すスルギの目には、紅玉の龍がどういった品物か見当はついているのかも知れなかった。

「お前が親の形見をくれたのだ。つりあいは取れている」

「でも……」

「受け取れ。受け取るのだ、スルギ」

やれるものなら、なんだってスルギにやりたいのだ。今やれるものと言ったら、これだけだが。だから是が非でも受け取ってもらわないと、困る。

いささか強引に口付けた。幾度も幾度も夢に見た愛しい女、世にも稀な佳人スルギのまさにその花びらのような口を強引に割るようにして舌を潜り込ませ、愛らしい小さな舌に絡ませる。最初は戸惑っていたようだったが、やがて情熱的に応じてくれるようになり、やっと自分が嫌われてはいないと確信が持てた。

長いまつ毛が震える。私はやはりひどい事をしようとしているのだ。

「私はひどいやつだ。すまない」

「謝らないで、謝らないでください」

スルギは私に体を寄せてきてくれた。本当に良いのだろうか？ 理性はそんな殊勝な問いかけをするが、体の方はあからさまに欲望を剥きだしにしている、爆発寸前だった。

そして結局……私は男としての本能に忠実に振舞った。どこもかしこも美しい体は、窓から差し込む月の光に濡れてまるで仙女のようだった。

感じやすく美しくしなやかな体に、私は天にも登る心地であった。だが、私は決定的な誤りを犯したと悟って愕然とした。なんとスルギは真正正銘の乙女であったのだ。あの男とは何も無かった……それなのに、スルギはこのような状況で私を受け入れてくれたのだ。ああ……

「すまない、許せ」

申し訳ないと思った。やはり後宮に引き取り然るべき支度をしてから、男女の契りを交わすにふさわしい吉日に、こうしたことをなすべきであったか……一番大切な人を軽々しく扱ったような形になってしまった。

「本当に、すまない」

私のものを受け入れる苦痛に喘ぐその痛みを少しでも和らげたいと、あれこれしてはみるものの、効果の程は自信が持てず、皮肉な事に私自身の快感はかえって大きく増すのだった。

「初めてであったのだな。すまない。その……男女の機微を色々と判っているようであったので、経験は有るのだとばかり、勝手に思い込んでいたのだ。すまない、本当にすまない」

「謝らないで下さい。いけない事をしたのだと思いたくありません」
「本当は、お前の身が危険だから私の手元に引き取る、そう言う話だけをするはずだったのだが、お前の顔を見ているうちに、他の男に取られたくないなどと思ってしまっただけ……」

「そんなに、危ないのですか？」
「ああ。あの噂になっっている高官達が、ここを嗅ぎ付けた可能性がある。だから、一緒に来てくれ」

いつもなら何でも手早くしてしまうスルギだが、この時ばかりは腰の辺りが辛そうだった。

希望の光・7

明け方の光の中で私はスルギの体を拭き、改めて少なからぬ純潔を散らした際の出血を確認して、厳粛な気持ちになった。もう、私はスルギ以外、誰も抱かない。そう固く心に決めた一瞬でも有った。

「御正室様にはなんと行って？ お怒りを買ったりして、鞭打たれたりするのは……」

そのような事、絶対にさせるものか。そう思った。

中殿も実家の沈家も側室達も、スルギにあだなすものは絶対に許さない。いや、許せない。だが、そうした私個人の決意は別にして、スルギの言うように正妻には他の女を懲戒・監督出来る権利がこの国では認められている。そしてそれは、なかなか厄介な問題ではあるのだ。

「そこは、気の利いた者に目配りさせて、お前が罰せられたりしないようにする。何か有れば、私がすぐに善処する。その……最初はすまないが、召使と言う扱いになってしまいが、すぐに何とかする」「それで十分です。あのう……御名前を教えてはいただけませんか？」

「チョンバン正邦だ。これから、私をそう呼んでくれ。他の者にはそんな呼び方を許していない。お前だけの特権だ。迷惑かもしれないが、私の気持ちだと思ってくれ。……さあ、スルギ、私の名を呼んでみてくれ」

「正邦様……」

そうだ。他の者は私をチヨナー殿下と呼び、私は相手を称号で呼ぶ。だが、スルギとは互いに名をよびかわす仲でありたい。そう強く願ったの

だった。

スルギは私の名前を聞いて、たちどころに何処の誰か理解したようだった。そして二人一緒に朝日の中を私の馬に乗り、宮殿に戻った。後から思えばこの日を境に、スルギ自身だけではなく私の運命も、そしてこの国の運命も大きく変化し始めたのだった。

二人の道行きは思いの外すぐに終わった。

私は判内侍府事を信じてはいたが、自室の有る大殿テジョンに戻る時は身を切られるように辛かった。だが王としての日課はもうすぐ始まる。

「大殿内官テジョンネクアンが女官達の目をごまかしておりますが、そろそろ難しゅうございます。お急ぎください」

大殿内官は忠義一筋の真っ直ぐな性分だ。目的のためなら器用に嘘もつく判内侍府事と年のころは近いが、とつさに胡麻化すと言うのは苦手なようだ。女官の誰かが後宮の女に何か言われて朝食前にやってくる事も有るから、そろそろ危険な時間帯だ。

「くれぐれもスルギの事を宜しく頼むぞ」

判内侍府事は深々と頭を下げたが、私は心配でならなかった。

この時、一言伝えて置けばよかったのだが、配慮不足でスルギを気の毒な目に逢わせてしまったのだった。

スルギを気かけソワソワした気分のまま朝議を終え、昼食を済ませた私の所に判内侍府事がやってきた。感情表現の乏しいこの男にしては、珍しく上機嫌だ。

「合宮はいつになさいますか？ 本日、抜刀術・居合い・組み手・弓・馬術といったあたりを監察部の者たち相手に私と提調尚宮の前で披露して頂きましたが、見事なもので。科挙の覆試相当の物は軽々とこなされましたな。学科の方は高尚薬にも立ち会ってもらって、

殿試相当の問題も出題してもらいましたが、立派な回答らしいです。私には難しすぎまして、訳が分かりませんでした」

しまった。私は肝心な一言を判内侍府事ハンネンブサに伝えていなかったのだ。った。

「合宮なら、すでにとげてしまった」

「は？」

身分有る者の家では、初めての床入りを合宮などと言う。王が女と夜を共にする場合、普通は日柄だの相手の女との生年月日時刻による相性だの、見てから日取りを決めるものなのだ。

「寡人がいつもも下げていた紅玉の籠とこれを交換したのだ」

「……っ？ さようございましたか！」

「可愛そうな事をしたな。紛れもない乙女であったのに、無理をさせてしまった」

「で、では、今宵は？」

「共に過ごすつもりだ。無理はさせないが」

「承知いたしました。……その、璧玉のかけらですが、大変な逸品ですな」

「うむ。実の親の形見だそうな。武官の何某は養い親らしい」

「あの方は、高貴な方のお子なのでしょうか？」

「さあ……あれがどこの誰でも、寡人の気持ちは変わらないが、高貴な血筋の方が宮中での苦勞は少ないな」

「その玉の模様は何やら見覚えが御座います様な……恐れ入りますが、もう一度お見せ願えませんでしょうか？」

「嫌だが、何やらお前が探り当てた事を寡人にすっかり教えると誓えるなら、見せてやらんでもない」

「はあ。それはもう、残らずすべて御報告申し上げます」

「何によらず、あれの希望は可能な限り叶えてやってくれ」
「はっ……そのように取り計らわせていただきます」

一日の予定を無事に済ませ、夕食後、急いでスルギのいる部屋に行ってみると、使用人は誰もいない。

「誰も付いていないのか」

「その方が気楽です。それに、私が宮中に入った事は隠しておいた方が安全なのだと思いますが」

「それはそうなのだが……今日は、色々と大変な目に逢わせてしまったようだな……その、私が判内侍府事に伝えておかなかつたのがいけなかつたのだ。辛かつただらう？」

初めて男と交わつたそのすぐ後に、武術やら試験やら何やら、大変であつたらう……

「大丈夫です。先ほどちゃんとしたお風呂に入れていただきましたし」

「どこの風呂に？」

「宗廟そばの王族以外、お入りにならないとかいうお風呂です」

「そうか、うるさい判内侍府事がよくもまあ許可を出したな。確かにあそこが一番良い条件の浴室だと思う」

このとき宗廟の楔のための浴室にスルギが入浴を許されて少々驚いたが、私が希望を叶えてやって欲しいと特に言つたからだろうかと思つただけだった。スルギに貰つた玉を判内侍府事に見せた事と結びつけて考えられなかつた。こういうあたり、私は少し間が抜けているのだと、後で思い知つたのだつた。

希望の光・8

あの宗廟そばの浴室は、大妃様も入浴できるのだが、お使いにはならないようだ。ちなみに中殿や後宮の女たちはあそこへの立ち入り自体、許されていない。

「お前と話をするようになってこの方、ずっと手を握っていただけ……だったりしたくせに、昨夜はその、あまりにいきなりだったので、判内侍府事も色々調子が狂ったのだらうよ」

抱き寄せると、ごく自然に体が腕の中に収まってくれる。スルギと自分は契りを交わしたのだと実感できて幸せだった。

「名を呼んでくれるか？ 私の名を」

「正邦様」

自分の名が、スルギに呼ばれる。それだけで、天にも昇る心地だ。昨日の今日だ。無理をさせるのは慎もうと思……手をつなぎ合っただけで一旦眠ったのだが、夏の早い明け方の光の中で目が覚めた。

「綺麗だな。本当に綺麗だ。私は幸せ者だ。これでスルギを妻と呼べたら、なお幸せなのだが」

清らかな額に口づけると、スルギも目覚めたようだった。

「おはようございます」

「おはよう」

嬉しくて、ついついじつと顔を見つめてしまう。スルギの顔は少し赤らんでいる。照れているのだろうか？

「先程は寝顔を御覧になってらしたのですか？」

「うん。綺麗だな。その……その……」

普通なら言い出せないような、不躰な願いを口にしたものかどうか……

「何でも、出来る事なら致しますから、おっしゃって下さい」

「スルギの体をすっかり、見せてもらっても良いだろうか？」

「と申しますと……何も着ていない状態……ですか？」

「朝日の中で、すっかり目に焼き付けておきたいのだ」

「……判りました」

スルギはスツと床に立つと、背中を向けハラリと衣類を脱ぎ捨てた。右の肩に空の『三ツ星』のように三つのホクロが並んでいるのが目を引いた。白い玉を刻んだような真っ白い肌が目にしみるようだ。

「前を……向いてくれないか？」

右腕で乳首を隠し、左手には衣を握って足の付け根辺りを隠している。顔は恥ずかしげにうつむいている。

「お願いだ。全てを見せてくれ」

「はい」

小さな声で返事をした途端、体中がさっと薄桃色に色づいた。そしてようやく全てが光の下にさらされた。まだ何処か熟しきらない

乳房、小さく色づいた木の実のような乳首、臍の窪み、慎ましやかな陰り……全てが愛らしい、そして美しい。

「綺麗だ。本当に綺麗だ」

気がつくのと、そんな事を呟きながらスルギをかき抱いているのだ。それから熱に浮かされたように口付けし、肌をまさぐり、気がつくくと再びの交わりを遂げていた。

「済まない。無理をさせないで置こうと思ったのに、スルギが美すぎて、つい……」

「私は大丈夫ですから、どうか、謝ったりなさらないで下さい」

「だが、本当に私は勝手な事ばかりしているな……朝食などはどうするのだ？ 私は慣わして大殿に戻らなくてはいけないのだが……そうなれば、スルギー一人になってしまう」

「穀類や幾つかの食材は頂いてきましたし、欲しい物は大抵、内侍府に伺えば頂けるようです。これまでもずっと自分一人で自分の食事は用意してきたのですから、一人でも大丈夫です」

「朝食はそれでも良いとして……日中はどうぞすすのくだ？」

「昨日の内に、高尚薬の所に弟子入りをお願いしてきました」

「高尚薬か……確かに名医だと聞いているが、医者修行を始めるのか？」

「はい。以前から興味は有りましたが、せつかくの機会ですから」

スルギほどの学識があれば、立派な医師になるのも案外すぐではなからうか？ そんな気がした。

「なるほど、確かに尚薬職に詰めていれば、毒を使うような輩からも身を守りやすいな」

「どうやら食うに困らぬ身分になったようなので、人助けができる

ようになりたいのです」

「そうか。スルギが本腰を入れて人助けをするなら、定めし多くの人の助けになるだろう……だが、私の事も忘れないでくれ」

「忘れるなど……そのような事、有りえません」

確かに宮中に居れば王の事は意識せざるを得ないだろうが、私が知りたいのは無論そんな事では無い。王としてではなく、正邦としての私を想っていて欲しい。そう願うのはスルギに対してだけなのだ。そのあたりの事は賢いスルギなら十分承知しているだろう。だが、確かめずには居られない。

「そうか、有り得ないか。それは有りがたい。医師の修行に夢中になって、食事も忘れるかも知れないから、ちょっと心配だ。また、夜に来る事にする」

見送ろうとするスルギを押し止めて、しばらく休むようにさせた。何しろ無理の連続だから……

いつかスルギと一緒に朝食も食べられるようになりたいと思っていたが、それが実現するためには、随分と長い時間が必要だとは思ってもみなかった。

時がたつのは早いもので、もう秋も終わる。

「スルギ、お前、やはり懐妊しているのではないか？」

「そうですね。明日、高先生に診ていただきます」

こんなやり取りの有った翌日、懐妊がはっきりしたわけだが、本人はどこまでも自然体だ。生まれる運命に有る者ならきつと生まれる……とでも思っているようだ。出産ギリギリまで、これまでの日課を平常通りこなしたいらしい。

夏に入宮して以来、スルギは妙に内侍府尚薬職になじんでいて、樂しげに医師としての修行に励んでいる。確かに名医である高尚薬の傍に居れば、よそに居るより安全だろうとは思う。氣難しい高尚薬にしては珍しくスルギを心から受け入れているのが見て取れる。良い師弟関係だ。何やら実の祖父と孫娘の様な、穏やかでほのぼのとした雰囲気がある。

「実に氣の利く助手でして、もう何年も前からこの薬房に居た弟子の様に時折錯覚いたします。医学の事も良く学び、もともとの深い学識とも相まって、打てば響くような受け答えですから、実に楽しいです。承恩を賜りお子を懐妊しておいで的女人である事をつい、私も忘れてしまいます。ハハハ」

声を上げて笑うこの老人を見たのは初めてだった。

私は毎日、スルギと夜を共に過ごしていて、深く心地良い眠りが得られるおかげだろう、心身ともに健やかだ。ただ、隣にスルギがいてくれるだけで気持ちが安らぐ。

一度だけスルギの月の物が来たので、氣にしたスルギの言葉に従

って、別々に眠ったが、どうにも寝つきが悪くて困った。以来、どちらかが熱でも出さぬ限り、同じ臥所で眠る事になっている。懐妊しても事情は変わらない。

その日は朝食の最中に、取り急ぎ知らせる事が有ると判内侍府事がやって来た。最近が高齢のせいもあって、宿直は免じている。今ではスルギに会う為に夜、市中に出る必要が無くなったのも大きな理由だ。

「あの方がお持ちだった玉ですが、どうやら王家ゆかりの品ではないかと思われます。先々代様の頃までは確かに御物の中に存在した品物があの清との戦もございまして、いくつか紛失しております。開祖様より伝来の燵？玉の璧玉と申しますのも、そうした行方知れずの品物ですが、かなり細かい特徴を書き記した台帳が残っております。そこにはこのような絵図がつけられております。先日拝見した時のこの龍の模様と、双喜紋や雷紋の感じが、実にそっくりだと感じましたが、いかがでございましょうか？」

示された台帳には、確かに私の今持っている玉牌と同じ模様が浮き彫りされた璧玉の詳細な絵図が載っている。

判内侍府事はずっと引つ掛かりを感じていて、方々調べさせ、自分でも記録をあれこれあつたと言つ。戦後の混乱で古い記録類が失われたり、本来有るべき場所から別の場所に紛れ込んだりしているようだ。そんなわけでこの台帳も見つけ出すのに、かなり手間取つたらしい。

判内侍府事がまだ内侍見習いであった十代の頃、一時期御物の係をしていた事が有り、その折にこの台帳を見た記憶が微かに残っていたのだと言つ。

「まさに、この品物の右半分のような。朱筆で但し書きが有るな」

私の手にある現物と絵図を見比べて、まさに同じ品物としか言いようがなかった。

「はい。国宝の璧玉を割り、二人の公主様に先々代様が分け与えられた……そう言う事でございましょうね」

「うむ。ならば、大妃様なら、事情を御存知かもしれんな。ひよつとしてこれの左半分をお持ちかも知れんし……で、そちがこれを持って来て、その話を聞かせるという事は……寡人自らが大妃様に伺え、そう言うわけだな」

「はあ。それが一番確かかと……」

「そちには何も話して下さらぬから、な、恐らくは……あれに、襖のための浴室を使う許可を与えたのは……この玉の所為であったのか？」

「はい。先々代様の御長女は只今の太妃様なわけですが、御同腹の妹君に關しました記録は大半無くなっておりまして、その、何とも奇妙でございますので」

「亡くなられた……のではないのか？」

「この国においでにならないだけだと、そのように亡き先王様から伺いましたが、細かな御事情などは何も伺っておりません」

「外国にいらしたのか」

「そのようです。明、辺りでございましょうか？」

「明の残党は南海の島々に今も幾つか根城を持っていて、商いなどをしているらしいな」

ならば、スルギがこの国の最南端の海域で難破した船に乗っていた……と言う身の上話もつじつまが合う。もつともスルギ自身は難破して救出された八歳以前のこの世界での記憶は、一切無いらしいのだが。

救出したのは当時県令として着任したばかりの金稔なる人物で、

スルギの賢さと美しさを感じ入り、実の娘として夫人と共に養育した、と言う事のようにだ。判内侍府事はわざわざ難破船が発見された土地まで人を遣わし、細かく調べ上げたようだから、恐らくは間違いの無い事なのだろう。

もつとも……スルギと私が共有する異世界の記憶についてはお互い以外、誰も知らないのだが。

「ともかくも大妃様にお話を伺わねばな」

大妃様は三人の子を失くしておられる。そしてその不自然な死の影に判内侍府事が居ると感じておられて、今でも判内侍府事にはお会いにならないし、どこかで姿を御覧になっても一切言葉をおかけにならない。だが、私が最初の妻と長男を陰謀により失くして以降、私には心を開いて下さるようになった。

最初に祖母である大王大妃様、次に継母にあたる大妃様に毎朝御挨拶を申し上げる。これは、この国の王がずっと続けてきた習慣だ。祖母への挨拶もそこそこに、この日は大妃様のお住まいに急いだ。

「大妃様、この品物に御記憶がお有りでしょうか？ これはこの台帳を見る限りでは御物であった璧玉の半分の様なのですが」

私は腰からスルギにもらった玉牌を外し台帳と共に、小机の上に乗せた。

「主上、これを一体どこで？」

大妃様は目を見開かれ、玉牌を御覧になっている。

「心から愛しく思う女子が出来まして、その者が懐妊しました。後宮の女たちは誰もそのことは知りません。殺害された成弘の二の舞はこりごりですから、慎重に事を運びたいのです。これは、その女子の親の形見だそうで、私の持つておりました紅玉の龍と契りを交わしました折に交換した品物です」

大妃様は衣服の襟に隠すようにして下げておいでだった錦の小さな袋を取り外された。更にそこから玉牌を取り出され、震える御手で私の置いたものにぴったりと合わせる様に置かれた。結果は明らかだった。

「大妃様、これは？」

「そう、あれは我が父君様がお亡くなりになる前日でした。その御物であった璧玉を我が父君様が真つ二つになさり、私と妹にお渡しになったのです。嫡流の公主の身の証として……」

「妹君はその後、いかが遊ばしたのですか？」

「許婚と明へ参ったようです」

それから、大妃様は妹君、そしてその夫君についてご存知の事を色々とお話し下さった。その日の午後、私は祖母の住まいと大妃様のお住まいの間を幾度か行き来して、内密に話を進めた。

大妃様は生前の妹君が外国から送ってこられた手紙類をすべて保存しておられ、その中にはスルギのあの右肩の『三ツ星』を思わせる三つのホクロについての記述も有ったのだ。実の御両親がスルギにつけた本来の名前は三星^{サムスン}というらしい。

「妹らしい、変わった名前の付け方です」

そう大妃様がおっしゃるように、確かに風変わりな名前だが美しい名前だとも感じた。それを知ったスルギ本人は「どこかの家電メーカーみたい」と言って笑ったが、その意味が私には何となくわかってしまった。スルギと毎夜過ごすようになって、私自身の前世の記憶も多少は呼びさまされているのかも知れなかった。

スルギの事もスルギの懐妊も初めて知った祖母は驚いていたが、喜んでくれた。しかしあまりに高貴な血筋に、戸惑い、心配もした。「沈中殿や金昌嬪の実家の思惑が……厄介でしょうねえ」

今の所、沈家と金家の派閥争いは朝廷でも後宮でも一旦停止状態だが、緊張状態にあるのは確かだ。ここに双方にとつて邪魔なスルギの存在が知られば、どうなるか……

やはり、残念だが当分はスルギの真の身分も懐妊も伏せておくしか無いのだった。

後宮の女たちの所にも行かず、なぜ王自らが幾度もお二方のお住まいの間を行き来しているのか、事情を知るものは、ほんの一握りであった。事情が事情だけに余人に任せるわけには行かなかった。数日後に祖母や大妃様との相談がまとまり、スルギとの対面が果たされた。

それにしても、唐衣タンウイを着たスルギはことのほか美しかった。

宮中に入ってからスルギは昼間は内侍の恰好で、それでも夜はこっそりチマ・チヨゴリ姿になってくれたが、簡素なものだ。後宮の女たちの追及の目を逃れるための方策ではあったが、身分にふさわしい衣装を着せてやれない事が、私には辛かっただけに大妃様の御心遣いが嬉しかった。大妃様は実の伯母君だけに、スルギの衣装に対する思い入れは私よりも強いのかも知れない。

唐衣は士大夫の夫人ならば大礼服、宮中ならば小礼服にあたるもので、このような金糸を用いた物は高位の女性しか着用を許されない。髪を王族の既婚女性に相応しく結い上げ加髷（付け毛）をつけ、金の置地チヨブチや珊瑚シニコの簪シニコの他、幾つもの見事な簪類を飾った姿は、堂々としていて気品が有った。

「まことに、まことに良うお似合いじゃ」

礼法にのつとつた見事な礼をするスルギの姿を見て、祖母は感極まっただと言ふ感じの声を出した。私も胸が一杯であつたけれど、大妃様は声を放ち涙を流された。

スルギは斯くの如く実の伯母君であられる大妃様と無事に感激の対面を果たした。その際祖母にも同席して貰い、そのこと自体はまことにめでたく、大妃様はもちろん祖母も大いに喜び感激もしたが、問題はその対面の直前に何者かがスルギを襲撃したという事だ。

その時はスルギ自身のとっさの機転で屋根に上り、事なきを得た。曲者どもはどうやらスルギを布袋に詰めて空井戸に落とそうとしたらしい。力仕事をさせる大柄な四人の女官と提調尚宮の所の見習いが絡んでいるのは確実らしいから、そこから洗うしかないだろうが……。

「愛しい妹の忘れ形見なのですから、私にも何かさせて下さい。少なくともこの住まいには不逞の輩の仲間はいないと思いますし、訊ねて来る者も稀ですから」

すでに不逞の輩にスルギが命を狙われているのが明らか以上、何か抜本的な手立てを考えた方が良くという話になった。相談場所が一番訪問客が少なく、仕える者は古くからの忠義ものぞろいと言う大妃様の所が一番安全だろうという話になった。祖母の所は、朝廷の爺どもがかなり頻繁に顔を見せるし、私の自室が有る大殿テシヨンは盗み聞きをする不届き者もいる。

血筋やら相性やらに強いこだわりを持つ祖母は、国中で名高い占い師三名ほどに私とスルギの相性を鑑定させたらしい。

「大妃から三星姫のお生まれになった日付と時刻を伺って、四柱サシユを見させました。三名とも一致した結果ですが、主上チュサンとの相性はまさ

に最上です。互いが互いに力を与え、いかなる難局も切り開くような。誠に、誠に感じ入りました。まさに国難のこの時期、御先祖様からのお助けがあったとしか思えません」

「今の中殿を冊立する前に、お会いしたかった」という祖母の言葉は尤もだが、そうそう愚痴を言っても仕方がない。沈家の力は相変わらず強大だし、今は小康状態だが後宮の女同士の争いも厄介だ。スルギが懐妊したことを知る何者かが命を狙っているのだが、それを突き止める以前に攻撃される可能性が高い。

「三星にいつそ、表での位と官職を与えられてはいかがでしょうか？」

大妃様がこんなふうにおっしゃった。それはかねてからの私の考えと一致したので、ご賛同申し上げると、祖母も最初は面食らっていたが、科挙で良い成績が見込めるなら、良いかもしれないと同意してくれた。スルギの高貴な血筋なら科挙など抜きで直ちに王族の中でも最上級の身分となるわけだが、今は公にできない。

「非凡な知恵で夫を支え多くの者を救う、そう言う星をお持ちだそうだから、良いかもしれぬ」

祖母は占い師の言葉に昔から弱いのだ。

「私は早速、鍼はりを打ってもらいましたが、肩の凝りが嘘の様に軽くなりました。医師としての腕もなかなかのようですね」

「そうですね。今受け持ちの医女は今一つですから、私もお願いしたいものです」

「大王大妃様の御用なら、心して務めねばなりませんね」

こんなやり取りが有って以降、スルギは毎日ご機嫌伺い方々、祖母と大妃様のお体についての御相談も承るようになった。スルギがお二方の住まいに通うようになって「単なる無位の内侍見習い」から、「高貴な方々のお気に入り」という具合に周囲の見る目が変わる。それがスルギの身を守る上での力にもなると期待しているが、それだけでは心許ない。やはり、しかるべき官位官職が欲しい所だ。

表での役職を与える前に科挙を受けさせようと言う計画は、スルギの言う「チートの学力」ならば合格は保証されたようなものだと思う。ちなみにスルギはこの世界に転生するにあたって「超低周波から、超音波、五キロ先のネズミの足音も聞こえるレベル」の聴力、「四キロ先の物体もミジンコの手足も正確に見分け、夜も昼並み」の視力、犬の二倍鋭い嗅覚、さらに人としては最も鋭い味覚と触覚、「オリンピックの全種目でメダルが狙える」運動能力、「殺されかけても十回までは助かる」運の強さ、更に「前世の五割増しの知恵と勇氣」が与えられたのだと言う。キロ・レベル・オリンピック・メダル……初めて聞く言葉では無い。私にも当たり前のように意味が分かるのだった。それにしても……闇夜も見抜く眼力と、鋭い聴覚の事は知っていたが、よもやそのような神のごとき存在との取り決めがあったとは……私は王として生まれただけで、すべてが平凡な人間の状態のままだ。だが、王位にあればスルギの力にはなれる。スルギを補佐し助けるのが私に与えられた役割なのかもしれない。

スルギに大いに活躍してもらうためにも、科挙に良い成績で合格してほしいものだ。

「科挙などせいぜい春秋でも左氏伝しか出ないぞ。公羊伝もまず出ないし、穀梁伝に至ってはさっぱりだ。四書五経の範囲で十分だし、後は韻を指定しての詩作だな」

「詩作ですか、本当は出来ないんです。少タインチキしても良いで

しょうか」

「どうやら異世界のすぐれた詩を書き写してしまつらしい。この世界で知られていない詩なら一向に構わないと言つと、ほつとしたらしい。」

「この世界の者が知らない優れた詩を、スルギが紹介するのだと思えば良い。確かに名を借りるのは気が咎めるだらうが、この際科挙に合格して、朝廷での確固とした身分を得る事が子供を守るためにも大事だ。スルギなら、きっと朝廷の中に自分で多くの味方を作る事が出来る、そう期待もしているのだ」

「そもそも今、真剣に調べている隠田の件も、教えてくれたのはスルギだ。」

「スルギが科挙に合格すれば、朝廷の改革にも大きな助けになるだらう。」

スルギの身の安全を図る上で判内侍府事の協力は必要だ。大妃様は御不快でも「背に腹は変えられません」とおっしゃって、判内侍府事が科擧の件で関与する事をお認めになった。

「大王大妃様からもお話を伺いましたが、いよいよ科擧をお受けになるのですね」

「この際だから、師匠にならって文科と雑科を共に受けさせようと思っ」

科擧には文科・武科・雑科の三種類が有る。文科はこの国の政治を行う文官の登用試験で、世間的には一番難しいとされている。武科は武官の登用試験だが、文科の受験が禁止されている庶子でも受験できる。実技はかなり難易度が高いがスルギなら良い成績で受かるだろう。もっとも懐妊中の今年はさすがに無理だ。雑科は職業的な技術官の登用試験で医学以外に翻訳・天文・法令と言った種類が有る。スルギが受けるとすれば医科だろう。

どの試験の規則にも「女が受けてはいけない」と書かれていないのは「女が受けるはずが無い」あるいは「女が受かるわけが無い」と言っるのが暗黙の大前提だからだ。

スルギの師匠の高尚薬が宦官であっても表の医師や官僚達にも一目置かれているのは、医師としての手腕が優れているだけではなく、科擧の文科における成績優秀合格者だからだ。

「科擧の会場は寒っございますな」

判内侍府事もスルギが懐妊中で有る事がかりなのだろう。

「うむ。毛皮の裏付きの極上の外套と温石が必須だな。先に試験を取り仕切るうるさ方に特別な面接をさせて、殿試の受験資格を得る事にしようと思う。寒い場所は出来るだけ避けたいからな」

高級文官登用試験の場合、初試・覆試・殿試の三段階を順を追って受けるのが普通だ。だが、抜群の学力を有すると認定されると途中は省ける。实例は非常に少ないが皆無ではない。覆試までも下級の官吏ならなる資格は得られるが、私はあくまでスルギには国王臨席のもとで行われる最終段階の試験である殿試で、華々しい好成績を上げてほしいと期待している。

「ですが、雪も考えられます。殿試の会場も吹きさらしですからなあ。お子に何か有っては大変です」

「雪か。傘をさしかけてやっても、体にこたえような」

やはり私は目配りが不足している。判内侍府事に言われるまで、雪について考えが及ばなかった。

「……いつその事、会場を屋内になさればいかがでしょう？」

「ああ、それで、オンドルを入れよう」

「オンドルですか。かなり大掛かりな工事にはなりますが……費用を惜しまなければ、間に合いますよ」

祖母と大妃様にオンドルの件についての御意見を伺うと、諸手を挙げて御賛同頂いた。特に大妃様は御自分の歳費の大半を会場のオンドル設置に振り向けてくれて構わない、とまでおっしゃった。

「只今手元にあります資金を、後ですぐに判内侍府事に届けさせます」ともおっしゃり、事実「並みの瓦屋根の家が十件は買えそうな」金額を判内侍府事に遣わされたようだ。

「何よりもまず、あの子を寒い目に逢わせてはなりません。お腹の御子に何か有れば、今度こそお前を許しませんから」

そのような御伝言も一緒に有ったそうだ。

判内侍府事との相談は庭で人払いをしてか、弓や乗馬の鍛錬の際に行う事が多い。王の住まいである大殿では、朝廷や後宮の各派閥の手先が盗み聞きをしている可能性が高い。

「捉えて処罰してやった方が良いかな」

「処罰なさらず、利用なさった方が良いのではありませんか？」

スルギはそんな風に言う。恐らく皆、財物を貰うなり家族の面倒を見て貰うなりして言う事を聞いているのだから、それを上回る財物なり恩義なりを施すと危険が回避できるのではないかと言うのだ。スルギは短い間に、各派閥の探り役の尚宮や内官を割り出したようだった。

「この者たちをそれぞれ一人ずつそつと呼んで『大殿での動きや密談に関して、知らぬふりをしていてくれぬか』と仰せになり、銀の粒の一掴みもおやりになつたらいかでしょう？ ついでに『お前に大殿を探るように命じた者の様子を、逆に知らせてくれたらまた、褒美をやる』とでもおっしゃってみると、情報が集まるようになると思われませう」

スルギに言われたように、話を聞かせてくれた者にはこまめに財物を遣わすようにすると、以前よりずっと多くの朝廷や後宮の裏情報が集まるようになった。

当座の資金を御協力いただいたおかげも有り、ともかくも腕利きの職人たちを掻き集め、突貫工事でオンドルが設置された。

朝廷の爺どもの中には「若い者が軟弱になる」とか何とか言つて反対した者も有つたが、祖母と大妃様が率先して設置のために尽力なさると知ると、自分の懐が痛む話でもないので、反対の声は止んだ。だが、これまで疎遠だった祖母と大妃様が、なぜ今頃になつて急接近したのか不思議に思っている者は多いようだ。

「御嫡流の公主で有られる嫁御は気位が高く何かと扱いが難しいと、以前の大王大妃様は仰つてましたが……不思議ですなあ」

「あのお二方にいつたい何が御座いましたので？」

そのように直接私に尋ねる連中は、まだ罪が無い。一番恐ろしいのはお二方の急接近と、スルギの身の上を結びつけるだけの情報を持っていると思われる連中だ。特に沈家の者たちは一体どこまで真実を掴んでいるのかわからないだけに、恐ろしい。

沈中殿は感情が読み取りやすく考えも浅はかな所が有るので、父や兄が知っている事でも知らされていないことが多いように私には見える。昨日は昼食がてら、久しぶりに娘の仁恵公主の顔を見に行つたのだが、中殿の機嫌は最悪だった。

「誰ぞ新しい側室が増えますとか、どうなのでしょう？」

「側室の話は随分以前に大王大妃様から伺つた覚えが有るが、具体的な話ではないと思うぞ」

以前、王子が生まれない事に痺れを切らした祖母がそんな話をした事が確かに有つた。

「なぜ、大王大妃様はそのようなお話をなさったのでしょうか？」

「今は王子が一人も居ないから、御心配なのだろう」

「後宮の誰かが懐妊したと言う噂もございます。誰ですか？」

「それは初耳だ。誰であろうな？」

スルギは後宮に入った訳では無いし、とぼけておかなくては中殿が何をしでかすかわからぬ。だが、一番恐ろしいのは中殿の実家の切れ者の兄・知宣だ。父親の右議政・守己は頭脳明晰だがむら気で、何事も緻密さに欠けるきらいがあるが、知宣は賢さをひけらかすことなく控えめに振る舞い、それでいて細かな所まで目配りできる、まことに敵に回すと厄介な人物だ。

中殿は年がら年中側室ともめ事を起こしているが、一番折り合いが悪いのは金昌嬪だ。また金昌嬪ともめているらしい。

「あれは自分の容色に自信がございますから、何かと傍若無人の振る舞いが多ございます」

「ならばそなたが中殿として毅然としていさめれば良い事だ。ともかく母親同士の揉め事に、娘たちまで引きずり込むで無い」

まあ、こやつには無理だろうがな。そう考えただけでうんざりした。

「そなたの手に余るようなら、大王大妃様が大妃様をお願いしてみよ」

すると何やらまだ文句を言う。大王大妃様は自分の様な不器量な女はお嫌いだとか何とか、大妃様はろくに口もきいて下さらないとか、その言い方がいかにも愚痴っぽくネチネチ煩い。

「不器量でも賢明で落ち着いた人柄なら、大王大妃様はきちんと話を聞いて下さろう」

すると中殿はワツと泣くのだ。

「やはり臣妾を不器量だと思っておいでですね」

それは……誰が見ても事実ではないかと思っただが、何か言つとまた煩そうなので、仁恵公主を乳母の手から取り上げて、抱きかかえて建物の外に出た。

「そなたは、姉上たちと仲良うするのだぞ、良いな？」

柔らかな頬を撫でてやると、仁恵は嬉しそうな笑いを浮かべた。あの女が生んだ娘でも、娘は可愛い。抱いたまま庭を一回りして、再び仁恵を乳母の手に戻すと、私は足早に大殿に戻った。

「そち達が納得の行く方法で試験をしてくれればよいのだ」

「主上殿下の仰せではありませんが、内侍の場合、たとえ殿試まで進んでも、議政府や六曹・三司といった主だった場所での登用は無理でしょう。」

内侍、すなわち宦官に対する偏見は非常に強い。

「さよう。高内官の前例も有りますが、三位の探花及第でも高内官は内侍府以外では用いられませんでした」

内官とは官位を持つ宦官だが、高尚薬の場合、官職本来の位に加えて長年の功績により内侍としては例外的に高い従二位に叙せられている。だが、表での官職にはついた事が無い。

「状元ならば、どうだ？」

「さよう、状元なら……その優秀さの度合いにもよりますが、三司ぐらいは」

「ですが、三司の若い者たちは意気軒昂と言いますか、学識は高くてもスネ者が多いですからな。大王大妃様や大妃様の御殿に出入りしなれているような、あの、線の細い内侍に耐えられますかな」

司憲府・司諫院・弘文館をまとめて三司という言い方をする。これらの部署は特権として、時の政治を自由に批評する事が許されており、所属の官員は合同で国王への上訴を行う事もできる。官員は官位に囚われず学識に富み政治に対しても独自の見識を持ち、科挙で優れた成績を修めた人物を任命する事になっている。一般の国政だけではなく、王や王妃・王族の私生活まで躊躇う事無く批判する

場合も珍しくない。彼らに嫌われ憎まれては王妃・王族・外戚であつても命が危ない場合も有るのだ。

「ああ見えても武芸の方も相当の物で、寡人が最初にあれを知つたのは、あれの剣で命を助けられたからなのだ。優しげな外見に似合わず、胆力も有る。今年文科を受けた後、来年は武科も受けさせようなどと思う程だ」

「ほう、さようでしたか。女と見まがう見た目ですが、意外ですな」

私はこの国の最高教育機関である国子監の教官を務める主だった連中を集め、昼食でもてなしながらスルギのための特別な試験をするように依頼した。教官は他の官職と兼任の者が多い。皆歴代の科挙の成績優秀者だ。

「主上殿下がそれほど肩入れなさいます理由が知りとうございませぬ。命の恩人に恩返しなさる、と言う訳でも無さそうですが」

「学識がずば抜けており、私利私欲に囚われずこの国の未来を見据えているのだ。あれは。世に出さなければ、まさにこの国の大きな損失であると信じている。まあ、そのあたりもそち達にもよく見て、納得して欲しい」

昼食後も大司憲・林誠哲には少し残ってもらった。数少ないスルギの正体と懐妊を知る人物で、あの「ヤンホ兄さん」の実の叔父だ。スルギの高貴ではあるが少々厄介な血筋についても承知している。

「隠田の件について、最初に建策したのはかの方でしたか？」

「そうだ」

「ふうむ。ですが、三司も様々な不逞の輩に蝕まれておりますからな、危険かもしれません。いっその事……」

「何だ？」

「何か新しく部署を立ち上げられ、あの方をその初代の長官となさってはいかがでしょうか？ 内侍は偏見だけでなく、王族の私生活に近すぎる故、警戒もされますから、従来の国の機構にはなじみにくいでしょう。あの方が華々しく状元及第あそばしたら、きつと議政府辺りから待ったがかかりますぞ。たとえ非常に優れていても、内侍では登用しかねるとか何とか。そうならましたら、大いに粘り、ごねられた方が良いでしょう。そして、官職は諦めるがという条件を付けて、官位はうんと高くなされば宜しいかと」

「議政府は、認めないか」

「あの方の非凡さと本来の御身分を承知していれば別ですが……難しいでしょう。事情を知っていたとしても、不逞の輩からすれば、好き好んで自分たちに不都合な存在は作りたくないでしょうからな」「そちは『女はすつこめ』と思うているのでは無いか？」

「失礼ながら後宮の方々は、すつこんで頂きたいです。ですがあの方は、女であつて女では無いですからな、ある意味。私も大いに期待しております」

かなり文句を言っていた者もいたようであるが、そこは「王命である」と押切り、スルギのための殿試受験の資格の審査を国子監で行わせた。当然と言えば当然だが、皆、回答の非凡さ見事さに仰天したようだ。

希望の光・14（後書き）

国子監は本当は中国式で、リアルは成均館と言います。トップを状元と言うのも中国式で、本来は壮元になります。

皆が言う見習い内侍・金勇秀キム・ヨンスとはスルギの事だ。国子監での最初の課題は「李杜の詩より随意選び楷書・行書・草書・篆書で書写せよ」と言う内容だったそう。篆書などと言うめったに使いもしない書体まで指定したのは、間違いなく弘文館の長官である大提学の張季良チャン・ゲリヤンだろう。側室の一人張昭容の実の兄で、違法な高利貸しを影でやっているというもっぱらの噂の人物だ。いつの時期だったかの状元だが、当代きつての能筆家などと持ち上げる輩も多い。本人としては篆書に関しては、この国で一番だと自負していたようだ。それが……

「いやあ、あの見習い内侍、凄いですぞ。皆度肝を抜かれました」
大殿テジョンに出入りする連中が朝からその話ばかりだ。

「李白から『蜀道難』『静夜思』『月下独酌』の三作品、杜甫から『蜀相』『石壕吏』『登岳陽楼』の三作品を選びましてな、楷書は一書体、行書・草書は各々二書体、篆書も一書体で実に見事に書き分けましたぞ」

「そのまま屏風にでも張って飾っておきたい出来栄えで」

「我が子の手習いの手本に何か書いてほしいですな」

だが、もっと驚かされたのはその筆跡の見事さではないそう。

「二つ目の課題は、朝廷への上奏文を一つ仕上げてみるようにというものでしたが、これがまた凄かったですぞ」

「書体・型式が完璧なものも凄いです、何より中身に仰天しました」
「飛んでもないのが出てきましたな」

皆、一様にスルギの能力の高さは認めながらも、どう扱うべきか態度を決めかねているようだった。王である私との関係性が読めないのも不安なのだろう。

後から上奏文形式の回答についてスルギに尋ねてみると、恥ずかしそうに手の内を明かしてくれた。

「唐の時代の『塩鉄論』でのあれやこれやを前振りに入れて、結論は中華民国の塩政顧問だったイギリス人・デーリーの手法が良い、という事にしたのです。インチキです。ズルですな」

ふうむ。異なる世界、異なる時代の知恵を借りたとはいえ、それを見事な奏上文にまとめ上げて書き上げたのはスルギの能力だ。

それにしても腹立たしいのは張季良だ。スルギが見事に篆書で漢詩を書き上げたのがよほど悔しかったものと見える。スルギに関して面白おかしく勝手な噂を広めているようなのだ。曰く「王は衆道の気がお有りではないか」だの「あの内侍は美貌と按摩や鍼の腕前で孤閨を託つ高貴な方々を慰めて差し上げている」だの、実に無礼千万だが、可愛い順恵翁主の実の伯父だけに表だって処罰しにくい。以前ならそうした陰口も気が付かなかったが、最近話を聞かせてくれる尚宮や内侍にマメに褒美を遣わすようにしているので、すぐにどこで誰に向かって張季良がスルギの悪意有る噂を口にしたのか分かるのだ。

夜は毎晩スルギと眠るので、最近後宮では昼食時に順番に女たちの所を回っている。女たちの顔を見にと言うよりは、それぞれの産んだ娘たちに会いに行くのだ。張昭容の所で昼を食べた後、散歩がてらスルギのいる薬草畑に順恵翁主と一緒に向かった。

癩癩持ちですぐ目下の者に辛く当たる張昭容が産んだにしては、順恵は賢い良い子だ。以前木に髪の毛を引っかけて身動きが取れなくなっていた所をスルギに助けられた事が有り、以来スルギの「仲良し」を自認している。スルギの薬草畑での作業を手伝うのが楽しいらしい。スルギも順恵に色々な事を教えてやったりしている。そのお蔭で随分字なども覚えたようだ。

近頃頻繁に母親の所にやって来る実の伯父がスルギを擲掬するのを聞いて、小さな胸を痛めているらしい。母親の張昭容も落ちてくる屋根瓦に気づいたスルギが庇って無事だった、と言う一件があったのだが……ろくにスルギに礼も言っていない。どうやら美しすぎるスルギを警戒しているらしい。女だと見破っているかどうかまではわからないが。

「ヨンスは母上も助けてくれた恩人のはずなのに、母上まで伯父上の話を黙って聞いておいでなのです」

「そなたの伯父上は、自分こそがこの国で一番上手いと自負していた隷書を、官位も無いヨンスが余りにも見事に書いたので面目を潰された様に感じているのだろうよ」

「あんな方が私の伯父上なんて、情けなくて嫌です」

「正直言つて処罰したいが、そうするとそなたにも類が及ぶからなあ」

「母上や伯父上がヨンスを悪しざまに言うのは、官位が無いからですか？」

「そうだろう」

「科挙で状元になれば、ヨンスも高い位が頂けますか？」

「なるべくそうしたいが、反対が色々有って、なあ」

「ヨンスは立派な人なのに、みんな分ならず屋ですね」

「そうだ。皆、分ならず屋だ。だが王である私は朝議の席でそう、素直に発言できないのも確かなのだった。」

スルギは大繁盛していた幾つかの店の権利や持っていた土地などの一切を、あの林亮浩に譲ったらしい。スルギは詳細な出納簿をつけていて、私としてはただの小遣いとして渡したつもりで金銀に關しても、キツチリ何に使ったかがわかるようになっていて。別に財産目録のようなものも有って、そちらは私や大妃様、大王大妃様から貰った宝石類や装身具、衣類などに関する一切を記帳してある。

「全部をこの西洋式の金庫に納めましたから、火事になっても大丈夫です」

その金庫は何でも大の男十人がかりでないと動かせないと言う大きな鉄の箱だ。そこに西洋から輸入した複雑な構造の錠前を五個も取り付けてある。そしてその鍵は大妃様にお預けするのだと言う。朝、鍵をお預けし、夕方また受け取りに行く。これならば買収された女官が潜り込んで何かを盗み出すなど、したくても出来まい。

「小さな小箱なんかは貴重品を入れて居たら、何をどうされるかわかった物ではありませんから」

まあ、この国では美しい小箱などに貴重な宝石類を入れ、部屋にしまい込む程度の用心が普通だ。機密の書類もせいぜい隠し引出に仕舞い込むか、敷物や布団の影にでも隠す程度だろう。だから女官や内侍にでも比較的たやすく盗み出せるのだ。

実際に中殿と金昌嬪は互いに手の者を忍び込ませ、装身具などを盗ませている。そして互いに「毒を仕込まれた」だの「呪詛された」だのとやっている。そして装身具が犯行現場に落ちていたとか何とか、茶番も良いところだ。今は少し下火だが。

「事を表ざたになさらず十分に調べ上げ、将来廃妃なりなさる時のお役に立てた方が宜しゅう御座います」とは、判内侍府事の言いぐさだが一理ある。今までの所業だけでも沈中殿は廃妃の根柢は十分

なほどだ。

「さてその林亮浩だが……」

「懐妊したことも打ち明けてきました」

「そうか。何か言われたか」

「……泣かれてしまつて……自分の迂闊さに腹が立ちました」

スルギは真実、あの男を頼れる兄の様に思っていたのだろう。それがあの男の想いとどうずれていたのかは、想像に難くない。スルギはこれまで恐らくはすべての手紙類を私に見せてくれていたが、あの男とのやり取りは商売に関わる内容ばかりであった。ただ、その中にも親密さは感じられたが。

「私が林亮浩の立場なら、地面を打つて大泣きしていただろう」

「護衛のムセンさんに『こうした場合、慰められるとかえつて辛いものだと思いますが』って言われました」

「あの男、スルギを不幸にするなら例え王でも許さない、そんな事を私に直接言ってきたぐらいだから……スルギを大切な友だと思つている。決して傷つけるつもりは無い、あの時はそんな返事をしたが……大ウソをついた事になるな」

スルギは私をじつと見つめてから、小さなため息をついた。それからポツリと言った。

「皆、私が悪いのです」

「そうだな。スルギは賢いくせに、他人が自分に向ける好意には少し鈍い所がある。悪意や策謀はすぐに見抜くのにな」

「おっしゃる通りなのでしょうね。実は交易船を兄さんと共同で仕立てたいなど思っていました。やめた方が良いですね」

恐らく新しい商売の仕方を思いついて、それを形にしたかったのだろう。林亮浩の反応に驚いて、その話を出来ずに引き上げてきた。

そんなところか。

「構わんぞ。私も資金を出そう。ああ、だが、しばらくそっとしておいてやった方が良からう。スルギの殿試が終わった後ぐらいなら構わぬのではないかな」

その頃になれば、あの男も現実を受け入れるだろうし、それに恐らくは斬新で興味深いであろうスルギの提案には魅かれるだろうし。

「それにしても船を仕立てたいとは、その交易でかなり儲かりそうなのか？ あるいは何か珍しいものが欲しいのか？」

「ええ……新大陸の銀が……」

そこまで言いさしたまま、スルギは私の腕の中で眠ってしまった。

懐妊してからこのような事が時折ある。以前より疲れやすいのだろう。今日は色々あったようではあるし。安らかな寝顔を見て、私も幸せな気持ちになりながら、眠りについた。

明日はいよいよ殿試当日と言う日になって、私は腹が立ってならなかった。だからと言って誰にでも愚痴を言えるわけでもない。昼食の後、判内侍府事に庭のあずまやで鬱憤をぶちまけたのだ。

「昨夜になって、ジジイどもが『金勇秀が良い成績をおさめたとしても、やはり登用はお控え下さい』と言ってきおった。不快だ。実に不快だ。判内侍府事、あれは『まあ、それが世間と言うものでしよう』と笑い、寡人に怒るだけ損だと言うのだがな。大司憲の林誠哲が提案した様に、官職は諦めるが位の方は高くすると言う事で手を打つしか無いか」

「なるほど、確かに現実的な落としどころなのでは御座いますまいか？ あの方を百官の頭に据える事は、これまでのこの国の有り様を考えますと難しゅうございます。それに、何よりお体の事もございます」

「ああ、そうだな。それはそうだ。腹立たしくて、忘れておったよ」
「御心を落ち着けませんと、不逞の輩に思わぬ事で付け入られます」
確かに。様々な思惑と策謀が入り乱れる宮中で大切な者を守るためには、落ち着いて用心深くしなければ。

「受験資格に関してもごねてな。あれが内侍で、その出自に関して疑わしい節が有り受験資格に問題有りと抜かすのだ。『王の特命による人選』の特別枠を使ったと解釈しても構わん、と言いつつ皆黙ったがな」

「断固たる御決意を示されたことで、御期待の大きさが皆にも伝わりましたでしょう」

「皆、あれが状元となる事を恐れているのだ」

「ですがそうなりましても『龍頭会』は迎え入れると思います」

状元とは首席合格者の事で、終生王に直接面会を求める権利を持ち、歴代首席合格者のみが入会できる『龍頭会』の会員となる。通常はそのまま高位高官への道を進むが、たとえ野に下つても「状元」の威力は大きい。通常、苗字の下に「状元」を付けて敬称とする。スルギなら金状元と呼ばれるわけだ。

高尚薬は第三席合格者の「探花」であつたので、上位成績合格者の親睦をはかる『鼎元会』の会員ではあるが、その資格だけでは上部組織である『龍頭会』会員ほどの威力は無い。

今回の件で、判内侍府事なりに独自に動いているようだ。かねてから国子監の下仕えや官奴婢たちを手懐け、内部の事情を探らせているのは知っていたが、今回は現在の『龍頭会』の会長である金恩成キムウンに接触を図つたようだ。金恩成は後宮で中殿と一番揉めている側室・昌嬪の祖父で、言わずと知れた領議政ヨンジョン、すなわち全ての官吏の頂点に立つ老人だ。

「元来あの方は高貴な御血筋であつたが、清との戦の折の混乱の中で内侍になる羽目になられた……とまあ、このように申しておきました。更には領議政自身ともかなり近い血縁関係だとも言っておきました。まあ、嘘でもありませんからな」

「ほう、そうか。あの爺は血筋に対するこだわりが強い。効き目が有るかもしれんな」

「大王大妃様や大妃様はあの方の高貴な御血筋について、良く御存知なのだとも言ひ添えましたからな。大丈夫でしょう」

今回の殿試からは宋の頃考え出された不正の防止措置を復活したスルギ以外の正規の殿試の受験者はいずれも名門・有力者の子弟で有つたので、その措置は誰も反対する者は無かつた。その作業・監督に当たる者を金や地位でつり、不正行為に巻き込む事ぐらいたやすいと見ていたのだとも思われる。

身分は軽いが、どの門閥にも属さず不正を憎む者を慎重に選び、試験官の役目をさせる事にした。その時点で多少『身分が軽い者はふさわしくない』などと文句を言う者が居たにはいたが、概ね自分の派閥の子弟の仕上がりには自信が有るようで、どうにか実行できる事になった。ともかく、スルギには万全の態勢で殿試を受けさせた。ともかくも手は尽くした。全てが順調に行くように、あとは祈るばかりだ。

いよいよ殿試当日だ。領議政は判内侍府事から聞きかじったスルギは自分と『本貫が同じ』らしいと言う話を、早速後宮にまで乗り込んで、孫娘の昌嬪に御注進に及んでいる。判内侍府事の工作は良い所を突いているのだろう。

本貫とは同一の先祖を頂き、始祖である偉大な先祖の故地とつながる人々の集まりで有り、その故地そのものでも有るが、その本貫はこの国では極めて重要視される。概ね地名と姓をあわせて、安東金氏とか慶州金氏とか言う具合に呼ぶのだが、同じ金姓でも本貫は二百以上に分かれ、「どこの金」であるかで、世の中万事、特に官吏の場合は運命が大きく分かれる。

ちなみに中殿は一等功臣を多数輩出した青松沈氏との関わりが深く、一応王族に準じる格式だ。高名な学者を多数輩出した平山申氏の貴人や、祖父母の代にさかのぼっても全員が名門の嫡出子と言う密陽朴氏の淑儀も、本貫と実家の格式で位が定まった。

最も位が低い徳水張氏の昭容は実家が二等功臣であり、裕福ではあるが、一門から出した状元も張季良一人きりだ。その一門から何人の状元を出したかも、一族全体にかかわる事柄なのだ。

今の状態ならどの側室でも王子を産めば位が即座に上がるので、それぞれの女たちの実家は躍起になっているらしい。中殿も実家の勢力拡大を狙って見え透いてはいるが策謀を巡らせている。互いが互いの所に私に通っているのかもしれないと疑心暗鬼状態だ。あるいは後宮内に新しい王の女が出来たのではないかと探りを入れていく所のような。判内侍府事は積極的に介入して、情報を攪乱させている。全く実体のない噂に踊らされる女たちは、哀れと言うか愚か

と言つか、御苦勞な話だ。今の後宮では毒藥やら呪詛の札やら人形やらがあちこちで見つかるらしい。肝心の私がスルギ以外の女と同衾しないのだから、後宮の騒ぎも虚しい限りだが。

今回の殿試は後宮でも大きな話題になっている。

「ヨンス様、頑張ってください」

「ヨンス様が状元になられますように」

まだ子供の内侍見習いや女官見習いが、一心に祈る姿を幾度か私も目にした。どうやらスルギに文字を教えてもらったり、掃除や水仕事を手伝ってもらったり、時には針仕事や料理を助けて貰った者たちらしい。

薬を貰ったり針を打って貰ったりして世話になった者は言うに及ばず、何かと親切で明るいスルギは、後宮の身分が軽い者たちの間で絶大な人気を誇っている、と判内侍府事は言う。身分の有る者は家や本貫ごとに応援するべき受験者が決まっているので、表だつた事は出来ないが、それでも影ながらスルギの成功を祈ると言う者も少なからず居るらしい。

殿試は落第者は出さない習わしだが、順位が付き、その順位は一生ついて回る。

試験問題は国王からの下問という形で出題され、それに対して朱線で罫を引いた特定の用紙に、しきたりを守つた上奏文の形で論文を仕上げ、提出する。「臣対臣聞」と言う言葉で始まり、最後は必ず「臣謹対」で終える。最低でも千字以上が必要とされ、改行や敬語の使い方にもうるさい規則が有る。

それを日没までに仕上げなければ、失格だ。過去に急病で失格した者が二名ばかり居るが、極めて珍しい。

今回取り入れた不正防止の手段だが、まずは答案の受験生の名前を糊付けして隠し、王である私自身が選出した収賄に応ずる可能性が低いと思われる者たちに、それらの答案を筆写させる。筆写する事で、筆跡から誰の答案か推理する事も出来なくなるわけだ。これで収賄による情実をほぼ完全に封じる事が出来るだろう。

通例とは異なり、私自身が筆写に立ちう事になっている。不正は絶対許さないという意思の表明でもある。

筆写したものを隣室に持ち込み、七名の採点官が全員で全ての答案をそれぞれ採点する。採点には三日を要する。その間、内禁衛・兼司僕・羽林衛の王宮護衛の任務に当たる内三庁はもちろん内侍府監察部も加わって、日夜不届き者が答案のすり替え、部屋からの持ち出しなど不正行為を働かないように、採点を行う部屋の内外を厳重に護った。

果たして採点の結果はどうなるのだろうか？

「いやはや、どこで見つけておいでになったかは存じませんがあも見事な成績を取られてしまつては、具合が悪いですな。宦官に表の官位官職を与えた例はこれまで皆無でしたのに、一体どうすれば」
「登用はお控えくださいとは申し上げたが、あの答案を見て王様の御意向に沿うべきではないかという意見も上がっております」

慣例を破つた三十四人目の殿試の受験者・キム・ヨンス金勇秀つまりスルギが、他の受験者を圧倒的に切り離れた好成绩で状元及第したのを受け、スルギをどう扱うべきかで朝廷内は紛糾していた。

殿試の結果が出てすぐ、しきたり通り上位十名を王である私が直接表彰し、一位から三位までの者は輿に乗つて都を練り歩くのだ。

「今頃は龍頭会主催の酒宴か？ 嫌がらせや辛い目に遭つておらんかな」

大殿で判内侍府事を相手に酒を飲んでも、スルギの事が気になつて仕方が無い。

「会場の妓楼はあの方がかつて、女将から花形の主な妓生連中まで親しく交流なさっていた所です。姑息なたくらみや嫌がらせは、恐らく有つたとしても未然に防がれましょう」

「そうか。それを聞いて安心したぞ」

既に市中に放つた者たちから幾つかの報告が入っていた。華やかに夕暮れの街を進む及第者達の行列は、歡呼の声を持って迎えられたらしい。特に目を引いたのは艶やかに着飾つた妓生たちの「金状元様、素敵」と言う黄色い熱狂的な歓迎であつたと言う。

その後は連日祝賀の宴会が続いている訳だが……スルギは必要最

低限の宴会にしか出席していない。懐妊しているのだし、スルギにはこれといった学問の師匠もいないからだ。医学の師である高尚薬は酒は好きだが宴会は嫌いだというのだから、必要も無い。

「龍頭会主催の宴会で即興に作らせた詩も見事でした」

領議政の金恩成は判内侍府事の事前工作のお蔭か、異例尽くしの状元・金勇秀キム・ヨンスに対して友好的な態度を取っている。領議政は歴代状元及第者の親睦団体である龍頭会の会長でもある。朝議の席でこのような話題を出すのも、その表れだろう。

「どの様なものであったのか、知りたい」

「たまたま宴の席に有ったミカンを私に取りました、皆にミカんにちなんだ詩を作らせてみましたら、かの金勇秀が真っ先に筆を走らせ、書き上げましたのがこれでございます」

「読み上げて、皆にも聞かせてやってくれ」

「はい。題は『柑子に献ず』でございます」

領議政は高齡ながら、詩を吟じる名人としても知られていた。朗々と読み上げられた詩は見事だった。

桃李 珍と雖えども 寒さに耐えず

豈に柑橘 霜に遇うて美なるに如かん

星の如く玉の如く 黄金の質

香味 応に???に実つるに堪るべし

太いに奇なる珍妙 何こに将ち来る

定めて是れ天上の王母の里ならん

応に千年 龍頭の会を表わすべし

攀じ摘まんて持って我が国王に献ずる

「見事だ。領議政の吟じ方が見事なお蔭やもしれんが、実に良い出来栄えだと思う」

私が褒めると、追従と言う訳でもないと思う。多くの賛辞を皆が述べた。

「素晴らしいですなあ」

「いきなり目の前のミカンを詠めと言われて、こんな具合には普通いきません」

それらの声がひとしきり治まった所で、私は宣言した。

「金勇秀だが、官職は当分は見送ろう。皆の方も色々と戸惑うようであるからな。だが、かつて寡人の命を救い、また今も寡人が孝養を尽くすべき方々に良くお仕えしてくれている。更に、医科も一等第一席の成績で合格し、またこうして見事な詩も披露された。本来、状元といえども初年度は最高で五品どまりが通例であつたが、今回は官職をあきらめさせるのだ。大王大妃様、大妃様は『位しかやれぬなら、いつそ正一品を』と仰せだが、そこまでは難しかろう。これまで宦官に与えられた最高の官位、正二品をもって、報いてやりたい。賢いあれなら、その高い位も決して無駄にはしないだろう。よつて金勇秀には大状元という一代限りの称号を与え、正二品に叙す事とする」

領議政の詩吟の効果か、こう宣言しても意義を唱える声は出なかつた。

さらにスルギを百官のいる前に呼び入れ、官職を断念させる代わりに三つの願いをかなえると申し伝えた。官位だけなら大した特権も旨味も無い。大抵は官職がらみで半ば常識化している汚職や不正行為をやって、官吏は皆財を蓄えるのだ。だから彼らの既得権益を侵害しそうなものなら、即座に文句を言われるだろう。だから、特権を与えるにしても色々考えなければいけなかった。

不本意だが朝廷内の主だった連中とはある程度事前に申し合わせをした。大王大妃様や大妃様にも雰囲気づくりに御協力いただいて……まずはスルギ自身が希望した二つの特権を与えた。

一つは通常国王も不介入の編纂中の芸文館の歴史書や、国子監の秘蔵書も含め「国内全ての書物・公文書の閲覧許可」、もう一つは相手がいかなる高位高官であっても「土下座無用・処罰不能」と言うもので、処罰できるのは国王のみと言う訳だ。

「残るもう一つは、思いつきません」

スルギは落ち着き払っている。なかなか大した度胸だと思う。

「ならば、いかなる場所であっても、そちが必要と感じれば周りの人間全てに、寡人の代理として命じる特権を与える。特に人命に関わる場合は、いかなる人物も金大状元の指揮・命令に速やかに従うように」

すると皆は急に騒ぎ立てたが、私は臆せず声を張り上げた。

「この命令が人倫にもとる破廉恥なものであるとか、私利私欲を満たすためとか言うものならばともかく、そのような事は言うはず

が無い。万が一そのような不屈きな事があれば、寡人に直訴せよ。寡人がこれに適切な罰を与える事を約束する」

すると、皆は不承不承だろうが、静かになった。

「まあ、思い切り位の高い暗行御史のような者と、さよう心得る」

そう付け足してやると今度はどこからともなく、ため息が聞こえてきたが、反対の声はもはや上がらなかった。

無事に科挙が済めば、あとは出産だが、スルギはただ待つという事はできない質で、相変わらず研究熱心だ。

以前も話に出た林亮浩と共同出資の形で交易船を仕立てる件がまとまったので、私も手許の金銀を出した。これまでの働きに対する褒美のつもりだったから、別に返してもらおうとも思わなかった。だが、二か月経たない内に元の資金が二割増しになって、私の手元に戻って来たのには驚いた。

倭から琉球をめぐり清で西洋人と交易して戻るといふ航路を設定し、西洋との金銀比価の違いやそれぞれの国の人気商品をうまく商って、大きな儲けを手にしたようだ。

清には欧州経由で大量の新大陸の銀が流入していた。この国や倭国の金銀比価はせいぜい金壹に対し銀は七から八程度なのに対して、清の西洋の船が入る貿易港の周辺では金壹に対して銀はなんと十五になっているらしい。我が国では銀はもっとも決済で重宝される。これを利用しない手は無い、と言う事のようだ。

「ほおお、だから以前、寝言で『新大陸の銀が』などと言ったのか」

「まあ、そのようなおかしな寝言を言いましたか」

「うむ。覚えていないか」

「全然」

スルギは賢いくせに、妙にあっけらかんとしている。そこがまた、良いのだが。私には隠し事をしないと決めてくれているらしい。それもまた、うれしい。

たちまち「金大状元は金儲けも上手い」という評判が立った。相変わらず元の料理屋やボジヤギを商う店は大繁盛らしいし、商売への出資分の分け前を受け取るだけで、もう働かなくても自分自身の才覚だけで食べて行ける収入は有るようだ。

「それでも正二品相当の俸禄は別個に頂けるし、食うには困らないのですから、ありがたい事です」

そんなふうのスルギは言うが、相変わらず普段の着るものは地味な男物だし、私が与えた以外の装身具は持っていないようだ。

「どうも書物やら薬やら、働いてくれたものへの心づけやらで結構物入りです」

そうは言っても、スルギの金の使い方は、ちゃんと目的が有り、役にも立っている。無駄遣いが無いのは、時折私に見せてくれる帳簿を見ても伺える。

「金を稼ぐのは大変なものですから、その大変さに見合った使い方をしませんとね」

後宮の他の女どもに見習って欲しいと思うが、実家の資金やら色々有って私からの注意も出来にくい。

「身分有る者は財物の事を表だってあれこれ言うのは、この国では

はしたないとしたものですから、難しいですよ。王様なのですし。けちんぼだと思われるもお困りになるでしょう」

確かにスルギの言う通りで、その為に後宮の財政改革は難しいのだ。

一方で祖母や大妃様はスルギの養母が居る尼寺へ使いをやり、かなりの寄進もなされた模様だ。そうした出費は私は無駄だとは感じない。スルギは「お気持ちだけで十分」などと言うが。

養母はスルギが王の子を身籠ったと知って大いに驚いていたが、大妃様がスルギの実の伯母だと知って更に驚いたらしい。養母の身を寄せた寺でも他の名刹でも、国中のめばしい寺で安産の祈禱を行わせたようだ。

何はともあれ、出産に備えて安全な産屋が必要だ。そのために祖母と大妃様は知恵を合わせて色々とご配慮下さった。スルギの初めての出産が無事終わるように、周囲の者たちは心を砕いていた。

新たな命・1

もうすぐスルギはあれの言う所の「産休」に入る。休みに入る前に三司・六曹といった主だった部署の顔なじみの連中に季節の菓子を渡し、しばしの別れを告げてきたらしい。

「外国で病気の治療なんて嘘を言いましたから、万が一にも姿を見られたらまずいですよね。大王大妃様と大妃様のお住まいの裏手にすっこんでいるなんて、めったな事ではバレないでしょうが……それでも人は使う訳ですから、悪気が無い一言でも鋭い人間にはバレるかなあ……」

極端な話、露見しても、それを公にされなければ良いのだ。どう隠しても、沈家の連中には見透かされているような気はする。まあ、あの、考え無しの沈中殿はどうやら何も知らずに、相変わらず側室たちと角を突き合わせているだけのようだが……

「ともかくも母子共に無事に健やかにお産を終えてほしいものだ」
「そうですね、それが確かに一番大切ですね」

文科と前後して医科も首席で合格したので、御希望も有り、祖母と大妃様の担当医師はスルギに決まった。そんな事情もあってスルギは実用的な男の衣類で居る事が多い。凜々しく涼やかではあるが、やはり女らしい姿も見たい。そんな風に思うのは私だけでも無さそうだ。スルギの鍼や灸の腕前は新人なのに抜群の勘の良さ、手先の器用さ、学識の深さがいまって「名人の域」だと言う。頼まれれば身分の低い者でも分け隔てなく、面倒を見てやっていたが、皆、症状が嘘のようにおさまったそうなの。

「あの方がいるおかげで、袖の下が取りにくくなったものがずいぶん増えましたぞ」

師匠の高尚薬は笑っていたが、内医院の医官の中には苦々しく思う者もいるだろう。位自体が正三品の御医よりも上なので通常の内医院の医官という訳にもいかない。普通なら見習いで色々やらされる使い走りのような段階だろうが「難病のため海外で手術」「一時病欠」と言う事になっている。お産が終わったら、スルギは「客分の扱いで内医院の活動にも参加する気らしい。特に現在手薄な貧しい人々のための医療活動を行いたいと考えているようだ。高尚薬のように宮中の高位の女性だけを見る、などと言うのは嫌らしい。

「確かに多くの症例にあたる方が、医師としての技量は伸びましよう」

そう高尚薬は言うが、スルギの体が疲労しすぎないか心配ではある。まあ、出産後の心配ではあるが。

「三星姫の御器量なら何でもお似合いだが……質素な内侍の服ばかりというのも、何やら残念ですねえ」

祖母は人目を気にしなくて良い場所のなら、三星と言う実の御両親がお付けになった名でスルギを呼ぶ。母君が先々代様の公主であり、父君が王族の中でも特別に尊崇を受けている家柄の嫡流で有られるので、貴い血筋に敬意を払い敬語を使う事も多い。

「大王大妃様のおっしゃる事もわかるのですが、まだ、人目の有る所で艶やかに着飾らせるのは難しいです」

「主上は御覧チュサンになってますのか？ 女らしい姿を」

「二人きりの時は、唐織や繻子チヨコリの上衣チムに絹の裳チムぐらいは着ておりませんが」

「私もそうした姿を拝見したいものです。おお、そう言えば、主上、タシウイ姫に夏物の唐衣は差し上げたので？」

「そつえば、まだです」

唐衣は身分ある女性しか着用が許されない略礼服だ。王妃の場合は更に金糸で刺繍して五爪龍を表した捕ポという丸い縫い取りの布が付けられる。本当はスルギにこそ金糸の龍補が相応しいと思うが……今は諦めるしかない。

「極上の薄絹をあれに、と思って幾つか取り寄せました。白地に金糸で吉祥紋が縫い取りされておりますものが、特に涼やかな感じでした。あれで唐衣を仕立てさせましょう」

「おお、主上が御自分で見立てられましたか」

「近いうちに着ております所をお目にかかけましょう」

「それは、楽しみです」

祖母の後に伺った大妃様の所でも、お産の事で色々お話をする。実の伯母上だけに、スルギの身分について残念に思っておいでのお気持ちは祖母よりも一段と強いようだ。

「袞龍袍をお召しの主上の隣が龍補をつけた唐衣姿の三星ならばねえ……」

袞龍袍とは今も私が着ている王の通常の服装で、五爪龍を表した捕を前後左右に縫い付けて有る。

「私もそう思いますが……本人はあまりこだわらないようです」

「内侍見習いの様な服ばかりだと、見ている私が悲しくなります」

「こちらに伺う時は、もう少し身なりを整えますように申しとおき
ましょう」

「いや……良いのです。本当に忙しいようですし、人目をくらます
には、あの方が良いのでしょうか。でも、お産の前後は休むのですよ
ね、大状元としての仕事やら何やらを」

「はい。そうさせます」

「では、せめてその間だけでも、女らしい美しい装束で過ごしてほ
しいものです」

私が金糸の縫い取り入りの白い唐衣を仕立てる予定だと話すと、
大妃様は母君の御形見だという繊細な透かし彫りを施した見事な白
玉製の簪を私に託された。

「母が若いころ真夏の時期に好んで使っていたものです。もともと
は開祖様ゆかりの品と聞き及んでおります」

「おお、ならば実の御祖母様の御形見と言うことになりますな」

「母は王子を産めませんでした……三星には、ぜひ世継ぎを生ん
で欲しいものです」

祖母と大妃様のお住まいは隣り合わせだが、互いの敷地は相当に
余裕が有る。その双方の住まいから行きやすい裏手の場所に、スル
ギは「清潔で衛生的な」住まいを作った。井戸の水質にも気を遣い、
この国では初めてとなる『ポンプ』を取り入れ、下仕え達が洗濯を
しやすい場所を作った。調理場も色々新しい工夫が有るようだ。

「衣類は清潔に洗い上げて、きちんと干して、火熨斗も当ててほし
いです。それに夏は特に調理に気を付けなさい。お腹を壊す病気に
なったら大変です」

食中毒、と言う事について説明してくれた。どうやら、私もその

事は前世では常識として知っていたようだ。

「ふむ。清潔な水で手を洗うのも大切なのだな」

礼儀作法、たとえば主人の前で足袋ボンを丸出しにするようなはしたない動作を目下の者がしても、スルギは丸で気にかけない。外出から帰ったら、あるいは用を済ませたら、必ず何か触る前に手を洗う事。そして洗った手は日に当てる乾かした布で拭く事、その布は湿つたらすぐに取り換える事、そんな事の方がずっと気になるのだ。

大妃様が信頼する尚宮サンケンも調子が狂うのだろう。わざわざ私の所に相談に来た。

新たな命・2

「普段の昼間は何やら難しげな書物を前に、忙しそうにしているそうではないか」

前触れ無しで、今のスルギの住まいの方に行ってみると、ちゃんと女らしい身なりで私を出迎える。今日は朝から朝議が無い日なのを意識していたのだろうとは思いが……

「明の官吏で学者でもあった徐光啓と言う人の書いた本と、格闘しておりました」

確かに、格闘し甲斐の有りそうな、ずいぶんな量の書物だ。これなら確かに読了するだけでも目が疲れるだろう。年老いた尚宮の心配も無理からぬ事のように思われる。

「ほう『農政全書』とな。随分と大部な著作のようだが……徐光啓と言う人物は暦法に通じた学者で、天主教徒であった事は承知している」

「我が国で実学を尊重する機運がもつと興ってほしいものだと、私は常々感じております。空理空論をこねくり回しても、米一粒余分に出来はしませんし。老人たちは『崇明排清』の気風に染まりきっておりますから、明の学者の本なら、まだ受け入れられやすいかとも思っています……これですが、全部で六十巻有ります。この中で我が国でもすぐに使えるような事は取り入れたいと思い、入門書を作ろうと思ひ立ちまして……で、出来ましたのがこちらです」

何とまあ、ただ読むだけでも骨が折れるだろうに、関連した本まで書き上げたのだ。国王の立場としては感謝すべきであろうが、夫

として、また子の父親としては体が心配になってくる。

「なるほど『農政入門』に『救荒作物考』か。この六十巻の使いそ
うな所を纏めたのか？」

いかに『農政全書』が良書でも、漢字だけで書かれた全巻六十巻
の著作を読みこなせる者はそう多くは無いだろう。スルギの本は平
易なわかりやすい表現を心がけたようだ。読んだ内容がすつと頭
に入る。なかなか良くできた本だと思う。難しい事を人に分かりや
すく説明するのは、よほど学識が深くなくては出来ない事だけに、
あらためてスルギの並々ならぬ能力を強く意識した。

「我が国の場合、特に飢饉に対する対策が急務と考えましてその『
救荒作物考』には西洋の書物からの知識も盛り込みましたが、甘藷
に関しては、『農政全書』の受け売りが多いです。『農政入門』は
『農政全書』が農作物の事だけではなく、水利・治山・養蚕・有用
樹木の活用法・牧畜など多岐にわたる項目から農政全体を見ている、
その姿勢にならしまして、我が国で生かすにはどうするべきかを論
じております。本当は我が国の気候・地質・水質を考慮した実用的
な書物が欲しい所ですが、すぐには無理ですよね。何せお産を控え
てますから、田んぼや畑を見て歩けませんし、山にも入れませんか
ら。多くの人の知恵と協力を仰いで、そのうち、そうした書物を編
纂したいと思っております」

「そういえば、薬草畑で甘藷を育てていたな。救荒作物として、や
はり相当優れているのか」

「はい。ですが甘藷は寒冷地には適しません。一方で馬鈴薯は寒冷
地に向きますが、連作障害がやつかいです」

「連作障害？」

「同じ場所でその作物を作り続けると、その作物は次第に育たなく
なる事を言います。たとえば馬鈴薯を作った畑は、翌年は異なる作

物を作るか休ませるかしませんと、土地も荒れ、収穫も望めません。薬用人参も連作障害が酷い物の一つです」

「ふーむ。そうか。では、そのスルギが纏めた本にも、その連作障害については、述べてあるのか？」

「この『救荒作物考』には西洋式の連作障害の避け方について、説明はして有ります」

思わず、時を忘れて農法についての話、貧しい民を救う方法について語り合ってしまったが、私の所にわざわざ相談にやってきた大妃様の腹心である呉尚宮オ・サングンに、目配せされ、咳払いをされて、ようやくここにやって来た本来の用事を思い出した。

「おお、そうだ。今日はこれを持って来たのだ。確かに、色々忙しかろうが、スルギには美しく装って欲しいと私だけでなく、大王大妃様も大妃様も感じておいでなのだ。この唐衣は私が選んだ。こちらの簪は唐衣の色合いに合わせて大妃様を選んで下さったものだ。開祖様ゆかりの御品で、大妃様の母君、つまりスルギのお祖母様が真夏に好んでお使いだったそうなの」

「さようでございますか」

無理もない。このようなぜいたくな衣装と簪で、貧しい民の家が何世帯救われるか……などと、つい、スルギは思ったのではなからうか？　だが、それを口にするとう上の方々や私を非難しているようにも聞こえてしまうからだろう。「お召しになったところを、ご覧いただきましょう」と言う呉尚宮の後に、素直について行った。

その挙措動作はちゃんと礼法に適合しており、優雅でそこはかかない気品が有る。身分ある女性としてまず、けちのつけようがない完璧な作法だ。朝廷内で男として振る舞う時は、颯爽としていて女である事を私も一瞬忘れそうになるのだが、そのあたりの使い分けも見事だと感じ入る。

それにしても……この部屋の調度類は装飾が殆どない簡素な感じの物ばかりだ。小さな引き出しが沢山ある薬笥ヤクシヤンには様々な薬剤が納められ、大量の書物を置いたがっしりした冊棚チエツヤンが有る。これだけ見るとまるで学者の書齋か医師の薬房だが、刀箆筒には業物の倭刀が、銭函には銭がどっさりという具合なのが異色だ。武術の心得が有り、金もつけの出来る学者は稀だろうし……。衣類をしまっパンダジもまるで飾り気が無い。何より大きな西洋の鉄製の金庫の威圧感は大変なものだ。どれもこれも実用一点張りで、華やぎとは無縁だ。家具を見ただけでは、この部屋の主の正体はさっぱりわからないだろう。少なくとも婦人の部屋には見えない。屏風や敷物は上質だが、男の物に見える飾り気の無いものだ。

「螺鈿細工の家具でも誂えさせるか」

婦人の部屋にふさわしい華やかで愛らしい意匠の家具を持ってこれれば、かなり部屋の感じも変わるだろう。

新たな命・3

立派に朝廷の刷新のために力を尽くしてくれている事に、感謝もしている。だが、スルギを一人の女として愛する想いを形にしたい気持ちは常に私の中にある。しばらくして白い唐衣に着替え白玉の簪を髪に刺して現れた姿は、実に美しかった。

「そうして唐衣姿で居ると、やはり一段と美しいな」
「いつもむさ苦しくて申し訳ありません」

スルギは何処か浮かぬ顔だ。

「何やら私の方が喜びでいるような気もするな」
「いえ、その、初めて着ますのでいささか戸惑っているだけです」
「ん？ どうした？ ため息などついて。後宮に閉じこもっているのは性に合わんか」

なにやら眉間に少ししわまで寄せている。私の子を産むのがイヤと言っわけではないと思うのだ。私が王であれば、どうしたってスルギの懐妊は個人的な問題では済まない。後宮の鬱陶しい争いとも、無縁ではいられない。手を取り、肩を抱きしめると、スルギは素直に私の腕の中に納まった。相変わらず難しい顔だが。

「その、お慕いしている方の子供だから生みたい……と言っただけは許されないのですよね……この子も生まれて来るなり大変そうので、何やら気の毒で……」

「私も気の毒なのだろう？ だから力を貸そうと、そう言う訳なのではないか？」

「お役に立てますなら、何でも致します」
「そうか。ならば……」

花の如き唇に、思い切り深く口づけた。何でもするとは言いが、私はスルギ自身の幸せや喜びを犠牲にはして欲しく無いのだ。スルギの幸せは私の幸せ……そうであって欲しいのだが……

私は眉間の辺りを軽くなぞり、もう皺が寄っていないのを確認した。

「随分と腹が大きくなったな。子が足で蹴るのか？」

「ええ。時折ハッキリかかとの形がわかったりします。でも今月になつてからはお産が近いようで、静かです」

「夜中に呻き声を上げたときは、驚いたが、胎児の蹴り方は随分強いのか？」

「ええ。小さな体なのに、ずいぶんと力強いですし、いきなりなので驚きます」

「やはり、男子だろうな」

「さあ……こればかりは生まれてみませんと」

願望も込めて、スルギは男子を産むのだと私は堅く信じて来たのだ。

「私は自分なりに男女の産み分けは出来ているつもりだ。今まで一度も失敗した事は無いぞ」

「……と、申しますと……」

「前世の記憶がどこかに残っていて、どうすれば男が生まれやすくなるか、あるいは女になりやすいか、私なりに十分意識している」

「まあ。そうなのですか……」

初めてスルギだけに打ち明けた私の秘密だ。

「本気で好いているわけでもない者に、世子を生ませる訳にいかん」

スルギはまた、眉間に皺を寄せた。私はスルギを幸せにしたいし、私も一緒に幸せになりたいのだが、なかなか思うに任せない。スルギには官位官職を世話してやる様な身内も居ないし、贅沢な品物を贈っても喜んで貰えそうにない。ただひたすら、時間さえ有れば顔を見に行く、夜は同じ臥所で眠る、それ以外何をどうすれば良いのか、どうすればスルギを心から楽しそうに微笑ませる事が出来るのか……方法が分からない。

「私はスルギだけを想っている……お前だけを愛している。スルギには迷惑なのかも知れんが……」

「迷惑なんて、ただの一度も思った事は御座いません。でも、この子がもし男なら……あまりに多くの事を、生まれてすぐから背負う事になりますね」

「私だつて、そうだった」

「ああ、本当にそうですね。お生まれになつてすぐから、ずっと重い荷物を背負つておいでだったのですものね。今や正邦様はこの国に行く末を、そのお体一つに引き受けておいでなのです」

抱きしめている私の体を、スルギは抱きしめ返してくれた。

「私を……気の毒だとは、思ってくれているのであろう？」

「お力になりたい、いつもそう願っています。そしてその事が、私なりの想いの証でもあります。私は強く正邦様をお慕いしております」

「愛してくれているか？」

「ええ。愛しております。この世のどなたよりも、正邦様を愛して

おります」

「ありがたい。私は小心者だから、スルギが本当に私を愛してくれているかどうか、幾度も幾度も確かめたくなくなってしまっ」

「私が、いけないのですね」

「いや、スルギの言う事は正しいのだ。だが、普通の女なら喜んでくれそうな事も、大して喜んで貰えないし、中殿に据えたいと言え止める様に諫められてしまったから……な」

自分が中殿となれば、不毛な派閥争いに火が着く故、受け入れられない。昨夜スルギは、はっきりそう言ったばかりなのだ。確かに、理屈としては尤もで、実際にはスルギの言うように当分、子供の存在は伏せておかなければいけないだろう。娘であっても危険だが、世子となる息子が生まれたとなれば、なお一層の事慎重に不逞の輩の耳目に触れないようにしなくてはならない。確かに、スルギの言う通りだ。

だが……残念だ。実に残念だ。中殿に一番ふさわしいのはスルギなのに。

新たな命・4

「あつ……」

「どうした？」

「ほら、ここです」

スルギは私の手を取って、自分の腹の上に導いた。

「おお。確かに。足か。随分と腕白だな」

「お転婆な姫が出てきても、あまりがっかりなさないで下さいね」

「何よりもまず、スルギも子も無事で元気で有る事が一番大事だ」

私は結び紐を解いた。雪のように白い乳房が重く実り、乳首の色は葡萄の実を思わせる色合いに変化してきている。どうやら近頃は真っ直ぐ上を向いて横になると、腹の重みで辛いらしい。確かに腹に常に重い荷物を抱え込んでいるのだから、楽ではなからう。

「随分と腹も大きゆうなつたものだな。腰が辛いそうだが、大事無いか？」

私は大きな腹とは対照的な細腰を手でゆっくりと擦りあげる。

「ああ……そうやって頂けると、心地良いです」

急にスルギの呼吸が規則正しいもの変わった。摩ってやったのが心地良かったようだ。もう深い眠りに入っていた。腹も乳房も私の目の前に晒したままなのに、驚くほどの早業だ。こつも無防備にされると、怪しからぬ事もしかねる心理を承知の上ならば、なかなかの策士なのだとも言える。

「だが、この程度の悪戯は構わぬよな？」

乳首を口に含み、今にも弾けそうなほど大きくなった白い腹を撫でてみた。

「…………ッあつ…………正邦さまあ…………」

夢うつつに私の気配は身近に感じているらしい。声は艶めいでいるくせに、微笑みをうつすらと浮かべた寝顔は童女のような感じだった。自分がこのスルギにとって、一番近い存在なのだ。そう実感できる事は、私に穏やかな喜びと安らぎをもたらした様であった。むき出しの腹と乳房を仕舞い、腹を冷やさぬように軽い夏掛けをかけてやると、私もスルギに寄り添って、深い眠りに入った。

その数日後、スルギは元気な王子を無事に出産した。名は成明ソシムヨシとした。そして、スルギの言うとおりに、当分の間、成明ソシムヨシの存在は秘密にされる事になった。

翌日、私は庭園に判内侍府事を呼び寄せ、人払いを命じた。

「不届きものの後釜に誰がなるのか、判内侍府事、気をつけておいて欲しい」

「承りました。お話とは、この事で御座いますか？」

「いや、その…………もう承知しているのではないか？」

判内侍府事にしては珍しい柔らかい笑みを浮かべた。

「王子様の御誕生、誠におめでとうございます」

「うん。さすがに耳が早い」

「昨日の内に大妃様付きの呉尚宮から伺いました」

「秘密のはずだが宮中でどれ程の人数が承知しているのであろうな

「？」

「中殿様や他の御側室方の事でございますか？」

「ああ……あれらの実家が怪しからぬ事をあれこれ始めるのではないかと、気がかりでならん」

「根も葉もない別の噂を流しましたので、今はそちらに皆気を取られているはずですが、いつまで持ちますか……悪気は無くとも下仕えや女官達のふとした一言から悟られる恐れは十分に御座います」

「誰も男子を生めぬので、索性正しく年若く健康な美女を選び、側室に召しだす予定だと言う噂か」

「はい、さようでございます」

「その噂ほどの程度信じられているのだ？」

「少なくとも、中殿様と全ての御側室方から私にお尋ねが御座います程度には」

「どう答えておいたのだ？」

「そのような事が御座いましたら、内侍府としては王様の御意思に従うばかりだと、申し上げておきました」

「側室達も中殿も寡人には何も尋ねない。だが、皆それぞれ翁主や傍仕えの者たちに噂に関してあれこれ言わせてみて、寡人の目の前では『出すぎた事を申すな』とか言いながら叱り付けて見せる。寡人は逆にどう思つか聞くだけだがな。すると皆『王家の御繁栄のために結構な事かと存じます』と判で押したように同じ答えが返ってくる。つまらん……あれらも好き好んでつまらん事ばかり言っているわけでは無かるうがな」

判内侍府事はあれこれ考えているだろうに、じつと無言で私の言葉を待っている。

「あれは後宮に居たく無さそうだ。表から王子を支えた方が良くとも言いおつた……中殿の据え換えは……」

判内侍府事の視線は鋭くなった。

「朝廷が乱れましような」

「そうよな。あれもそう言うのだ」

やはり、あきらめるしかないのだ。私はため息をついた。

布石を打つ・1

スルギの出産以前に、大殿に配属されていた盗み聞きの常習犯の尚宮は、私が直接に宮中から立ち去るように命じた。私の存命中は都に立ち入る事も禁じた。纏まった金品を与え、出身地に戻るように申し付けた。そして表向きは病による宿下がり、と言いつくろつてやった。

「不届き者に余りにお慈悲をかけておやりになるのも如何なものでしょうか」

判内侍府事は良い顔をしなかったが、不届き者は多くの身寄りのものを宮中に呼び込んでおり、恨みを買わない方が賢いというスルギの意見に従う事にした。

「銀と絹は『あれ』の心遣いだ」と私が言葉を添えると不届き者はハツとしたようだ。「宮中で見聞きいたしました事を外で漏らすような事は、終生いたしません」と殊勝な様子で言つてのけた。だが……本気にして良いものだろうか？

近いうちにスルギが言うように盗み聞き防止のために、控えの間を作り、私の居室の出入り口の前に立つ人間は最も信頼できる大殿内官だけにする、などの実効的な方法を取る必要が有るだろう。

今の私には朝廷の『功臣』どもを追い払うどころか、中殿を据え替える力すらも無い。ようやく盗み聞きする手先を排除できる目途が立っただけだ。情け無い。悔しい。折角スルギが成明という息子を産んでくれたのに、スルギこそが真の私の妻というべき存在なのに、どうやって報いたら良いのだろう。

スルギは何か物を欲しがったりしない。だが、私の気が済まない。

今の私なりに、スルギの役に立つ事が何か出来ないだろうか？ 何か与えた事で逆に危険が及ぶのでは本末転倒だし、出来る事ならスルギが身を守るのに役立つ物……そんな物が何かを考えこむ。判内侍府事はとっくの昔に私の想いを見越していたようだ。

「大状元にお邸を、宮中のすぐ隣に賜りましてはいかがでしょう？」
「おお、その手が有ったな。だが、新たに邸を立てるには良い資材も職人も押さえて置かねばいかな。あまりその、工曹ではそうした物をすぐには用立て出来にくいだろう。だからと言って礼曹にはこの話は出来んし……」

工曹はあくまでも公共性の高い建物・道路などの普請が本来の仕事だ。王室の事、王の個人的な生活に関わる部分は本来は礼曹の担当なのだが、その礼曹の長官である判書を沈中殿の長兄である切れ者の沈知宣が務めているのだ。権力を握る右議政・沈守己の最も信頼する息子であり、取り巻きの切り崩しも容易ではない。礼曹判書の権限で横槍を入れられては厄介だ。スルギの高貴すぎる素性や私との関係については可能な限り隠すべきだろうし、何よりスルギが王子を産んだと感づかれては危険だ。

「既に、土地以外のものはあらかじめ用意して御座います。さすがに内部の調度や、あの方が必要となさる書物やら道具類までは無理ですが」

なんとまあ、準備もしていたのか。つくづく用意周到な奴だ。私としては宮中と目と鼻の先、できれば袞龍袍のまままで思いついたらすぐに顔を出せる場所に邸を構えさせたい。

判内侍府事が管理しやすく、医療の中心である内医院にも近い方が良い。
ネウイウオン

「先々代様の頃までは舞樂を催していた空き地はどうだろうか？ 内侍府が今は管理しているのではないか？」

「さようでございます。ただいまは内侍府監察部の武芸の修練に使っております」

「内医院が近いな」

「歴代の東宮様の為の御学問所も、すぐ隣です」

「おお、そつだな、そこで決まりだ」

スルギは喜んでくれるだろうか？ 実はそれが何よりも気になる私であった。

布石を打つ・2

「内侍府が管轄している武芸の修練場に時折使う空き地が有ろう。あそこなら、私も安心だし、通いやすい」

「まあ、通ってくださいますの？」

「ああ。一人寝は辛いし、成明の顔を毎日見たい……だがこれは……私のわがままかもしれない」

「いえ、私も、そしてきつと王子も、共に正邦様の御様子を身近に感じて、暮らして行きたいのです。ただ……」

「ただ、何だ？」

「ただ、後宮の方々の手前、何か不都合がおこらないかと気がかりなだけです」

「本来スルギが遠慮する必要は無いような連中だ。当分は判内侍府事が目くらましに使えそうな噂を流させるようだし、どうにか切り抜けられるだろう」

「どのような噂を流すのですか？」

「誰も男子を生めぬので、素性正しく年若く健康な美女を選び、側室に召しだす予定だと言う噂だ」

「本当にどなたかお召しになりますの？」

明らかに悲しそうな表情になったのが、私としては意外だった。

「まさか。だが、私の事は気にはしてくれているのだな。少しは妬いてくれたか？」

「……私は……焼き餅焼きです」

見ると長いまつ毛が伏せられ、スルギにしては珍しく声の響きが至極感情的だった。私としては形ばかりだという意識が強いが、それでも確かに後宮のあれたちは「王の女」なのだ。

「別の女を迎え入れるなど、全く考えても居ない。だが、スルギと出会う以前に、大王大妃様がそのようにおっしゃった時期があったな」

抱き寄せて背中を撫で、額に口づけると気分は落ち着いたようだった。

「でも……噂の目くらましは、ごくわずかの期間しか効かないのではないでしょうか？」

「だが、邸を作り、スルギと成明を密かに移す時間ぐらいは稼げるだろう」

「無事に邸に移ったとして、この子が赤子のうちはともかく、立って歩き言葉を話すようになれば、皆の目から隠すのは無理かと思えます」

「確かにいつまでも隠す事などできはしない。いや、むしろそのころになれば、成明が世継にふさわしい王子だと認めさせると言う方策を取る事になる」

「なるほど。ですが世子の母が私で、大丈夫でしょうか？」

誰よりも愛しく、本来は一番高貴な身分のスルギにこんな事を言わせたくなかった。

「成明が世子となるのはどの道、動かしようが無い。それにスルギの血筋は世子たる王子の生母として、誰も文句がつけようが無いはずなのだ。中殿を廃妃に出来なくても、同格かそれ以上の資格を新たにもらう後宮での位を定めるのは、さほど難しくはなからう……が、後宮に入るのはいやか？」

「表だって反対できないからと言っても、実家の権勢を背負っておいでの方々との間で、水面下での深刻な争いが興るのは避けられない」

いでしよう。その点は懐妊中と大して条件は違わないかと……やはり、不毛な派閥争いの火付け役になるのは嫌です」

「わかった。なあ、スルギ、私に今すぐできる事は何か無いか？」

スルギはじつと私の顔を見た。

「すぐ出来る事がどうかわかりませんが、私がやろうと考えている租税や貢納の割り当ての見直し、不当徴税の禁止、凶作の対策といったあたりで、理屈に合わない変な横槍を入れられたくありません」

その日の食事にも事欠く貧しい民を一人でも多く救うために、スルギは力を尽くして居るのだ。当然の希望だと言えよう。

「なるほどな。となると戸曹判書がスルギに好意的な人物でなければ不都合だな。……うむ。ならば近い内に現職の者を別の横並びの官職に移すことにする。スルギの建策に積極的に賛同しそうな若い人材を三司・六曹を中心に配置しようと努めているのだ。その……既得権益を守ろうとする連中の反発を呼ばずに、じわじわと進めたいと思っているのだが、なかなか難しい」

「私は嫌われている、あるいは警戒されているかもしれないね。」

大王大妃様や大妃様にこびへつらう宦官に見えるようですから」

「その点は、あまり案じていない。実際のスルギに接すればそのような人間ではないと、見る目の有る者ならわかるはずだからな」

「では、何が一番お困りですか？」

「有能で、なおかつ既得権益を持つ爺どもに毅然として正論を主張できる気概の有る人物が少ないのだ」

「なるほど。そうした人材はお目に留まりにくい様な部署に追いやられている可能性も高いでしょうしね」

大司憲の林誠哲を昇進させて戸曹判書にできれば良いのだが、旨味の多い不正もしやすい部署だけに、なかなか現職者を他に移すのは難しい。

スルギと共寝した後、常の様に朝食を食べながら、私は難しい顔をしていたようだ。

布石を打つ・3

食事を終えて給仕の女官たちが退席すると、すぐに判内侍府事に声をかけられた。

「いかが遊ばしましたか？ あの方と何か気まずい事でも御座いましたのか？」

「いや。そうではないが、戸曹の人事でなあ……入れ替えたいが……戸曹判書の家で何やらもめ事が有り、人が亡くなったようです。それを沈家が手を貸して揉み消しましたとか」

「揉み消したのか。誰が亡くなったのだ？」
「御正室です。寵愛している側室は沈家の先代が妓生に産ませた娘だとか」

「つまり、その側室は右議政の異母妹なのだな？」

「はい。沈家が関与して、争いが余計に深刻になったようです」

「うまくすれば、スルギの望みを叶えてやれそうだが、下手をする
と厄介だな。だが……」

「国法に照らし、是々非々で臨まれれば、誰も否やは申せませまい」
「それにしても、当事者がひた隠しにしている不祥事をよくも知り
得たものだな」

「はあ。これでも、それなりに色々網を張っておりますので」

「正室はどここの家の出かな？」

「洪家の出かと。平市署提調を務める洪敬徳様と殺害された御正室
は父君が御兄弟とか」

「ああ、思い出したぞ。正室は嫁入りして翌年に息子を産んだが、
幼い内に病で亡くしたのであつたな」

それ以降正室は子室に恵まれなかつたはずだ。それから三日ばかりかけて内密に情報の裏を取った。やはり噂は真実である可能性が

高い。

改めて洪敬徳を呼び、どう考えているのか話を聞いた。

「庭の敷石でしたたかに顔を打ったとかで、死に顔も見せてもらってはおりません。変だとは思っておりましたが、まさか毒殺とは……」

調査の結果を見て絶句していた。だが、事を表ざたにしたくは無さそうだった。

「その……娘の立場を思いますと、あまり事を荒立てたくはないとつい思うのです。お許しください」

娘は本家の当主である右議政からすると分家筋ではあるが、幼馴染の沈家の男と夫婦となり、まずまずの官位を得て子供たちにも恵まれ、仲睦まじく穏やかに暮らしているのだと言う。

「事を荒立てたくはないか。ふむ」

洪敬徳を退出させた後、どうすべきか考える。判内侍府事なら、沈家を追い落とす好機と捉えるのだろうか。

「何事も思し召しのままになさるべきかと」

機嫌が良いのか悪いのか、いまだに良くわからないこの食べぬ老人の顔を見て、また考え込んでしまった。

私は右議政・沈守己と平市署提調・洪敬徳を大殿に呼んだ。

「現在の戸曹判書を解任したい」

私は何も細かい話はしないで、それだけをまっすぐ切り出した。スルギの話は全く匂わせない方が良く感じたのだ。二人は深々と礼をした。だが無言だ。次を続けろと言う事らしい。

「ついでには、この洪敬徳を新たに任命したいと思う。右相ウサンどう思う

「？」

「すでに従一品の位をお持ちの方には申し訳ない様な気も致しますが、六曹は国政の要ですからな。まことに結構かと存じます」

平市署提調は従一品相当の官職だ。戸曹判書は正二品だが国政の中枢に食い込んだ役職だ。まあ、横滑りの人事と言えよう。こうした場合、位はそのまま官職だけ移動する形を取るものだが。

「提調はどうだ」

「はっ、心して務めさせていただきます」

私が一切現職者の不行き届きに関して言明しなかつた事を、右議政は私の『擦り寄り』と取つたらしい。宮中でも臍履の妓房でも探りを入れさせたが、沈家と姻戚関係が有る人物で、事件の被害者の近い身内を後任に据えた事で、総て円満に片付く。そう認識されたようだ。洪敬徳自身が穏やかな人格者であるのも幸いした。

どうやらスルギのこれからを考えて断行した人事だとは、悟られずに済んだようだ。

「なあ、洪敬徳ならば悪くあるまい。早くからスルギの才覚と手腕を高く評価もしていたのだからな」

「はい。ありがとうございます」

スルギは本当にホツとしたような顔になってくれたので、苦労した甲斐が有った。

布石を打つ・4

スルギのための邸がもうすぐ完成する。高位の内侍は養子を迎え、財産をその者に継承させる場合が多いが、スルギはそんな事は無論しない。私が「一代限り」と言う事を強調したのが良かったのだらう。

「病後の金大状元の為の住まいを作る」と言う話も、思いの他、廷臣たちの反対は無かった。

今のスルギは内侍府尚薬職の客分として籍を置いている形だが、医科の第一席合格以来、内医院との連絡も緊密に取るようになった。惠民署での貧しい庶民のための医療活動も自ら積極的に行い、身分の上下にはまるでこだわらず、優れた学識とひたすら患者のために考えるその姿勢で、たちまちの内に内医院の内にも支持者を多数作り上げた。

「時々、妓房で飲もうと誘われますが『^{「シヤ}鼓子には用無しの場合だよ』
と言って断ります。断っても銀の一つかみも持たせるので、そうそう悪口も言われずに済むでしょう」

鼓子^{「シヤ}とは男の物が不全なものを指す蔑称だ。陰で宦官の悪口を言うときなどに「鼓子のくせに」などと言う訳だが、その言葉を自分であっさり口にして、すつと銀を出すのだから、確かに余り悪くは言わないだろう。

「医師としての技量を上げるためには、沢山の症例にあたりませんと」

余りに熱心で体を壊しかねないと祖母や大妃様が心配なさるので、三日に一度は惠民署の激務を休むように命じている。それでも今度は宮中の診療を希望する内侍見習いや女官見習いたちがかなりの数

尚薬職に尋ねてくるので、ゆつくり休むわけには行かないようだ。

「伝染病対策のための東西の活人署ファリンをもっと、普段も活用するべきですね」

「どうやら貧民に粥を施す活動はこのところサツパリ行われていないらしい。おかしな話だ。」

「どこに穀物が消えちゃうんでしょうか？」

「誰かが取り込んでいるな。うむ。調べさせよう」

スルギの提案で活人署での医師の診療を毎日行う事にした。正八品の賛奉の医官達は業務は過酷であるのに余りに薄給だと聞いたので、米や麦、冬には炭を支給するように命じた。公に報酬を上げるとなると色々揉めるので王の個人的な褒美という形を取った。判内侍府事が直接届けるので、まずは安心だ。

活人署ファリンの穀物類は沈家の者が取り込んでいた。沈守己一人を呼んで「罪滅ぼしに粥の施しを真面目にやれば許してやろう」と申し渡しておく。娘の中殿が他の側室と揉めてばかりなのも注意しておいた。

「公にするつもりは無いが、貧しい民から更に搾り取るようなまねはするでない。中殿がまたえらく贅沢な髪飾りをつけておったが、あれ一つで活人署の粥ぐらい賄えそうだがの」

「主上殿下、恐れ多い事でございます」

「国庫も随分と厳しいのだ。髪飾りにする資金が有るなら、本来の税を正しく納めてほしいものだ」

「まさかそのような事は」

「知らぬと言つか。ほう、ならばそう言う事にしておじよ」

スルギにその話をすると、険しい表情になった。

「隠田の調査などに支障が出ませんでしょうか？ 父親はともかく、あの沈家の長男は刺激すると厄介だと思つのです」

新たに出そうとしている献策書に横やりが入るのではないかと、恐れているようだった。確かに長男・知宣は大変な切れ者だ。

「ならば、スルギが得意な資金計画をはつきり明示した献策書にしてみたらどうだ？ 他のどんぶり勘定で適当にやっている連中に対する牽制にもなるう」

「承知いたしました。やってみます」

数日後に甘藷の栽培法をはじめとする新しい農法を取り入れた地方の建て直しに対する献策がスルギから提出された。その改革を実行するのに、どの程度の予算が必要かと言ったきわめて具体的な内容が書かれているのが皆の目を惹いたようだった。

「献策書と言うよりは、商人の帳簿でも見せられているような気がします」

「何に幾らかかると言う点までしつかり固まっているのは、それだけ本人が実効性に自信があるからでしょうな」

「机上の空論では無い、と言う事なんでしょう」

「だが、その、甘藷なるもの、真に食べられますものですか」

「我が昌嬪様のおっしゃるには、その甘藷なるもので作った菓子がこのほか美味であつたそうですぞ」

「ほお……そう言えば、中殿様も良い味だつたとおおせでしたな」

別に彼ら高官が自腹を切るわけでもなく、宮中の勢力争いとも関係無い事なので、金大状元のお手並み拝見と言う所なのだろう。

こうして、スルギの建策はどうか実行できるめどが立ったのだつた。

布石を打つ・5

私は志が高い若手の官僚を一人でも多く取り立てようと努めていた。韓明文もそうした先が楽しみな若者の一人だ。今でこそ義禁府ハン・ミンムン都事フトサと言う軽い役目だが、そのうち折を見てジワジワと引き上げてやるうと考えている。

父親の応善ウンソンは世子の護衛にあたる世子翊衛司セジャイギサの右洗馬ウセマという軽い身分の武官で、母親は女官だった。応善は名家の庶子で、庶子であるがために文官登用試験を受けられなかったのだ。本来なら武官と女官は思いあう事も、ましてや夫婦になるなど許されない立場であったのだが、私が取り計らってやり、宮中から駆け落ちさせてやった。士大夫ではなくただの良民の夫婦としてだが、戸籍と田畑も都合してやった。その落ち着き先の農村で韓明文は無事に産まれ、育ったのだ。賢い子供であるらしいと知った私は時折書物を送り、隠遁した学者への紹介状などもこっそり送ってやった。普通の士大夫の子供は書堂に通い、千字文やら四書やら学び、将来の科挙受験へと備えるものだ。農民となった夫婦には書堂に息子を通わせる余裕も無いし、無理に通わせても士大夫の子供らにいじめられるのが才子であつただらう。

韓明文の学問の師匠はいわゆるソンビと呼ばれる在野の学者で、農民と変わらぬ極めて質素な暮らしぶりを亡くなるまで貫いた人物だ。まあ、スルギあたりには言わせると「実生活には役に立たない観念をこね回す学問」だけの人間と言うことになるが、高潔な人柄であつたのは確かだ。

「先生と畑を共に耕しながら四書五経を暗唱し、漢詩を吟ずると言う具合でした」

そんな思い出話を語った韓明文の表情を見ると、よほど良い師匠

だったのだらうと思われる。おかげで、スルギが状元及第した殿試では第三位の探花で及第した。内侍府所属で祖母や大妃様に可愛がられているスルギに対しては妙な敵愾心を抱いている節があるが、あまり気にはしていなかった。というのも、これまで三司の口の悪い拗ね者達の中にも、スルギはちゃんと支持者を作ってきているからだ。

私は韓明文に密命を与えていた。暗行御史として一度事にあたらせてみたが、なかなかに悪くないと感じた。父親譲りの剣や弓の腕前もなかなかの物で、胆力も有る。その為、沈家中枢の人物の信頼を得て、内偵にあたるように命じたのだ。

右議政の長男・知宣は現在、礼曹判書と義禁府の長官・判義禁府フサ事を兼任している。私としては義禁府から知宣を外したいわけで、その意向も踏まえて事にあたるように命じた。

それが、なんとまあ……

先ほど、私はスルギと大木の木陰でつかの間の逢瀬を楽しんでいた。薬草畑の手入れに励むスルギには迷惑だろうが、私の寂しい心細い気分を癒せるのは自分だけだと知っているからだろう。人目を避ければ優しく抱きしめ返してもくれるし、接吻にも情熱的に応じてくれる。質素な内侍の官服で化粧つ気抜きでも、スルギはどんな後宮の女より美しい。

「こうすれば、だれにも見えない筈だ。違うか？」

「あ、あの、まだ」

木陰で人目を避け、私が袖の中に抱き込んだのに、スルギは何かに気を取られている感じで、何時もより素っ気無かった。

「ええい、だめだ」

私は焦れてきて、強引に唇を奪った。と、その瞬間、重い音がした。何かが落下したのだ。

見覚えのある青年が呻いていた。

「韓探花！」

スルギの呼びかけに、はっとした。沈知宣を見張れと命じたのに、逆に私やスルギを見張るとはけしからん。

「韓都事！」

「この方、只今はどちらの都事ですか？」

官服ではなく、まるで商人か農民というなりなのだ。市中ならともかく、宮中で見とがめられたら厄介なはずだが、どういいうつもりだろうか？ 忍びの名人のこの男が樹から落ちたのは、スルギのつぶてを食らったせいらしい。

「義禁府だ。なぜ、そちがここに居る、寡人は謀反の恐れがある危険人物を秘密裏に見張れと申しつけたのだぞ。スルギを監視するなど、見当違いも甚だしい！お前は王命より、爺どもの命令に従うのか？」

私は逢瀬を邪魔されたせいもあって、頭に血が上り気味で、気が付くと襟を掴んで詰問していた。

「上官から何か言い含められたのではないですか？」

事と次第では許せない。私は脚を抑えて呻いている韓明文を睨みつけた。

布石を打つ・6

「そのう、大状元には重大な秘密がお有りだと判義禁府事は見てお
りまして、その内偵役に小臣を選んだのです。上手く運べば主上殿
下が御申しつけになったように沈家の信頼も得られると思ひまして
それに、小臣自身もあの方のその、色々非凡な状況には興味があり
ましたので引き受けました」

出来たばかりのスルギの邸でケガの手当てを終えた韓明文に事情
を問いただすと、こんな答えが返ってきた。

「それにしても、大状元は学問だけでなく武術の方も大変なもので
すな。今朝ほどはこっさり勇ましい御様子を拝見しました」

「何が有ったのだ？」

「あの、沈徳宣殿を足蹴になさっております、徳宣殿も最初は怒
鳴り声を上げていましたが、最後は泣いて大状元に許しを乞うてお
りました」

「何やら、面白そうな話だな。もそつと詳しく話を聞かせよ」

右議政の次男・沈徳宣は文科殿試の成績は上位十位以内だったく
せに、官職にも就かず遊び歩いている。一度史官か何かになったも
の勤務態度があまりにもひどく罷免された。それでも妹の中殿の
所^{スフケアン}に出入りする承候官としての資格は有るのだし、親の威光も有つ
て食うには困らない。風流貴公子を気取って、あちこちの女を引っ
掛けているらしい。確かに美形だが、いけ好かない男だ。

ただ、中殿が兄弟の中で次兄である徳宣だけをひどく嫌っている。
王である私には悟らせまいとしているらしいが中殿は隠し事が下手
なので、丸わかりだ。女たらしと言われるような不品行を憎んでの
事……とも思えない。理由がわからないだけにずっと以前から気に

なっているのだ。

「覚えたか、沈徳宣。これはお前の子を身籠ったまま井戸に身を投げた下仕えの分だ。母と子二人分だぞ、と語気厳しくおっしゃいましてな、二度ばかり強烈な蹴りを入られました。更に、ええつと、そしてこれがお前に身を汚されたせいで、自害なさる羽目に陥った姫君の分だ、とおっしゃって一蹴り、後は……：そうそう、さらにこれが、お前のせいで相愛の男との縁が断ち切れてしまった商人の娘の分だ。ふん。名を上げずとも、全て身に覚えがあるう、とおっしゃってまた一蹴り、そのような具合でした」

「ほほう」

「その後、あの貴公子殿が地面で身を縮めて、涙を流し呻きながら大状元に許しを乞うておりました」

「ほう、なるほど。井戸で死んでおったと言う女は沈徳宣の子を孕んでいたのか。それが誠なら、奴めを罪に問えぬ事も無いが……：許しを乞う言葉がどこまで本気であるのかな……：」

「そう言えば最後は、誠に反省したのならこれから一年様子を見てやるう。身分高き家に才能を持って生まれたものにふさわしい責任の果たし方と言うものがあるはずだからな。世のため人のために身を粉にして働いても、お前は償いきれないほどの罪を犯したのだぞ！ と仰いましたな。その姿も決まってきました」

「スルギは優雅な動きも、さわやかな動きも自在故な。いやあ、見たかったなあ、その雄姿を」

私がうつとりしてしまったのを、韓明文は心配そうに横目でちらちら見ている。どうやら私が衆道に走ったと深刻に案じているらしい。今私が抱いている成明の顔を見ただろうに、こうした方面は鈍い男のようだ。

「韓都事、王子の母は誰だと思っているのだ？」

「いや、その、見当もつきません」

「おお、そうか。それで先ほどは訳が分からないというか、信じたくないというか、困ったような顔になったのか」

「……え？ もしや。いや、まさか」

「そのまさかかも知れんぞ」

「大状元は、女性ですか？」

「そうだ。そして、この王子・成明の母だ」

成明は韓明文の驚きをよそに、私の腕の中でスヤスヤ眠っている。唐衣に着替えたスルギを見た韓明文の顔は、見ものだった。呆然としていたのだ。

「余り不躰に見るではないぞ」

私がそう言うと、スルギはクスクスと笑った。

布石を打つ・7

韓明文は唐衣姿のスルギが部屋に入ってから、まるで石のように固まっている。

「どこまでお話なさったのです？」

「大状元はまことは女だと、教えた。無論一切他言無用だがな」

「韓都事が口を滑らせたら、王子も私も身の破滅ですね」

スルギが冗談めかして言うと、韓明文はひどく緊張した面持ちになったかと思うと平伏した。

「小臣は絶対に、絶対に秘密を守ります。守れそうに無ければ、命を絶ちます」

ほとんど悲鳴のようだった。なかなか面白い男だ。

スルギはなだめるように救荒作物としての甘藷と玉蜀黍の有用性を説明しながら、「すういーとぼてと」と「ぽっぷこーん」を温かい茶と一緒にすすめた。

確かにどちらも美味くて私も好きだが、韓明文は王の前と言う事もすっかり忘れて夢中で食べていた。朝からろくに食べていなかったらしい。「うまい、うまい」と気持ちが良いほどの勢いで全て平らげた。

「救荒作物と言うには、美味過ぎる！ あなたは凄い人だ大状元」

唸るようにそう言うってから、救荒作物としての甘藷と玉蜀黍を早く導入すべきだと言う話を始めたが、スルギが王子の母とばれると大変だという話に自然と戻った。

「私の存在が知られると、後宮が荒れるでしょうね」

「朝廷も大変でしょうなあ……」

「だから、秘密を守れと言っている」

「ですが恐れながら主上殿下、ただお一人の王子様ですから……その、御側室腹でも世子様となられるべき方では御座いませんか？」
「これは側室などに出来ん。高貴の血筋故、後宮での位は特に授けない」

スルギは王族で、中殿・大妃様・大王大妃様に準じる扱いをするべき存在なのだ。

「ですが中殿様がおいでになります」

「これの方が中殿よりずっと格上の王族なのだ。スルギの母君は大妃様の同腹の妹君だ。そのお血筋だけでも今の朝廷では扱いがたいのだが……父君のお血筋がな」

二代目様の東宮だった方は弟君に東宮の位をお譲りになった。父王の本当の御希望をかなえるために、お気持ちを察知して自発的になさった事だと伝わっている。愉快な方であったようで、巷に色々と面白い逸話を残しておいでだが、一生三代目国王となられた弟君の廷臣たちから「潜在的脅威」として監視をお受けになった。しかし、三代目様御自身は非常に義理を感じておられたようだ。兄君を殺害する事も兄君の御子達を殺害する事も廷臣たちに堅く堅く禁じ、兄君が七十過ぎて亡くなられた後は「もうすぐ自分もあの世に行くのだし、あの世では兄弟睦まじく過ごすつもりだから丁寧にお祀りするよう」とお命じになり、国王以外の王族では最高の格付けで兄君の御霊をお祀りする事になった。今もなお三代目様の遺言通り、その方は王室の御霊を祭る「祠堂」に鄭重に祀られている。

その最高の格付けの王族の直系嫡流の子孫である方が、スルギの父君なのだ。

「と、言う事は、大状元の父君様は、二代目様の御嫡子の御嫡流。つまり……」

「これは本家の嫡出の姫と言う事だ」

二代目様は偉大な聖君であらせられる。スルギは由緒正しいその聖君の子孫と言う訳だ。

「と言うことは、あの、王様の秘密の文箱の中身だと噂される内容は……」

「三代目様の御遺言か。実はなこうした内容なのだ」

「わ、私などが承って良い事でしょうか？」

韓明文はあたふたしている。

「お前には将来、成明の傍で頑張って貰うつもりだから、良いのだ。ああ、無論これも他言無用だぞ」

五代目以降になつて自分の子孫が愚かで不出来な王なら、二代目様の東宮であつた方の御血筋に王位を返せ。娘しか居なければ、中殿とし、その子に王位を継がせよ。それが適わない事情が有る場合は然るべき者を夫に迎えさせ、家を継がせ、子孫を王族の筆頭とせよ。ざつとまあ、そのような内容だが……

「ならば大状元がどう考えても中殿となられるべきですが……」
「でも、そんな事をする、血の雨が降るって思うでしょ？」

スルギのその言葉に、韓明文は難しい顔で頷いた。

韓明文の忍びの術は盗人から教わったらしい。両親のもとに身を寄せ下男のような事をしていた男が、かつては大盗人だったそうだ。七歳のころその『爺や』の異様な身の軽さに気が付き、十日がかりで説き伏せ、悪事には決して用いないという誓いを立てて盗人の秘術を習いはじめ、ついに修得したと聞いた。

かつてある地方の牧使モクサの不正を暴いた密告状が、宮中のあちこちに無記名の矢文の形で打ちこまれた事件が有った。私は当時まだ世子であったが、宮中が大騒ぎになったので記憶している。無記名の密告は無視すると言うのが、一応宮中での決まりではあったが、文章の措辞・筆跡が整っていたので朝廷の者たちは目を留め、朝議でも話題となった。結果、特命の監察官が遣わされ、密告状に挙げられていた通りの事実が確認された。問題の牧使は即座に解任となり死罪に処せられた。次に赴任した牧使は、特に優れた人物が選ばれた。おかげでその地方の民心も落ち着いたと言う。

つい最近韓明文本人に告白されて驚いたのだが、なんとその密告状を書き上げたのは当時十歳にも満たない韓明文で、爺やと二人で決死の覚悟で夜中に宮殿の屋根に登り、矢文にして打ち込んだと言う。事が明るみに出れば、不正を正したとはいえ、間違いなく反逆罪に問われ死罪だろう。

なんでも都から赴任したてのその牧使が、母親を側女にしようとして父親の応善を陥れようと計ったのが、事の発端らしい。父親を誣告するために書かれた文を盗んで焼いただけでは手ぬるく、先が不安だと感じたのだろう。その問題の牧使は他にも色々不正を行っていたのだ。

牧使と言えば外職つまり地方官としてはかなりの高官だ。単独での王への面会権も無い身分ではあるが、村々の農民が目にしうる最

も高位の官僚ではあろう。それだけに人物の良し悪しが地域の住民の暮らしを大きく左右するのも確かなのだ。

私は韓明文にスルギの秘密をすっかり教えてしまったわけだが、裏切らないと信じている。幼いころからあれの両親は、私の忠臣となるように申し聞かせながら育てたそうだ。父親の応善は善良な、そして不器用な男だった。さればこそ彼の熱い視線の先に、一人の女官が居る事に私が気づくことが出来たのだらう。

その話をスルギにすると「随分と大人びたお子様だったのですね」と言われたが、宮中のような所で育つと他人の視線の意味合いにも敏感になるものだ。

韓明文は一度、暗行御使としての任務を無事にこなした実績も有る。だが、彼一人ではいかにも手が足りない。他にも優れた若手が欲しいが、誰にでも相談できる事でもない。優れていても右議政の子分では使えないからだ。

洪敬徳を見かけたので、相談すると彼の従弟の息子・ホン・ソンド洪善道を推薦された。

「おお、記憶にあるぞ。『馬馬鹿』だと女官達が噂していたが、馬には詳しいようだな」

「はあ。あの善道が生まれる時母親が産気づいたのが馬小屋の前だったそうで、その所為と言う訳でも無いでしょうが、幼いころから馬が好きで好きでたまりませんでしたな。馬がどの程度主人に心服しているかで、その人となりかわるとか、馬にも馬鹿にされる人間とはつきあう価値も無いとか、勝手なようですが、それなりに良い所を突いているのやもしれません」

「騎射の腕前は並みの武官より上ではないかとも聞くな」

「確かに。馬が折角良い具合に走ってくれるのだから、まじめにやらねば馬に悪いから、などという言い草がまた『馬馬鹿』と言われるゆえんでしょう」

「父親は漢城府判尹であつたな」

「さようで。あちらの方がむしろ本家なのですが、仕事が終わればまっすぐ家へ戻り、あまり人付き合いません方ですので、色々な話が近頃は小臣の方に持ち込まれて困ります」

「ホン・インキョム洪仁謙は漢城府勤め一筋であるとは知っていたが、そうか、そうした人柄か」

「愛妻家でしたな。病死しました先妻とも夫婦仲は良かったですが、後妻は先妻の従妹でしたか、かなり歳の差が有るはずです」

「子だくさんであつたな」

「いつも明るいにぎやかな家ですから、真つ直ぐ帰る従弟の気持もわかります」

名家で歴代高官を輩出してきた家ながら、多くの兄弟姉妹と仲良く寄り添い、質素なつましい暮らしぶりだと言つ。愛妻家だと言つ父親の穏やかな風貌を思い返し、洪善道という若者を私はしっかりと意識した。

「武科殿試、受けなくちゃいけませんか？」

「うん。その方が女だとばれにくい」

「そうでしょうか？ 練習しているうちにバレちゃったりしても、知りませんよ」

「バレたら、お前は後宮に入れる。中殿と同格の建物を作り、世子の生母として皆に披露する」

「絶対バレますって……ってどうかバレて欲しいのですか？」

「いや、そうではない。表で頑張るスルギを見るのは、好きだ。時々後宮に閉じ込めなくなるがな。まあ、私も気持ちは揺れるのだが、表の方でお前の手腕が欲しいのも事実だ」

スルギは戸惑っているようだ。私が勝手なわがままを言うと思っているのかもしれない。武官たちには能力の高さを証明できるし、後宮の女たちは、武科殿試に受かるような者は女だと思わない筈だ……と説明したがスルギは納得出来ないようだった。

「あの沈徳宣に以前言われてしまいましたよ。『女の匂いがする』って。騎撃毬の場合、結構体が近づくとじゃないですか。皆、変に思いませんかね」

「極端な話、誰もお前が女だと公言しなければ十分だ。勘が鋭いものは気が付くだろうが、王である私の扱いを見ていたら、うかつな事は言うまい。騎撃毬を宮中で練習する連中は、私への忠誠心は強い筈だから」

内侍府の者達とスルギは三日に一度程度武科殿試に向けた練習をするが、馬に乗って球を打つ騎撃毬だけは内侍府には適切な練習相手が居ない。それに馬の問題も有る。

「私が、お前の勇ましい艶姿が見たいのだ。お願いだ、見せてくれないか？」

スルギは『お願い』されると弱い。

「一つ心配なのは……お前に惚れてしまう武官が続出するだろうと言う事だけだ」

だが、少し気になる事は有った。

表向きは不味い事も無いのだが、沈知宣が正式に韓明文を議政府の人員として推薦して来た。現職の義禁府の都事と兼職の形で議政府の公事官にすべきだと言う内容だった。

これは、沈知宣が判書を務める礼曹に引き取る気はないと言う遠回しな意思表示かも知れない。

礼曹は王室の日常の事と儀礼が主な担当だ。中殿の身内として何がしか後ろ暗い工作に礼曹の連中を使っていると思われるのだが……その汚れ仕事に韓明文を使う気は無いと言う事だろう。後ろ暗い仕事に、真っ直ぐな性分が向かないからなのか、私の密命を受けている事を薄々承知しているからなのか、その両方なのか、どうもはつきりしない。だが、良からう。この際、身分と権限を引き上げておくのも悪く無からうと思った。

「沈知宣がお前を議政府の公事官にしたいと上奏文を送ってきたから、領議政と左右議政を呼んで『韓明文は温厚な中にも毅然とした所があり、将来楽しみだ。従六品・公事官では現職と横並びの兼職に過ぎないから、せつかくなら正五品・検詳としよう』と言って認めさせた。まあ、ついでに右議政に『知宣は人を見る目がある』と褒めておいたぞ。多分、お前の上司の機嫌は悪くなくなる」

スルギの邸でそう伝えると、韓明文は素直に喜んでいいのだろうか

かといった複雑な表情をした。もう、すっかりスルギの邸もなじみの場所になったようだ。逆に言えば、沈家側から見れば寝返りを警戒すべき人間になったとも言える。もう寝返ったと思われるのかも知れない。

韓明文自身も、沈知宣が自分を警戒して遠ざけたのだと感じたようだ。役目を果たせずにいると言う意味合いの詫びる言葉を口にしたので、私はそれならそれで、やり方も有ると伝え、焦るなども言っておく。

議政府・検詳の定員は一名だけだ。全ての役所の目付け役と言った意味合いが大きく、上官たちが話し合うべき課題を何にするかを左右できる、重要な役割なのだから、やはりやりがいには有るだろう。

「スルギと成明の事を頼むぞ。だが、こうなるとお前はスルギの監視役は解任か？ 後釜は誰だ？」

「大状元様の御信頼を得たとは言っておりません。私は相変わらず監視役で、恐らくは、私が大状元様に寝返らないかを監視する者がつくでしょう。既に先程それらしき内侍と、下仕えを見ました。共に塀を乗り越えたり、木に登ったりして撒いてやりましたが」

「どこの手の者か見当はつくか？」

「中殿様の所に入りの者達です。名前までは存じません」

「当たり前と言えば、当たり前だな。姑息な手段に頼らず、今は仕事を通じて正面から沈家の連中の信頼を得よ。それより、お前、あれに騎撃毬の技の一つも伝授してやってくれ」

騎撃毬好きの中に当然『馬馬鹿』洪善道も含まれる。スルギが自然に洪善道と気心の通じる仲になってくれる事を私は大いに期待したが、意外な人物がスルギへの接触を図るとは、まだ私は知らずにいたのだった。

スルギの邸で受けた報告では、司憲府の監察を務める洪善道ホン・ソンドはスルギが気に入ったらしい。いや、正確に言えばスルギに私があたえた白馬がスルギに心服している様を見て、感じ入ったらしい。

「馬は媚びへつらったりしない。良い馬ほど気位が高く、背中に乗せてやるほどの人間かどうか実に良く見ている。俺は人間におべつかを使われても何とも思わんが、名馬が背に乗る事を許してくれたときは実に嬉しい、などと申しましたので、自分は名馬に見込まれるだけの男だと言って、自慢してるって訳かと混ぜ返してやると、『そうとも言う』と言って笑っておりました」

韓明文はスルギが武官連中になじみ、騎撃毬の練習に加われるように気配りをしてくれていたようだが、上手い具合に自然な形で洪善道とも馴染めそう。スルギの騎射の腕前を「百発百中と言う奴だ。前に打ち込まれた矢を弾き飛ばして、自分の矢を打ち込むんだぞ、凄いな」と毒舌家で人に厳しい男が、珍しい手放しの褒めようだったそう。

「それは宜しいのですが、厄介な事が出来ました」

「どうしたのだ？」

「沈徳宣に大状元様が主上殿下との間にお子をもつけた女人だと見抜かれましたぞ」

「何？女というのは見抜く者もいるとは思いますが、なぜ子をもつけたとわかる？」

「そのう、小臣ではわかりませんでした、あの方は御子をお生みになって、一年とたっていないのは確かだろう。時折、仄かに甘い乳の香りがするからな。王様の御様子から拝察すると、王子様が

な？ お生まれになったのは』と言い切りました」

「まずいな」

「ですが、その事実を沈徳宣は兄にも父にも伝えていない。私が事情を知っていて秘密にしているのも、主上殿下の御意志故だろうか、とも申しました」

「王の意志には背く気は無い、そう言いたいのか」

「はあ。主上殿下の忠臣で有りたいたいと言う気持ちは強いのだとも言いました」

以前私がスルギと共に東大門脇の料理屋に出かけた折に、どうやら沈徳宣に士大夫の夫人といったなりのスルギを目撃されてしまったようだ。

「王様の御寵愛は非常に深い事が見て取れた。今まで後宮のどなたの上にも王様のお気持が無い事は明らかだったが、このような方がおいでだったかと、大いに納得したよ」

そのように沈徳宣は言ったらしい。

「ともかくも大状元様をベタ褒めですて、隋の木蘭も一軍の將を務めたらしいが、あの方はより美しくより賢くより強い、そのように申しました。私も常々凄い方だとは思いますが稀代の色男は、言う事が気が利いておりますな」

沈徳宣は「沈家の都合はさておき、王様の忠臣でありたいと言う願いは、私にだって有るのだ」と言ったらしいが、どこまで信じてよいのだろうか？

「昨夜は話の流れで、やむなくあの男につきあって、大状元様が懇意になさっている女將のやっている妓房で飲んだのですが……そこでもまた、驚くような事が判明いたしました」

まさに韓明文の報告は沈家の秘事と言うべき内容だった。

「右議政と最初の奥方と戦死された忠安君様は、幼い頃は毎日のように仲睦まじく御一緒に遊び過ごされた仲でいらしたそうです」

チュンアンケン

清との間には幾度か大きな戦いがあったが、忠安君は若くして相思愛の許婚を残し激戦地で戦死した。今も語り草になるような立派な戦いぶりだったらしい。あの涼やかな容貌とあいまって、当時悲劇の英雄として幾度も話題に上った人物だった。

「最初の奥方はその忠安君の許婚でいらしたのです。右議政は奥方が懐妊なされたのも御承知で、妻に迎えられたらしいです。と言うのは、右議政にとって最初の奥方は初恋の大切な方だったようなのです」

この国では許婚に死なれた娘は未亡人と同じ扱いを受け、別の男との結婚は不道德とみなされる。身分の高い家ほど、その取り決めにうるさく守るものだが……どこをどう工作したのか、右議政は初恋の人を妻にした。王族で親友でいわば国の英雄でも有る友人の遺児は、実子として育てた。その遺児が知宣と言うことだ。

「昨夜、女将に聞いたところでは、奥方はかつての婚約者の事を忘れかねていて、右議政は初恋の人でも有る奥方の御気持ちに遠慮がお有りになった。そのうち奥方によく顔が似た妓生、つまり今のあの女将ですが、と馴染まれ、徳宣が生まれたようです。その後、奥方と女将が実は腹違いの姉妹だと判明し、事情を察した奥方が御自分の実子として徳宣を扱った……と言う事ですね」

その奥方は知宣・徳宣の幼い二人を残して、病死した。使用人たちは知宣の秘密は知らなかったが、徳宣の実母が妓生だった事は知っていたため、事有ることにいびつたらしい。特に中殿の生みの母親の二度目の奥方にくっついてきた連中は、徳宣に酷く当たったと

言う。

「ちなみに今の三度目の奥方は、最初の奥方の乳母子だそうです。興入れの時、ついて来たんですな。そう言ういきさつの所為か、徳宣を何くれと無く庇ったようです。いつの頃からか右議政のお手がついて側室となり、武宣が生まれ、更について最近正室になったわけですな」

だが、もっと、気になる事が有る。中殿は他の兄弟達と血のつながりが無いというのだ。確かに……あの沈兄弟の妹にしては、不細工だとは思うが……

「中殿様があまりにお気の毒だから、これ以上は勘弁してくれとのことでした。更には自分が悪いんだとも……申しましたが、どのような事情でしょうなあ」

中殿が次兄の徳宣を嫌うのは、何らかの深い訳が有りそうだ。

スルギの邸に入ると、スルギは上手い具合に騎撃毬の練習が済んで帰りついたばかりのようだった。

「先日贈った薄桃色の金通し生地ヨシロの唐衣を着せてくれ。そうだな筈は赤い珊瑚の物が良かろう」

出迎えた忍和ヨシロにスルギの着替えを命じておいた。忍和は成明の乳母で、この邸の女たちの束ね役兼スルギの小間使い役もこなす女だが、判内侍府事の異母妹で、結婚前の沈家の三男・武宣との間に息子を一人儲けた。

沈武宣シム・ムツンは誓いの印まで取り交わしておきながら、都に戻るやいなや親の決めた相手を妻に迎えた。懐妊中の忍和がわざわざ上京して沈家に武宣を尋ねて行っても、門前払いを食らわされたらしい。その後は、判内侍府事の邸に身を寄せていたが、スルギの出産の半月ほど前に男児を出産し、乳母となった。

「芯のしっかりした信頼できる人」というスルギの評もわかるが、恐らく本人としては自分を貶めた沈家の者たちの鼻を明かしてやりたい思いも有るのだろうと思われる。ともかく陰ひなたない、細やかな奉公ぶりだ。親子ほど年の離れた兄に似て頭の回転も速く、無駄な事は話さず、必要な事はきちんと主に報告する。なかなか良い人物がスルギの側についてくれたと思っっている。

やがて韓明文と洪善道が目立たぬように別々の門からやってきた。華やかな唐衣を纏ったスルギは輝くばかりに美しい。嫣然たる微笑みを浮かべて若い客人二人を迎えた。にこやかに酒肴を勧めるスルギを前に、韓明文は嬉しげに箸をつけ酒を飲み始めたが、洪善道

の態度は見ものだった。

「ホン・ソンド 洪善道でございます」

そう言ったきり、その場に固まってしまったのだ。

「馬の事で色々教えていただいて、ありがとう。これからもどうぞ宜しく」

「ああ、お声は、やっぱり大状元様なのですか」

洪監察はほっとしたような声を上げた。

「こやつは馬の事ならやれ顔が美しいだの、姿が良いだの蘊蓄を垂れ述べるくせに、人間の女相手だと何も言えないようだ」

「そうはおっしゃいますが主上殿下、大状元様の唐衣姿は真にお美しいですから、洪殿が固まってしまわれるのも、致し方の無い事で」

「いやあ、実に、実に驚きました。真に御無礼致しました」

「洪殿、主上殿下はそうやって固まる様子を御覧になりたかったのだから、構わないのだと思うよ」

「ハハハ、最近、韓検詳は平気なので、つまらないのだ」

固まる洪善道を見るのは面白かったが、無論それが目的ではない。

「最近、大殿で盗み聞きする不埒物を駆逐できたし、控えの間を作つて、取次ぎはそこからさせるようになったのでな。秘密の漏れる危険はぐつと下がった。そこで、この洪善道をつれてきたのだ。来月から司憲府内で現職の監察から昇格させて正五品持平とする。兼職はスルギの元で働くように校書館の校理とした」

異世界の国立図書館のような部門である校書館を設立する事になったのだが、その初代提調すなわち長官にスルギを着任させるのは決定事項だ。スルギのもとに兼職の形ではあるが、優れた若手の官僚を集め、党派や家柄に囚われず互いに交流させようと言う試みでもある。

「大好きな馬の本からでも良いので、実学の書籍も目を通しておい
て頂きたいです」

「はい。大状元様がお書きになった『西洋馬術詳解』は拝読しまし
た。農事や商業の本ももつと当たってみます」

「そうですか。それは良かったです」

「馬の話が出れば、洪殿は嬉しそうですね」

「全くだ」

韓検詳の言葉に、その場の皆はうなずきながら笑い声を上げた。

私は早めに夕食を済ませ、内侍府の数人だけを供につれ邸に入った。すると珍しく忍和が一人きりでやって来て「申し上げたい事が御座います」と言った。

「兄と相談いたしました。宮中で少し賄賂をばら撒くつもりであります」

「ほおお？ 賄賂とな？ 賄賂などと聞くと王の手元資金を使わせるわけにも行かん」

「大状元様に過分な程の物を頂いております。食い扶持は兄のおこぼれだけでも十分ですので、更に保母尚宮の官位と官職を賜りましたから、下々に与える賄賂には十分すぎる程財物はございます」

何といっても忍和は成明の乳母であるから、内密にふさわしい官位官職を与えてある。正式に世子付きとして入宮すれば、すぐにも皆に認められるであろう人となりと言うか、品格と重みがある。

「して、ひっそり撒けば良いものを……許しを求めるのはなぜだ？」

「王世子となられる成明様の御身分を盤石なものとし、母君で有られる大状元様が憂いなく国事に邁進なさる事が出来ますように、後宮を少しばかり掃除した方が宜しいかと」

「ほう？ で、どのようにして掃除する？」

「噂を流し、それに踊る浅はかな不逞の輩を、宮廷の外に追い出すべきと愚考いたしますが……大状元様のお考えは恐らく異なりましよう。御情け深くまっすぐな方ですから。あの方が後ろ暗いはかりごとなど、お嫌いな事はよくよく存じております。ですから、こっそり致しますのでして」

「流す噂はどのようなものだ？」

「王様のお子が新しくお出来になった。今度は王子様かもしれない、それだけでございます。後宮の方々は互いに御自分以外の所に主上殿下の夜の御渡りが有るのではないかと、疑心悪鬼に陥っております」

「フッフ、お前の兄の仕業であろうが」

「はい。さようです。ですから、あとは仕上げの段階なのでございます」

「そうよな。命まで取るのは禁じる。愚か者でも成明の姉を産んだ者たちだ。後は、お前が兄とよく相談して、自分の主人が後々恨みを買う事の無いようにしてくれば良い」

掃除されるのは、おそらく二人だと思われるが、私はあえて問いたださなかった。

その後スルギと共寝した後、朝食に間に合うように秘密の入り口から大殿に戻ったのだが、聞けば昌嬪が明け方から控えの間に詰めているらしい。朝食を食べながら、愚痴だか告げ口だか、出来の悪い兄弟たちの官位官職への口利きだか知らんが、ともかくも聞いてやる事にした。

「主上殿下！ 哀れな臣妾を、どうか御見捨て無きように」

開口一番、泣き落とす。まあ、そこそこ美人なのだが、泣かれたからと言って、特に気持ちが悪くわけでは無い。愚かな女だ。

「そなたの様に美しい人に泣かれてしまったら、寡人はどうすれば良いのか戸惑うではないか」

スルギの言うリップサービスというやつだ。判内侍府事なら「腹芸が御上達あそばしました」と言う所か。また中殿と揉めている。最初は下仕え同士の角の突合せだったのに、次第に火種が大きくな

り、ついには互いの主人が事を構える段階に至ったと言う事らしい。

「中殿様は御懐妊遊ばしましたのでしょうか？ 臣妾の事を『長らくお仕えしているくせに役立たず』とおおせになつたとか。口惜しゅうございます。確かに中殿様の方がお若いですが、臣妾だとして御渡りを頂けましたら、お役に立つて御覧に入れます」

「領議政の秘蔵の孫で、一品内命婦たる身が『役立たず』のはずはなからう。だがそのような言葉、まことに中殿本人が口にしたらわけではあるまい。そなたと中殿の所の下仕えや女官達は仲が悪いと聞く。売り言葉に買い言葉と言うもので、下々の誰かが吐き散らかした無礼な言葉が独り歩きしているだけではないか？」

考えてみれば、中殿や側室たちとの会話は「寡人」と「そなた」という調子だ。知らず知らず自分でも他人行儀だと改めて実感する。話の中身は延々、愚痴だ。下らん。いや、忍和が掃除するつもりなのは昌嬪か？ とにかくもなだめて己の住まいに戻らせた後、祖母と大妃様のご機嫌伺いをする。お二人には忍和が言っていた事をお伝えし、何事が有っても知らぬ存せぬという事にしておいて頂きたいと、お願いしておく。次に中殿の所に寄った。

「主上殿下、昌嬪めは夜明け方から大殿をお騒がせして、何を申しましたか？」

「何やら愚痴だ。あれも寡人に長く仕えてくれているが、色々思う事も有るのであるう」

「愚痴ごときで朝からお騒がせするなど、許せませぬな」

「別に、あれも寡人の側室の一人だ。二人の娘も生んでくれた。至らぬ所も色々あるうが、まあ、穏やかにやってくれぬか？」

「どちらかに新しくお子がお出来になりましたとか、噂が立っております。まことの事でしょうか？」

「さてな。後宮と言う所は、時折奇妙な噂が立つなあ。おおそうだ。

仁恵はどこだ？」

母親の中殿は実家の勢力で押し付けられた女だが、二歳になった娘の仁恵公主には罪は無い。立ち寄れば必ず顔は見て行く事になっている。

「公主様は父上を恋しがっておられました」

乳母がしたり顔で言う。母親が言わせているのかもしれないが、本当なのかもしれない。そのあたりの判断は微妙なところだ。

「仁恵も早う大きくなって、姉上たちと仲良う遊ぶようになるのだぞ」

抱きしめて言い聞かせてやると、黙って頷いた。まだ二歳だが言葉は概ね理解しているようだ。

「翁主たちが、これを可愛がってくれましょうか？」

「皆、良い子に育っているぞ。そなたの方から、あれらに優しゅう接してやれば、良いのではないか？」

中殿は不満げだったが、知らぬふりをして、その場を立ち去った。

中殿の後は、朴淑儀・張昭容と回る。朝既に話をした金昌嬪の所は寄らない。

「申貴人の所で翁主たちと共に夕食を取る事にするから、伝えておけ」

久しぶりに申貴人が戻っているのだ。亡き先の中殿・明珠と同じ時期に毒の被害にあったようで、ずっと体調が思わしくなく、本人の希望で田舎にあたえた別邸で養生している期間が年の内三分の二ほどにもなる。

忠義一筋の大殿内官に使いをさせて、執務に励む。領議政・左議政・右議政の三公のほか、六曹の判書を集めて地方官の任免の件について話し合う。地方からの嘆願書も近頃は増えた。

「すぐに官吏の不正や非道な行いにはお調べが入り、賢明に御裁きになるという世評が立っております」

「そうならば結構な事だが、寡人が裁くのではなく、寡人が見込んだ者たちが頑張ってくれているのだがな」

「広く人材を求められ、身分の軽いものからもどんどん引き立てておやりになるので、近頃は若手が活気づいております」

「救荒作物ほどの程度役立つっているかな？」

「例年なら餓死者が報告される冬越えの時期ですが、今年は甘藷を導入できた地域では餓死者がいませんでした」

「馬鈴薯が、来年あたりから導入できれば、また事情は変わってきますでしょう」

「玉蜀黍も土地によつては、よくなじむ場合があるようです」

「官吏が不正に米や麦を取り込む事を厳しく管理なさいましたので、民の気持ちも前向きになりましたでしょう」

「去年は暗行御史の『出道』が多かつたですなあ。村々で子どもが暗行御史ごっこをしているそうですぞ」

暗行御史は地方行政監察制度の不備を補うものだ。王である私の権限で随時任命できるが、頻繁に必要であると言うのは、やはり一種の異常事態だ。と、言うよりは、スルギの情報網に引掛かるものを調べて行くと、今まで気が付かなかつた行政の不備や矛盾、民の困窮に目が行くようになったのだ。

暗行御史は任地に急ぎおもむき、変装して地域の実情を内偵する。問題解決の方向を見定めたら、地方官庁に入つて公文書と倉庫を検査するのだが、その際に付き従う者が「暗行御史の出道だ」と叫ぶのが通例だ。

「あまり、あれらを『出道』させるような粗末な者を地方に着任させるな。今年はもっと慎重にやってくれ。六月には良き人材を送り出したいものだ」

特に清や倭との国境に近い地域には、武官としても高い能力を持った人材が望ましいと付け加えておく。

「戦でも、御座いましたでしょうか？」

「戦は無いと思うが、不逞な西洋人どもがやってきて、暴れるぐらいの事は覚悟した方が良くかもしれん」

すでに昨年そうした事も起きた。炭・水・肉・小麦・野菜などを宛がい、幸い船に居た清国人の仲介で立ち去らせることが出来たのだが……

「我が国の武器では、なかなか太刀打ちするのが難しゅうございま

すが」

「頭の痛い問題よな。だが西洋人は土地に不案内だ。誘い込んで、疲弊させてから捉える事も出来ようかな」

「紅毛南蛮の連中も、あれらなりに国も法も有ると聞きます。言葉がわかれば、交渉もできますな」

「それぞれの部署に校書館の役職を兼任している者がいるだろう？ それらの者たちとよくよく相談して、より優れた人物、賢い問題の解決法を見出してほしい」

廷臣たちは賄賂を取り込みながらも、そこそこまじめに仕事はしている。その様子が手に取るようにわかるようになったのも、スルギが自分の事業の出資金の配当を内侍府に還流し、私の秘密の手元資金を拡充したおかげだ。

見張り役も腹が減るし、移動の手段も必要だったりする。実を言くとスルギに言われるまで、私はそんな簡単な事も思いが及ばなかったのだ。

「同じ銀塊も、私が渡すより正邦様が御自身でお渡しになる方が、効果が御座います」

確かに、王という資格は、その程度には人々にありがたがっては貰える物らしい。私への忠誠を要求すると同時に、小遣いをまめにやるようにしたら、朝廷でも後宮でも情報の集まる量が以前より格段に増えた。

だが、ほとんど賄賂の効果が無い場所が有る。

大王大妃様や大妃様の所ほどではないが、申貴人と朴淑儀の所はさしたる動きが伝わってこない。申貴人と朴淑儀が注意深く慎み深く暮らしている所為だろうが、身の回りに仕える者たちに、真に主として尊敬されているのだとも言える。

朴淑儀はこの国の伝統的な「婦徳」を体現したような、賢く控え

めな女だ。私の所に嫁がなければ、あるいはあっぱれ功臣の母となっていたのかもれない。不足を言つては申し訳ないが、これと言つて欠けた所も無いが、激しく思いを掻きたてられた事も無い。勝手なものだ。時折済まないとも思う。

申貴人は、大きな局面で物事をとらえる事が出来る女だ。国という単位で物事を考えるだけの学識も持ち合わせている。話していて後宮の中では一番肩が凝らない。時折、古い知人と言つた懐かしい気持ちにさせる人だ。貴人が毒を仕込まれたと思われる時期は、まだ赤子だった成弘が殺害された時期と重なるが、私にその話をした事がない。私が毒を仕込んだ側の女をどう考えているのか、読めなかつたからだろう。優れた人柄だが強い愛情を互いに覚えている訳ではない。政略の絆とは、どうしてもそうなりがちなだろう。

だが、信頼はできる人だ。

申貴人は冬を越したら、また田舎に戻るらしい。その前に私の口から伝えておきたい事が有つた。

申貴人の所で夕食を取ってから、スルギの邸に入った。スルギは私が申貴人の所に泊まると思っていたらしい。確かに翁主の父親としてはそうすべきであるのかもしれないが、スルギ以外の女とはもはや共寝をする気になれない。スルギは何か難しげな書物をいっぱい広げていたが、私が部屋に入ると、急いで取り片づけた。

「何を読んでいたのだ？」

「天主教の坊主の懺悔録のようなものです。西洋では発禁処分のある国も有ると言う問題作のようですね」

新大陸における西班牙の暴虐と、亡国の民に塗炭の苦しみをもちます結果になつた天主教の布教活動に関する自己反省的な内容らしい。明に布教に來た天主教徒は礼節を保ち、皇帝に臣下として仕えたが、先ごろそうした天主教徒から見れば異教の地では、断固異教と対決し排除すべきであつたと批判を受けたそうだ。

「天主教徒も色々内輪もめが有るのだな」

「ええ。この懺悔録は大本山の新东方針に真っ向から逆らつた内容なので、発禁処分を食らつたのでしょ」

話せば長くなりそうなので、気にはなるが話題を切り替える。

「どうやらスルギは中殿も昌嬪も「困つた人達」と考えているようだ。スルギは激しく人を憎むと言う事をしない。出来ない性質らしい。張昭容は本人は「気の毒な人」で、娘の順恵翁主は「仲良し」と言つたあたりか？ 朴淑儀本人は「良く存じ上げない」が、父や兄弟達の人柄と能力は高く買っているらしい。

「申貴人にお話になりましたの？ 成明と私の事を」

「王子が生まれて成明と名づけた事、生母は大王大妃様・大妃様からも世子の生母にふさわしいと認められている事、後宮の他の女には、中殿も含めてだが、秘密である事を伝えた」

「母親がどの誰かは、おっしゃらなかったのですか？」

「訊ねられなかった。だから言わなかったが、察しているやもしれん」

申貴人の生んだ二人の翁主が、夕食時に「私達も順恵翁主のように大状元のお弟子になりたいのです」と申し出て来た話をする時、「それは無論構いませんが、貴人はどうお考えのようでしたか？」と気にしている。

「申貴人は、私の正体を見抜いておいでのように思います」

「あの人はそう言う人だ。良く人を見ている。一番苦しく大変であった時期に、王である私がろくに手助けもしてやれなかったのを、恨んではない様だが、最初からあてにならない男と思われていたようだ。実際即位後間も無い私は、無力で無能な王ではあったが……」

一言の不平も不満も漏らさず、毒を盛られた話も全くしてくれ無かった。無理は無いのだが、よそよそしい気分させられた。

「初めて、毒を盛られた件について話したよ。スルギに教えられたように、豆類を意識して取るようにしていたら、ゆっくりと解毒効果が見れたらしく、最近では以前よりずっと体が楽なそう。是非、二人の娘を大状元の弟子にしたい、ともしな」

「でも、それが一番大切なお話、でも御座いませんでしょう？」

「ああ。そうだ。中殿のなり手がなくなったら、引き受けてもらうかも知れないと言っておいた」

「では沈中殿は？」

「近い内に廃妃、だろうな。まあ、後宮には止めるが。昌嬪も降格

は免れまい。既に二人の間で呪詛の応酬と、毒薬のやり取りが有るのだから……」

スルギは闇でもしっかり見えると云う目を見開いて、私の顔を見つめた。

「判内侍府事と忍和が、何かしでかしましたか？ 時折木や屋根に登って様子を伺うと、二人が何やら一緒にゴソゴソやっている風ですのぞ」

「木はともかく、時折屋根にも登るのか？」

「忍びの術に関しては、私は韓殿の弟子です。内侍府の屋根は馴染みの場所です」

思わず苦笑するしかなかった。全く、何と言う女だ。

「あれら二人に任せただ。誰の命も取ってはならないという条件を付けてな」

忍和の申し出について話すと、スルギはあきれたらしい。

「随分前から、ゴソゴソやってましたよ。もう最後の詰めと言う段階になって、正邦様に申し出たんですね。兄妹揃って成明のために何かやっているとは思いましたが、やっぱりその手の陰謀でしたか」

スルギは陰謀で邪魔者の力を削ぐのは、やはり反対らしい。

「忍和は邪魔者を宮中の外に放り出したのに、主のお前の考えに背きたくないから、手ぬるい処分で我慢するらしい」と言うと、不快そうな顔つきになった。

「毒はともかく、呪詛なんて効果が有ると思えません。呪詛の所為で罪を重くするのはやめませんか？」

「呪詛は誰かを呪う気持ちの表明だ。針を打たれた呪詛の人形は見るもの全ての心に毒をまき散らかし、疑心暗鬼へと導く。ある意味、毒よりも罪は重いのだぞ」

スルギは賢いが、閉ざされた場所ですつと暮らす女達の感情までは、恐らく良く分らないのだ。中殿になるのは面倒でイヤだと言
い切ったスルギの顔を、まじまじと見つめた。

兄妹の陰謀の甲斐が有って、スルギの邪魔になりそうな困った二人の降格処分が決定したのは、申責人が保養のために旅立って間もない頃だった。

沈家の内部が色々揺れ動いているのは確かだろう。あの女たらしの沈徳宣がスルギに「心を入れ替え、生まれ変わりました」とか何とか言って、やたら親切に騎撃毬の練習に頼まれもしないのに付き合っらしい。

「沈徳宣めは、スルギの同情を買おうとしているのかも知れんな」「そうでしょうか？」

「身内の恥も、己の過去もあれこれ告白して、気を引こうとしているかもしれない。だとしたら、やはり用心せねばならんな。スルギが『可愛そう』と思うのは要注意なのだ。私自身がそうやってお前の気を引いたのだから、間違い無い」

それにしても、沈徳宣の告白の内容は驚くべきもので、複雑で、整理してみないと訳が分からなくなってくる。

「本当に複雑怪奇ですね。沈家は秘密だらけじゃないですか。書きだしてまとめてみますか」

確かにそうした方がわかりやすそうだ。

- ・スルギとなじみの東市場そばの妓楼の女将は、沈徳宣の実母
- ・亡くなった右議政の最初の正室と女将は父親が共に金領議政の亡くなった兄。つまり腹違いの姉妹。正室の母親は当然金家の正室、女将の母親は妓生。二人は瓜二つらしい。
- ・知宣は右議政と血のつながりは無い。知宣は最初の正妻と戦死した王族・忠安君の遺児。
- ・右議政の二度目の正室が沈中殿の生母だが、徳宣によれば中殿は他の兄弟達と血のつながりが無いという。
- ・三度目の正室は最初の正室の乳母子で武宣の生母。側室から昇格

した。

「やはり、廃妃が決まった中殿が、どうも右議政の実子では無いよ
うなのが気になるな」

「実の父親が誰かって事ですよ。ああ、あと、もう幾つか最近分
かったことが有ります」

・ 右議政の所の柳執事は、実は右議政の庶兄。先代が身分の低い下
仕えに産ませた子らしい。

・ 申貴人の忠実な女官見習い柳乙東コ・ウルトは柳執事の娘。最近素性を中殿
の所の女官に知られ、『裏切り者』呼ばわりされ、折檻された事も
有る。

・ 申貴人の母親は右議政の最初の正室の乳母子にあたる。申貴人の
母が嫁入りの際、沈家から下げ渡された小間使いが柳乙東の母親。
乙東は母親の縁で幼いころから申貴人に仕えている。

「ほう、この柳乙東とは、どうやって知り合っただけ？」

「母親、つまり柳執事の奥さんですが、その人には持病が有りまし
て、女官見習い同士の伝手で、私の患者になりました。今も十日に
一度ぐらいの割合で往診していますが、症状は随分と緩和され、私
は妻思いの柳執事には感謝されているんみたいですよ」

「ほう、それはまた、ずいぶんと心強いつながりだな」

「その柳執事ですが、つい先日、右議政に打ち据えられたようです。
はつきり言いませんでしたが。かなりひどい打ち身が背中から太腿
のほぼ全面に広がってました」

「なぜまた、そんな事を右議政はしたのだろうなあ」

「中殿の降格処分が決定して以来、使用人に当たり散らすようにな
ったそうです」

「右議政にしてみれば、実の娘かどうか知らんが、ともかくも娘と
して育てた者が降格になり、後釜が申貴人なのだから、柳執事は疑

われているのかも知れんな。何か自分にとって不都合なばかりごとを庶兄である執事が仕掛けた……あるいはそこまで疑っていなくても、申責人との縁が有るのだから、気に入らないだろう」

「柳執事に見れば、今まで真面目に弟に仕えてきたのに、人目の有る所で打ち据えるなんて、酷い、不当だと感じているようです」

柳執事か。他家にも名執事としてそれなりに知られた男だ。聞けば沈家の先代、つまり実の父親だが、その先代は科挙を受けられない庶子の身分を憐み、自分で色々と柳執事に学問を仕込んだそうなの。その実の父親が死ぬ間に「弟を支えてやってくれ」と遺言したから自分は懸命に仕えてきた、と娘の乙東に愚痴つたらしい。

「その柳執事と娘、使えそうだな」

「はあ。忍和にもそんな風に言われちゃいましたが、陰謀の片棒を担がせるのは、どうも嫌です」

「だが……何か有れば、沈家の内情を知るのに使えるだろう」

「さあ、どうでしょう。使い物になるのは、柳執事が自分で言ったように、右議政に追い出されない内でしょうけどね」

確かに、右議政は庶兄を追い出すつもりなのかもしれないが……

沈中殿の降格が決まっても、沈家はまだ強大な権勢を保ったままだ。私はスルギや成明に対する報復を恐れて、隠田の事も表沙汰にできずにいる。だが確実に朝廷内部の雰囲気は変化してきた。沈徳宣の不品行など今更なのだが、徐々に噂が表面に現れるようになってきた。かなりの数の廷臣が沈徳宣に正室なり側室なりを寝取られていくらしい、はつきりしている隠し子は三人。それらしき子供はまだ他にいるようだ。近頃はスルギの練習にやけに甲斐甲斐しく付き添っている様子なのが、薄気味悪くもあり、気分も良くは無い。

「良い加減にせぬと、あやつ、寝取られた亭主どもに嵌められて、死ぬ羽目になるな。それを悟って、救いの手を求めているとも考えられなくも無い」

「はああ、だから生まれ変わりました発言ですかね？」

「良く腹の読めん奴だが、スルギの魅力に参っているのは確かなようだ。だが、くれぐれも油断するでないぞ。どんな女も閨に誘い込んでみせると豪語していたような奴ゆえ」

「今日はひたすら親切に、騎撃毬の教師と介添え役に徹してましたけれど」

「お前には浅はかな策略は通じぬから、真心を見せようと言った所だろうよ。教師としては、どうだった？」

「教え方が上手いと思います。私と馬の癖を良く見て、それに対する対策を考えてますし。韓都事も上手いですが、ああ、あの人今、検詳でしたね。御役目が忙しいですから。無役の徳宣ほど、ゆっくり教えられないでしょう。洪持平も以前より顔を出さなくなりまして。やはり忙しいんでしょうねえ」

沈徳宣は生まれ変わったなどと言っても、根が無類の女好きだ。

どのような魂胆か知れたものではない。

「見目良く、細やかに気がつき、食つに困らず、暇があり、聞ごとに長けている。そういう奴だからな。もう、奴の話ばかりするのはやめよう。何やら腹が立つてきた」

「御不快ならやめましょう。せつかくの二人きりの時間ですもの」

「私は小心者だからな。それに焼餅焼きなのだ。知っているだろう？」

「そうなのですか？」

「今凄く、焼餅を焼いている」

「まあ、私の気持ちは正邦様一筋です。あのような男とは比べ物になりませんのに」

「それを聞いて、非常に嬉しい」

「そうですね？」

「そうだ。自分に自信も無いから」

「自信が無いと言えば、次回の武科殿試はちょっと難しいですね。ただ受かるだけなら受かるでしょうが」

「そうか。第一席での合格は難しいか」

「騎撃毬が今一つですから。それに校書館の仕事が山積みで、それを片づけたいですし」

校書館は万事スルギの考えで自由に運営させている。「一芸に秀でた」「何かの研究に夢中」「発想が柔軟」「語学に堪能」といった基準で、人物を集めたようだ。

宮中の経書・史籍・外交文章・書簡を管理し、王の顧問役を務めてきた弘文館と、国史を編纂し王命を撰述する業務を管掌する芸文館の役人、それに国王と大臣らの専横を戒め抑制する司諫院と司憲府の有能な人物を、すべて兼職で迎えた。それぞれ位は高くは無いが科挙の成績優秀者で、将来有望な若手官僚が多い。

これらの人物と、将来の王世子の母であるスルギが親しくなるのは、大いに結構だと思う。

あとは客分でも構わないからとスルギ自身が手紙のやり取りで口説き落として全国から呼び集めた、在野の学者・技術者たち。更には国を豊かにしようと言う志を持つ農村漁村、あるいは商いにおける高い見識を持つ者たち。こうした者たちの意見は確かに、耳を傾けて聞くに値するだろう。従来の身分や官位の縛りから完全に自由な場所を提供しようと言う試みは、なかなか斬新で魅力的だと思う。

そして長官であるスルギ自身が、全ての人物に敬称をつけて呼ぶ事にしたと言う。官職が有る者はその官職で、官位官職が無い者は「先生」「殿」をつける。大勢を占める士大夫連中の反発を考慮して、強制はしなかったが、次第に定着しつつあるようだった。

そして従来、地縁と血縁で派閥を作って凝り固まり、泥沼のような不毛な闘争を繰り返してきた宮中の雰囲気、少しづつではあるが、変化しつつあるようだった。

新中殿は申貴人に引き受けてもらった。儀式などは再び冬を迎えて、申貴人が都に戻る時期になるだろう。

沈中殿は貴人に、金昌嬪は昭儀に、それぞれ二段階格下げとした。翁主や親兄弟は「あずかり知らぬ事であった」として一切とがめだてしなかった。

それでも領議政は孫娘の不始末に恐縮して辞職を申し出たが、私は慰留した。もうすでに高齢で、体も弱っており、余命幾ばくも無いのは誰にも明らかだ。恨みを買ひ、事を必要以上に荒立てるのは避けておきたい。買わずに済む恨みならば、買わぬに越したことは無い。どうやら私のこうした考え方は、スルギに強く影響されているようだ。

沈家は沈黙を通しているが、どう考えるべきなのだろう。

その前後に「沈貴人は右議政の実子ではない」と言う怪情報、いや事実らしいから怪情報とも言えないが、ともかくも秘密であったはずの事が噂になった。これは判内侍府事と忍和の仕業だろう。

成明は新中殿の猶子ゆうしとする事に決めた。政治的な意味合いでの後見と言った所だ。王世子となる成明の身を守るためだ。

「実母は当分伏せておこう。今の状況では、意外にその期間が長引くかもしれないが。スルギは世子侍講院傳とする予定なので、ぜひとも武科殿試も良い成績で及第して欲しい」

私の言葉にスルギは驚いていた。

世子侍講院の傳と言うのは、東宮つまり世子のための学問所の次

官だ。過去の例を見れば長官の師は領議政が兼任するのが普通だ。傳も左右議政のどちらかが兼任するのが通例ではあるが、是非スルギにやらせたい。どうか恰好の付く理由を付けてスルギにその役職を与えるためには、官位が正一品でなければならぬ。

領議政の金家と、右議政の沈家の発言権が今回の不始末で低下した隙に、スルギをねじ込むつもりだ。それでも相当の無理を通すのだから「文武両道に優れた」と言った売りが有る方が、ねじ込みやすい。

「救荒作物の普及など、大状元の民の飢餓を救うために果たした役割は大きかった」と言う名目で、つい先ごろまずは従一品にスルギの位を上げたのは、この世子侍講院傳着任を睨んでの布石なのだ。

和惠翁主・善惠翁主の二人は母の申貴人に同行しなかった。本人たちの希望も有り、かねてからスルギの弟子で友人を自認していた順惠翁主と共に、スルギが学問を教えている。さすがに毎日は無理なので、三日に一回、場所が広い割に人が少ない大妃様のお住まいの一部屋を、学問所としてお借りしている。

三人ともスルギの講義が楽しみなようだ。私も時折こうして見学するが、確かに色々知らない新たな知識を得る事が出来て、いつも興味深い。

「お姉様方は新しい中殿様が中宮殿にお入りになれば、公主様ですね」

「何を言うの。今までと同じようにお姉さまと呼んで頂戴」

「そうよ、同じお父様の娘ですもの、そんな事、気にしないで」

「でも……御付きや下仕え達は、そうは思わないと思います」

幼いながら順惠は現実を見ている。公主となる姉二人より、庶子である翁主は確かに身分が下だ。

「和恵様、善恵様のお優しいお気持ちは、何よりも尊いものです。どうかこれからもずっと、そのお気持ちを大切になさって下さい。順恵様はお姉さま方のお優しいお気持ちを素直にお受けなさいね。確かに、お姉さま方に仕える者がいる場所や、儀式の折は『公主様』とお呼びするべきですけどね」

スルギはそんな話をしてから、この国の地図を広げて、地球儀を持ち出し、主な地名を書き出してゆく。この国には異世界での黒板に相当するものも何も無いが、スルギは黒板のような形の看板状の物を作らせ、そこに紙で書いたものを張り、指示して授業をする。そのうち子供用の教科書に編纂するために集めた資料などを使うらしい。スルギならそのうち見事な教科書を完成させるだろう。

「女の王様っていないのよね。やっぱり女はじつと家の中に居なくてはいけないものなのかしら」

「むかしむかしは女王様もおいでだったのですよ。今の八道が三つの国に分かれていたころの事ですが」

「なぜ今は、女の王様はダメなのかしら？」

「この王家を最初に開かれた初代様が、儒教を国の教えとする。男女の区別をはつきりすると定められたからでしょうね」

そして、スルギはかつて偉大な女王が住む都が有った場所や、勇ましい妃が戦った場所などを地図を見せながら紹介した。三人の娘たちがとも目をキラキラさせて熱心に話を聞いたのは当然だが、私も非常に興味深く話を聞いた。この娘達が大人になるころには、少しは身分の差別が少なくなっていてほしいものだ

「紆余曲折はあったが、後宮での学問所に私の娘たち全員が入る事になった。」

どうやら母親が降格された娘に仕える者たちは、侮辱されたり馬鹿にされたりするような不愉快な事態を想定していたようなのだ。だが、案に相違して、皆で和気藹々と楽しい時間を持つ事ができている。スルギが最初に互いの母親・親族親類の悪口は厳禁で有ると言い聞かせたのが良かったらしい。

まだ授業には早すぎる年齢の元中宮の生んだ仁恵翁主も授業の後のお茶会には毎回参加している。

仁恵翁主の場合、母親が中宮位を追われた途端に称号がこれまでの「公主」から切り替えられてしまった。幼いながらもその変化を肌で感じている節が有る。

翁主、公主の区別無く、同じ王の娘として、上に立つものとしての責任感と公明正大さと広い視野と豊かな教養とを持つために学ぶ、と言っスルギの基本方針は皆に受け入れられたようだ。

「資金が足りませんね」

スルギの頭の中にはやるべき事柄が山積みで、貿易や様々な事業で稼いでも稼いでも追いつかないらしい。つい先ごろもこれまでこの国には珍しかった澄み切った美味しい酒を開発し、清にまで輸出してかなり稼いだようだったが……

「随分稼いだようなのに、まだ足らんか」

「国中の然るべき所に灌漑用水路を作りたいですし、橋もまともなものが作りたいですし、子供らに文字の読み書きとソロバンを広めたいですし、まともな医者数を増やしたいですし、もっとまともな翻訳官が必要ですし、もう考え出すとキリがありません」

「美しく着飾りたい、とは微塵も考えて無さそうだな」

「いえ……そんな事も無いのですが……普段は忘れてしまっています」

「まあ、それどころではないか……こうして時折女装束のスルギを見るだけで我慢しよう」

本当は男装束で仕事に励んだ方が便利なのだろうが、私に気を使つて女装束を纏っているのだろう。

「世子侍講院傳の任命は、もっと遅らせるか？　かねてからスルギが言っている様に、更に官位を上げるのは慎重な方が良いのかも知れんな。まだ成明が学問をするわけでもないし、急いで皆に披露する必要も無いかも知れん」

領議政の金家と右議政の沈家が不祥事でおとなしい内に、スルギ

を世子侍講院の傳にねじ込みたいとは思うが、確かに焦ればかえって反発を買う恐れは有る。一方で、成明に関する噂はゆっくりとではあるが確実に広がっている。

「噂は広がっておりますね。世継ぎの王子は生まれたと」

「うむ。今日昼前に主だった連中が集まった折に、領議政が噂について訊ねたのでな。本当だと答えた」

「で、皆さん大騒ぎなさいましたか？」

「したが、当分どの誰が生んで今どこにいるかは、明かせないと告げた。大王大妃様・大妃様は御承認下さり、出産の折も色々お心遣い頂いた事も伝えると、皆、静かになつたな」

「私の事は、右議政あたりは何も言いませんでしたか？」

「かなり前になるが沈徳宣を目立たぬように呼び出して、庭で会つた。その折、スルギが女である事を他言してはならんと念を押したのだ。すると、きやつめ『大状元を勝れた臣として頼りになさっているのか、女子として愛しく思っておられるのか、どちらですか？』などと言いおつた」

「どうお答えになりましたの？」

「頼りにもしているし、愛してもいる。毎晩共寝していると言つてやると、奴め、表情を変えおつた。それから父や兄には、まだ自分の気がついた事は告げていないし、少なくともこれから先も自分からその秘密を口にする事は無い。だが、兄はひよつとしたら気がついていないかも知れないと言いおつた」

「知宣は気がついてるんですか……やっぱり」

「さあな。沈徳宣の言葉は、一体どこまで信じて良いものやら、分からんがな」

沈家にとって、スルギは不都合な存在のはずだが、その態度ははつきりしない。沈黙が続けている。

スルギはまた、新しい本を書いて、物議をかもしている最中だが、非難と言うよりは、驚きあきれ、あるいは驚嘆していると言うべきかもしれない。無論絶賛する者もいるが、それらは現在利権を得ていない非主流派、あるいは学者の連中だ。

「義を明らかにして利を計らず」と言う董仲舒の言葉を引いて始まっているが、スルギは儒学の正当性など実はどうでも良いと思っっているようだ。たまたま自分の見解に一致したから利用したに過ぎない。

「この国では何だって儒教の皮を被っていないと、弾き出されてしまいますからね」

「私以外の誰かに、そのような言葉は聞かせるなよ。それこそこの国の人間は、何でも儒教に引き寄せて見てしまうのだから。この果てし無い、もう二百年以上繰り返された派閥争いをそろそろ終わりにしたいが、急には難しかろうな」

「ヤンホ兄さんと設立した『会社』が上手く機能するようになれば、少しは違ってくると思うのですが」

林亮浩とスルギは共同で、国のために貿易で金を儲ける仕組みを立ち上げ、会社と名付けた。

「商いで国を、民を豊かにするという考え、皆には目新しいだろう。あの『道德経済合一説』は、なかなか有意義な本だ。利益を求める商いでも道德が必要だという考えは、賛同する者も多いだろう。何より商いを賤しいものと考えがちな人間にも認識を改めさせる事が出来ると思うぞ」

「あれは異世界の偉大な商人で国を発展させた人の説を、そのまま引いてきただけです。ずるいのです」

「ずるくてもこの国では初めてなのだから、構わないではないか。あの具体的な方策も、悪くないな。財政状況を内外に公開して無駄

や贅沢を戒めるのは理にかなっている。街道や河川・港などの整備をする工事を国が起こして、貧しい民を雇い入れ収入を与えるのは確かに良いかもしれん。街道筋の安全や用水の灌漑も同時に整うのだからな」

「ただ、灌漑の方はこの国の技術が稚拙すぎまして、もう少し研究の必要が有りそうです」

「ああ、水車が出来ないのだったな。木を曲げる技術が完全に廃れた所為だと言う事だったか？」

「ええ。蒸気と圧力でだんだんに木を曲げる方法ですが、この国の職人が育っておりません」

「清から報酬を払って職人を呼んで、この国の職人達に教えるのはどうだろうか？」

「ああ、そうできましようか。職人たちの俸給も弾んでやりましよう。どうもこの国では職人の手間賃が不当に安いと思います。優れた品物を仕上げて、特に褒められるでもなし、豊かにもなりにくい今の状態が続けば、確かに皆職人になりたがらないのも仕方のない事です」

いつもスルギの頭はやるべき事でいっぱいだ。

「少しは私の事も気にかけてくれるのかな？ 水車の半分も気にしてもらってないような気もする」

「ああ、ごめんなさい」

全く、正直だ。謀をめぐらすとなると細心で慎重で、なおかつ大胆なのに、私の前では全然遠慮しないで、思ったように話し、振る舞う。それで良い。そう言うスルギが見たいのも事実だ。

「良い、良い、スルギはまっすぐでひた向きで、それで良いのだ。だが、時々寂しくなるだけだよ」

「まあ、お寂しいのですか？」
「うむ。だからお前と一緒にじゃないと、うまく眠れないのだ。やることは山積みだろうが、それでも人の一生は限りがある。あれもこれもと欲張らず、人に任せられるものは任せた方がよい。大切な体を損なうまで、働くな」

一番の気がかりは、その点だ。

「この国が出来てとうに二百年は過ぎている。今の馬鹿げた朝廷の有様もそれなりの歴史が有るのだ。困った伝統だがな。その積もり積もったものを、わずかな期間でどうにかしようなどと思わない方が良い。スルギの撒いた種が、後の世の心ある人間たちによって育つような道筋をつける、そんな感じで良いのではないか？」

「ある程度の大きさに育てておかないと、また泥まみれになり、踏みじられておしまいのような、そんな怖さを感じます」

「そこまでこの国の民が愚か者ばかりだとは思わない。いや、思いたくないのだ。いかにみじめでも、自分の国だからな」

清の命令で建てた『大清皇帝功德碑』には、皇帝に対して三跪九叩頭の礼を行い許しを乞う敗戦後の王の姿が刻まれている。その大きな傷から立ち直れずにいるのに、その当時の国際情勢の判断の誤りを真摯に認めようとせず、「功臣の子孫」どもは宮中に根を張り続けているのだ。染みついた汚れの様に洗い落とすことが出来ない厄介な存在だ。短気を起こすと、スルギの祖父である先々代様のように「反正」の名のもとに、肅清され排除されてしまう。

「暴君」とされる王の直系の孫娘だというスルギの血筋の厄介さは、よくよく気を付けないと、他人の足を引っ張る事だけは得意な連中に、追い落としの口実を与えかねないことにある。

そもそも「暴君」とされる先々代は明が清に敗北すると読んでいたのだ。その認識は正しかったが、長年明の模範的な属国であった事を誇りとするような連中には、北の蛮族が中華の主となるなど、認めがたかったのだらう。

国論が二分したが、それをうまく收拾できなかった先々代は、果

てしない派閥抗争に火をつける結果を招いた。

以前、スルギに言われた事が有る。

「そもそもこの国の国号も明から押し付けられたものを、使っているに過ぎませんよね」

そうなのだ。国号自体にそもそも、明国から賜ったものだ。「崇明派」はそれを悲しいとは思わないのだろう。

「初代と二代目の王は、明の皇帝には『王の代理』としか見てもらえなかった。屈辱的な交渉を経たのにな」

「その明との屈辱的な歴史を直視せず病的にありがたがり、既に強国である清を過小評価する困った連中は、いつその事、清へ遣いに出しますか？ 愚か者でも現実を見れば、目も覚めましょう」

そのスルギの提案は実行に値すると思ひ、その後さつそく、未だに根強い「崇明排清」派の学者と官僚を清国皇帝へ新年を賀するための使者に同行させた。本人たちは嫌がったが「国を代表する立派な見識の持ち主たちに清をよく観察してほしい」とおだてつつ、絹だの銀だの支度のために多めに財物を遣わしておいた。

連中は偉そうに色々言うくせに、物欲に弱く、多少の物や金銀で態度が大きく変化するのだ。そうした節操の無さを恥ずる気持も無いのが、私は嫌でたまらないが、宮中の大半はそうした人種だ。見て見ぬふりをして、いざとなったら金品を掴ませて大人しくさせるのが、スルギではないが「一番現実的」なのだろう。

新中殿が保養のために旅立った後、梅の咲くころになって、連中が戻ってきた。

「あの、清に行っていた愚か者どもが戻って来たぞ。言う事が全く変わってしまった。あきれれるほどだ。今度は清の皇帝の靴底でも舐めかねない勢いで、清を崇め奉っている。その清を虎視眈々と狙う、西洋の列強の事は、まるで目に入らなかつた様だ。愚かで卑屈で情けない連中だ」

「でも、ともかく、清との取引を感情的に非難する人間が減つてくれて、助かります」

「寒さが緩んで、これからはもう少し長閑な気分になれるかな」

「さあ、どうでしょう？ かえって大忙しかもしれませんよ」

「それはそうだろうが、気分だけでも長閑にと言う事だ」

「ああ、それは良いのかもしれませんが。いつもあくせくしていては、体にも良くないでしょうから」

「では、たまにはのんびりしないか？ 一日位仕事を休んでも良からうが？」

急にスルギが身を固くした。

「隣の部屋に何者かが忍び込みました」

素早く立って、隣の部屋を戸の隙間から覗き込む。

「知っている者です。母親がかなり重症の患者なのです。声をかけてみます」

さつさと刀を取り、男装束を手に取って着てしまつたらしい。私には暗過ぎて良くはわからないのだが……

秘密を探る・2

「おい、ナミル、そこで何をしている？ 薬なら一月分渡したはずだが、何か有ったのか」

「え？ ええ？ その声はヨンス先生じゃありませんか？」

「お前、こんなところになぜ忍び込んだのだ？」

「ここになら、珍しい薬がたまり有るって聞かされて……」

「盗みか」

「すみません」

「素人が薬草を見極める事など、まずできんぞ。誰だ、お前にここに忍び込むようにそそのかしたのは？」

その、ナミルは右議政が資金提供を受けていると言う噂の、薬商人の名前を出した。

「ふん、張盛チャン・ソンか。西洋からの特別な薬でも狙ったかな？ だがなぜ、盗みを引き受けた？ もう足は洗っていただろうに」

「博打で派手に負けまして……チャンの旦那に立て替えて頂いた代わりに、言う事を聞かないと家に火をかけ、おふくろを焼き殺すと脅されました」

「お前……イカサマに引つかかったな。チャンが手下に仕切らせている博打場では良く有るらしいぞ」

「えええ？ そうなんですか、先生！」

「ああ。お前そんな話も知らないのか」

「そ、それはそうと、先生、こちらは随分立派な御邸だが、どなたの御邸で？」

「私の邸だよ」

「ええ？」

「明かりをつけようか。まあ、せっかくだから、酒の一杯も飲んで

行け」

スルギは何か考え付いたらしい。侍女を呼んで、居間の方に酒の支度をさせた。

「さあ、この子の後についてお行き。好きなように飲んで食べてくれてよいからね」

男が侍女について部屋を去った後、スルギは戻ってきた。

「珍客を、どういたしましょうか？ かつては怪盗とか言われた男のようですが、親孝行ですから、母の治療を面倒見るのを引き換えに、足を洗わせました。細工物なども上手い器用な男です。ですが、博打がやめられないようできて、困ったものですね」

「私も一緒に酒を飲もうかな」

「どなた様だと申したら宜しいですか？」

「お前の友で、深酒をして泊まっていた事にしろ。ヨンス先生を内侍だと思っているのだよな？」

「女だと気付かれていないと思います」

「なら、それで良い。さあ、行こうか」

スルギは部屋を出る前に再び侍女を呼び「夜中に悪いが急にお酒を頂くことになったので、幾つか温かい料理を用意するように」と言いつけ、銀の小粒を駄賃にやった。

「先生は内侍でも随分偉い方ですね。毎日王様にお会いするんですか？」

「まあ、日によるけどな。そもそも内侍は宮中にお仕えるために、決死の覚悟でやって来た者ばかりさ」

「その、ナニをちゃん切るんですね」

「ああ。皆最初は掃除から真面目に勤め上げるんだぞ」

「そうなんですか。オイラには無理だな」

「こちらの旦那は？」

「御身分のある方だが、偉ぶらない気分の良い方だ」

「お役人様で？」

「いやあ……実は科擧に合格してない」

確かに、王は科擧を受けない訳だが……我ながら上手い言い方をしたと思う。

「へええ、でも食うに困らない結構な御身分だ。羨ましいな」

勝手にどこかの士大夫の息子で気楽な身分と思ったようだ。

「それにしても、こいつはうめえ酒だなあ。先生がこんなに偉い方だとは知らなかったな」

実に良く飲み、よく食べる。

「お袋さんの加減はどうだい？ 博打で負けたって事は、妹に押し付けて、夜遊びしているって事だな」

「へっへへ、そうですか……もうこりましたよ」

「だが、悪事の足扱いは出来ないんじゃないか？ 命じられた物を持って行かないと、とっちめられるか？」

「オイラは逃げます」

「でも、お袋さんが危ない目に会っくんじゃなあ……」

「そ、それはそうだなあ……」

男は困ったという顔になった。病の老母が気がかりなのだろう。

秘密を探る・3

「チャンに何を盗んで来いと言われたんだ？」

「西洋の薬らしいんですが、熱病の薬って言っていました。木の皮らしいんで」

「キナ皮か。ほんの一つかみで、瓦ぶきの屋根の家並みの値段という貴重品だからな。金や銀を積んだって、いつでも手に入るってものじゃない。たまたま手元に無い事も無いが、やろうか？ まあ、こつちも条件付きだが」

「条件ですかい？」

「いかが思われますか？」

スルギは酒を注ぎながら私に尋ねる。

「右議政の邸も忍び込めるかな？」

私が尋ねると、男は目をまん丸くして身震いした。

「宮中でも一番の権勢をお持ちだっていう、えらい方でしょう？ そんな方の御邸に……そりゃあ無理ですよ」

「でもこの先生だって、右議政と官位は似たり寄ったりだし、もうすぐ更に上の正一品になるぞ」

「ええ？ えええ？ それ、本当ですか？」

「世に名高い大状元・金勇秀とは、この先生の事だ」

「ひえええ、オイラ、首が飛ぶでしょうか。牛裂きになるでしょうか？」

男の慌てふためきぶりに、スルギは苦笑している。

「別に、そんな事するわけないだろう？ ああそつだ。明日からお前の妹とお袋さんをこの邸に引き取るよ。それなら、お前も安心だろう？」

「ええ。ええつ？ 宜しいんで？」

「うん。でもまあ、人質だよ一種の。ちゃんと食べさせて、薬は処方するけどな」

「そ、そんなら、オイラ、右議政様の所に盗みに入らなくちゃなりませんね」

「盗みというよりは、探しものかな」

スルギが言うと、男はホツとした顔になった。やる事が同じでも、盗みと言われるのとは気分が随分違うのだろう。

「探し物ですか」

「お前、文字は読めるのか？」

スルギの言葉遣いは、完全に若い男の物だ。ナミルは女だとは気が付いていないように見える。

「まあ、千字文がどうにかこうにかって程度です」
「それで十分だ」

「で、探し物は、何か証文とか書き付けとか、そんなもんでしょうか」

ネズミを思わせる見かけの割に、頭の回転は悪くないらしい。

「細かい事は、そのうち頼もう。だが、この話は内緒にしてもらわなくてはな」

「嫌だつて言うと、妹とお袋の面倒は見て頂けないし……なんか、旦那もえらい方だったりしません？」

「この国では一番偉い方だな」

スルギはナミルと言うこの男に酒を注いでやりながら、ニヤツと私の方を見て悪戯っぽい笑みを浮かべた。

「おいおい」

「いつそはつきりおっしゃった方がナミルも合点が参りましょうし、口の締りも固くなりましょう」

「では、これは御命だ。命じられた時に右議政の邸から入用のものを持ち出して貰おう」

「お、御命」

「そつだ。謹んで承るのだ、ナミル」

この国の民にとって御命^{オミゴト}、つまり王命と言う言葉は重い意味合いが有る。良きにつけ悪しきにつけ、到底逃れられない絶対の命令、そんなところか。それにしては随分とまあ、軽々しい調子の命令だが。

「せいぜい張り切って働いてもらわねばならんのだからな、しっかりと飲んで、食え」

私が酒を勧めると、ひどく恐縮したが、やはり飲みたいのだろう。

「ちよ、頂戴つかまつります」

「へええ、ナミルが『つかまつります』？　なんか似合わないなあ、ハハハ」

スルギが爽やかに笑うと、ナミルは頭を掻いた。

「確かに全然似合わない」

私もつい、一言言いたくなる。

すると杯を干した後、ひ、ひどいや。お二人とも……などとブツクサ言っている。

「ひどかったか、そりゃあ悪かった。機嫌を直して飲んでくれ」

私が更についてやると、今度はさほど固くもならなかった。

ちようど良い頃合いに、先ほどの侍女が豆腐の小鍋を持ってきた。この国では、豆腐はまだまだ貴重品だ。

「うわあ、豆腐だあ」

ナミルは大喜びだ。スルギは侍女を「気が利いたものをありがとう」と労った。

「もう、遅いから、お休み。酔っぱらいの後始末は、こちらでどうにかするよ」

スルギは豆腐をとりわけ、私に渡した。

「良いなあ、こう言う熱いものは。宮中では冷えてしまったものが多くて、いかん」

「なんすか、先生、めちゃくちゃうまいじゃないですか」

「気に入ったか。ほれ、もう一杯、お食べ」

しばらく無言で、皆、豆腐の鍋を食べ、酒を飲む。それにしてもこの男、実にうまそうに食う。

「こんなうまいものを食わせていただけなら、人殺し以外なら、なんだってやりませあ」

「そうか、そうか。よろしく頼むよ、ナミル」

夜が明けて私が邸を出るころになっても、ナミルが眠りこけていたのは、予想通りで当然と言えば当然だった。だが、この気の良い盗人あがりの男が、思いの外役立ってくれたのは、予想外の事だっ

た。

「スルギや、成明の弟はいつこしらえる？」

耳元でささやいてやると、抱きしめている体の温度が一瞬上がったようだった。口づけの応酬がひとしきり済むと、私は胸元の紐をほどいた。

「武科殿試との兼ね合いを、どういたしましょう」

「そうだなあ、やはり受けてほしいから、それまでのお預けか……
いつそ日取りを早めてやるか」

「まあ……早めてしまわれるのですか？」

「いつその事、来月あたり、どうだ？ 女官たちがお前の騎撃毬での雄姿が『素敵』だと噂していたぞ」

「見た目は様になっていても、上位三人に食い込めますかどうかで、騎撃毬は運の要素も大きい。戦では軍を率いる者が強運か否かで勝敗が大きく変化する。だから、この騎撃毬は古来から重視されてきたのだと思うぞ。スルギは強運だ。私の運もスルギの強運に引きずられるように、次第に良くなってきているように思う。それも、スルギが常日頃からあまたの人のために尽くし、己は利を貪ったりしないからだと思うぞ。お前はよく稼ぐが、大半をこの国のために使ってしまうのだからな。天意に適わぬわけが無かるう」

スルギと私の出会いは何者かによって定められた物かもしれない。だが、私はこの出会いに感謝している。そして、可能な限り傍にいたい。

互いの気持が高まり、かわす目と目に熱が籠ったその瞬間に、急な来訪者をつげる鐘が鳴った。スルギがに重要な客、あるいは重要な報告を持ってきた者がやって来た折に、執事に鳴らすように命

じているものだ。

「何でしょうか、様子を見て参りましょう」

すると、部屋の外から執事が呼ばわった。普段は侍女か忍和の役目だ。どうやら重大事らしい。

「恐れながら申し上げます。本日より家族ともどもこのお邸に引き取りましたナミルで御座いますが、何やらただならぬことを耳に致しましたそうです。居間に待たせておりますが、いかが致しますか？」

「判った。話を聞きに行くよ。少し酒を出してやっておくれ」

スルギは私に暖かい服を着せた後、自分はさつさと男衣装を身に纏った。先ほどまでの艶めかしさは、何処かに雲散霧消してしまった。少々残念に思う。

ナミルは出された酒に手も付けず、硬い表情で我々を迎えた。

「何か大変な事を耳にしたって？」

「はい。明るいうちに下見を致しまして、右議政様の御寝所と書斎を見つけておきました。その後、日が暮れてから、改めて忍び込み、屋根裏に身を潜めて待つておりました」

しばらくして右議政と思われる邸の主人らしきひげの白い人物の所に、息子らしい人物がやって来て、一緒に酒を飲み始めたらしい。宮中の噂から話が始まった様だ。

「その息子らしき人が『先の王子毒殺の一件などは、うかつに記録になど残されぬ方がよいのでは有りますまいか』と言ったんです」

その男が父上と呼んでいた白ヒゲの人物は、どうやら長年詳細な日記を付けてきたらしい。

「その日記は代々のその邸の御主人が書いてきたものらしくて、『人に言えないような我が家の事情』も色々中には書かれちゃってるみたいですよ」

「代々の日記と言うと、相当な量だろうね」

「日記のための特別な蔵があるみたいですよ」

「その日記の蔵がどこにあるか、見当はつくかい？」

「見当はつきしましたが、錠前を外す支度も無かったので、一旦引き上げてきたと言うわけです」

「道具などは、大抵のものは有ると思うから、遠慮なく執事に申し出てください。ご苦労だった。さあ、お飲み」

スルギはナミルに酒を勧めた。

「成る程なあ。気にかかる事件、その王子毒殺が有った年だが……抜き取ってもらったら、急いで書き写し、また元に戻すと良いかも知れんな」

「確かに、それはばれにくいでしょうが……ナミル、幾度も通えそうか？ 右議政の邸に」

「王子様に何だかけしからん事をした様ですね。王様には言わば、息子さんの敵だ」

「そうだ。息子の敵なのだ。ずっと右議政が怪しいと言う噂は有ったのだ。だが証拠が無かった」

「ようがす。オイラも男です。お引きけいたしやしたからには、キツチリやらせていただきます」

「では、私が書き写しましょう。一番それが早いと思いますから」

確かにスルギの筆写の速さと正確さは神業だから、それが一番確
実だろう。

「写し終わったら、日記を返し、また別の日記を持ち出して貰うと
するか」

ひょっとすると、沈一門の陰謀がすっかり明らかになるのかも知
れなかった。

スルギはここ数日日記の筆写に専念している。大王妃様と大妃様のへの御挨拶を兼ねた毎朝の脈診と、娘達への学問所の授業以外は全てを休んだ。騎撃毬まで休んだのは感心しないが、体が疲労すると筆写の能率が落ちるようだから、致し方ない。そうこうする内に筆写した沈家の日記は二十冊にもなっていた。

私の長男・成弘の殺害に関する記述があるのか否か、最初のうちは判らなかったが……

「ここです。『決行ス。家人ニ一切ノ口外ヲ禁ズ』と有ります」

決行ス、とは……凶行に及んだ、そうとしか思えない。実行犯ではないが、計画し命令を下したのは右議政なのだろう。

「どうやら、以前から沈家の勢力圏内に無い女性が出産した王子は、殺害する予定であったようです」

「邪魔者は消す……そう言う事が……廃妃にしたあれを、入内させるためにか？」

気立ても決して良いとは言えない沈貴人の細い目を思い返し、嫌な気分になった。

「そのようですね。入内させられなくてかどうかは判然としませんが『好機を逸した』『密かに道を開く』と言う言葉が幾度も登場します。そして、沈家のおかげで行商人から小売り商、さらに御用商人の仲間入りを果たした男がどうも張盛のようです」

スルギが言うには、これまでの状態では本当の意味でこの国の価値有る特産物は限られており、利潤がもつとも大きいのは薬用人参であったと言う事だ。沈家が張盛に薬用人参の独占販売権を与えようと画策している気配は、随分以前から有ったが、私は取り上げず

に来たのだ。

「もっとも利潤の大きな品物の管理は国の手で行うべきで、一商人に許すべきではない」と言う私の言葉には、右議政も話を持ち出せなかったのだろう。

「ヤンホ兄さん達の事業展開で、張盛は商売のうまみが減り、提供できる資金にも限りがあると言って来たようです。つまり、もっと儲けさせてくれないと賄賂の増額は無理だと言う事でしょう」

「スルギの正体は気がついているのだろうか？」

「私の事は『女宦官』と有ります。女で有ると知られていると見てよさそうです。私が宮中に入ってすぐから、みたいですね」

なんと、スルギが入宮して三日としない内に「女宦官、入ル。御意不詳」と有る。あの頃、女官長であった者が、恐らく情報を流したのだ。御意不詳とは私の思惑が読めないと言う意味合いで良いのだろうか？

「知っていたが、公言しなかった……のだな？」

「私の身上調査が上手くいかなかったようですね。『高貴ナ老女ト寡婦ノ寵愛』が恐ろしいとも有ります」

「大王大妃様と大妃様か？ 随分な言い方だが」

スルギは苦笑している。

「さらに『王子出生ノ風聞有リ。生母ハ女宦官トモ官婢トモ』と有りますよ。これは成明が生まれてかなり経った昨年末の部分ですが、正邦様が『耳目ヲ奪ツタ』ために、不確かな推測しか出来ないと思痴ってますね」

大殿周辺での盗み聞き対策を徹底したのが良かったのだろう。

「その後、領議政の朝議の席での質問も有ったからなあ。大王大妃様・大妃様に御承認頂いていると、正面切って皆に言ったわけだから……生母は官婢……ではないと思っただろうよ。ますます、スルギの素性が気になっっているだろう。右議政は今でも『老宦官ト宦官ヲ反目サシメルベシ』と考えているのだろうか？」

「ナミルが持ってきてくれたのは、昨年までの分ですからね……今年の分はどうやら、寢室のすぐ隣の書斎に有るようです。普段人がいない蔵と違い、少しでも書物の位置がずれたりしたら、すぐに気づかれるでしょう」

『老宦官』がスルギと私が共に思ったように判内侍府事を指すなら、右議政側からの擦り寄りの工作がどの程度有ったかを、判内侍府事にも聞いておく必要が有りそうだ。そして、最新の日記を読むのは危険が伴いそうなので、スルギが言うように、昨年までの日記を正確に読み解く方を先にすべきかも知れない。

「そこで、この日記の分析ですが、御信頼なさっている若手に任せてみませんか？ 見る眼が変わると、また新たな事が読み取れてくるかも知れません。韓明文と洪善道あたりは、どうなのでしょう？」

そう言われて初めて気がついたが、二人とも忠誠心に疑問は無いし、こうした文書の解析も上手くやれそうだ。

スルギが二人に分析を依頼しようと考えたのは、もうすぐ武科殿試だからだろう。私の独断で、夏前に時期を早めてしまったせいだ。

「今日、久しぶりに練習いたしましたら、体の節々が痛んで、閉口

いたします。明日から鍛錬のやり直しです」
「すまんな。無理をさせて」

言われたように貼り薬を背中から腰にかけて貼ってやり、足を揉んでやる。

「誰かに見られたら大変ですね。『王様に対して、何と云う御無礼を』と言われても、弁解できません」

「私がやりたいのだから、そんな輩は気にする必要も無い。が、この貼り薬はなかなか臭うな」

「薬くさい女となんか、御一緒にお休みにはなりませんでしょうか？」

「お前、本気か？」

「いえ、その……」

私の語気が真剣であったのに、少しスルギは驚いたようだった。

「腰を摩りながら、共寝しようと思ったのだが、迷惑か？ 不都合だったろうか？」

「御手で摩って頂くと、とても心地良いのです。声を上げたいほど」

「ならば、上げればよい。二人きりではないか。体中、どこでも摩るぞ、喜んで」

「そ、そうですね？ でしたら……」

大きな貼り薬越しに、腰を摩ってやっているとスルギが突然に深い眠りに入った。その安らかな寝息を聞きながら、私も穏やかな眠りに入った。

秘密を探る・6

最後の難関と思われた騎撃毬も無事にこなし、スルギは武科殿試でも第一席で及第した。筆記試験も有るが、文科殿試の状元には容易すぎるものだった。それにしても、予定外、いや、ある程度予想はしていたが……沈徳宣が第二席で及第か……。あの男の「王様の忠臣となりとうございます」という言葉は、いったいどこまで本気にして良いのだろうか？

騎撃毬の際は、スルギを他の攻撃から護り、攻撃を補佐する様な動きを幾度かして見せた。おかげでスルギは思うさま玉を打ちこめたのであった。

武科殿試が済んで数日後、私は韓明文と洪善道を王の住まいである大テジョン殿に呼んだ。

「日記を分析する限り、右議政は知宣殿を何事につけても、第一の相談相手と考えておいでのようです。徳宣殿は予定されている遺産の分与は、殆ど庶子としての扱いです。大半は知宣殿が相続なさる予定のようです」

資産や財務に詳しい洪善道は、目の付け所が違つ。

「廃妃となった貴人様は、何か出生にとんでもない秘密がお有りなのは確かなようです。『悪夢』とか『秘事』とか言う言葉が意味する物は、具体的に何を指すのかまだわかりません。貴人様がお生まれになった年、さらにその前年の日記を分析しませんと……沈家の秘密の全貌は見えて来ないと考えます」

更に古い記録が必要だという韓明文の言葉は、納得できた。

「あれの邸で三人で上手く調べを続けられそうか？」

もう一人は、言わずと知れたナミルだ。

「三人で過去にさかのぼっての調べは十分できますが……一つ、難題が出て参りました」

「恐れながら、御耳を拝借」

急に二人は声を潜めた。

「今年の記録が問題なのか？」

「はい。特に王様が一番気にかけておいでの件は、今年の記録も見ませんと正確な事は……」

「お生まれになった王子様に、何か仕掛けようと策を固めている可能性もございます」

「わかった。続きは例の場所で」

そこへ判内侍府事ハンネシフサの来訪を取り次ぐ声がした。すぐに通させる。

「ひょっとして、重大な御相談でしたか？」

「うむ。判内侍府事も重要な事柄の報告か？」

「さようでございます」

かつて沈家と組んだ事も有ったが、私が即位してからは誓って無いと言いつつ切った。

「大妃様にはいかようにお詫びしようとも、仕切れぬほどの事を致しました。既に罪を背負って地獄に赴いた仲間も大勢おります」

「で、罪の償いをしたい……といった所か？」

「先ほど久方ぶりに大妃様のお呼びが有り、伺いました。死ぬ気で償いをすれば、恨み続けるのは止めてやろうとおおせでした。恨む気持ちは人を幸せには決してしない故、ともおっしゃいました」

判内侍府事は、涙を浮かべていた。若い官吏二人は驚いた表情を浮かべた。

「ふうむ。その涙は本物だと、信じてやる事にしよう」

「歳を取りますと、つい、涙もろくなりまして、はい。ありがとうございます」

あとの相談は、スルギの邸に集合してから行う事とした。それぞれの本来の仕事を済ませてから、皆、人目につかぬようにバラバラに、邸に入っているが、それでも何事かを右議政に悟られている可能性は高い。

「どうも沈徳宣の思惑が読めん」

「案外、言葉通りではないでしょうか？」

スルギは額面通り受け止めても良いかもしれないと、感じているようだ。私は……そこまでは信じられない。

日記の文章を分析した洪善道の言葉から考えれば、沈家の中で、徳宣は相当冷遇されている事にはなる。

跡取りと定められた知宣は実子ではなく、自分こそが実は長男なのだと言う思いを徳宣が持っているとしたら、父を恨んでいる可能性は有る。恨んでいるというほどではなくても、屈折した怒りを抱いている可能性が強い。

スルギの筆写速度が一番早いのだが、一人でやるのは限界が有る。この所は韓明文か洪善道が邸にやって来たら、引き継ぐ事になっている。だが、二人ともキリの良い所まで筆写すると帰宅するので、結局スルギの筆写量が一番多くなってしまっただが……。

「速度は落ちますが、二人でやれば、そこそこ行けまじょうか」

「徳宣に関する記述は無いのか？」

「余りにひねりのない表記ですが『次子』が徳宣であるとする、ここに気になる記述を見つけました。随分昔ですが、右議政の留守中に、沈家に賊が押し入った事が有ったようです。その際にですね『次子』が脅迫に屈して、奥方の寝所を教えたと有ります。その後、言語道断な事が有ったが、家の内外での口外を禁じた。そのように読み取れます」

日付を見ると、沈貴人の出生に先立つこと、ほぼ十か月……と言ったところか？

「この内容……沈貴人の出生と結びつけるのは、考えすぎだろうか？」

「えっ？……いや……」

スルギは記載事項を見つけただけで、そこまで考えていなかったのだろう。実に気まずそうな顔つきになった。

秘密を探る・7

やがて韓明文が宮中側の通用門から、洪善道が表門から、それぞれ時刻をずらして、このスルギの邸にやって来た。更に日が落ちてすぐに判内侍府事もやってきた。私は先ほどの項目を示し、皆の意見聞いた。

「主上殿下のお考えの通りではないでしょうか？」

韓明文は即答した。洪善道はその項目を、じつと見つめたままだ。判内侍府事は非常に難しい顔をして、黙っている。

「判内侍府事、どうした？」

「当時、沈家に押し入った賊だと名乗る者が、沈貴人様が中殿として入内なさってすぐに、私の邸にやって来たことが御座いました……」

その後、かなり長い沈黙が有った。

「人払いをするか？」

「いえ……申し上げます」

大きく息を吸ってから、絞り出すようにこう言った。

「自分は中殿として入内した方の実父にあたるかもしれない。自分の体にある炎を思わせる様な特別な形の痣が、その方にも有れば、自分との血のつながりの証になる。そのように申しました……私はそれ以上聞くに堪えませんでしたので、男を刺殺しました」

男の言葉が真実でも虚偽でも王家のためにならないとの判断が、
そうした行動をとらせたのは想像に難くない。

「して、その痣は男の体に認められたのか？」

「はい。右の太腿に確かに御座いました」

沈貴人の左の太腿には奇妙な形の痣が有った。数えるほどしか見
た記憶がないが、炎のような形の赤みがかつた痣であつたと思う。

「右議政の奥方は押し入った賊に凌辱され身籠つた。右議政はそれ
を知っていたのだな。そして生まれた女の子を実子として育てて、
入内させた……だが、その不幸のきっかけとなつたのは……徳宣の
言葉だと受け止められていた、と言つた所なのだろうか」

だとすれば……徳宣は奥方に不幸をもたらした疫病神の様に扱わ
れた可能性も有る。

「徳宣殿が以前、当時の中殿様、只今の貴人様は他の兄弟達と血の
つながりが無いとか、余りにお気の毒だから事情の説明は出来ない、
とか言いましたが、そうした訳が有つたのですか」

韓明文は納得していた。だが、悲惨な真実に、やり切れないと言
う表情になつた。

「ですが、あの徳宣も今のようなスレカラシではなく、まだ幼い子
供であつた訳ですよ。刃物を突きつけられて脅迫されて、思わず
本当の事を言つてしまった……ただ、それだけなのでしょうが……」

スルギは暗い表情で、ため息をついた。

「でも、それが真実でも、生母が同じならば兄弟の血縁関係は有る筈じゃないですか」

洪善道が言う。そこで、知宣は最初の正室腹で実父は王族である事、徳宣の母は正室と瓜二つの異母妹の妓生で、表向きは正室腹扱いになっている事、貴人は二番目の王族出身の正室腹で、武宣は最初の正室に仕えていた女が生んだもので、武宣の母を最近三度目の正室に直した事、などなど、沈家のややこしい事情を韓明文が手際良く説明した。すると……奇妙な事に、洪善道の顔つきが心なしか険しくなつたように思われた。

「ふむ。出生の秘密が関わって居るのかして、徳宣と貴人の間には今も相当な確執が有るのかもねえ」

スルギも以前から、徳宣と貴人の関係に引つ掛かるものを感じていたのだろう。

「そうですね。徳宣殿は自分の子を孕んだ女を殺害したのは、貴人様の手の物だと信じているようです」

そうか、韓明文はかなり徳宣とも近頃は話をするのであつたな……

「徳宣の中のものよそよそしい気持が『他の兄弟達と血のつながりが無い』発言になつたものだろうか。こちらが何も知らぬうちから、わざわざそのような家の事情を打ち明けるとは……」

「王様……」

洪善道は、顔が真っ青だつた。

「お人払いを願います」

「どうした？」

いつも明るい彼にしては、実に奇妙だ。スルギも驚いたのだろう。

「では、私達は薬房の方におります。終わりましたら、洪殿が呼びに来て下さい」

すぐに洪善道を残して、皆、居なくなつた。

「何だ？ 皆に聞かせたくない話とは」

「私の体にも、そのような……炎のような痣がございます」

「失礼いたします」と言う掛け声と共に、袴ハジを勢いよく捲り上げ、左太腿の赤い痣を私に見せた。沈貴人が中殿であつた頃に見たものと、非常に似ていた。

洪善道は「御無礼いたしました」と言つて衣文を整えてから、再び話し始めた。

「かつて士大夫の家ばかりを襲い、その家の夫人を凌辱する賊が、都で暴れておりました。父は役目柄、夜不在である事も多く、そうした隙を狙われて、我が家も襲われました……その十か月程後に生まれましたのが、私です」

「それを知ったのは、いつだ」

「王様から直接の密命を頂くようになって以降の事です……ですが考えてみますと、兄も姉も、そして両親も……時折、気遣うような哀れむような視線で私を凝視する事が御座いました」

「ふうむ。官吏となるまで知らなかったとは、洪家の皆は、度量が広く情けが深いのだな」

「父に確認はしておりませんが、おおよそ間違いはなかるうかと」

「そうか。漢城府判尹は、たしか漢城府勤め一筋であったか？」

「さようでございます」

「では、明日にでも洪判尹に話を聞こう。事情を知っていて、なお実の子として育てた理由というのも知りたいからな……ああ、そうした事情が有っても、お前を将来、成明の身近に配するのは予定通りだからな」

号泣と言って良い程の泣き声が、しばらく続いた。

本人に何の罪科が無くとも、生まれと言う物は、この国において重いくびきなのだ。

「涙をぬぐってから、皆を呼びに行けよ」

返事をして、また、泣き方が酷くなったのは、少々戸惑った。

だが、皆を呼んで戻った後の善道は、打って変わったように明るい顔つきだった。

「すみません。私は……話の内容が聞こえてしまいました」

皆が帰った後、スルギはすまなそうに私に言った。そうだ。スルギは地獄耳だった。だが、何も困らないが。

「聞かなかったふりをしておいてくれれば、それで良い」

翌日、私は漢城府判尹・ホン・インキョム洪仁謙と二人きりで面会した。

「息子から事情は聞いておるか？」

「はっ、おおよその所は」

「漢城府勤めが長いそちなら、その賊の人となりや素性も存じて居るのか？」

「細かな所まではわかりませんが……」

男、善道と貴人の実の父親であるらしき賊だが、その男はどこかの百姓の妻が、旅の士大夫に凌辱されて生まれたものらしい。恥ずべき事にこの国には、身分の低い者の意志も道徳も婦道も踏みにしても、意に介さない者が多すぎる。その男は体の炎のような痣の故か、気性が激しく、すぐに悪の道に染まり、若いうちから賊の頭になったようだ。

「一度捉え、獄につながりましたが、放火され、逃げられました」

獄につないでいる間、責め立てたが、むしろどこそこの奥方を手籠めにしたの、孕ませたのと、自慢げであったという。

「さよう、まだ若かった私自身が直接聞き取っただけでも、被害を受けた奥方は五十名を超えていたようです」

身分の恨みが強いらしく、凌辱したのは必ずその押し入った邸の正妻であったという。

「善道の母は、先妻の従妹でございまして、幼いころから私を御兄様と呼び『大きくなったら御兄様のお嫁さんにしてください』と申しておりました。そのころは先妻が健在でしたから、無理だと申しますと『では、側女にしてください』と言われてしましまして、困りました」

先の正妻が息を引き取る時の遺言と、洪判尹自身が憎からず思っていた事も有って、後妻に迎えたらしい。

「奴めは、そうした折を狙っておりますたのでしよう」

火賊が出たとの報に基づき、邸を空け捕縛に向かった所、新婚の若い妻がいる留守宅に押し入れられたのだ。

「帰宅いたしますと、家じゅうが火の消えたようで、陰鬱な雰囲気でした。自害すると言う妻を、先妻の残した子供ら在必死で押さえおりました」

それ以降、子供らは後妻を大切に扱い、後妻もそれによく応えた。使用人も皆、その夜の事は触れるものが居なかったと言う。

「日に日に大きくなる腹を見て、薬で流そうか私も妻も迷いましたが……決意が出来ませんで……生まれたのが善道でございませう。顔を見ましたら、この子は血は繋がらずとも、息子だと思ひ定める事

が出来ました」

「生まれてきた子に罪はございませんから」と晴れやかに言う洪判
尹を見て、善道とは血の繋がりは無くとも、父子なのだと言得させ
られた。

秘密を探る・9

「ただいまの右議政が沈家の当主となってからの日記の大半が揃いました」

「ふうむ。残るは今年のみだけか」

「どうやって手に入れましようかねえ」

スルギの邸で語り合っていると、韓明文と洪善道が相次いで別々の入り口からやって来て相談に加わる。

「陽動作戦に出ますか」

「……陽動作戦？ 誘い出すのか？ 韓殿は何か案がお有りです」

「主上殿下がお呼び出しになれば、右議政も、イヤでも出て参りましよう」

仁恵翁主の誕生日がもうすぐではあるが、その時にと言うのは幾らなんでも気がとがめる。

「いつその事、明るい内の方が仕事をしやすくは無いかしら？」

「確かに、それは、その通りですね。効率良く探し物が出来ます」

「では、真昼間に調べに行かない？ 実はあそこの執事は、当主の守己からすると庶兄にあたるんだ。先代が成人してすぐ、水仕事をする婢に生ませた子供なのだそうだよ。『身分の恨み』と言うのが深いんだろうね。妙ないきさつで私の患者になったんだけど、あちらの方から『邸の内部を隠密にお調べになりたいのでしたら、どうぞ』って言われたんだよ」

その執事は、長年忠節を尽くしてきた『弟』の右議政に他の使用人が見ている前で、娘が中殿から貴人に降格されて以降、打ち据え

られたと言つ話は以前、聞いた。

「いつその事、『弟』の政敵だともつぱらの噂の大状元に診て貰つて、不満やら愚痴やらぶちまけてやれば良い」などと、娘にそのかされたらしい。娘は娘で沈貴人についている連中と、揉め事を抱えているようだ。

「その庶兄ですが、表向きは母親の苗字を名乗り、柳執事コッパンと呼ばれております」

その男の事は記憶しているが、他にも、何か有つたような……

「たしか以前、お前と判内侍府事との間で、柳何某と言つ女官見習いの話が出たような記憶が有るが……」

「はい。新中殿の所の見習いのウルトンです。最初は母親、つまり執事の妻の治療に時々通つてましたが、話を聞くまで右議政の所の関係者だなんて全然知りませんでした」

ウルトンの母は右議政の母親である翁主から、乳母子の嫁ぎ先の申家に侍女として譲り渡されたらしい。

「私奴婢は品物のように主人の意向で、簡単にやり取りされてしまいますからね」

だが、柳執事は申家の正室となった女性の機嫌を上手く取り結び、主家と申家で認めてもらえる形で所帯を持ったようだ。こうした執事などの表に出ないつながりは、意外な所で力を発揮するものらしい。

「どうやら、言わば格下の申家の娘、右議政から見て母親の乳母子

が産んだ娘が、手塩にかけた娘を押しつけて新中殿に納まるというのは、耐え難い事のようにです」

「ふうむ。沈貴人を実子では無いと知っているのだから、娘を哀れだと思ふ親心と言うより、利権と自尊心の問題なのだろうかなあ？」

「

沈貴人腹の仁恵が、なにやらひどく哀れに思えてくる。

「と、なると柳執事の右議政邸での立場は、微妙なんでしょうねえ」

洪善道は己の身の上と合わせて、色々感じる所が有るようだ。

「そうだよ。洪殿。柳執事も『来年の今頃は、こんな形でのお手伝いは無理かもしれませんが』って言っていた。仕事を干されちゃう可能性が高いって、自分で感じてるようだ。そうです。右議政は生まれや育ちで苛められた経験が無いからでしょうかね。皆の面前でぶっ叩くまではそれなりに真面目に執事をやっていたのに。叩いた事で、押し殺していた恨みに火をつけたのですね」

庶子とは言え、兄なのだ。右議政は自分の母が翁主であることを誇り、文科殿試で状元及第で有ったことを誇るような男だ。庶兄の痛み・無念・恨み、そんなものを知らなかったわけではなかっただろうが、その深さと強さを理解できていなかったのだ。おそらく。

この国では庶子はいかに優れていても科挙を受ける事が許されなかった。時代と共に少し規則が緩められ、雑科と武科はどうにか受験できるようにはなったが、文科の規則は緩められそうにない。私も即位して幾度か朝議にかけてはみたが、有能な庶子に自分たちの取り分を持って行かれるとも思っているらしく、非常に感情的になり、この件に関してだけは、全部の派閥が反対なのだ。幾ら王で

も、どうにもできない。

右議政の家の有能な執事として聞こえた男は、屈折したものを長年抱えてきたであろう。この国を代表する名家を支えているのは自分だという自負も有っただろうし、同時にいつまでたっても自分は弟の使用人だという虚しさも抱えていたに違いない。

「知宣に仕えるのがイヤみたいです。本来なら『よその方』だって言ってみましたよ」

スルギが「知宣は右議政の実子ではない事を承知している」と打ち明けると、そんな言葉が出てきたらしい。どうやら、今よりもさらに身分の区別に煩かった時代に『父上』と呼ぶ事を許し、科挙は受けられなくても学問はしておくものだと言って、心配りをしてくれた先代の恩義に報いたいというのがこれまで忠勤を励んで来た大きな動機であつたらしい。

「一滴も先代様の血を受け継いでおられない方は、私の主では御座いません」

スルギに語ったというこの言葉を、右議政はどう聞くのだろうか？

スルギの決めた手順で、白昼に右議政邸に忍び込み、日記の内容を筆写するという計画は順調らしい。

「ナミルが右議政邸の屋根に上って柳執事が合図の太鼓を叩くのを確認すると、この邸で鐘を五回鳴らします」

するとそれを合図に、白装束のスルギ・韓明文・洪善道が屋根伝いに右議政邸に入り、人気が無いことを確認して当主の書斎に入るのだそう。

韓明文が速読して、重要度の高い項目を選び、それをもとにスルギが書き写す。洪善道は手形・書き付けなどを専門にあさり、日記の重要事項と関連有りそうなものは内容を書き写す。墨はあらかじめ擦っておき、筆は複数本用意しておくのだそう。

協力者の柳執事は主人の戻る刻限が迫ると、咳払いをするらしい。それも、三人が後始末をする時間を見込んでだということから、念の入った事だ。更に随時「旦那様はもうすぐ宮殿を出られるぞ。門前の掃除を確認せよ」とか「もうすぐお戻りだから水を打て」とか大声で他の使用人に命じて注意を促すらしい。

「ナミルには見張り役で、屋根から見て邸に近づいてくる人影があれば随時報告です」

二重に確認しているわけだ。

「ともかく、騒がしくなってきたら、早めに片付けます」

怪しまれないように「完全に元通りにする」のに気を使っらしい。

雨の日は休み、右議政の非番の日も当然休みだ。だが、一か月かそこらですべての主要項目は筆記し終わった。二日ほどしてから大取を取って、官位も官職も無く立場の弱いナミルだけ、涼しい北方へ船で送り出した。母親と妹はスルギの屋敷の内部に留まるので、まずは安心なはずだ。

「拷問にかけられちゃ適いせんから、林の旦那に御厄介になつて、白頭山でも拜んできます」

林とは誰であつたかとスルギに尋ねると、「ヤンホ兄さんの事です」という。近頃は店の方でもかつては名乗るのをやめていた林姓を掲げているらしい。

「林亮浩商店です。なんか、確かに偉そうかな。ハハハ」

「その店の名は、私でも知っているぞ。なるほどな。あの男の店であつたか。いや、確かに、あの男はなかなかに偉いと思うぞ」

かつての恋敵とでも言うべき存在のあの男は、確かにひとかどの人物だ。

ナミルも今評判の林亮浩商店で薬草の仕入れなどを手伝い、商売を覚えたいらしい。身を隠しつつ、新しく仕事も教えてもらえるというので、悦び勇んで出かけたようだ。

「ナミルが避暑の間に、我々は日記の分析です」

スルギは、筆写のために『病氣』だと嘘を言って休んでいた通常の仕事を、再開した。そして、その傍ら、日記の分析を続けた。

夏が終わるころ、亡き長男・成弘の殺害計画と実行の過程は、ほぼ明らかになった。

「うつつむ。四人の側室のうち、まったくのシロと言い切れる者が居ないのだな」

一緒の時期に毒の被害に逢ったと思われる申新中殿も、全く無関係と言う訳では無かったのだ。既に一人きりの弟が右議政にそのかされて殺害計画の片棒を担いでいると知った申新中殿は、内密に計画を阻止しようとして、失敗し、毒を盛られたのだ。ちなみに、申新中殿の弟は王子殺害後すぐに落馬事故を起こし、亡くなっている。

朴昭儀の実家は、積極的に関与はしなかったが、兄弟のうち二人が『殺害計画について一切他言しない』という誓約書を書いている。これは洪善道が証文の束の中から見つけ出したものだ。

金昭儀の実家は不正の証拠を突きつけられ、沈黙した。

張昭容の兄は、積極的に犯罪に手を貸したようだ。

衝撃だった。後宮から皆追い出し、島流しにしてやるうかと一瞬思った。

「でも、それでは余りに多くの人を敵に回す事になります」

そのスルギの言葉で、やっと我に返ったが、はらわたが煮えくり返りそうだった。

やはり計画立案は沈守己だった。

実行犯の女官達は殺害されてしまって、居ない。協力者の内侍も既に亡くなっている。

それでも銀を変色させない特殊な毒薬の調達や、毒の与え方に關して御用商人・張盛の果たした役割は非常に大きかったのがはつきりしたのは、大きな収穫だ。

「張盛をすぐさま召し捕らせよう」

この日が来るのを予想して、この六月に沈知宣を判義禁府事から外しておいた。

スルギとは相性の良い戸曹判書に兼任させることにしたのだ。この日から、義禁府を上げて王子・成弘殺害事件の取調べが始まった。日記の記載事項をもとにした韓明文と洪善道の調べは綿密で、調べが始まってすぐに、張盛は、言い逃れは無理だと観念したらしい。

「先の王子様殺害の主犯は右議政・沈守己に相違ありません」

朝議の場で、正式に報告された結果を聞いた廷臣たちは、静まり返っていた。もう夏の暑さは過ぎていた。

成弘殺害事件に後宮の女四人全員が何らかの形で関わっていたと知った瞬間、私はかなり不穏な事を口走っていたようだ。いや、瞬間と言うのは私の主観で、スルギが言うにはかなりの間、歯ぎしりしながら随分と物騒な事を言っていたらしい。殺してやるとか、全員流罪だとか、後宮なんて空っぽにしてやるとか……

「あまりに大きな歯ぎしりで、そのような状態は初めて拝見したので、どうしようかと思いました」

ああ、そう言えばそうだったかな……スルギは私をしつかりと抱きしめてくれた。スルギの方がずいぶん小柄なのにおかしな言い方だが、私は優しく強いスルギに抱きしめられたのだ。そして精神の平衡を取り戻したのだ。

「無理に何かおっしゃる必要も、無理に涙を堪えられる必要もないのです」

その言葉は恐らく私が一番求めていたものだったと思う。何年ぶり、いや何十年ぶりか忘れたが、私はスルギの胸に顔を押し付けて号泣したのだった。

「随分、派手に濡らしてしまっただな」

あきれたことに私の涙のせいで、スルギの胸元は桶の水でもぶちまけたような濡れ具合だった。改めて自分の女々しさが恥ずかしくなった。

「何か、お飲みになりますか？」

「いや。もう少し、こうしていてくれ」

「ええ」

「母親にすがって泣きじゃくる馬鹿息子のようだな」

「どんなに賢い方でも、泣きたい時は泣く方が良いのです」

「壁に向かって一人で泣けば良いのに、つい、スルギにすがってしまっただけ」

「その『つい』が、とても嬉しいのです。さすがに……壁よりは多少はマシだと思って良いですよ？」

「自分以外の女との間の息子の事にいつまでもこだわってと……そんな風には思わないのか？」

「自分の子供が殺されたのなら、なぜどうしてそうなったのか、知りたいのは当たり前だと思います」

「当たり前か」

「ええ。当たり前です。大事な子供なんですから」

私を気遣う優しい眼差しと、穏やかな声、そして、ぬれたせいで透けて見える豊かな胸元……スルギに身も心も癒されたいと言う本能からか、二人の距離を可能な限り近づけたいと言う感情の所為か、気が付くと私は自分の服もスルギの服も総て取り去って、膝の上に抱えたスルギとぴったり肌を合わせていた。そして思いのたけを総べてぶつけるようにして、事をなした。

「二人で一緒に何処か別世界に抜けて出たみたいだ……」

まだ体のほてりが引かないスルギも私と同じように感じてくれたらしい。

「何だか嬉しそうでいらっしやる」

「うむ。きつと子が出来た」

その夜は、夢の中でもスルギを抱きしめていた。

スルギのおかげで、私は不幸にもならず不安にもならず落ち着いて事後処理にあたる事が出来た。

「徹底して処罰すべきです！」と言う者も、「御温情を」と言う者も、自己保身と利権の保持で頭がいっぱいな奴ばかりだった。沈家

から受け取った金品や、親族の官職に関する口利きに関する証拠を突きつけ、双方の勝手な言い分をひっこめさせた。

沈守己は死罪とした。

息子の内、知宣は半年の流罪の後、実父の家を再興する形で継いだ。政治に直接は関わらない王族の身分に繰り入れたのだ。沈家の資産の半分は没収されたが、残り半分は徳宣と武宣で分割相続とさせた。

元の邸は寡婦となった正室と実子の武宣夫妻が住まう事となった。武宣には実子の朴銀龍の存在を伝えたが「主上殿下と大状元様の御意向にお任せします」との事だった。成長した銀龍が望めば事実を伝えるが、あくまで朴姓を名乗らせると言う事に落ち着いた。柳執事は武宣夫妻に仕える事を望み、認められた。

徳宣には自身の官位官職に見合った邸を与えた。特に「実母が年老いたならば、気兼ねなく引き取るが良い」という言葉を添えたのは、徳宣の実母の妓房の主は、スルギの恩人だからだ。

「余りに甘いのではないか？」と言う声は、蜘蛛の巣の様に複雑に絡んだ利権の頂上に守己が居ただけであり、厳密に処罰をすれば議政府と六曹の主な面々は、全員有罪だと朝議の席で伝えると止んだ。

新中殿は中宮殿に入った。

さらにしばらくしてスルギは「病気が再発した」として、産休に入った。今度も王子だと私は信じていた。

スルギが言うには私と言う王の存在が、これからのこの国の有り方を変える一つの要なのだと言う。そして果てしない派閥抗争を終わらせ、実学を尊ぶ気風を育てないと、この国は大変な事になるとも言った。

「神というか正邦様や私を異世界からこちらに生まれ変わらせた存在の配慮かも知れませんが、倭国からの二度にわたる侵略が無いですし、清との戦闘も一度少ないみたいですね」

「なぜだろうな？」

「特に倭との実り少ない互いにとって悲劇的な関係は、どうにかした方が良くと言う事でしょうか。私は前世で三百年ほど後の倭の間として生きていましたから、互いの国にとって不幸な歴史の流れが変われば良いのには、幾度か思った事があります」

スルギの知る歴史では、派閥抗争は多少形を変えるが、性質の悪い深刻な状態で延々二百年も続くという。そして幾人かの優れた実学的業績が有っても、忘れられ踏みにじられて、全ての改革が停滞し、国全体がますます貧しく惨めな状態となり、時間ばかりが過ぎ、やがて列強の介入と侵略という最悪の結果を招くらしい。

「スルギと同じ世界にいたのだろうか、私も」

「たくさんの方が存在しますが、どこの国の人でしたか？」

「それが、わからない。スルギ程前世の記憶が鮮明ではないのだ」

「なぜなのでしょうね？」

「死んでみなくてはわからないだろうが、スルギと別れたくないから死にたくない」

「まあ。本当に？」

「ああ。無論だ」

「では、私は生まれ変わっても、正邦様と仲睦まじく共寝する仲で有りますように、と願うことにします」

「ならば私はスルギだけを愛し、唯一の妻だと言える国に生まれ変わりたい」

私は幾度かスルギを中殿と同格、あるいはそれ以上の妃として後宮に迎えようとしたが、いつもスルギは反対した。確かに後宮に入つては思うように改革を押し進める事も適わないだろう。スルギの建策から始まつた隠田をめぐる数々の不正も、沈家の隠し財産であつた分を取り上げたのを皮切りに、大半の条件の良い隠田を王の直轄地として取り込むことに成功した。資金面でのやりくりが楽になつたおかげもあつて、様々な改革が実行され、実を結びつつあつた。スルギも私も昼は改革のため夢中で働き、夜は共に眠る日々を重ねる内に、歳月は瞬く間に過ぎた。

成明は無事に数えて五歳を迎えた。

「そろそろ御秘蔵の王子様を御披露ください。この爺も目の黒い内に次代の聖君とされる方にご挨拶を申し上げたいものです」

余命いくばくも無いと言われながら、どうにか無事にここ数年を過ごしてきた金領議政は、成明の立太子式に出席して、役目を果たしてから眠るように安らかに亡くなった。

立太子にあたり申中殿は成明を猶子ゆうしとしたが、成明の生母がスルギで有る事は承知の上だ。

第二王子は成仁セイニンと名付けたが、既に三歳だ。第三王子の成平セイヘイも無事に生まれたので「そろそろ母君を披露なさるべきでは」という話もちらほら出たが、披露すればスルギは後宮に入らざるを得ない。

それでは思うように活動出来なくなり、改革も滞る。それが狙いと
言う者も居るだろうが、利権と派閥がらみの思惑で国全体が揺れ動
く状態は、一刻も早く終わらせたい。

実情は、気が付いている者は居るし、知っている者は知っている
が、公の場所で大状元が世子の生母だと言う者は居ない。

金議政と相次ぐようにして、祖母である大王大妃様も亡くなられ
た。

「良き王子が三人も生まれて、ホツとしました」

それが最後の御言葉だった。スルギが三人もの王子を無事に産ん
でくれた事を大いに喜んでくれたが、それ以外のスルギの様々な功
績の方は、正直言って祖母の理解の範疇を越えていたかもしれない。
だが、祖母がいつもスルギを全面的に支持し擁護してくれたのは確
かで、実際大いに私の助けにもなったのだった。

丸一年の服喪の後、成明は忍和と共に東宮殿に移った。だが、成
明の母がスルギで有る事は、まだ公に宣言出来る状態では無かった。

長い道・2

スルギは差別された貧しい人々の村にでもどこにでも出かけ、必要だと思えば奴婢であるうが白丁であるうが頭を下げ、畑仕事を手伝い、病人を見舞う。

王世子になる以前、成明は時折スルギに連れられて、そうした現場に出かけていた。だから食べ物の好き嫌いは言わないし、目下の物に滅多にわがままを言わない。だが、母親と別れて宮中に住むようになったって緊張もしているのだろう。夜、寝入りばなに必ず泣くらしい。

「寡人が母親を独占しているからなあ。実は大殿も寂しい所だ」

成明の乳母で正式に東宮殿付き筆頭尚宮となった朴忍和は、ちょっと困った顔をした。その通りですとは、言にくいだろう。

「お前の実の息子・銀龍はどうしている？」

「兄の邸におります。庶子の身分ではありませんし、世子様の身近にお仕えするにはふさわしくありません」

やはり息子が庶子である事を気にしている。世子の立場を悪くするかもしれないと言う忍和の心配は、この国の宮廷では馬鹿馬鹿しい事に大いに根拠の有るものなのだ。

「やはりそうであったか。実の父親の沈武宣と相談して、嫡子扱いとしたぞ。今の夫人との前に、お前が正式に婚姻していた事にした。離婚の理由も死罪にした先の右議政・沈守己に二人の仲を無理やり引き裂かれた所為としておいた」

事実そうに違いなのだ。ただ、沈守己は忍和が曲者の判内侍府事の血を分けた実の妹と知らず、息子が地方官在任中に勝手に田舎娘を孕ませたと言う認識で、邸から放り出したのだろう。スルギに言われて取った措置ではあるが、乳母子である忍和の息子も身近に仕えさせた方が、成明も寂しさが薄らぐだろうし、熱心に務めてくれる忍和に対する一番の労いにもなるだろう。

「正直申しまして……沈姓を名乗らせたくありません」

「母親の離縁により、母方の姓を名乗っている、そう言えば良い。これで、お前の息子は嫡出子だ。な？」

だが、まだ問題は有る。離婚した婦人は「不品行」「徳が足りない」「女と言う扱いになっちゃダメ、その息子が科挙に合格しても三司の職などは着任できなかつたりする。全く理不尽な規則だ。朴銀龍が科挙を受ける頃までには絶対廃止にしたい。

「母親が離縁した場合の馬鹿げた官吏登用の規則は、少し時はかかるが、必ず廃止にする。案ずるな」

「まことに、まことに有りがたい御配慮、お礼の申し上げようもございません」

丁寧な礼をしてから、忍和は大殿を退出した。

その夜、スルギに成明が寝る前に泣く話をすると、困ったような顔になったが、しばらくして結論を出したようだった。

「王世子がこの邸で眠るわけにも行かないでしょうね。私が毎朝会いに行く事にして、あとはなるべく昼食でも一緒に食べる事に致します」

そのあと、幾度もスルギがため息をついた。何だか自分が責められているような気がしてくる。成明は中殿の猶子だし、王世子の立場なら父王の中殿に毎朝挨拶に行くのが通例なのだが……スルギは表向きは臣下だ。だからスルギが顔を出してやらなければ、成明はスルギに会えない。

「弟たちに会う為に、三日に一度ぐらい邸に泊まっても良かろう」
「まあ、本当ですか？」

「大王大妃様ならお怒りになっただろうが……その程度の事は構わないと思うのだ」

私はスルギを抱きしめた。

「ようやく、ため息が止んだな」

「ああ……申し訳ございません」

「今更、他の女と寝る気は無いのだからな、多少迷惑でもこらえてくれぬか？」

「そんな、迷惑なんて、とんでも有りません」

今日も降格された沈貴人や金昭儀が、勝手な陰口をきいているという報告が有った。

「あの化粧気ひとつない内侍のなりで、王様をどう籠絡したのやら。医者は色々な秘術を知っているから、妙な細工をあれこれしたのかもしれない」

まあ、そんな感じの内容らしいが、噂をした当日中に報告が来るぐらい、実家の庇護が期待できなくなった二人は後宮での力を失っているのだ。まあ、そんな話なら言わせておけば良いが、不快な女

どもだ。

「どうなさいました？」

「スルギと朝食を共にとれるようになりたい、そんな事を思った」

不快な女どもの話は、したくなかった。スルギと共に堂々と朝食をとるには、スルギを中殿かそれを上回る身分にしない限り、無理な話だ。

「幾度かお話を頂きましたのに、お断りして、申し訳ありません」

「いや、スルギの判断は正しいのだ。だが、なあ……」

スルギは私を抱きしめ返ししながら、こういった。

「成明がこの邸に泊まります時は、御一緒に夕食を頂けましょうか？」

「うん。そうしよう」

「まあ、うれしい」

本当に嬉しそうな声を聴き、花のような笑顔を見て、私はしみじみ幸せだと感じた。

大半の廷臣が沈家とのかかわりや隠田の件で脛に傷を持っている。それを穿り返されなくなかったら、大状元が女である事を公言するなど、私は事あることに釘を刺している。

相変わらず、スルギは内侍府の客分、風変りな医者で、校書館の提調で、位が高い割に非常に質素な暮らしぶりです。表での活動を続けている。

商いや物作りで我が国は随分と立ち遅れていたようだが、スルギの奮闘のおかげでかなりマシになったらしい。井戸水のくみ上げポンプも、荷車も、灌漑用の水車も、そして酒造りも、事業化に成功させたのだ。

スルギの建策・立案に基づき、甘藷・馬鈴薯・玉蜀黍は本格的に各地で導入栽培され、例年春先に発生していた餓死者が、この数年目に見えて減少したらしい。

「多少歴史の歩みを変えても、スルギが存在するおかげで、この国の未来は明るい方向に向かっていると私は思うぞ」

「懸命に働いてはおりますが、ただ一つ、申し訳ないことが有るのです」

何でも、本来なら存在したはずの名医と、我が国固有の薬草や医学を実践的にまとめた医学書が存在しないそう。自分が存在する事で、本来存在したはずのものが無くなったのかも知れないと、スルギは気にしている。

「ならば、スルギが作ればよい。思うようにこの国の実情に即した医学書を編纂せよ」

私はそう言って励まし、とりあえず王の手持ち資金を自由に使う許可を与えた。

内医院でスルギが医学書編纂の話を持ちかけると、若者を中心に協力を申し出てくれる者が幾人も出たと言う。皆、かねてから同じような事を感じていたらしい。

「貧しい人々に対しての治療を行っておりますと、身近な薬草を上手に使えば、うんと症状が良くなるような場合でも、それを知らずに無用な苦勞をしていると感じた事が度々有ります。この国の野山に生え、比較的たやすく手に入る薬草で、かなりの事が出来る事を皆に正確に伝える様な書物を作ります」

明の『本草綱目』を主な参考にして、散逸したとされた『医方類聚』を執念で探し集め、西洋医学の研究成果も反映して、郷薬と呼ばれるこの国の薬物で出来る治療法について、体系的にまとめようとしているらしい。これもまた、かなりの資金が必要なのだろう。私の手許金を全額使い果たすわけにも行かず、正直な話、全額使っても不足なので金策をどうしようか悩んでいた矢先、あちこちから資金というか袖の下が集まったと言う。

「ふうむ。資金が勝手に集まってくれたか」

「まあ、何がしかの利権を期待して持つてくるんでしょうけどね。持つて来てくれたって何もお約束できませんから、おやめなさいとは言うんですが……最近には純粋に私の行為に賛同して協力しようと言う奇特な方も居られるようです。でもだからって、そういう方の場合でも官職の口利きなんてしませんけどね」

「する気はなくても、お前の傍をうろつろつしていたら、誰かが目に留めてくれるかもしれないという期待感はあるのだからなあ……スルギが褒めた人物の事は、何かしら登用している。それを口利きと

言われると心外だろうが」

スルギが世子の実母で有ると知る者は、今やかなりの数に達したらしい。金品を持って擦り寄る人間が急に増えたそうで、鬱陶しく感じているようだが、あれの考える『為すべき事』は医学書編纂ひとつ取っても大事業で、金はいくらあっても足りないのだろう。

「御寄付はありがたく頂戴して、皆、貧民救済のために有意義に使わせて頂く事にしました」

スルギはそう宣言して以降、綿密な帳簿をつけ、それを毎月公開している。文字通り公開で、官吏ならだれでも目を通せるのだ。

宣言通り自分のためには一切使わず、人々のための事業の資金に充てているようだ。おかげで貧しい村の井戸を衛生的な閉鎖式に変える計画が予定より早く進み、医療奉仕の範囲も広げる事が出来たそう。そして、私と二人きりになる時以外は、相変わらず地味な男装束で通している。

「あの人は自分で大金を儲けるせいか、普通のお偉方と感覚が違すぎて、戸惑う」

「物はめったに受け取ってもらえない。よほど珍しい薬か、書物でもない」と

「それも寄付してしまうようだし……調子が狂う」

「変な方だ。理解に苦しむ」

そんな噂が飛び交っているそう。

いくら贅沢な品物を贈っても、贈り主も品目も使い道も公開されずは、賄賂としての意味をなさない。

だが、誰に何を言われても、スルギは自分で正しいと思う方法を通している。

「あそこまで資金の流れがあからさまですと、袖の下だの賄賂だのとは言えませんからなあ」

「我々も似たようなことを要求されるかもしれないから、大状元の資金関係について批判がましい事はうっかり口にできません」

適当に袖の下を取って、資産を膨らましてきた官吏どもが、皆戦々恐々としているとか。実に良い傾向だと私は思っている。

スルギが中殿では無いために、誰にも文句を言われずに共に朝食を取ると言う事は出来ない。スルギと共寝するのは幸せなのだが、早朝に慌ただしく大殿に戻らなくてはいけないのだ。真冬の身を切られるような寒さの中、味気ない一人の朝食を食べるために戻るのは、何とも切ない。スルギが隣にいれば、ただの粥だけでも最高の味わいだろうに。そんな日は、ダメだとわかっていても同じ話を蒸し返したくなる。

「スルギ、やはり、そのう……中殿と同格の妃として後宮に入る気はないか？」

「ですが、それでは中殿の立場が無いでは有りませんか。中殿は穏やかに平和に後宮をまとめておいでだと思いますし、そこへただでさえ色々と身辺が騒がしい私が後宮に入り込んだら、ろくな事は無い様に思います」

「だが、実質、妻らしい妻はお前だけなのだがなあ。もはや別の女と共に寝る気も無いし」

「まあ、それはさておき……世子の母と、後宮の頂点に立つものと、毎晩国王が同衾するものが同じと言うのは、この国の宮中にいる他の人間達にとって、好ましい事態ではないと思うのです」

「お前が校書館で色々な人間を招いたことで、以前のような本貫ごと凝り固まった派閥争いは影を潜めているとは思うのだがな」

「少なくとも、正邦様と毎晩安らかに眠るためには、色々和小細工もまだ必要だと思っています」

スルギがそこで何かふと考え込む顔になった。

「申中殿は……胃の中に性質の悪い腫瘍が出来ます反胃という病に

なっておられます。まだ初期ですから、御医が進行を押さえる薬は出しているのですが、西洋人のように腹を裂いて手術をするわけには行かないでしょうし……完全な治癒はなかなか難しいかもしれません」

反胃は英吉利人がキャンサーと呼ぶ厄介な病の一種で、世界中で完全に直す方法は見つかっていない難病なのだという。胃の腑がいらだちや不安で縮み上がる様な状態は、反胃にかかりやすく、塩辛い物、辛みの強い物を頻繁に食べると良くないと言う。

スルギが気にしているのは、自分こそが申中殿の反胃の一番の原因なのではないか、と言う事らしい。

「後宮の愚かな女たちの方が、中殿の胃の腑を痛めつけていると思うがなあ」

「そうでしょうか？ お二人の公主様たちの事を考えると、何やら自分が罪深い存在だと思えてなりません」

「寧ろあれは、お前に感謝していた。おかげで毒の副作用から完全に立ち直ったようだ。それに、公主たちはスルギのおかげで学問の楽しさを知ったのだしな。そうか。痩せたような気がしていたが、反胃なのか」

「ですから、労わって差し上げて下さい」

「でも、夜はお前と寝るからな」

「はい」

後宮の女達の所で夜を過ごす事など、今では考えも及ばない。私は、ずっとスルギと共寝を続けている。嘗てと違うのは、後宮の女たちはスルギが世子の生母で女だと知っている点だ。その事が困った事に結びつきはしないかと、スルギは時折気にする。だが、とりあえず今の所は……平和だ。

「下の王子二人だが、政争の道具にされないように良く気をつけな
いといけないな」

「兄弟で相争う悲劇は、決して繰り返したくないですからね。少な
くとも今、国の中で内輪もめを起こしていられるような甘い状況で
はないと、会う人ごとに言ってますが、どの程度皆の理解を得てい
るでしょうか？」

この二百年近くは母親が同じ王子同士の王位争いは無いが、この
王朝の初期にはそうした大きな争いも有った。そんな争いは何とし
ても防ぎたい。だが、大妃様の御子様たちは「政争を未然に防ぐ」
意図で幼いうちに殺害されたのだ。

三人の王子は三人ともスルギが生んだだけに、優れた息子たちだ。
今現在の様に、ずっと仲睦まじければこれほど心強い事は無いが、
後宮や官吏の派閥争いが私の死後勃発し、勝手に三人が大義名分を
付けて担ぎ上げられ、大切な子供らが互いに争い殺し合うようでは
堪らない。

確かにスルギの言うように、細心の注意を払って、早めに政争の
芽は摘んでおかねばならないだろう。

『正当な儒者』を自称する者たちが徒党を組んで、実学、ことに西洋的な学問を異端視して排斥しようとする動きが有る。実学に対する反感と言うよりも「女の癖に」表の世界で自由に振舞うスルギを、生理的に受け付けられないから、遠回しに皆で寄って陰口を叩いているといった所のようなのだ。

「正面切ってお相手なさらぬ方が宜しいかと思えます」

スルギは言うが、出来る事はしておこうと思ひ、厄介事の中心になりそうな人間は早めに利権で吊ったり、地方官に任命したりしている。おかげで今の所は余り大きな組織にはならないですんでいるが、目を離すとんでもない所で足をすくわれかねない。

それにしても、スルギも笑っていたが、自称まともな儒者ほど賄賂に弱かったりするのだ。

「頭の固い、大して賢くも無い学者もどきより、天主教の方が心配です」

スルギが学問の充実のために、海外の文物を積極的にこの国に紹介したのは良い事なのだが、スルギがかねてから心配していたように、西洋との距離感が適切に保てない連中もいる。近頃じわじわと増えつつある天主教の宣教師にのめり込んでいる連中だ。布教にやってきた連中の中には、植民地獲得とは関係無しに「福音をもたらすため」この国に来たと本気で思っている宣教師も混じっていると云うのが厄介だ。

スルギは西班牙の天主教徒が新大陸で行った暴虐と不正の数々に関する告発文書を、翻訳した。書き手は天主教の坊主で既に亡くなったそうだが、祖国では裏切り者扱いで、その告発文書は発禁処分

になったそうなの。

「著者のラス・カサスが意図した以上に、著作が西班牙以外の国で脚光を浴びたようです。西班牙の新大陸での利権は不当だと弾劾する目的で、取り上げられる場合が多いようですな」

『中南米暴虐記』という書名で発行された翻訳書は、かなりよく売れ、話題にもなった。スルギはそれに先立って、西洋の通史をまとめた著作も出しており、これも評判を呼んだ。

近頃は天主教徒に関する話題が時折、大殿にやってくる廷臣たちの間でも話題になる。西洋列強の植民地政策の餌食にならないように備えるべきだと考えるスルギの働きかけの効果が、少し見えてきたように思う。

「明の皇帝に御意を得た連中は、中華の歴史や伝統に敬意を払いましたが、その後、羅馬の天主教の大本山で宗門内の激しい論争が起ったそうですぞ」

「ほう？ 大監、それは一体どのような論争でしょうか？」

「天主教を信じぬ国、連中からすると『化外の地』では、中南米でのような暴虐こそが正しいとされたそうですな。明の官吏となった連中のような『生ぬるい懐柔策』は許されぬと言うのが、新方針だそうですぞ。奴らも一枚岩ではないから様々な考えの者がいるのでしような」

「だが、天主教の大本山での方針は大きな影響が有るのでしような
あ」

「大きいでしょうが、紅毛人と言うのは大本山と派手に喧嘩別れた連中だそうですぞ」

こうした認識が広がること自体は、悪くないだろう。

スルギは宣教師達が絶対に表ざたにしたがらない、海外での植民地政策や奴隷貿易の極悪非道な実態を定期的に宣伝するようにしている。確かに、うかうかしていたら何をするかわからない連中なのだろう。

ともかく、西洋人の居住地域は厳しく限定している。それは今後も緩め無い方が、安全だろう。

最近では、宮中の中にも天主教がじわじわ浸透しつつあるのが要注意だ。天主教の教えそのものは、スルギも言うように「偉大で結構なもの」だが、それが植民地政策と一体化しているのが困る。

「ローマ帝国では奴隷の宗教などと言われていたぐらいですから、虐げられた者には魅力的な教えですよ」

「お前、成明にもつと張り付いたほうが良いぞ。それこそ世子である成明に、勝手に天主教徒にでもなられてみる、厄介ではないか。今こそ、お前に世子侍講院の傳になって貰おう。うむ。それが良い」

実の母親が守り役とは、いささか茶番めいているが、悪くない手だと思ふ。これまで我慢強く機会を見計らってきたおかげで、大きな反対も無くスルギを世子侍講院傳に着任させる事が出来たので、ほっとした。

「母上が引き受けてくださって、私は嬉しいです」

まだ幼い成明は素直に喜んだ。毎朝ちゃんと大妃様と中殿には挨拶をしているのは結構だと褒めておく。

「銀龍とは、仲良くやっておるか？」

「ええ。私は気にしないのですが、銀龍が乱暴で行儀が悪いと、時折忍耐……朴尚宮がきつく叱るのです」

忍和の息子・銀龍は勉強仲間遊び仲間と言う事で、毎日伯父で

ある判内侍府事の邸から東宮殿に通ってきているようだ。ひとここの寂しげな暗い表情が無くなって、父親としては一安心だ。

スルギは傳に着任して以来、意識的に世子となった成明を、校書館の講演会や勉強会に連れ出している。

警備上の問題が無い割に、国内全土の様々な人と会う事が出来るようで、それらの優れた人材から良い影響を受けることを期待しているのだろう。このところの成明は治山治水に興味が有るらしい。好ましい傾向だと感じる。千字文だの四書五経だのは、一応教える程度にとどめ、スルギは数学や統計学、地理・歴史、はては医学や商業について、基礎的な事柄を教える事にしたという。

保守的な儒者たちは良い顔をしなかったが、私はスルギの方針に賛成だ。実学派の力はここ数年で確実に大きくなっている。若い儒者たちは知的な好奇心も有って「儒学も実学も大事です」というスルギの言葉につられるらしい。実際、知的好奇心を刺激する書物を、それこそ金に糸目をつけず校書館に集めた効果も有ったようだ。

明らかに、派閥抗争も以前とは様相が変わって来た。

長い道・6

「そろそろ、成明の嬪宮を選ぶカシテクリヨン揀擇令を出す準備をせねばいかな」

この国の王世子は十歳前後で正妻である嬪宮ヒンケンを迎える慣わしだ。成明は無事に八歳になったが、表向きの母である申中殿は次第に病が進行して臥せりがちだ。ここは実母のスルギが頑張るべき所だろう。どうせならスルギの気に入った娘が嫁になる方が良いだろうし、これまででも、中殿が病気の為、世子の実母や大妃が中心になって嬪宮を選んだ前例は存在する。今回は、表向き大妃様が中心となつて選考なさるような形を取れば、スルギもやりやすいだろう。姪のスルギが可愛くてならないらしい大妃様なら、恐らく色々と御心遣い下さるだろうし。

「まだ、八歳ですが……めばしい候補をあたるべきでしょうか」
「二年の内にふさわしい家、ふさわしい娘を探し出さねばならぬのだから、早すぎると言つ事は無いぞ」

王室にふさわしい女子を選ぶ間に出される結婚禁止令が、揀擇令だ。中殿や側室を選ぶ際に出される事も有るが、後継者が存在しないなどの正当な理由も無しに頻発すれば、暴君と見なされかねない。過去の記録を見ても、嬪宮選出のための揀擇令の場合には特に、結婚禁止より、近く王室に慶事が有ると国中に知らしめる事の方が重要視されて期間が設定されたようだ。

通例では三十人の嬪宮候補者が決定するまでは、結婚適齢期の女子の結婚を禁止する事になる。そこから更に三分の一程度に絞り、なおも選考を重ね、最終候補が選ばれる。こつした選考過程を揀擇と言つのだが、長々と全国に結婚禁止の命令を出すわけにもいかない。結婚したい人間は沢山いるだろう。だから、事前にしっかり下

調べをして、有力候補をあらかじめ絞り、結婚禁止期間は短めに設定するべきだ。

下調べを十分行うには、二年でも時間が足りないぐらいなのではなからうか？

「正邦様も最初の中殿様とは、そうやって御一緒になられたのですね」

そう。

最初の中殿・明珠の話をする時だけ、スルギは会話の中でも「様をつける。私にとって真実妻であった存在だから、特別な敬意を払っているらしい。確かに明珠は、幼馴染で最初の異性で初めての子供の母だが。

「うむ。互いに幼くて、夫婦と言うより最初は話し相手とか遊び仲間と言う感じであったな」

こうした時、スルギの目の中には他の女の話の時には決して見られない、ある種の諦めか寂しさと言った表情が滲む。そうした顔もまた美しいが、誤解はされたくない。

「スルギ……一人の男としての私が望んだ女は、お前だけなのだ。お前が私の本物の初恋の相手だと思っているのだが、判っているのだろうか？」

「何だか……最初にかき口説いて居られた時に、そのような事も仰ってました。話半分でも十分嬉しいです」
「半分などと、そのような事は無いのに」

亡き明珠が相手となると、妙にスルギは弱気だ。

「正邦様のために沢山働いた自信はありますが……むさ苦しいですし、いつもバタバタ落ち着きませんし……」

「スルギがむさ苦しかったら、世の中、不細工な女しか存在しない事になってしまふ。あまり着る物や装身具に興味が無いのかと思っていたが、それでも無いのか？」

「どうも貧乏人根性のせい、交易で取引される時は幾らぐらいかなどと、つい考えてしまいます。でも、わざわざ珍しい布を賜ったりすると、そこは、女ですから嬉しいのです。その……私のために選んで頂けたと言う、その事自体がとても嬉しいのです」

「毎晩色々話したい事が有って、身なりの話はつい、後回しになる……と思っけていて良いのかな？」

「申し訳御座いません。細やかなお心遣いに、ちゃんとお礼を申し上げなかつたのがいけなかつたのですね」

抱き寄せると、しなやかな体はすっぽり腕の中に納まる。私に取りスルギほど大きな存在は無いのだが。

「お前は私を助けようと、いつも懸命に働いてくれている。事実、お前で無ければ出来なかつた仕事も多い。これからも恐らくそうなのであるうな。だが……美しいお前をふさわしく着飾らせて、私の腕の中に止めておきたい。そんな願いを捨てきれ無い。お前に着せる物を選んだり、装身具を誂えたりする時、あれこれ思い浮かべて見るのは、私の大きな楽しみなのだ」

今着ている金襴の縁入りの紫の唐衣は、三人の王子の母にふさわしい落ち着きと気品を湛えた物をと心がけて贈った。思い描いた以上の結果に、私は満足している。

「これも、良く似合うな。これまでとはまた違う、しっとりした美

しただ」

スルギは嬉しそうに気恥ずかしそうに頬を染める。綺麗だ。幾度見ても見飽きない。

「今日は、特別に用意したものが有るのだ。さあ、手を」

スルギの小さな手は、いつも少し荒れている。それだけ私のため国のために良く働いているのだ。その指に清国で特別に誂えさせた指輪を嵌めた。こうした二本一組の指輪は身分の有る既婚婦人が持つ物で、夫が亡くなると一本をその棺に入れ、もう一本をチヨゴリの結び目に付けて貞淑な未亡人として過ごす、そうした物なのだ。

一本は真珠で白梅をもう一本は紅玉で紅梅を表す意匠にしたのは、かつて梅里様と呼んでもらっていたころを懐かしみ、今のもつとずつと深く強くなった想いを形にしたいと言う気持ちからであった。

「常に嵌めていると言うわけには行かないだろうが、ずっと身近に持っていて欲しい」

「はい。でも……棺に入れて頂くのは私の方でありますように……」
スルギの方が随分若いのがから難しいだろう、そう思ったが、スルギは大真面目なようだった。

「私としては慣わしどおりであって欲しい物だが、それがスルギの望みなのか？」

「ええ」

王の葬儀を仕切るのは中殿か王世子だが……今私が死んでしまえば、スルギにその役目は頼めない。だからこんな事を言うのだろうか？ 王が自分の妻の葬儀を仕切る事は、まず無いが……偉大な功臣としてなら、可能だ。本当は同じ日、同じ時刻に死に、同じ墓に納まりたいものだが、それは無理だろう。

「困った奴だ……ならばお前の喪が明けたらすぐに、私も後を追いたいものだ」

もう、スルギ無しでは生きてはいけない私なのだから。

ネタバレ気味の登場人物のまとめ

「希望の光」以降推奨です。ややネタバレ気味ですので。

・私

国王。「寡人」は公式の場での自称。清に大敗した後、国の屋台骨がガタガタな状態で父王が亡くなり、急遽即位する。派閥争いに明け暮れる廷臣を何とかなだめながら、朝廷刷新の機会を常に狙っている。

最初の妻と息子は陰謀により殺害された。

長い春を経てようやく意中の人スルギと結ばれる。

・スルギ

命の恩人。私と前世で同じ世界にいたらしい。私好みの絶世の美女。やり手の経営者。「チート」的な記憶力・学力の持ち主で、武術の達人。医師。長らく性別を偽って、宮中の内侍府に籍を置いていた。朝廷刷新にも大いに貢献する。後に高貴な血筋であったことが判明。

・大妃様

美しい私の継母。父王の後妻。先々代様の公主。父王との間の子供達は全員幼いうちに不可解な死を遂げた。どうやら判内侍府事の関与した陰謀によるものらしい。長年、人との付き合いを避けていた

が、スルギとの出会い以降、疎遠だった姑である私の祖母とも親密になった。

・祖母

大王大妃様と呼ばれているが、自分が王の妻であったことは無く、元来は分家の王族の正妻だったにすぎない。息子が即位して大妃扱いとなり、孫の私が即位後は大王大妃扱いとなった。血筋と身分に對するこだわりが強い。朝廷の老臣たちに対してかなり強い発言力を持つ。三人の王子の出生を見届けて大往生する。

・判内侍府事
パンネシブサ

宮中に仕える内侍、つまり宦官の長。私の出生以来、最も身近にいる人間。感情の起伏をほとんど外に表さない。行きすぎた忠誠心の所為で、犯罪を犯した過去を持つ。スルギの事は出会った当初から気に入っていた模様。世子となった成明は命がけで守る覚悟らしい。世子・成明の乳母・忍和は腹違いの妹。

・林亮浩
イム・ヤンホ

都の東の市場の若き顔役。後に大富豪となる。スルギは「ヤンホ兄さん」と呼ぶ。スルギにとっては店の共同経営者で信頼できる相談相手。兄のような存在だったらしい。父は無実の罪で死罪となったかつての大司憲・林正哲。

・林誠哲
イム・ソンチョル

正哲の弟。亮浩の叔父。田舎に引っ込んでいたのを呼び寄せ、大司
ホソ テサ

憲とした。

・洪敬徳 ホンキョンドク

市場を監督する平市署の長官・提調テジヨを務める。私が即位したばかりの頃、ならず者達が宮中の勢力と結んで米や塩の取引に絡み、民を困窮させている件を解決する必要性について献策した人物。早くからスルギの優れた資質に気づいていた。温和な人格者で要職を歴任する。

・忍和 インファ

成明の乳母。苗字は朴。故郷の土地に赴任して来た沈家の三男・沈武宣ムンとの間に息子・銀龍が出来たが、認知されず、縁が切れた。物静かで、しっかり者。保母尚宮から世子付き筆頭尚宮となる。

・朴銀龍 パクインヨン

実の父親に認知されていないが、伯父の邸ですくすく育って居る。世子・成明の乳兄弟。

・韓明文 ハンミョンムン

田舎の士大夫の息子。忍びの特技を持つ。文武両道の若手官僚有望株。

・洪善道 ホンソンド

馬が大好きな馬術の名手。若手官僚の有望株。毒舌家らしい。出生の秘密を背負う。

・沈徳宣^{シム・ドクソン}

沈家三兄弟の二男。数々の痴情沙汰で女性との醜聞多数だったが、スルギに蹴りを入れられて心を入れ替えたらしい。文武両道で、やれば出来るはずだが、色々未知数の男。

・明珠

幼馴染で初めての私の正室。私の初めての子・成弘の母。中宮冊立後、陰謀により殺害された模様。

・沈中殿

実力者で右議政の沈守己^{シム・スギ}の娘。一番上の兄は切れ者の知宣^{チソン}。二人目の中殿で、側室達より後から輿入れした。後に廃妃・降格され貴人となる。出生の秘密を背負う。仁恵の母。

・金昌嬪

長らく領議政を務めた金恩成^{キム・ウンジョン}の孫。祖父以外の親族は官位も官職も振るわないのが悩み。翁主二人の母。野心家。後に降格され昭儀となる。

・申貴人

一番入宮が早い。目敏く賢い人。亡くなった明珠とは仲が良かった。健康を損ねており、田舎の邸で過ごす事も多い。仕えている者は皆忠実。和恵・善恵の母。後に中殿に冊立。反胃を患う。

・朴淑儀

父親は高名な学者の朴時烈パク・シヨル。兄弟たちは皆有能で出世株。貞惠翁主・謹惠翁主の母。後に一階級昇進して昭儀となる。

・張昭容

家柄のせいで一番格下の側室。実家は豊か。兄チャン・ゲリヤンの張季良は学者なのに阿漕な高利貸し。激しやすい性格で、すぐに周りの者を打つ。翁主二人の母。上の娘が順惠翁主。

・順惠翁主

私の娘。スルギの仲良し。後に弟子。知的好奇心が旺盛で賢い。生母は張昭容。母親に対して批判的。

・成弘

私の長男。幼い内に陰謀により殺害された。生母は明珠

・成明

私の二男。王世子となる。

・成仁

私の三男。後に医学を学ぶ。

・成平

私の四男。国中の伝承や言い伝えを集めて書物を著わす。

二つの指輪・1

スルギは相変わらず良く働いた。医師としても目覚ましい働きをし、後進をよく指導し、多くの若い医師を育てあげた。また多くの子供向けの学問の本を作った。スルギが導入した救荒作物は国中に根付いた。凶作の年もスルギの建策で寄付を募り外国より穀物を購入して、王である私の名で苦しむ民に無償で配布した。

「餓死者の出ない年が、五年以上続いております。まさに聖君の御世でございますな」

そんなのんきな事を言うだけの老臣も、スルギの功績は認めていた。スルギが実は世子の実母であるという事は、三人の王子が全員正室を迎えるころには「公然の秘密」になっていた。

二男の成仁は西洋の医学を学ぶために、妻を連れて清国に留学した。三男の成平は国中の伝承や言い伝えを集めて書物を著わそうとしているようだ。

「成明に子供が生まれるんですね。私は晴れてお祖母ちゃんです」

世子である成明と世子嬪は仲睦まじい。私もスルギも孫の誕生を心待ちにしている。

赤子がスルギの築き上げた医療制度のおかげで死ぬことが少なくなり、この国の民の数は増えている。従って穀物も真剣に収穫量を増やさなくてはいけないようだ。

成明は林亮浩に自らの意志で学んだおかげで、経理や帳簿に明る

く、国の予算と収益を正確に把握出来ている。その林亮浩は、今やこの国を代表する大富豪だ。『売り手良し、買い手良し、世間良し』の言葉を看板に掲げ、その富を民のために還元し、また新しい事業に結び付け、『道德経済合一説』の実践者として世に広く認められている。母のスルギが今も「ヤンホ兄さん」と呼ぶのに倣って、成明は林亮浩を時折「林伯父上」と呼ぶ。

また、更に成明は先の王朝では普通に行われていた王族が自分の田を耕す習わしを復活させた。

「米作りも自分でやってみると、天候や新しい農法が気になるものですね」

成明は世子になる前は、母に連れられ、白丁村でも火田民と呼ばれる焼き畑でどうにか食いつないでいる貧しい農民の村にも出かけて、実態を見ていた。若い官僚たちとこの国の有るべき方向について真剣に語り合う事も多いようだ。その中で確実に次代の王としての自覚と手腕を備えつつあった。

「王世子様に謀反のうわさがございます」などと言う言葉で、親子の仲を裂こうとする輩も居た。その背景には自分たちの不正を隠す意図が隠されていた。韓明文・洪善道は無論の事だが、予想外に沈徳宣までもが目覚ましい働きをして、そうした不逞の輩をわずかの間に宮中から排除する事に成功した。

「もう、王位を早めに成明に譲ろうか」

「いや、まだ、悪賢い輩をあれでは抑え切れません」

スルギとそのような話をするようになった頃、申中殿の病はもう

回復しようがないほど、進行した。どの医師の見立ても一致しており、余命は数か月と言う事だった。既に嫁いで子を産んだ二人の公主たちが、連日母親の所に通って、心のこもった看護を続けているのはせめてもの幸せと言えようか。

「主上殿下、大状元様をそろそろ中殿となさつても宜しいのでは有りませんか？」

死期を悟った中殿は私に、そのように言った。

「まだ、あきらめるな。連日介護に通う公主たちの気持ちも考えてやれ。……あれは中殿になりたがらないし、ならずとも、息子たちのおかげで路頭に迷う事も有るまい」

だが……世子の母で王族である者を差し置いて、名目だけとはいえ自分が中殿を名乗るのは心苦しかった、と、そのような事をかき口説きながら、「成弘王子様と先の中殿様は私をお許し下さるでしようか」と呟き、涙を浮かべた。この女も私のもとに来た所為で、幸せには縁が薄かった。気が付くと陰謀に巻き込まれてしまった犠牲者でも有るのだ。

「案ずるな。きつと……許してくれよう」

申中殿は噤り泣いた。

そして……それが私と申中殿の最後の会話となった。

結局、申中殿の喪が開けた後、スルギは中殿に納まる事を受け入れた。三人の息子たちがそれぞれスルギの撒いた種を、しっかりと育て上げる役目を果たせそうな目途が立ったからだろう。

二つの指輪・2

「清にいる成仁までが『早く父上の悲願を叶えて差し上げて下さい』などと手紙を寄越しました」

スルギは困った様な照れたような顔でそう言った。見せられた成仁の手紙には医者のお卵らしく『父上があのお年で夜明け間際に慌て大殿にお戻りになるのは、まことにお気の毒です。堂々と御夫婦としてゆつくり朝までお休みになれる方が良いに決まっています』などと有った。

「そうだよ。私もだが、近頃は以前より、スルギも体が疲れているのでは無いかと案じられる事が多い。昨夜は大きないびきをかいていて、驚いた」

「いびきですか」

「うむ。ゆつくり休めと耳元で囁いてやると、ちゃんと返事をして、そのいびきがやんだのは、驚いたが」

いきなりの大きないびきは、色々な病の前兆だと考えるべきであるらしい。慢性的な過労が原因の場合も有るようだ。

「ならば、もう、早めに中殿となつて、落ち着け」

それ以降私は、スルギを後宮の女あるじとして迎え入れる準備を急いだ。

それだけに中殿即位の儀式の際、シヨギ？衣と呼ばれる雉模様の王妃専用大礼服を着用したスルギを見た時は、思わず胸にこみ上げるものが有った。美しいだけでなく身に備わった威厳が皆を感動させた。

王族の血がそうさせるといふよりは、スルギという女の魂の有りようがその姿に現れていた。

「それにしても大状元、いや新中殿様は王族の嫡流中の嫡流で有られたのですな」

今頃になつて頭の固い爺どもは、スルギが中殿となる条件を十分すぎるほどに備えている事を理解したらしい。

「それにしても、あのように凄い、いや素晴らしい方を、どこで見つけになつたので？」

「それは、秘密だ」

いまだに民衆の間で人気のある少々過激な無名子時代の著作の数々を、スルギに結び付けるものはまず、居ない。実際、つい最近事情を知つた韓明文は、目が回るほど驚いたらしい。

困つた事にこの働き者は、中殿となつてからもなお、あれこれ頼まれると引き受けてやってしまうのだ。さすがに市中への往診などは、若い医師たちに任せるようになったが、すっかりお年を召した大妃様の介護は他の者には任せられない……そう思つたようであつた。

「頼むから、スルギや、もっとゆっくりしておくれ」

スルギと一緒に朝食を食べるのは、長年の願望であつた。

ようやく夫婦としては当たり前の状態になれたのだ。私は政務の大半を世子である成明に任せた。朝議はさすがにまだ私が出席して仕切る形だが、大半の事は成明に任せても、危なげ無く執り行えるようになっていた。無論、かねてから成明に付けようと育てて来

た人材が、一人前になりつつあるお蔭が大きいのでは有ったが……。少なくとも、かつての様な露骨な利権争いや、愚劣な派閥抗争は息をひそめた。有り難い話だ。

「お前とこうやって共に夕食を取り、一緒に朝食も食べられるようになって、実にうれしい」

「まあ、ありがとうございます。でも、本当に、私もそう思います」

銀の箸を使うその手は、中殿の手にしては少しばかり荒れた働き者の手だが、私の贈った二本の指輪は実に良く似合っていた。

二本の指輪・3

男が意識を取り戻した時、良く見知った女の顔が自分の胸の上に有って、大量の血が流れていた。

Remember to let her into your
heart
Then you can start to make it
better.

ああ、ビートルズだ。そう思ったが、体に力が入らない。
意識が途切れる寸前に救急車のサイレンが聞こえた。

「スルギ！ スルギ！ 私を置いて行くのか。私だけが生き延びても、生きる意味など無いに等しい」

明滅する意識の中に浮かんでは消え、消えては浮かぶ髭を生やした男は、自分だ。まるで隣国の時代劇みたいな恰好をして、必死にかき口説いている。スルギと言うのは妻の事で、叫んでいるのは間違いなく自分だ。男は自分が病院に居る事も、集中治療室に入れられた事も認識できなかったが、自分も妻も助かる。その事だけは確信できたのだった。

目覚めた時、妻の意識はまだ戻っていなかった。男はリハビリを受けながら、妻の回復を根気強く待った。

「これ、CTスキャンを受ける時外したんですが、お返ししますね」

看護師から渡されたのは見覚えのある指輪だった。

男は毎日、あの生々しい前世の記憶について、まだ意識の回復しない妻の枕元で語った。数日すると、妻も意識を回復した。軽い記憶障害が有ったが、回復可能だと医師は請け合った。

男は二人にとって大切な二本の指輪を妻に嵌めた。

「この指輪って……」

「ハネムーンでお隣の国に行った時に、骨董屋で買った物じゃないか。昔は貴族の女の人が指に二本重ね付けしたって説明を聞いて、二人とも絶対に持って帰るべきだって思って、買ったんだよ。忘れちゃった？」

「とてもきれい。これ、梅の花よね」

「ルビーと真珠で紅白の梅の形を表現しているんだよね。真珠も結構珍しいけれど、このルビーが指輪の出来た当時は、大変な貴重品だったみたいだよ……どう？……思い出せそう？」

「何も。でも、この指輪の元々の持ち主の事、知ってる気がする」

「実はね、僕もなんだよ。意識を失っていた間、ものすごくリアルな夢だか幻だかを見たよ」

「髭生やしてなかった？」

「僕が？ うん……生やしていた。隣の国の時代劇みたいな恰好で、叫んでたよ、必死で」

「スルギ、って呼ばなかった？」

「ああ。そういえば、そうだ。何だろうね、あれは。夢を共有したのかな？」

半年後、退院した男は妻を伴って隣国の首都に赴いた。

空港から、スルギと夫である王の眠る墓を真っ直ぐ目指した。タクシーに乗って辿り着いたのは、芝生を張った公園の様な所だった。巨大な土饅頭は幾つもの大きな石版で周りを囲って有る。その前には馬や文官・武官の石像がズラツと列をなして並んでいた。

「ここがスルギと呼ばれた中殿と夫の輝祖が仲良く一緒に眠るお墓です」

男も妻もタクシーの運転手の言葉が通訳なしで、はつきり理解できた。そしてそれが不思議とも何とも感じられなかった。

「スルギが亡くなって、ちょうど丸一年目に王様が死にました。夫の王様が妻の葬式を仕切るのも異例の事でしたが、その喪が明けた途端に後を追うように王様が亡くなってしまったのも前代未聞の出来事でした。三人の息子たちは、二人を是が非でも同じお墓に入れなくてはいけないと感じたようです。次の王に即位したのは長男で、二人の弟たちは兄を良く助けて、この国は空前の豊かで平和な時代を迎えました」

その言葉を聞いた次の瞬間、男の脳裏に幾つもの見知らぬ人々の顔が明滅して、スルギと輝祖以降のこの世界の歴史の流れをハッキリ意識することが出来た。

実学が根付き、派閥争いが減り、初等教育と科学的な思考法が浸透し、国の運命は変わった。

日本において征韓論は盛り上がりならず、江華島事件も発生しなかった。日本は植民地を持たず、歴史は流れた。

「歴史は、流れを変えたんだね」

「ええ」

これまで男と男の妻の脳裏に存在していたもやのようなものは、全て綺麗に晴れたのだった。

二本の指輪・3（後書き）

これにて終了です。お読み下さった皆様、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9593s/>

歪みを正す

2011年7月20日08時31分発行